
習作・ゼロの使い魔弐次

間田紘野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

習作・ゼロの使い魔式次

【コード】

N0095S

【作者名】

間田紘野

【あらすじ】

ハルケギニアに転生したアルベール君のお話です。物語は原作にないオリ国から始まります。

注意： 作者のゼロの使い魔の知識は、アニメ第一期とWikiで確認したことだけです。原作に思い入れがある方、誤字・脱字を気になさる方、作文・読書感想文以上の読み物を期待される方はご遠慮ください。お読みになると不幸になる人間が増えるだけです。

00. プロローグ

寒さ知らぎ、春を臨むこの季節。

世間の多くは去りゆく者への別れに涙し、あるいは新しい始まりへの期待に胸膨らみます。まあ、今日のオレの場合は喜びに涙し、四月からの夢の生活に股間を膨らめますのだが同じ様なものだろう。

今オレは大学の合格発表の為、神奈川の辺鄙な駅に降り立ったところだ。

さつき敷地への入り口となる門にはメディアの姿もチラほらと見かけた。首都圏の有名な名門私立大学ということもあって、これは毎年の光景なのだろう。

帰りには当然オレもインタビューされるだろうから今から使われそうなコメントを用意しとくか。興奮気味にうれしさを隠し切れないうれしさを隠しきれない純朴そうな受験生コメントにするか？いや逆に平静を装って「うれしさよりも四月からの学生生活を思っただけを引締めしている」なんて言ういかにも優等生のコメントにしておくべきか……、チョイスに悩むところだな。

うむ。誰かにベストアンサー聞きたいが、この難解な問いに答えしてくれる人間がいるのだろうか？

「教えて！池上さんっ！」

ついつい先程見たテレビカメラの方向に振り返りながら叫んでしまったが、もうそこにカメラマンは居なかった。もちろん池上さんもない。つか、周りの痛い人を見る視線が突き刺さるが、そんなものを気にするオレではない。

「バッチこゝい！」

天に雄叫びそんな事を考えていると、ひときわ人だかりが出来ているところまで来ていた。人だかりの周りでは受験生の親らしき年配の夫婦や、合格を祝う為に胴上げなんかをしてくれる応援団の格好をした学生などが、一喜一憂する受験生の集団を眺めていた。

「ここか」

どうやらここが受験番号が張り出されている場所らしい。ネットなどで確認する受験生が多い為、あまり直接見に来る数は多くないと思っていたが予想をはるかに超えた人数に少し驚いた。この中にはわざわざ受験に失敗した姿を晒しに来た“M男M女”がいるなんて考えが頭をよぎると、人生の分岐点ともいえるこの場に己の特殊性癖を曝す人間の思考回路にある意味尊敬の念をおぼえないでもない。

こんな変態どもとは一味違うオレは確認するまでもないのだが、ガクブルよろしく生まれたての仔牛のように一歩ずつ掲示板へと近づく。その他大勢のモブキャラをかき分けつつ最前列に出ると、隣に居た眼鏡の冴えない“茄比なび太”（“オレ様命名”）がこちらを睨む。モブごときがイキってんじゃねえ！眼鏡とって目ん玉逆3の字にすんぞ、ゴラァ！

おっと、そんなことより番号だ。手元の受験票の番号は

「 5002705 」

•

5
0
0
2
6
8
0

•

•

5
0
0
2
2
4
-

•

•

•

5
0
0
1
9
-
-

•

•

•

•

5
0
0
0
7
-
-

掲示板を見上げる。

5002697
5002701

「よしっ！合格だあああ！」

声を上げた合格者を見つけた応援団がオレの周りにワラワラと近寄ってきた。暑苦しいっいたらありやしねえな、このモブキャラがあ！

「君、合格したの？」

「当然です！」

さっきまでの自信なさ気なシャイBoyは何処に言った？！と突っ込みたくなるのはガマンしてくれ。なんと言ってもこのノックアウト大学に入れさえすれば人生薔薇色なのだから。そう、春から毎週末開催されるコンパとか、合コンとか、ヤリコン（註：個人の力量次第）とかっ！そりゃ股間も膨らみますがな、兄さん。

「おあゝおめでとう！お祝いに胴上げさせてもらっていいかな？」

「もちろんいいですよ」

前途洋々の受験生には少しぐらいの辱めなんて受け止める度量があるのだ。さあ、曝してくれ！この未来輝かしい受験生を！

「おい！おまえら胴上げだあ！」

わっしょい！わっしょい！と天高く舞い上がる、
“他人”。

さっきまで俺の隣に居た人型汎用モブキャラ受験生、オレ呼称“
茄比なび太”。心なしかこちらを見下すように顔を傾けると、勝ち
誇った笑みを口元に浮かべた。

呆然とその光景を眺め、これは幻？ともう一度手元の受験番号を
確認して掲示板を見上げる。

オレの受験番号は「 5002705 」番だ。

5002680
5002695
5002697
5002701
5002729
5002733

・

・

・

ド、ド畜生がつ！

その後どうやってここまで来たかは憶えてはいない。

だがどうして今、地べたに這いつくばっているかは理解している。流れ出すオレの血液が視界を真っ赤な世界に変え、それが次第に暗い闇に飲み込まれていく。

冷静に『ああ、オレ死ぬんだな』と悟る。

人生の最後なのか走馬灯なんていうものが過っていきが、死を悟った瞬間からオレは心のなかで叫び続けていたから、そんなものはすべてスルーだ。誰の人生にでも起こるイベントより重要な事がある。死んで魂だけの存在になる今、リアル“魂の叫び”を発動！

「童貞のまま死ぬなんてヤダーーーーーー!!」

00・プロローグ（後書き）

活字嫌いの矯正のためにこちらのサイトで、作品を“読む”事をしています。効果が少しありました。

さらなる効果を期待し、作品を“書く”事に挑戦しています。

……疲労感がパねえですね。

今からアニメの第一話を見て、以後の作品を書き進めていきます。

さよなら負け犬、こんにちわ貴族様

オレの名前はアルベール・レオポルト・マランド・ド・アントワープ、どこぞの国の家に生まれて早3年、見事に生まれ変わりを果たしました。前世の名前なんて忘れてせい。

グッバイ負け犬人生。

てか、ナイス神！……かどろかは知らんがとにかくナイス！

現状、只今オレ3歳10ヶ月。

下半身ダダ漏れシユチの快感を覚えなかった自分を褒めてやりたい年頃になった。最近ようやく言葉を不自由なく話せるようになって、うれし恥ずかしのリアル幼児プレイから卒業をする。

そして今日は「あ〜ん」から巣立つ日、そう決めた。

「ははうえ。きょうから 食事しよくじ は 自分じぶん でたべます」

朝食の席で母が席につくと朝の挨拶の後、オレは意を決してそう切り出す。

「アルベール。あなたはまだ子供なのですから、使用人に任せてお

けばよいのですよ」

くっ！その気品と美貌に気圧されるじゃねーか。あいかわらずイ女だぜ！マイマザー。だがここで負ける訳にはいかない。オレの性癖、いや人生がかかっているのです。

「^{自分}じぶん できることは ^{自分}じぶん でやりたいのです」

「まあ……。それは立派な心がけです。ですがあなたは貴族なのですよ。なんでも自分で遣る必要はないの」

なんとっ！ここにきて驚きの事実が発覚した。

母の気品溢れる立ち居振る舞いや、使用人が数人いる事から裕福な家庭だとは思っていたが、まさかの貴族！日本ではもう半世紀以上前に絶滅した人種がまだいやがるとは…。

まあ確かに母の服装や屋敷の内装が西欧貴族風だし、庭もアホみたいに広い。使用人もオタクの聖地にしか存在しないはずのメイドと執事がいて、午後はティータイムまである。

しかし食事はごく普通なものだし、入浴も三日に一度程度なのでまさか「オレ、貴族」なんて発想はなかった。

「貴族は人を使う事を学ばねばなりません。もう少しすれば貴族として学ぶべき礼儀や作法を身につける時期が来ますが、あなたはまだその時ではないのです」

ちよつとしたサプライズがありはしたが、ここで引く事は出来ない。いい加減もう精神的にダメなのだ。

これ以上、この生活を続けると確実にマダオ（＝まるでダメなお子様の意）になる。

「それはいつなのですか？わたしはもう、もじ^{文字}をよむこともはなすこともできません」

「それは本当なのかしら？アルベール」

「はい」

そんなに見つめんなよっ！「照れるぜ、ママ」と心の中で付け加え、無駄にキリリとした表情で見つめ返す。何かを考えるかのように目を瞑る母の反応は、そんなに悪いものではないように見える。まつ毛なげえーなあなんてぼんやりと見つめてみると、母は少しの沈黙の後、目を開け後ろに控えている使用人に声をかけた。

「レイモン！」

「はっ」

「アルベールが文字を読めるという話はあなたからは聞いておりません。どういう事なのかしら？」

母の後ろに控えていた筆頭執事のレイモン、オレ称“自慰”じゃなくて“爺”が一步前に出て恭しく答える。いいねえ！その白髪とヒゲ&モノクルはテンプレだぜ。さすが執事、空気読んでやがるっ。

「そのような報告は受けておりません」

そりゃそうだろう。誰にも言っていないからね、文字読めるなんていくら使用人Lv.が高い“自慰”じゃなくて“爺”と言えど知ってるはずがない。

「アニー、ミネット。あなたたちは知っていたの？」

今度はこちらに視線を向けて、オレの両脇に控えているメイドに聞いたです。

使用人の中でも出来る子であるアニーはいつものように平静を保っているが、グズでのろまなミネットは隣であたふたとしているのが見なくてもわかる。ミネットは日々の決まった仕事をする分には問題ないのだが、突発的な出来事や立場が上の者から声をかけられると落ち着きをなくすのだ。

彼女たち二人はオレ付の世話係で、今日もこれからいつもの「あくん」をしてくれるためにここに控えていた。

生後少しした頃から母に代わって一日中ほとんどの時間を一緒に過ごし、日常生活のすべての面倒をみている。そのためオレの事で知らないことはない訳で、マイサンはもちろんケツの穴、排泄物的な色ツヤまで見られているそれはもう「デーパーでマニアックな関係」だ。

「い、いいえ、奥様」

どもるミネット、「スマン」と心の中で謝っておこう。

「存じておりませんでした、奥様。ですが……」

「どうしたのです、アニー？心当たりがあるというの？」

気弱なメイドのミネットはすぐに否定したが、落ち着いて対応したアニーは含みを持たせた為、母がその先の言葉を促した。

「はい、奥様。昨年のアンスールの月あたり……からでしょうか。物語をお聞かせする時に、アルベル様が『ほんがみえるようにしてよんで』欲しいとおっしゃる様になりましたので、読書の時間やお休みの前にはそのように読み聞かせをさせて頂くようにしております」

「そつなの？」

「そ、そつといえばわたくしも昨年、アニーに言われてからそのようにしております」

ハツと思い出したように言うミネツトは、母の確認の視線に恐縮して最後は消え入るように答える。

「……………、アルベル」

「はい、ははうえ」

「物語を読む事が出来るのなら、今からわたくしに何か読んでみていただけるかしら？」

「はい、もちろんです」

執事のレイモンがメイドの一人に本を持ってこさせ、食事そつちのけで朗読発表会が始まった。

この本の題名は『イーヴァルディの勇者』と言って、内容は某竹槍で魔王を倒す物語と同程度の出来栄で、メイドAさん談では一番の知名度を誇るものだそつだ。

その『イーヴァルディの勇者』をスラスラと読み上げると使用人達は一様に驚いていたので、母の様子もチラリと見てみたが、目を

瞑って聞き入っているような考え込んでいるような感じだった。

(ヤバかったか?!)

そう思ったと同時に母が席を立ちこちらに近づいて来た。

前世の記憶があるなんてチートは気味悪がられると思って誰にも言っていないが、3歳児が読み聞かせだけで文字を憶えてしまうのはやはりマズいのか。

文字数もアルファベット並みだし、文法も英語やフランス語とまでは洗練されていないが単純なものだったし、名詞によって冠詞がいるいと異なる事を除けば、単語を覚えるとこの言語は結構簡単だと思ったものだ。だからギリ天才児風の仕上がりでイケると思っていたが……。

「アルベール！あなたはわたくしの誇りよっ！」

ヒシと抱き上げられてしまった。

アレ？記憶にある限りじゃ抱き上げられるのなんて初めてじゃね？オレ。

つか記憶があるって言うてもここ二年程度で、生まれてから一年はもうほとんど憶えてないのよね。前世の記憶があるって認識した頃以前の記憶がないから、初体験ではないかもしれない。

まあそんなことより“天才児風な仕上りの息子”はどうやら許容範囲内だったらしい。ビビらせんなよ、マイマザー！てか胸が柔らかいじゃないか、こんちくしょー！

「ありがとうございます、ははっえ」

「あなたの父上にもご報告の手紙をすぐにしたためねばなりませんね」

手紙とな。

親父殿は見ない見ないとは思っていたが、やはりこの屋敷には住んでいなかったのか。ご報告することは死んだり、離婚したりしている訳じゃないと思うけど実際どうなんだろう？

母とも基本的に食事以外では会わない。というか、食堂以外であったことがないと言った方が正しいだろう。

親子の会話と言うのもマナー上、食事の最中の会話は御法度なので食前の挨拶と食後の「かわりはありませんか？」程度のものだ。別に苦手と言うわけではないのだが、とても家族の会話とは言えないコミュニケーション、事実それ以上は何も話さない。だから母親と言うよりは、同じ屋敷に住んでいる美人さんぐらいの認識しかない。

年齢すら知らないのよ、オレ。

まあでも今はちょうどいい機会だし、次にこんなに会話する事があるのかどうかさえ怪しいため、パパ上様の調査を開始しますか。

「^{父上}ちちうえ はいまどちらにいらっしゃるのですか？」

「あなたには話していなかったかしら。あなたの父上はこのベルギウムのためにゲルマニアと戦っておられるの。我がアントワープ家の誇りと命をかけて」

「へるぎうむ？」

「ベルギウムはあなたがいるこの国の名よ。ゲルマニアはベルギウムのすべてを奪うために蛮行を行う国の名前。そのゲルマニアからわたくしたちを守るために戦場に赴いているの。アルベールにはわかるかしら？」

「はい」

「そう」

「ですが、わたしも ^{父上}ちちうえ や ^{父上}ちちうえ のまもる ^国くに
のことを、まなぶべきだと おもいます」

「そうね。まだ早いとは思っていたのですが、聡明なアルベールならば問題ないでしょう。レイモン！」

「はい、奥様」

「明日からアルベールの教育にお前も加わりなさい」

「承知致しました、奥様」

「これなら魔法もすぐに上達するわね。今から楽しみだわ」

まほー？

……マホウ。まっ、魔法！？

今、魔法つったよね？いわゆる、マズイック？！

何？ここヨーロッパじゃねーの？

もしかしてファジーとかファンタジーとか言うやつですか？

言っちゃなのディスプレイかあ~~~~~!!!!

さよなら負け犬、こんにちわ貴族様（後書き）

アニメを数話見て大体ゼロの使い魔の話が掴めてきました。

ゲルマニアが蛮族の国と言う紹介がありましたので、その辺りから話を始めることに決定致します。

ゲルマニアとトリステインの位置関係は？とハルゲニアの地図をググってみると、ゲルマニアにある半島（トリステインの北の位置）が目につきましたので、ココにテキトーな国を作ることになりました。

原作に思い入れのある方は読んでいないと思いますので、苦情はご勘弁を。

ロリと魔法とメイドとか

先日、新たな人生を過ごしてきた中で最大の衝撃を受けた。

THE魔法。

そう魔法なんていうチートがこの世界に存在していたのだ。

なんでも貴族は誰もが魔法を使う事が出来る『メイジ』（「おそらく魔法使い」）であり、平民は魔法を使う事が出来ない人間の事なのだそうだ。

もうこの際ここが水の惑星ジ・アースでなかるうが、夢の科学技術の時代二十一世紀でなかるうが、歩いて5分以内にコンビニがない事以外は些細な事だ。

重要案件0001「コンビニが歩いて5分以内の距離にない」は思考内フォルダから削除。

関連案件0002「月曜日にジャン　　が読めない」も脳内禁則事項に指定。

たったこれだけで鬱要素がなくなるオレってなんてペラい人生だったんだろう。そりゃ模試でA判定でも受験失敗するわ……。

まあそれは考えても無駄だし忘れるさ。

なら確変引き当ててファンタジーしちゃってるんだから、とりあ

えずはアゲて行こう。なんつっても貴族だしね！ビッグ引いちゃってるよ、オレ。

人生やり直し（ただし異世界）、母美人（未だ父見ず）、リアルメイド（萌え成分なし）、そしてオレ様〓貴族！ノー平民！！ひやつほーううううう！！！！

ビバ“選民思想”っ！

うむ、昨今知識層からは人権がどうだこつだと言われるが、いざ特権階級側になるとたまらんね、これは。経験した者にしかわからないのだよ、この高揚感は！

「改めまして愚民ども。選ばれし者、またの名を『メイジ』な貴族のオレの靴を『はあはあ』言いながら舐めなっ！」

なんてついキメキメ大人口調で言っちゃったりする。ありもしないカメラ目線&脳内効果音付きで。

「申し訳ございません、アルベール様。何か不手際がございましたでしょうか？」

やべっ、リアルメイドのアニーが傍で控えている事を忘れてしまった。

このアゲアゲなラリ状態もそろそろ落ち着かせないと「アルベール、ダメな子っ」って思われちゃう。

「いや、なんでもないよ。きにしないで」

「ですがそれほどまでお気に触る事がございますのでしたら、仕え

る者として罰を受けねばなりません」

いつも理知的な彼女の表情に少し不安が浮かんでいたのを見ると、アホな自分を殴りたくなる。

ああ、マジ罪悪感……いつぱい……おっぱい。

地味で野暮なメイド服に主張する母性が、じゃねー！ヤベーよ、処置が遅れたせいかマダオ症候群が進んじまっている。

生真面目巨乳マンセー！

「ほんとう 本当 になんでもないから」

心でどう思っているように、一応自称純粋な瞳を上目づかいで、無邪気なお子様を意識して「なんでもない」と誤魔化してみる。

「ちよつとこの 本ほん がむずかしかつただけだよ」

念のためもう一押し。

「そうでございましたか。ですが不手際などございましたら何なりとお申し付けください」

「わかってる。でもそんなことは 今いま までなかったし、きつとこれからもないよ。それより ちよつとつかれたな」

「では一息お入れになってはいかがでしょうか？只今、お茶を用意いたしますので」

「うん。そうだね」

部屋の隅に置いてあった台車をテーブルの傍まで押し来ると、その上にあるティーセットでアニーはお茶を入れてくれる。

使用人なのだから当然なのかもしれないが、なかなか手馴れたその所作にナイスリアルメイドっ！とサムズアップしておく。

なんてユルい日々を過ごしていると、ふと考えてしまう事がある。今はお気楽貴族ライフを満喫しているが、この生活がいつまで続くのやら……と。国が戦争をしているのだから安穩としてはいられないだろう。

この国ベルギウムはもちろん攻めてきていると言うゲルマニアも、今まで聞いたこともない国の名前だ。不思議ファンタジーの世界の戦争がどんなものなのかわかん時点で考えても無駄なのだけはわかる。とりあえず今は知識を蓄える事を優先しておくか。

まあ、最低でもどうにか家督を継いで、いいトコのお嬢様と婚約そしてイチャラブするぐらいまではもってほしいものだ。

そんな事を考えていると紅茶が用意されていたので、香りを楽しんでから口に含む。

「アニーのいれる 紅茶 こうちゃ はおいしいね」

「ありがとうございます」

「どのくらい 使用人 しようにん してるの？」

「6年になります」

「わたしの生まれ 前 まえ からだね。ずいぶんながく 仕 つかえて
くれているんだね」

「いいえ、わたくしなどレイモン様に比べれば、まだまだご奉公させて頂き始めたばかりのようなものでございます」

「わたしが生まれるまでは、^{母上}ははうえに？」

「いえ、特に旦那様や奥様という訳ではなく、レイモン様の指示の下で努めさせて頂いております。ですが奥様が嫁いで参られた時の事は今でもよく憶えております」

「えっ！？^{母上}ははうえ よりもながく ここにいるの？」

「奥様はわたくしがこのアントワープ家にお仕えするようになってから1年ほどで旦那様とご成婚という運びになりましたので、5年前にこのお屋敷に嫁いで参られました」

「そうなんだ」

「ええ。当時レイモン様から奥様のお歳がわたくしと同じだと聞かされておりましたので、学のないわたくしは幼いながらもまだ見ぬ奥様にただそれだけで好意を持っておりました。恐れ多いことではございますが親近感のようなものであったのかもしれない。使用人の身でありながらアントワープ家の慶事を我がことのようにうれしく思っていたのです。

嫁いで参られた奥様は、言い表す事が出来ないほど可憐でいらっしやいました。このアントワープ家にお仕えすることが出来たわたくしの生涯忘れる事のない思い出でございます」

「？ちよつとまって。アニーと ^{母上}ははうえ はおなじ とし ^年なの？」

「はい」

「いくつ？」

「今年で19でございます」

「ちょ、ちょっと待て！それマジか？！」

母親がまさかのティーンエイジだったなんて！ない事もないがこのファンタジー世界ではあたりまえなのか聞きたい。

しかし調査するにも、おそらくここでは標本が偏りすぎていてまともな統計が取れるか疑わしい。っていうか、いろんな意味で無理だ。

だが起こった事をありのままを話すぜ！

母親が19歳でオレが3歳だから、母親は16歳で出産。

妊娠は15歳！てか、中 生かよっ！？

すでにそのお歳でやりまくりかっ！うらやましすぎるぜ、ダディ。

結婚したのが6年前って事は、14歳？

ヤベーな……、拝啓、まだ見ぬ親父殿。

『あなたはロリだったのですねっ！』

ロリ、ロリロリ、マイ親父

ロリの、国から、やあってきたー

思わず歌つちまったけど、ファジーだから合法なのか？

いや待て！親父殿はいくつだ？なんとなくちょび髭のアラフォーを想像していたが、周りの人間に言質をとったことはない。もし親

父殿も10代での結婚だったら許されるのではないのか？よしつ、オレも器のでかい男だ。20代前半まではギリセーフとしてやるう！ふっ、我ながら寛大な自分に恐れ入るぜ。これで脱チエリーボーイのあかつきにはどれだけデカイ器になってるか、オレ今から怖いよ。

親父殿ロシキ下、早く（戦場から）帰ってこい！

～ 合法ロリ、戦場にイク。 ～

語呂がいいからドラマのタイトルに使えそうだ。二ノに主演を依頼して、カリナに太もも出してもらおう！バックミュージックでさつきのパクリの替え歌を使っても、もう結構昔の歌だからバレはしないだろう。

なら10%はカタいはずだ、又けるもとい、イケる！

「アルベール様は近頃よくわたくしども使用人にお声をかけて下さいますね」

「そうかな？」

おっと、太ももトラップにまんまと引っ掛かるところだった。ヤベーヤベー。

普段なら使用人は用件がなければ絶対に話しかけてこないが、今はオレが振った話の最中だもんな。アホな妄想は程々にしておこう。

「はい。以前はわたくしたちがお世話させて頂く折に返事をなさるか、ご挨拶をして下さるだけでしたが、ここ数日は使用人のわたくしたちによくお声を掛けて下さいます」

「まあ、 “ じぶん ^{自分} でできることは じぶん ^{自分} でやる ” ってきめたからね。そのためにも、いろいろ ^知 しりたいんだよ」

「そうでございましたか」

微笑むアニーに照れ臭さを感じ、顔を背けるように紅茶をもう一口。するとその会話の切れ目を狙ったかのように、コンコンと部屋の扉を叩く音が聞こえてきた。
もうそんな時間か。

「アニー。レイモンだともうから、なか ^{室内} にいれて」

「かしこまりました」

彼女が扉に向かう後姿はいつ見ても奇妙だ。

アニーは出来る使用人なので動きに無駄がないのはいいんだが、移動時に氷上を滑るかのように歩くのは気持ちが悪い。音はもちろん立てないし、上半身が上下もブレもしない。ホント人形みたいなんだよな。

「アルベール様、お時間でございます」

「わかった。ところで ^杖 つえはどうなったの？」

開けられた扉から入って来た執事のレイモンの言葉を聞くと、オレは気になっていた用件をすぐに切り出した。

「奥様にお許しを頂いてからすぐに懇意の商人に手配させました。オセルの曜日に屋敷へ来るように伝えておりますので、今しばらくお待ちいただけますよう」

手を胸に当て頭を下げるレイモン。そのモノクルはどうやって固定されているの？いや、これは聞いちゃダメなのだろう。テンプレはそれが当然のように存在するからテンプレなのだ。

それより杖はまだ結構かかるな。今日がユルの曜日だから、エオ
ー、マン、ラーグ……オセルの曜日まで5日か。それまでにこの『
偉大なるブリミルの残したもう高尚たる魔法儀式 - 基礎儀式篇 -』
を読んで杖との契約儀式を一通り把握しておこう。魔法儀式に高尚
って？なんてツッコミを入れたいところだが、こういうのは反
応してしまったら負けだ。

オレは手に持っていた本の題名を確認してから、部屋の壁一面に
備え付けられた本棚に戻す。

窓辺に置かれたテーブルではアニーがお茶を片付け、台車を押し
て部屋から出て行く。

使用人からの自立宣言をしてからというもの、彼女たちの膝の上
で後頭部を母性に抱かれながらの読書がなくなり、後悔しているオ
レは名残り惜しそうな目でアニーを見送る。いつかドラゴンール
を7つ集めてギャルにパフパフしてもらうぞと心に誓いながら。

そんな童貞の野望など我関せずとばかりに、執事のレイモンは準
備をしている。レイモンは部屋の中央に置かれた机に持ってきた地
図を広げ、オレが椅子に座るのを待つ。

「あつ、アニー。まだ^窓をあけておいて

「かしこまりました」

台車を廊下に出して部屋を去ろうとしているアニーに思わず頼み

事をしてしまった。最近、スキンシップが足りないせいか、ただ名残惜しいせいなのか、つつい甘えてしまう。

ぬくもりを忘れてしまうと最大SAN値が低下してしまう可能性があるから、これはこれで仕方がないと思いませんか？

ブーメラパンツは好きですか？（前書き）

前回の続きです。

ブーメラパンツは好きですか？

「じゃあ、今日きょうは 何なに をおしえてくれるのかな？」

「はっ。本日も我がベルギウム王国について、現在までの成り立ちを中心にお話をさせて頂きますが、まずは昨日アルベール様がお尋ねになりました同盟国についてからお話致しましょう」

「ルクスベルガ、フリースランドとの 三国同盟さんごくどうめい だね」

ハルケギニアの地図に目を落としベルギウム、ルクスベルガ、フリースランドの三ヶ国を指で指し答えるとレイモンが頷く。

視界の隅でアニーが頭を下げ部屋から出て行く。
うむ、なかなかできたメイドよのう。特に胸が！

「おしゃるとおりでございます。ベルギウム王国、ルクスベルガ大公国、フリースランド王国の三国永年同盟についてですが、アルベール様はフリースランド王国と我が王国との関係を憶えていらつしやいますか？」

「ユランは半島んとうの 統一とういつ のために、むかしはフリースランドが 南みなみのベルギウムに 攻せめて きていたんだよね」

「その通りでございます。」

フリースランド王国は初代フリースランド王ウィレム1世、世に

言う海賊王のオラニエ地方統治がはじまりと言われております。ウイレム1世はオラニエ地方統一後、海洋の軍事力によって南へと勢力を広げ、海岸部を中心にユラン半島の半ばほどまで国土を広げました。

その後、7代のフリースランド王マウリッツ3世がユラン半島内陸部にも版図を築き上げ、半島統一に後一步と言ったところまで勢力を広げた時に我がベルギウム王国との関係が始まるのでございます。

我がベルギウム王国は“始祖の血脈”の国トリステインの貴族が一つ、ナツサウ伯爵家がはじまりと言われております。ルイ＝エクトル・ド・ナツサウ伯は当時のブリミル教の聖地奪還の為の聖戦において、疲弊したトリステイン王国の財政を立て直す為に北方地域との交易を計画致しました。ナツサウ伯は領地を嫡男のル・マレ子爵に任せ、3隻の軍艦と50人のメイジを率いてフリースランドへと赴きますが、軍事力をもってしてのトリステインに有利になる交易の交渉は決裂に終わります。

ナツサウ伯はリンブル地方のさらに南、ヘルデ川の河口に留まり幾度となく交渉を行っていましたが、交渉が進む事はなかったと言います。その間も豊かなヘルデ川の上流の地域と交易を行っておりましたので、数年も経つとそこは街になっておりました。その街こそ現在の古都ルーベックでございます。

ルーベックが港町にもかかわらず古都と呼ばれるのは、後にベルギウム王家となるナツサウ家が今の首都バラムスに移るまで居を構えていたからなのです。すこし話が長くなってしまうましたが、ここまでではよろしいでしょうか？」

「だいじょうぶだよ。たしか、わがアントワープ^家の子はナツサウはくしゃくがルーベックでなした5ばんめ^番のこ^子だったかな？」

「はい、側室の一人ゾフィー様が長子、マルク様が後に領地を授かりアントワープ公爵を称したのが始まりでございます。

アルベール様、アントワープ公爵家の事はもちろん何よりも大切な事ではございますが、我がベルギウム王国の事とは別に後日詳しくお話致しますので、本日はユラン半島の三国の事をお話してもよろしいでしょうか？」

「ああ、すまなかった。はなし^話をつづけて」

テンプレなモノクロ執事レイモンこと“爺”は、なかなか博識だ。

確実に貴族である母より知識があるのではないだろうか。

このところオレの中での母の“株”が暴落している。

以前からオレら親子が会う機会といえば食事ぐらいで、身の回りの世話や教育は使用人に任せきりだった。そこはまあ貴族だからそんなものかと深くは考えていなかったのだが、自分でいろいろと動き始めてわかることが多々あった。

例えば母が一日なにをしているかなどである。

彼女は朝の食事に会うぐらいの存在だったので、昼・夜の食事にはいない訳を使用人に聞いてみた。

すると「本日は 男爵夫人と王都にてお約束が」「x家晩餐にお出かけになられます」「伯爵夫人とフリースランドへ1週間ほど外遊に向かわれました」などと答えが返ってくる。

なんて事はない、何をするでもなく放蕩の日々を送っているだけ

だ。

アントワープ領は大丈夫なのかと思い、その辺りの事を“爺”にばかしながら聞いてみた。すると自領の経営などは不在の親父殿に代わり、王都の邸宅で叔父上が執っているとのことだった。

まあ考えてみれば当然この事か。

あの残念貴族な母に領地経営など関わらせると取り潰しの未来が開けてしまう。

そうだ！

これは地球が青いことと同じくらい当然のことだったのだ。

なんか心配して損した気分だからアニーのおっぱい眺めよう。

……さつき出て行ったんだった。

他には重要な判断が必要な件では、引退して別邸で静養されているお爺様が行っているらしいとか聞いたが、だからといって遊び呆けているのめいかかなものか？

公爵夫人ともなれば本人がどう考えていようと、言動に政治的な影響を帯びてくるだろう。

まだ10代で遊びたいのはわかるけどさ。なんかホント残念な意味で生粋の貴族なんだよね、マイマムは。

“爺”の話とは関係のないことを考えている間も話は続き、ベルギウム王国が当初トリスティン王国の国王に代々任命される総督を国家元首としていたなどと説明していた。総督にはナッサウ伯爵家から選定されていたが、独立をはたした際に王を称したみたいだ。

この辺りの昔話はオレには関心がないので聞き流す。

だつて知りたいのは現在のことだけなんだも〜ん。

「この時に今の首都バラムスに遷都をし、本格的に北のフリースランド王国に侵攻を始めるのでございます。内陸部においてはメイジの存在が我がベルギウム軍に有利な戦闘をもたらし、着実に北へ北へと領土を拡大して行きました。

しかし海上の戦闘においては、いかにメイジを擁するベルギウム軍と言えど、質・数ともに圧倒するフリースランド軍に圧され、ルーベック以北の沿岸都市の制圧までには至らない結果が長く続いたのでございます」

ああ、お空に浮かぶ雲が白いなあ。

そういえば、この世界でも女性の下着は白のシエアが多数を占めているのだろうか？

いやマテ、下着と言ってもブラとショーツって訳ではないだろう。たしか近代まではヨーロッパではズロース的なものだったと聞いた覚えがある。

童貞で死んでしまった前世の屈辱を果たすべく、今回の人生では可愛くなくてもいいから彼女的なものを作り、そ、その……せ、せつ、せつ………。ダメだ。童貞にはこの言葉の壁は高すぎる。

つまり、イチヤイチヤしてえええ〜のオレは！

なのにブラとショーツがないなんて事になったら、果たしてオレはタツことが出来るのだろうか？

ズロース姿に萎えて息子シヨボン

大人への階段登れず

女の子に可哀想な目で見られる

そのショックで勃起生涯に

クララ氏す

鬱だ……。

そんなオレを気にも止めないで、しゃべりが調子に乗ってきた“爺”がこんな事を話していた気がする。

2000年も経つとフリースランドの王家にメイジの血が入るきっかけとなった事件が起こる。始祖の血脈の国ガリア王国の西部、ルシアンボネ領で起こった反乱だ。

時のガリア王の突然の崩御によって巻き起こった後継者争いにおいて、使用人が身籠った庶子である第3王子を即位させようとしていた者がいた。

船を使った交易によって財を成したルシアンボネ侯爵だ。

結果としてはその時の後継者争いには敗れたが、侯爵は財力にモノを言わせて兵と糧秣を集め、1年後武力蜂起という形で反乱を起こしたのだ。

反乱は数ヶ月の時を要し鎮圧された。

こうしてルシアンボネ侯爵家は断絶したが、御輿となっていた第3王子ラウルは寸でのところ、落ち延び、海路でフリースランドに入る。彼は3年後にフリースランドの第2王女と結ばれ、ルクスベルガ大公を称する。

んで、ラウルが活躍してルクスベルガ大公国が出来るっていう感じかぁ。

でもガリア王国の正史にはラウール君は庶子であって王子と認められていないんだよね。しかも反乱の際に死んだ事になっているらしい。

考え方によっては新天地での活躍で、救国の英雄的に祭り上げられているんだから、そんなに酷い人生ではなかったのかもしれない。帰る場所がなく祖国から追われている彼と、始祖の血とメイジの力を欲したフリースランド王家の思惑があったとは言え、一国の女王様とイチャラブ出来んだから最後は勝ち組だよな。

ラウール、うらやましス。氏ね。

このルクスベルガ大公国建国の後、他の近隣諸国の台頭と停戦協定の際に行われたフリースランドへの輿入れによって、両王家の血が交わることで対立関係が軟化していく。

結果、ルクスベルガ大公国建国から350年ほどで三国間で同盟が結ばれ、のちに三国永年同盟になる。

この三国永年同盟もオレに言わせれば変な同盟だ。

50年の期間に三国間で必ず一度は王家またはそれに順ずる血筋の者を他国に輿入れさせるという“政略結婚の強制条約”のことを前提に結ばれた同盟なのだ。

この高貴な人物の人質条約がもう1000年以上も守られているのが驚きだよ、マジで。

「うーん、レイモン」

「いかがいたしましたか？アルベール様」

「このくに、ベルギウムは あまりよくないね」

「よくない、とはどのような点がそうお感じになるのですか？」

そんなの決まってるだろうが！

聞く前に察しろよ、“爺”。

同盟だとか、他国のことで又けるかよっ！

少し考えれば解るだろ？オレが必死に思い悩んだ表情してんだ。

そつだよ！

下着とかエロとか以外でこんな真剣に悩むやつがいるかつ！

そのモノクルは伊達なのか？あぁ〜ん？

「^{停滞}ていたい している」

ズロースで満足しているようじゃ、大人の産業なんて夢のまた夢だ。

夜の営みには下着も重要な要素なんだよ。

見たり、触ったり、脱がしたり、着けたまましたりなあ！

「停滞している訳ではありません。安定しているのです、アルベール様」

まだ言うか！このオナニー野郎！

呼び方昔の“自慰^{じい}”に戻すぞ、ゴラア？！

さつきは言わなかったが、変態のおっさんが女性モノの下着を着けるなんていう萎える革新すらあるんだぞ！

「国永年同盟3ごくえいねんどうめい がむすばれてからも、しんぽ進歩してないじゃないか？」

ドレスにレースなんかもふんだんに使ってるんだし、体のラインを強調するような作りを採用してるんだから、フェロモンに似た概念ぐらいあんでしょーが！

どうしてスケスケでキワキワのレースのショーツとか考え付かないかなっ！

「平民も増え、村・街ともに大きくなり、作物の収穫も多くなりました。平民が船を持つようになり漁での漁獲も増えております」

「いや、そういうことじゃないんだ」

そういうことじゃないんだっ！

ハイッ！大切なことだから2回言いました。

「何も他国への侵略によって領土を増やす事が

「もういい」

無駄なんだ。

きっと“自慰”はガチホモなんだ。

ムキムキの筋肉とすっぱい臭いが大好きなんだ。

ブーメランパンツともっこりを、こよなく愛して50年なんだ。

だから女性に関係する事はどうでもいいんだな。

……もつやめようこの話題は。熱くなっちまったけどさ、オレも実際この世界で女性の下着姿を見たこともないしね。

「アルベル様はこのベルギウム王国がお好きではありませんか？」

「どうだろう？わたしはまだ、知らないことばかりだからね。好きとか、嫌いとか、いえるほどなにかを^何しているわけじゃないから、その^{質問}のこたえはもってないよ」

“自慰”の尊厳のためにオブラードに包んで言っちゃったが、ベルギウムどうこうよりガチホモの質問には答えないよ。だってキモいもん、もっこり愛好会。

一生その質問の答えは考えもしないさ。神に誓ってね。

「そつでございますか」

そつでございますう！

てか、あたりまえだつーの！

ああ、つまらん。

実につまらないな、着エロのない世界は。

NO！天才とか死ねばいいのに

杖との契約に一月はかかるだろうと言われていたが、オレは一週間もかからず出来てしまった。

契約とはどんなものなのかまったく想像できなかったのだが、書庫にある書籍に記していたとおり“常に身につけておく”を実践していると変化があったのだ。

すべてのメイジが思ったであろう月並みな言葉で表現するならば、“手に杖が馴染む”と言うのがその変化だ。手に持つ違和感が無くなり体の一部のように在る事が当たり前前に感じるようになった。

この書籍はトリステイン魔法アカデミーに属する高名なメイジの手によるもののだが、実験による検証や標本を集めた上での統計で導き出された結果ではなく、どうも己は有能という有りもしない根拠を下に主観で書かれた書籍のようであり役に立たない。

記述も抽象的なものが多く、著者の傲慢さが随所に表れていてイチチ癩に障る。

“契約の成功は己の魔力の下に杖を支配する事によって完了する”などとエラそうに書いてあったが、こいつは『俺様スゲー、貴族マシナー』と出来の悪い日記を書いているだけだ。

しかし杖の契約に関する記述のある書籍はこれのみ。

イライラを募らせつつも主観部分の記述を排除しつつ、内容を整理していく。

結果、契約とはどうやらまず常に身につけておく事で、杖に自分固有の魔力を馴染ませる事が必要不可欠らしいという事わかった。その経緯は書籍の記述から、以下の工程で行われるものと推測した。

- ・ 魔力を馴染ませるといふ行為は、個人の魔力量によってその期間が長短する。
- ・ だから魔法の才能があり、生来魔力を多く保有する者ほど儀式をする準備段階に至るのが早い。
- ・ 杖は魔力を溜め込む性質の特別な木で出来ている為、身に付けておく事で自身の固有魔力が少しずつ杖に蓄えられる。
- ・ そして十分に固有の魔力を蓄えさせ馴染ませた杖に“契約の儀式”をもって、魔法使用時にこの杖を魔力の発現媒体にすると刷り込みを行い、自己の深層心理に認識させる事が契約の概念のようだ。

これはこの書籍の最終章に記されているコントラクトサーヴァントの理屈に似ていると思う。

コントラクトサーヴァントは、対になる魔法サモンサーヴァントによって召喚された使い魔と“ルーン”によってメイジとの共感性を持つことを可能にし、そのメイジの魔力によって使い魔に能力が付加されるものだ。つまり儀式によって使い魔とメイジに魔力のパスを通し、個別の“ルーン”の能力をメイジの魔力によって使い魔が使用可能になると言うものだ。

杖の契約の場合、魔法使用時にメイジから放出された魔力が流れ

込むパスを杖に繋ぎ、その魔力を魔法発現時まで逃がさず留める媒体として指定する儀式という訳だ。うん、確かに似てるな。

『故にメイジの杖は“1人1本”しか存在しない』

この原則もサモンサーヴァントと通じる。コントラクトサーヴァントによって契約した使い魔がいる場合、サモンサーヴァントの呪文を唱えても召喚の門は開かない。故に使い魔はメイジ“1人1体”しか存在しない。

話しを杖に戻そう。仮に杖が2本あれば、魔法を使おうとした時に魔力が両方に流れ出してしまっから、1人1本の原則なのだろう。魔法発現は言わばフィラメント（抵抗）に電流を流し発光させるようなもの。現実の法則を無視して世界に干渉する魔法は世界の抵抗力に打ち勝つ魔力を必要とする。

2つ流れ出す出口があり、一方はその出口に栓をしたように抵抗が大きくもう一方はまったく抵抗がないのなら、まったく抵抗が無い出口に流れ出すのは自明である。いくら膨大な魔力を放出しようが一方から駄々漏れなら、もう一方の栓をされた出口から十分な魔力は流れてこない。流れるとしてもせいぜい発現するに不十分な魔力が、数滴こぼれ出る程度だろう。

系統魔法は2つ同時に使う事が出来ないのだから、2つの魔法を使い片方に栓のような魔法の抵抗力を作り魔力の流出を防いだ上で、もう片方で魔法を発現させるのは不可能。

おそらくこの系統魔法が2つ同時に使えないというのも、個人が

世界へ干渉するには事象が大きすぎるといふ事を意味している。すなわち世界の法則という根源的なものだろうから、この世界の神、もちろん始祖ブリミルなどではなく創造神の神を超える存在でもない限り、杖を2本持ち魔法を使用する事は出来ないはずだ。

ファンタジーな世界の癖に魔法についてはファジーじゃないなんて！

無駄に基礎魔法制御学概論的な考察をしてしまったが、結局は奥が深いのか浅いのか全然わからんっ！

とりあえず杖契約の儀式すっか、と思ったが止められた。それはもう必死にというか、頑なに言う方が正しいかな。

「今しばらくお待ちください」

えっ？まだダメ？なんで？

「危のうございますのでお止めください」

あぶないからダメなの？

「はい。危のうございますので」

いやいやいや、別にあぶなくもないし簡単じゃん。

「お止めください。危のうございます」

ほら、これ貸してやるから読めって。

「アルベール様、危のうございますので」

ああもうわかったよ、教師が来るの待てばいいんでしょ！待てばさ！

危のう、アブノウうるさいんだよっ！おめえの趣味の方がよっぽど危険だわ！

この“アブ脳”ガチホモ自慰野郎めっ！

ガチホモはいろんなところが頑なで、マジめんどくさい。いや逆に世の中“硬けりや何でもいい”って言う価値観だから、そうなったのかもしれないな。

うわっ、考えただけでもキモいな。

なんてやり取りがあったのも懐かしい程に思えてくる今日この頃。やっと魔法の教師が遣って来た。

前置きが長くなってしまったが、オレが焦らしに焦らされた悶々としたあの日々に比べればどうということはないはずだ。

っーかさ。2ヶ月も待たせるってどう言うことだ？うちの家はそんなに権力無いのか？違う？戦争で男のメイジがほとんど前線にいるって。

なるほどまあいいか、男は前線に居るせいかな遣って来たのは若い女子だったし。オレも江田島 八ぐらいデカい器の男、いや漢おとこを指す者。放置プレイの一環として嗜たしなんだという事にしておこうじゃないか。

では、いざメクルメク魔法の世界へ！

あつ、関係ないけどメクルメクってカタカナで書くとなんかメルヘンちっくだね。

「ソフィーナ」

名前はさっき聞いたところによるとソフィーナ・ド・ゴージェエというらしい。

「あい！なんででしょう？アルベルさま」

「もう 一回 いったい おしえてくれる？」

「あい！おまかせください」

いやマテ！みなまで言わずともその問いに答えようではないか。そうです。このアホな子の返事をしているのが、今話題のやっとな魔法の教師なんです……。

「らいとは、こう火が『ぼお！』ってなってね』って感じでえ、点いて って杖でランプを叩くんです。らいとお！」

杖の先でランプを叩いて出たチンツ！という甲高い音と共に、杖から魔力のかすかな光の筋が流れたかと思うとランプに火が灯る。火が灯ると言うのも違う気がするな、光が灯るのほうがいっしょく

るか。

それはそうと、なにが楽しいのか無駄に笑顔なこのアホな子は、魔法少女よろしく変なポーズを決めている。コモンマジックは特に難しい呪文があるわけじゃないし、呪文名を口にするだけだから最も単純な魔法だ。

呪文はもちろんポーズなんて必要ないのになにやってんだ？

計算か？この愛くるしさに違和感のない萌えポーズは？

いやそんなことより、こうオレの胸の辺りがムカムカすんのはそのポーズの効果なのか？……っ！か、こんな教え方で理解できるかっ！ゴラァ！！

「あい！点きましたあ。わかりました？アルベールさま」

「……」

ふりかえるドヤ顔の美少女。そして見つめられるオレ。

わかるかあああっ！と机を思いつきりひっくり返したいが、オレの胸まである西洋テーブルはビクともしない。卓袱台ちゃぶだいのアイデンティティーを今日ほど実感した事はない。というか何から突っ込むべきかイライラがパねえ。コメカミのひくつきが止まらねえぜ。

とりあえずその舌つ足らずなしゃべり方を直せと怒鳴っておこうか。待て待て、オレもガキじゃねえんだ。いやガキだけ。まあ、ここは大人の対応をしておこう。

これは早いところ土系統の魔法に手を出して、創作クリエイトの呪文を覚えねばヤバいな。卓袱台がない場合、イライラ限界突破を果たした才

レが何をしでかすか……自分でもわからん。今はまだイメトレでなんとかこの場を凌いでおこう。

「ではでは、アルベールさまやってみてください」

「……あ、ああ」

「魔力をランプに留める感じでえ、『えいつ！』って火を灯してみてください！」

魔力でランプに火を灯せって言われても、火を灯す時点で系統魔法じゃねえの？魔力を留める感じでランプに魔法かけるって言われてもわからん！

お前もあれか！すべてを感覚で乗り切るお気楽な“ゆとり世代の貴族”なのか！

ダメだ、今は魔法に集中集中

ライトボウウウツラ！

「ライトオ！」

ダメか。もっと軽い感じでいくか、集中集中

カモ〜ン！

「ライトウ」

うん、成功の気配すらないね。集中集中

キタこれ！

「って、できるかあ！！」

思わず杖を壁に投げつける。杖が跳ね返ってソフィーナの斜め上

を掠めていく。

呪文自体はコモンマジックだから“ライト”って言うだけなんだけど、こいつに教わってたらいつまで経っても出来るようになるなんて気がする。いや確実に無理。天才でも魔法使えるようにはならんだろ。

あれ？

「う、うつ、うつ、びえ〜〜〜ん!!!」

泣き出しちゃったよ、ソフィーナちゃん。杖ブン投げたのに驚いたのか、床にペタンと座り込んでガン泣きだ。いちいちめんどくせえな、コイツ。コイツのせいでアントワープ領にイライラバブル到来しちゃったし。ひとまず「オレは大人、オレは大人」と自己暗示をかけてイライラを抑える。

「すまない、ソフィーナ。おどろかせたか」

前世で男は『大人の余裕で自分から謝れ』と靴下を履かない人が言っていた。オレも文化人を自称する身だ。素直に謝ってやろう。オプシオンで頭もナデナデしておく。

座り込んだソフィーナの頭は、椅子から降りたオレにはちょうどいい具合に撫でやすい高さにあった。これは立った状態だったら無理だったね。

「ひっく、ひっく、ううう」

おお！落ち着いてきたぞ。さすが文化の人のセリフは一味違うぜ。

だけどマジ、コイツないわ〜。14にもなって感覚で生きてるの

に成功してるヤツは、いろいろめんどくせえな。

若くして火のトライアングルメイジになった天才だかなんだか知らんがチェンジを要求しよう。今なら追加料金なしでいけるだろう。これじゃあ、ただのボツタクリだからな。

今日はひとまずコイツにはあんまり拘んねえでおこう。

「おちついた？じゃあソフィーナはそこに 座すわって みててくれ。わたしはいろいろ 試ためして みるから」

「うっ、うっ、あい〜」

アホな娘のせいでオレは一步目から躓いてしまっ。

テレビの前のちびっこのみんな！

こんなモノなんだよ、人生ってやつはさ。

NO！天才とか死ねばいいのに（後書き）

アニメ第一期の視聴が終了致しました。

第三期まであるんですね、ゼロの使い魔って。

とりあえず第二期以降の視聴は保留して、拙作を書き進めていこう
と思っております。

目標である10話までに、主人公が原作の舞台であるトリスティン
に到着すればよいのですが……。

ワタシ、アナタノ、ナマエ、シラナ〜イ

無駄に可愛いだけなダメ教師・ソフィーナの魔法指導に悪戦苦闘しながらも、独自の理論で“ライト”を成功させたある日、ジジイが屋敷にやって来た。

親父殿の父親つまりオレの祖父にあたる人で、使用人たちは大旦那様と呼んでいるアントワープ公爵様だ。

結局チェンジがきかないまま、ダメ教師ソフィーナの指導（？）を受けて5日目の事だった。

混乱させる言葉と集中を邪魔する行動も、オレの足枷には十分じやなかったようである。やり遂げた自分を褒めてあげていたところで使用人のミネットがあらわれ、ジジイの訪問と呼び出しを告げられて応接室に連行されたのだ。

オレが応接室に入るとすでに母がすでに部屋の中において、柔らかな日差し差し込む窓辺にたたずんでいた。

一方、急な訪問でオレの達成の喜びに水をさしたジジイはというと、執事の“爺”ことレイモンにお茶を入れさせていた。

なんかロマンスグレーな感じが癪に障るぜ。

チッ！ジジイのくせに無駄にダンディズム発揮させてんじゃねえ！

「おじいさま、ごけんしょう健勝 そうで なによりです」

だがオレは貴族様。

些細な事でいちいち声を荒げたりはしないのだ。エッヘン！

右手を軽く胸にあてて左手を背に回し、頭を軽く下げながら同時に軽く膝を折る。

どうだ！

一昨日習ったばっかの礼儀作法は？

ぐうの音も出まい、あっはっは！

「しばらく見ぬ間に見違えたぞ。アルベール」

なっ！？

驚きもしないのかっ！………できるな、このジジイ。

伊達に年は食ってねえって事か。

オレの今後の“イチャラブ貴族計画”に支障をきたさないように、ここでアントワープ家の最高権力者にきっちりゴマをすっておかねばならんと言つのに！

「ありがとうございます。ほんじつ本日 はいかがなされましたか？」

「うむ、座りなさい」

「はっ、しつれい失礼 いたします」

とりあえず様子を見るか。

オレがジジイの右側のソファに腰をかけると、母も窓辺から離れオレの正面に座った。

しかし急な訪問の用向きとはなんなんだろう？

何事なのかと母に視線を向けるてみると、オレの視線に気付いた母は軽く首を振る。おお！仮面親子もどきとは言えアイコンタクトが通じるとは、驚きの一言に尽きるな、これは。

やっぱり、母とは一応ちゃんと血が繋がってんのね。

それは……、ちよつと残念だ。

てかさっきの反応からして、どうやら母もまだどういった用件なのか知らないようだな。

ああ、さつさと用事済ませてくんないかな。どんな用かはしらんが、オレは魔法のお勉強がしたいお年頃なんだよね。

わかってんのかな、このヒゲジジイは！

そんなオレ達に答えるようにジジイは爆弾を投下した。

「テレーズ。レオポルトが討ち取られた」

レオポルト？

記憶の引き出しを探ると割りと重要な関係が思い浮かぶ。オレ、アルベール・レオポルト・マランド・ド・アントワープの父にして、残念貴族な母テレーズの旦那様の名前だった。

あるえ？つてことはまさか親父殿が戦場でゲルマニアに討ち取られた？

「お、お義父様。今なんと……」

「レオポルトが死んだのだ。ゲルマニアにワロンが突破された時に
な」

やっぱりか！

最悪だ。ゲルマニア軍の侵攻を防いでいたワロンの戦線が突破されたと言う事は、そこを守っていた親父殿のいるベルギウム軍が敗走したという事だ。

親父殿が死んだとかなんとか言っているが、正直そんな事はどうでもいい。

確かワロンのベルギウム軍は、国軍と諸侯軍のほぼすべてだったはずだ。敗れたベルギウム軍が壊走だったらもうこの国は終わりじやねえーか！

そこんとことーなのよ？ジジイ！

「そんな……」

「ベルギウム軍が敗れたのは一昨日の事だ。今、ゲルマニアはワロンで軍の再編成を行い首都バラムズに侵攻する準備をしている。我が軍も敗走した部隊をまとめ王都で迎え討つ構えだが、ここにはあぶない。すぐに出る準備をしなさい」

「……」

「テレーズ、しっかりせんかつ！」

「レオポルト……」

「しかたない。レイモン!!」

「はっ」

「使用人はトレイズとアルベールの世話をするものを残し暇を出せ。先立つものをいくらか持たせるのも忘れるな。1人につき100エキュも持たせれば十分であろう。残しておいてもゲルマニアのやつらにくれてやるだけだ」

「かしこまりました」

おいっ!

今聞き捨てならんことをさらっと言いやがったな、ジジイ。

ここの屋敷が略奪されるのは確定事項かよ。そこまでやばい状況なのか。

なら今俺ができる事は……。

「おじいさま。^{爺様}わたしたちはこれから、どちらへとむかうのですか？」

身の安全確保だ!

オレの命に勝るものはこの世に存在しないのだから、この選択は当然だろう。

だってオレはガキだから。

お子様なのだからあゝ!

はあ?危険になったらすぐ保身に走るのは卑怯者だって?

ワタシ、ハルケギニア、キタバカリ。

ナンノコトカ、ワカラナイ。

キゾク、シラナイ。

ヒキヨウ？ナニソレ。

オイシイノ、デスカ？

「お前たちはテレーズの父であるブラツへ伯爵領へ行け。もう使いは出している。向こうに着けばブラツへ伯爵家の者がよくしてくれる」

ブラツへ伯爵領は北のルクスベルガ大公国との国境に位置する領地だったな。

よし、一先ず安心か。

ん？

国境のブラツへ伯爵領に行くことは王都が落ちたり、危なくなったらルクスベルガ大公国やフリースランド王国に亡命するってことか。

やっぱかなりヤベー状況なんだな。

つか今ジジイ、よくしてくれるって言ったな。

その言い方だとジジイは来ないのか？一応オレも孫だしその辺りの事も聞いておくか、心配してますよ的なニュアンスが伝わるよな感じだな。

「わたしたち？おじいさま爺様も一緒ごいつしよにまいられるのではないのですか？」

「わしは義務を果たす」

「^{義務}ぎむ ですか？」

「王都バラムズの城壁は堅牢だ。そう易々とは落ちません。フリースランドからの援軍が到着すれば巻き返す事も可能であろう。しかし、ここルーベックはフリースランドからの補給線の一つだ。ゲルマニア軍が王都を包囲するのならばこちらを捨て置く訳はない。こちらにも別働隊なりが押し寄せて来るだろう。わしはそれを迎え撃たねばならん」

国のために命を賭けるか。

ジジイ、あんた貴族の鑑だな。

確かジジイも水のトライアングルメイジだったはずだし、ジジイの周りには優秀なメイジも残るだろうから、最悪ジジイと側近ぐらいは死なずに落ち延びることもあるのかもしれない。

どうしようかな……。

そんな気はサラサラないがこの3年11ヶ月、一応貴族の特権を享受してきた身だ。ここは態度だけでも貴族の義務を果たしておくか。

うん、言うだけならタダだよな

「では、わたしも のこりましょう」

「女子供は戦場にいる必要はない。それにレオポルト亡き今、お前はアントワープを継がねばならん立場だ。アルベール、よく考えてからものを言いなさい」

「かめい家名をつぐのなら、なおさら義務きむをはたすべき立場 たちは
でしょう。それにアントワープには、おじうえ叔父上 がいらっしやい
ます。もしものときは、おうと王都 にいる おじうえ叔父上 に、すべてお
まかせすれば よいでしょう」

「……」

おいおい！

ここで黙んなよ、ジジイ！

オレみたいなガキが本気で戦えるわけねえだろっ！

サラツと流してくれないのかアンタは。

ちよつと母上様もなんか言っつてやっつてよつて、ダメだこりゃ。親
父殿のことがよほどシヨックだったのか、まだ茫然自失状態から戻
つてねえ。

言うだけつて感じでポーズのつもりが、このままでは命なんてい
うクソ高いチップを支払うハメになってしまう。

しょうがない。

ここは根性入れて 撤回しよう、全力全開で！

「おじいさ」

「黙るのだ」

おおつと、有無を言わせぬ威厳かもし出しちゃったジジイに気圧
されちまった。クワツと開いた目がコワいよ、ジイジ。

「口答えは許さん。アルベール、お前はブラツへ伯爵領へ行き、我

らにもしもの時はアントワープの名を後に残せ。よいな」

はあ〜……よ、よかった。

さつさとそれ言えや、ジジイ！無駄に沈黙で引つ張るから「ここにのこるなんてうそ嘘です。カツコつきたいとし年頃ころなんです。やっぱりのちがおいしいので、にがしてもらっていいですか？おじいさま爺」って泣きいれる寸前だっただろうがっ。

そんなんだからオレは未だにアンタの名前さえ知らないんだよ！

「わかりました。もうしわけありませんでした」

この答えに辿り着くまでに、どんだけかかんだよ。
引つ張りスギ。

ドラゴンボ ルの戦闘シーンかと思ったよ。

オレ今はガキだし、この結果はしょうがないよね？もうちょっと、いや最低でも系統魔法が使えるようになっていれば、親父殿の敵と戦ってもいいと思ったかもしれないが今は無理なんだよ。

いやホントだよ。

信じてないかもしれないけどさ……。

こう言った経緯でオレはこの日の夜、ブラッへ伯爵領へ向けた船上にいた。

オレと母、数人の使用人と魔法の教師であるソフィーナが護衛として同行している。

ソフィーナの生家のあるゴージェイ男爵領は、前線であるワロンに近い。ゲルマニア軍が王都に迫る今、ゴージェイ男爵領はすでに戻る事は出来ないということで俺たちに同行する事になったのだ。

オレはこの日生まれて初めて魔法を使った喜びを知ったが、オレの現在の生活と未来の安寧を約束してくれていた親父殿を失うという絶望も味わった。なんだかプラマイゼロっていうより、マイナスの桁が2つくらい違う気がする。

俗に言う“不運補正”と言うヤツなのだろうか？

オレはどう考えても主人公タイプではないと思っている。なら不幸属性は持ち合わせてはならず、成長イベントフラグなんて立つはずはないのだが……。

なんでこうも体験版“リアル転落人生ゲーム in ハルケギニア篇”（しかも一方通行）を強制プレイさせられねばならんのだ。

帝政ゲルマニアはこのハルケギニアでも一・二の大国である。

その国に攻められ、追い詰められている国の貴族たるオレが薔薇色の未来を夢見る事は、ダメ教師のソフィーナに魔法を上達させてもらう事を期待するようなものだ。

お先真っ暗である。

身近に不幸を例える“良い例”がある時点で鬱だ。

どこだ？

何処で間違った？

勝ち組の人生を得たはずなのに、どうしてこうなった？

松明の灯りがぼんやりと水面を映す甲板で、遠ざかる古都ルーベックを眺めながら自問してみる。起こった事は、オレがどんなに足掻いてもどうすることも出来ないことだ。

ならば答えなどない。

あるとすれば、ままならないのが人生だと言う事ぐらいか。
最近こんなんばつかだな。

まあ、そんなことは前の人生でわかっていた事だ。
今更である。

「……ライト」

空に浮かぶ2つの月の下に、魔法によって3つ目の光の玉が浮かんだ。

今日覚えたばかりの魔法。オレの人生初めてのファンタジー要素だ。

昼間、我が事のように喜ぶソフィーナが「オレの将来のように輝いている」と言った光。だがきつと、この光はオレの未来を照らしてくれてはいないのだろう。

それを暗示するかのようにその光の玉はすぐに消えてしまった。

ああ、負け犬人生フラグっていつ叩き折れるんだろう……。

オレはサノヴァピッチ

ゲルマニアに新たに投入された援軍が、別働隊として補給線でもある古都ルーベックに侵攻したと知らせがあったのは、オレがこのブラッヘ伯爵家の屋敷に到着した昨夜のことだった。

母の実家である伯爵家を頼って遣って来たオレたちを、母の実母・ブラッヘ伯爵夫人ジヨセフィー又はあたたかく迎え入れてくれたが。

何だ？この緊張感のなさは？

今は戦時でさらに言えば亡国の憂き目に会っているというのに、娘が帰ってきた事を喜んで晚餐の席を開くとは……頭おかしいんかい！

この鳥の巣アタマは？！

オホホホくじゃねえし。

母の悪い意味で貴族然としている振る舞いは血筋だったのか。

これはもはや落胆の域を超えて嫌悪の対象になってるオレはおかしくないよね？もうアレだ、パクリ遊園地やどう見てもガンムをオリジナルロボットと言い張る国民性を目の当たりにした時と同じ感じなんだもん。

つかリアルにこの国が減ぶことを実感したね、この残念な人たちのおかげで。

オレの心の声が現実化してしまったのか、2週間後にこの未来予想図？は的中した。それもいくつか想定していたものの中で最悪の展開でだ。

最悪の展開と言うのは、ベルギウム王国軍の將軍であるジュールダン侯爵がゲルマニアに寝返ってしまったのである。内側からこじ開けられた城門に押し寄せたゲルマニア軍の前に、首都バラムスはあっさりと陥落してしまった。それからというもの王都からはルクスベルガ大公国に接するこのブラッへ伯爵領へ逃げてくる者が後を絶たない。

平民、貴族問わずだ。

この混乱の最中、王族である王子と数人の貴族が落ち延びて来た。

初めに聞いた時はなぜ王子が？と思ったものだが、話を聞くにつれその答えは簡単なものだった。

王子を護衛して落ち延びて来た貴族の1人が、母の父でありこの領地を治めるブラッへ伯爵その人であったからだ。

それにしても国の為に最後まで戦い抜くって気概がないのかね？我が国の王家は。

それからすぐに王子がフリースランド王国へ亡命する事が決つたが、プリンスなんてリア充の事はオレの関心を1ミクロンも引かない。結構イケメンらしいし。

マジでリア充氏ね。

クックベリーパイの角にチン　ぶつけてオカマになってしまえばいいんだ！

か、勘違いしないでよねっ！べ、べつにアンタのことが羨ましい訳じゃないんだからねっ！

リア充王子の一行がこの屋敷に到着してから、母などは謁見などしていたがオレは悔しいから　　じゃなかった、興味がなかったから引きこもっていた。

いろいろ屋敷内が慌ただしい様子だったがオレは関係ないとばかりに魔法関係の書物を読み漁っていたのだ。“爺”が他の王族もフリースランド王国へ亡命するために別のルートから落ち延びているとかなんとか言っていたがどうでもいいんだってオレにはさあ。

なんて感じて“爺”の話をテキストに流していたら、数日後にはオレと母とアントワープ領から連れてきた使用人らは海上から国外に脱出することになっていた。

……が、行き先は真逆の南に向けてだ。

あるえ？

なんで南？

フリースランド王国は北にあるのですよ！

なんでだ？“爺”に詳しい経緯を聞いてみる。

それはブラッヘ領に滞在をしている間に、アントワープから持ち出した宝石や装飾品を現金に変えるために商人を呼んだことが原因だった。

その商人の名はイヴァン・リピエッツ。

ブラッへ伯爵が長年懇意にしていた商会の跡継ぎである彼は、商談の席で父を亡くし失意の母を励ましていた。

若く幼い母は一見誠実でいて言葉巧みな彼の話術にコロツと落とされてしまったのだ。まあAVぐらいでしか見たことがない10代の未亡人だからね。

こんなオチもあるさ。

結局なんだかんだで、アントワープ家は王子や他のベルギウム貴族と一緒にフリースランド王国へと亡命することなく、リピエッツ商会の伝手で始祖の血脈の国であるトリステイン王国のル・マレ伯爵領へ向かうことになってしまったのだ。

祖父のブラッへ伯爵も王子の亡命の準備が終わり、その話をオレの母から直接聞いたのだが、娘の決断に反対することなく首を縦に振った。

じじいにはなんでやねん？とツッコミ、いやケリを入れてやりた
い。

2日後、トリステイン王国へと出発する日の朝になって祖父のブラッへ伯爵がオレのもとを訪れた。ちっ！なんか用かよ、じじい。

「いかなされましたか？ブラッへはくしゃく伯爵」

「何、孫であるおぬしと少し話してもと思ってな」

「よろしいのですか？わたしとしては母の父上でいらっしやるブラッへはくしゃくとお話しをする伯爵きかい機会がいただけるのはうれしいかぎりなのですが……。いまブラッへはくしゃく伯爵がやらねばならないことは、まごの機嫌きげんをとることでないでしょう？」

トリステイン王国行きなんてワケワカメな展開を許したじじいに嫌味を言ってやる。

ふんっ！このぐらいいいだろう？一応、孫なんだし。

「ふむ、ジョセフィー又さまが何をもって そうおっしゃられているのかはわかりませんが、ブラッへはくしゃく伯爵にそう言っていただけなのは うれしいかぎりです」

鳥の巢アタマめ！

陰でオレ様のどんな話をしてやがるんだ？

なんかウゼーなこいつら夫婦は。

さすがはビッチな母の両親だ。

「そうか。まあ、おぬしに用もないのにただ会いに来た、と言う訳でもないのだ」

「そうでしたか。これは失礼しつれい いたしました。して、いかがな用詞ごようむき でしょうか？」

「そう急くな」

「はっ？」

そりゃ急ぐさ。ダリーことはさっさと済ませたいんだよね。

「まずはテレーズの父として、テレーズの息子に抱擁の一つでもさせてもらえんか？アルベール」

「もちろんです、おじいさま。^{爺様}よろこんで」

ウゼーがされるがまただ。

そのほうがスムーズに早く終わる。

ハグするじじいはやはり加齢臭が少し臭うが、香水なのかそれとも服に香を焚いているのか、なかなかによい匂いがした。さすがは貴族これは新たに“華麗臭”と名づけ、違うジャンルのものだと記憶しておこう。

「さて。用件と言うのはいくつかあってな。まずは頼まれ事から伝えるのが筋であろう。おぬしにとっても重要な事でもあるしな」

「わたしにとっても ^{重要}じゅうよう なこと、ですか？」

「これを」

そう言うと深い青色の宝石がついた指輪を取り出し、オレの目の前で見せてくる。

「おぬしに渡さすように頼まれたものだ。取りなさい」

なかなかデカいじじいの手のひらの上から蒼い宝石のついた指

輪を受け取る。

年代物の趣のあるそれは細やかな装飾がされているが、けして華美ではなかった。ただ蒼い宝石の周りを囲むように、台座にルーンが刻み込まれていた。

なんか高そうな一品だ。何なんだろう？聞いてみるか。

「これは？」

「それはおぬしの父の形見だ」

「父のですか？」

「そうだ。宝石は“星のサファイア”と呼ばれるもので、7代目の当主フィデルナンドが戦功により王家から賜ったものらしい。水石・海石と同様に水属性の魔力が宿ったアントワープの家宝なのだそう
だ」

「かほう……ですか」

確か7代目の当主フィデルナンドと言えば“大渦”の二つ名を持ち、フリースランド軍の艦隊を1人で沈めたと言う逸話を“爺”に聞いた覚えがある。

その時の論功で下賜されたのだろうか。

「こちらへきなさい」

そういつてバルコニーに繋がる扉を開け放ち、夏の日差しの中に歩みを進める。朝とは言えなんでわざわざ暑い日に外に出て日光浴せにゃなんのだ？話が進まなそうだからついて行くけどさ。

「アントワープ公爵はレオポルト殿が出征の折、息子の無事の帰還を望み、その家宝を持ち帰れと言って渡したのだと聞いた。おそろくその帰還の際には当主と爵位を譲るつもりであったのだろう。

残念な事にその望みは叶えられない事はなかったが、その当主の指輪だけは戻ってきた。指輪の宝石を陽の光に当ててみなさい」

指輪を日にかざし、濃紺の蒼玉に光を当てると六条の光が生じ、宝石の中で星となって輝く。

おお！

「これは……？」

「それが“星のサファイア”と呼ばれる所以だ」

「ワロンから王都に逃げ延びたおぬしの父と親交のあった者がおぬしの叔父・クレマンに託したのだ。しかし王都陥落の最中、王子を脱出させる為に殿を勤めると進言したクレマンはこれをアルベル、おぬしに渡して欲しいとわしに預けた。兄が死んだ今、これを持つに値する者は自分ではなくおぬしだとな」

「そうでしたか。では 叔父上 おじうえ もやはり？」

「うむ」

そううなずくとおもむろに小さな袋を渡してきた。じじいが片手で掴むぐらいなのだが、子供のオレにとっては両手で持っても余りある大きさだった。

「開けてみなさい」

そう言われ中を見ていると宝石がぎっしり詰まっていた。

スゲーよ。

キラキラがいっぱいだぜ。

見てるだけでテンションがアガるな。

しかし何のつもりだ？と怪訝な目でじじいは見てしまっ。

「それは殿下から賜ったものでな。王家の宝物庫に納めていた物ゆえ質の良いものばかりだ。おぬしが持つておれ」

王家の宝石？

マジで？

つかなんでオレにくれんの？

まさか！へんな“曰く付”のじゃねえだろうな。

持つものが不幸な死を迎えるとか。

コワッ！

わ、訳を話せよ、じじい。

早くプリーズ！

「これは2つ目の用件だ。王都から落ち延びる際に王子を守って死んだであろうクレマン・ド・アントワープに対して、王子が王室に蓄えられていた財を恩賞として与えたものだ。アントワープ家の者でもないわしが持つ理由がないからおぬしが受け取っておけ」

なんだそんだけ？ビビって損した。

「では、母上にわたしておきます」

「いや、アルベール。おぬしが持っていないさい」

「しかし」

「先程の当主の指輪の意味がわからんおぬしでもあるまい。もう指輪はおぬしの手に移ったのだぞ。その年で酷なのはわかっているが、今後は言質に気をつけなさい」

「もうしわけありません。かんがえが いたりませんでした」

「よい。3つ目の用件は今の件に少し関係があるのだが……」

じじいがこれまでとは違い、話しにくそうに用件を言ってきた。

とりとめもないような事をグダグダと言っていたが要約すると、娘つまりオレの母・テレーズはあの通りの残念な人なのでよろしく頼むということだった。

子に親のことを頼むのがナンタラとか、先程の宝石を渡しておくとか危険だとか、娘がダメ貴族だと言う事がわかっているじじいが、会ってみたら子供ながらにしっかりしているオレにも使用人同様、母の尻拭いをさせようという話だ。

母の父親と言う事でブラッヘ伯爵の事をカタカナ“ジジイ”のアントワーブ公爵の格下、ひらがな“じじい”と呼んでいたが、どうやら親バカではあるがアントワーブ公爵並にちゃんとした人間だったようだな。

一応謝っておくか。

じじい、正直すまん。

この後、オレは海路で南下しトリステイン王国に向かう為、
船の上の人となった。

オレはサノヴァビッチ（後書き）

今日で書き始めてから1週間経ちました。

今感じている事は、執筆 苦行ですかね。

投稿している他の作者様のすごさを実感しています。

休みの日ということであらすじも少し書き直しました。

イヴァンのハゲ

今は甲板の上でブラツへ伯爵家から持ち出してきた書籍、“戦場での華麗なる魔法” 集団戦に於ける実践火のスペル活用法・ドット & ラインスペル篇” を読んでいる。

アントワープ家は代々水系統メイジを輩出する傾向にあるので、おそらく火の系統魔法は使えないだろうが読み物としては面白い。ベルギウムとトリステインの関係がよいせいか、アントワープ家の書庫にはトリステイン魔法アカデミーの出身者の書籍ばかりだった。始祖の国と言う自負からか、内容の薄い俺スゲーをガン押しする書籍しかなかったのにイライラしたものだ。

しかし、ブラツへ伯爵家の書庫には、少なくともあったがゲルマニアの書籍もいくつもある。王家から遠いせいでそのあたりの意識がユルいのか、良いものは取り入れると言う進歩的な気風のある家柄なのかはわからないが、これはオレを喜ばせた。

さすがに幾たびもの戦争を重ねて国土を広げてきたゲルマニアの書籍は実践的で意欲的に感じるものが多い。この書籍のように将来役に立たないだろうとうすうすは感じているものであっても、読む価値があると思わせてくれる内容だ。

少しでも自分で知識を蓄えないと本当にヤバいからな。ダメ教師ソフィーナの指導じゃドットメイジにすらなれんかもしれん。

ブラッへ伯爵の屋敷に滞在中にいろいろオレに教えたが、説明がまるで印象派画家の絵のようにイミフだし。オレにはそんな感性は備わってねえんだよ！

結果、途中からソフィーナには説明はいいから実践して見せるようにしてもらっている。まあワケワカメなポーズはアンハッピーセツトとでもれなくついてくるんだが、忍耐力の磨かれたオレには耐える事が可能になった。

そうして試行錯誤の末にアローが使えるようになった。ライトの魔力放出と形状維持を基に、威力が弱いながらもなんとかマジックアローと呼べるレベル。

だがこれはスゴいことなのである！たとえダーツ程度の威力しかないとしてもだ！

しかし今回の船旅は2回目であるというのに、以前と同じく憂鬱な旅になったなあ。

今回は親父殿の死、領地の危機で逃げ出すような旅だった。今回はオレがよくこの甲板にいる理由からして鬱だ。

商人で案内人のイヴァン・リピエッツがオレと母の部屋に尋ねてくる度に、部屋を追い出されるのだ。あいつら息子のオレを部屋から追い出して何してやがる！たしかにオレらは仮面親子だが、もし昼間つから密室でイチャついていやがったらいい加減沈めんど、おまいら！

さらに天候も時化^{しけ}で海がよく荒れる。オレは体質のせいか、まっ

たく船酔いしないので問題ないのだが、使用人やソフィーナの世話を逆にしてやらねばならん。

やっと海が穏やかになったなと思ったら、今度は船員に絡まれ船室に連れ込まれそうになって泣き喚くソフィーナを助けなければならなかった。

おめえくはメイジだろうがっ！さくつと魔法で痛めつけてやれっ
てんだ。

当然後で説教してやったが、なんかうれしそうな顔で“にはには”してたので途中で諦めた。マジこいつヤダ。オレのSAN値を削る為だけに存在しているんだもん。

まあいい。このストレスはイヴァンのバカにぶつけてやろう。

「リピエツどの。さきほどソフィーナに 無礼ぶれい をはたらいた
せんいん 船員 がいたのだが、あなたはなにを やっていた？」（や
い！てめーは案内人の癖に貴族様の世話もちやんと出来ねえのか？）

「ん？アルベル君か？私はテレーズ様を励ましていたので気付か
なかつたよ」

「で？」

「なんだい？」

頭「言いたいことがわかりませんか？リピエツどののは よく あた

まがはたらく人ではないようですね。それは しょうにん として 致命的 ちめいてき ではないのですか？」

「……何をいいたいんだい？君は」

「あなたとかわした けいやく は『アントワープ家の者を ぶじにル・マレ家におくりとどける』で、たいか もすでに うけとつてはるんですが？こんなことも おぼえて いないのですか？（オマエの頭に脳みそ入ってんか？魚か？ああん？何千年、人に釣られ続ければ気が済むんだ？いい加減さあ、気づけよな）」

「憶えているさ。今こうしてトリステインに向かっているじゃないか」

「ほんとうに あたま がわるいな、リピエッツどの。ソフィーナはアントワープ家の者だ。その彼女に きがい がくわった じ 時点 であなたは けいやく にある『アントワープ家の者を守る』 ぎむ をおこたつたということだ！そのいいわけを聞きにきて やつたと言っている！」（あゝん？ソフィーナに無礼を働いた船員たちにどう落とし前つけさせるつもりだあ？オレ様の納得のいく 手打ちに出来るんだらうな！）」

心の声とセリフに大して差が無くなってきてるが、そんな事は気にしたら負けだ！

「彼女は無事だったんだろう？じゃあ問題ないね」

「カスがあ……それだけか？このアルベール・レオポルト・マラン・ド・ド・アントワープに対して……言いたいことはそれだけか！」
（なんだあ、ベルギウムが滅んだからってオレらを軽くみてんじゃ

ねえ！)

「だいたいお嬢さんが誘ったのかもしれないだろう？ 船員たちに聞けばそう言うかも知れないしね」

ブチッ！

「ケシズミにすんぞ、ゴラアアア？！ソフィーナの魔法で。それとも切り刻まれてえのか？ソフィーナの魔法で。調子ノツてんといてまうぞ！おもにソフィーナの力でよお！このシヤバ憎があああ？！」「(その侮辱は許す事はできないぞ！貴族が受けた辱めは杖によつて返してやるう！そこを動かなくなっ！息の根をとめてやる！平民があああ！！)」

ああキレた。もうキレた。心の声が前面に出てしまつぐらいキレました。

イヴァンのインポ野郎が「子供がイキリやがってヤレヤレだぜ」と言つた表情をしゃがつたので、部屋の外に待たせていたソフィーナを呼んで、火を着けさせた。ソフィーナは打ち合わせ段階では、なかなか嫌がつて承諾しなかったが、助けてやったのを恩に着せて「ちよつと火を着けて驚かせるだけだから」と納得させたのだ。

小さなファイヤーボールの呪文をブチかませただけだったが、思わぬ事態が発生した。

炎はイヴァンの頭の上をかすめて部屋に置いてあつたワイン樽を破壊したのだが、これは打ち合わせどおり。しかしその後不測の事態が発生。

イヴァンの髪に火がつき、頭の上が火事つたのだ。やつは大慌てで水を求めて逃げ出したのだ。

その無様な姿は今日一で笑えたな。わっはっは！よい気味じゃ。余は満足じゃ。

これからはイヴァンのハゲと呼んでやろう。

頭に火がついたイヴァンが船内を駆け回った日から、アントワープ家の者に絡んでくるバカはいなくなった。

その後、母いや“ビッチ”とちよつとめんどくさい事になったが、この人は正直もうイラネと思ってるので聞く耳はもたん。なんか結局イヴァンのハゲのアタマの火事を鎮火したのは“ビッチ”だったらしく、その場で火傷の手当てもしたとか。

てかヒーリングで火傷は治ったけど髪は生やせないらしく、イヴァンのハゲは直らないんだって！マジウケるんですけど〜！

「聞いているのですか?! アルベール！」

ナンだ？人がせつかくいい気分で笑ってんのにさあ。水注^さすんじやねえよ、“ビッチ”がっ！

「きいております。しかし母上がなにをそんなに おこっているのかがわかりません」

「リピエッツ殿のことだとさっきから言っているでしょっ?」

「そういう 意味 いみ ではありませんよ、母上」

「なら自分のした事がわかっているのに、白を切るうというのですか？情けない」

わかっているさ。なかつた事になんて出来やしねえぜ！この夏の熱い出来事は！

「なさけないとは 聞捨 ききずて なりませんが、今は母上に“ 事 こと の 次第 しい” をキチンと 理解 りかい していただきましょう」

「情けないと思うのは当然です。お世話になつてゐるリピエツツ殿に理由もなくあのような酷い仕打ちを」

ちよつとマテ！今、オレ話す ビツチ聞くつて流れだつただらう？人として最低限の空気の読み方もしらんのか！いくらオレでも怒つちやうよ。

てか、あちしの話 つた を聞けえええ！

「なにをおっしゃっているのですか！母上！わたしがなんの 理 りゆう もなくどうこうする 愚か者 おろかもん だとおっしゃるのですか！？」

「わたくしはイヴァン殿に」

「あのような無礼者の肩を持つとはっ！母上はそれでも高貴なるベルギウム貴族に名を連ねる者ですか？！貴族が無礼を働かれたのですよ！黙つてそれを受け入れるなどと出来るはずがないっ！」

あっ！ヤベツ。興奮してキメキメ大人言葉でしゃべつちやつたよ。

「ごまかさないと。まあこの人は頭ユルいから何とかなるよね？」

「ア、アルベール。何の話を……」

「ことはソフィーナがこの船ではたらくへいみんに、いかがわしいことをきょうよう強要されそうになったのがはじまりです」

「ソフィーナが？それはまことですか？」

“ビッチ”が共に呼び出され、オレの後ろで縮こまっていたソフィーナに聞いた。だす。

「あい、奥さまあ……。アルベールさまに助けをいたらきました」

なんと気が抜ける返事だ。あの時、オレが助けたと言っても実際は大した事はしていない。マジックアローを放って「オレを怒らせたら、又ツ殺すぞ」と虚勢を張っただけなのだ。

「わたしがかけつけ、なんとかソフィーナはことなき事無をえましたが、わたしがきずいていなければどうなっていたことか！」

後ろでブンブンと激しくうなずいているソフィーナに“ビッチ”は驚いた表情を向けている。

「このことをリピエッツどのにはなしにいったのです。しかし彼は「彼女がへいみんをさそったのだらう」と、うすらわらい笑をうかべながらソフィーナをぶじょく侮辱したのです。こともあろうかへいみんが貴族きそくであるソフィーナをですよ！」

ああ！なんかノツてきたあー！よし、命令を「ガンガンいこうぜ

！』に変更だ！

「わたしはいくら母上たちの 世話 をしているからと言って、これをゆるすことは 断 だんじて 有り様 できませんでした。そのとき彼女は おびえ、それはもうひどい 理由 ありさまで……それをさそつたなど！ いかな 理由 “りゆう” があるとしても、これを 許 ゆるす ことはできません」

「いい感じだ！ここが勝負どころか……今だ！リバースカードオーブン！トラップカード『貴族の嗜み・その5』。条件である『ガンガンいこうぜ！』状態であるため特殊効果『ビッチ言葉攻め』を発動っ！

「へい 平民 みん と 関係 かんけい をもつなど、犬やブタと 結婚 けっこん をするようなものなのに……。
そんな 淑女 しゆくじょ がいれば、いご 社交界 “しゃこうかい” でわらいの 種 たね となるでしょう。おそらく、とおくは 始祖 しそ の国々はおるか、明白 にくきゲルマニアの 晩餐 ばんさんの せき のせきですら、そうなることは 明白 めいはく です。
『ベルギウムの 貴族 きぞく は 平民 へいみん に身をゆるす、けがらわしい“アバズレ”がいる』と」

“ビッチ”め、言葉もないって状態か。さらに畳み掛けるぜ！

「ソフィーナはアントワープリ 領 ょう をでたときから、わたしたちをまもってくれるために共にいます。言わばもうアントワープ家の者と言ってもよい 関係 かんけい です。」

ダメージを与えているからと言って、愚かな慢心などオレはしない。そのせいで本来実力では勝っているライバルたちが主人公に足

元をすくわれる、なんてテンプレをいやと言うほど見てきているからなあ！

攻撃の切り口を変えて、さらに口撃を加えるぜ！

「かんがえてみて下さい、母上。ソフィーナはワロンのせんせん戦線がとつばされたおり、彼女のりょうち領地はゲルマニアにじゅうりん蹂躪され、かそく家族やしたしかった者がぶじ無事なのかさえ、わからないのですよ。」

父上がなくなつた わたちたちとおなじ かなしみ 悲 をうけた彼女が、その かなしみ 不安 と ふあん のなかで きじょう 気文 にふるまいながら、アントワープ家の助けとなっているのです。まだ せいじん 成人 もはたしてない14のむすめが！」

なんかオレが聞こえがいいように言ってるだけだが、字面だけ追えば“ビッチ”とはエラい違いだな。まあ事実ではあるんだか。改めて考えてみるとマジでオレの母は残念なヤツだったんだなあ。

「そんな彼女の けんしん 献身 にたいして しんらい 信頼 でこたえるのが、おうけ 王家 につらなる我が けだかき 気高 アントワープ家のつとめでしよう。それとも母上は、このわたしの きぞく 貴族 たるふるまいを ひてい 否定 なさるおつもりですか？」

「……………」

「ほんらい 本来 であれば、リピエッツどのは てうち 手討 にするところ です。彼はわたしたちをトリステインまで あんぜん 安全 につれて行く あんない 案内人 なのですから、それぐらいの せきにん 責任 のとりかたを すべきでしょう。」

けいやく 契約 はすでにかわされ、たいか 対価 もすでにしはらっている。彼はその けいやく 契約 にもとずき、このふねの あんぜん 安全 を彼の

しゅわん 手腕 もしくは ざいりよく 財力 をつかってでも、たもつ 義 ぎむ 務 があつた。

しかし彼はそれを おこたつたのです」

いかにも筋が通つたようなことを言っているが、これはただのストレス発散の一環だ。そろそろいいだろう。ダルくなってきたし、“ビッチ” イジメよりも甲板で読書をするほうが有意義だしな。

じゃあトドメさして終わりにしよう。

「わたしはいまだ 魔法 まほう は 未熟 みじゆく で、系統魔法 ライトとアローの 呪文 じゅもん しかあつかえません。もし 系統魔法 けいとまほう があつかえたのなら、いやブレイドがつかえてさえいれば、リピエッツどのはもう 世 この よ にはいなかったでしょう。

それほどのことなのですよ、母上。

ライトとアローしかつかえないことがくやまれます。 残念 ざんねん ながらわたしのアローではまだ人を死にいたらしめる 威力 いりよく はありませんからね」

いかにも残念だという演技をしておこう。ガキだからと言ってアママな考えばかりしてる訳じゃねえってアピールだ。

今後、オレに対して“ビッチ”の見方も少しは変わってくるだろうし。

「ああ、そうなるトル・マレ家によい 印象 いんしょう をもたれないかもしれないですね。でも、わたしが 心配 いまのはなしをすれば、そんな 必要 しんぱい も 伯爵 ひつよう ないでしょう。 最悪 さいあく 受け入れてもらえなくても、ブラッへはくしゃく 伯爵 のいるフリースランドに 命 いけばよいのです。

そうかんがえれば、彼の 命 いのち などフリースランドまでの

ふなだい 船代 ほどの かし 価値 しかありませんね、母上」

「……」

「もう はなし 話 はないようですね。では、わたしはこれで しつ 礼 いたします。母上からもリピエッツどのに、ぎむ 義務 は はたすようお伝えください」

返事ぐらいしろよ。後半ずっと黙ったままだったんだけど、ちゃんと理解できてんのかな？

……不安だ。

はあ、ホント散々の童貞だ。いや、道程だ。

唯一のアゲ要素は時化のときに見た翼クジラのデカさに興奮したぐらいか。

いやマジすげえのよ！

雨雲と共に現れたかと思うと急降下して「ドガーン！」って突貫して海中に消えたんだ。乗ってる船よりデカいクジラがいきなり空から現れて海に消えてくんだぜ！

ヒレが翼になっててやけにデカイとか、目が左右で4つあるとかちっちゃなことだ。ガキみてえに興奮しちゃったよ。船乗りでもなかなか出会えないみたいで、見た人には幸運が訪れるらしい。

ホントにい？オレ残念イベント比率高えんだけど？

その日、オレは生まれてからちょうど4度目の誕生日を迎えていたのだ。

イヴァンのハゲ（後書き）

いや本当に読みにくくて申し訳ありません。

次からちゃんと時間経過をさせて“ひらがなセリフ”少なく致します。

はるばる来たぜ！トリステイン

トリステイン王国への船旅は思いのほか時間がかかった。

ゲルマニアの軍船に見つからないように沿岸部を進まず、西の大海を大きく迂回する形で進路をとっていたからだ。そのうえ目的地であるル・マレ伯爵領は、領内を大きく蛇行するマルヌ川と湿地帯であることがオレ達一行の足を鈍らせた。

そしてようやく目的地であるル・マレ伯爵の屋敷に到着し、イヴァンのハゲと共にオレ達親子はこの屋敷の主であるオーギュスト・デュ・マレ伯爵に直面している。

「テレーズ・ジョセフィーヌ＝シャルロツテ・ファブリジア・ド・アントワープと申します」

「アルベール・レオポルト・マランド・ド・アントワープともうします。くに^国をなくしたわたくしたちを^受うけいれてくださるマレ家には、かんしゃ^{感謝}の^{言葉}ことばもございませぬ」

今、目の前に壮年の紳士が伯爵なんだが、第一印象は“くちびる”？まあ、いわゆるひとつの“アナゴさん”だ。

“アナゴさん”はこれから世話になる相手だが、頭は下げてはやらん。せいぜい目を伏せるぐらいでいいだろう。じじいから“星の

サファイア”を受け取ったからには、オレはもうアントワープ家の当主だ。始祖の国だろうが伯爵ごときに公爵家の当主が頭を下げる道理がない。

不躰に値踏みするかのような目で見下ろすマレ家の当主に、オレは逆にオマエがその立場だという態度で挑む。実際に立場は弱いのだが、貴族の家の当主たるオレが卑屈なものかかなものか。

「うむ。ワシもフリースランドやルクスベルガのことなどであれば気にもせん。だがベルギウムは我がトリスティン王国と所縁もあれば、ル・マレ家とは縁もある。ベルギウム王家のナッサウ家と我がル・マレ家は血縁、ナッサウ家と血縁のアントワープ家とも同じ様なものだ。

不自由もあるうが、古の故郷に戻ったと思い、心安く過ごされよ」

くちびるとイメージと実際の声が合わないので、ル・マレ伯爵の声は心の中で“アナゴさん”に変換しておこう。

「アントワープ家を ^{代表} だいひょう いたしまして、重ねて ^感 かんし や ^謝 とうしあげます」

「幼き身でよく出来た子よ。リピエッツ、下がれ。あとはこちらで手配する」

「わかりました。そうそう、例のご注文の品がティワズの週にお届きますのでまた参ります。今後とも我がリピエッツ商会も御二方向様よしなに」

イヴァン・リピエッツに見抜きもせず手を払うしぐさで退出を促す。貴族の尊大さここに極めりつてやつだ。ザマアだな、イヴァン。

ぶほおっ！

頭に放火されて以来、やつはカンカン帽をかぶっているのだが、退出の礼をする時にとりやがった。やゝめゝれえゝ。あんたの頭面白すぎるんだって！オレを笑わせ殺す気か？

山火事後が悲惨なことになってるんだよ、おじさん。

「ぶっぶっぶっ……」

ダメだ。

笑いを堪え切れなかったぜ。紳士としての修行がまだ足りないな、オレも。

そうかつ！これがあの有名なセリフ「認めたくはないものだな……、自分自身の若さゆえの過ちと言つものを」状態か！精進せねば大佐への道は険しいな。

つか、ハゲまだいるのかよ。さっさと出てけ、このクサれ商人め。

イライラの原因がいなくなったが、少しここで気を引き締めておこう。

オレたちが商人イヴァン・リピエツツの案内でル・マレ伯爵領に来たのは、当主の“アナゴさん”ことオーギュスト・デュ・マレに庇護を請う為である。ここでの生活はル・マレ伯爵に従うしかないのだから、そんざいに扱われる訳にはいかない。何事も最初が肝

心なのは、男女の関係でも連続ドラマでも同じだ。いっちょビシツ
つと行くぜい！

「リピエツツどのは しょうにん 商人 でありながら、いささか 礼に
かけるところがございますね」

「アルベール！口が過ぎますよ。失礼致しました、ル・マレ伯爵」

「いや、アルベール殿はなかなかに厳しい。だがまあ商會を未だ継
ぐ事ができないのは、そのあたりの事もあるのであろう」

「だろう？ “アナゴさん” はよくわかってんじゃねえか。」

「では今後お主たちが、いかに我が領で過ごしてもらおうか、簡単に
話しておこう。」

ここから北に5リーグほどのところに、以前ワシの妹マリーが生
前使っていた屋敷がある。大した広さはないが二人が住むには十分
であろう。

あの辺りは水鳥などは多いが、大型の獣も少ない。慌ただしく心
落ち着かせることも儘ままならなかったお主らが、平穩を取り戻すには
ちよつどよかるうて」

「ル・マレはくしゃく 伯爵 のころづかいに かんしゃ 感謝 いたします」

「なに、些細なことだ。屋敷はすでに手入れさせている。いつ向か
つても良いのだが、今日はここでゆっくりして行くのがよからう。
屋敷へは明日、義息子に案内させる」

「わざわざ御子息に案内をして頂くなんて」

「母上、こころづかいを無にするのも 失礼 しつれい にあたりまじょう。ここはル・マレは 伯爵 くしゃくの 厚意 ごじゅうい に甘えておきまじょう」

「今夜はささやかながら晚餐を用意させている。準備が出来るまで別室でくつろぎ、疲れをとるのがよい」

話はこれで終わりだと、ル・マレ伯爵が手をパンパンと2回叩く。すると部屋の外に待機していた使用人によって扉が開かれる。もう出て行けっか？なんか気に食わんがオレもさすがに疲れている。さっさとくつろぐか。

部屋を出ると待っていた使用人が先導していく。休憩する部屋まで案内してくれるようだ。そうだ！ダリー事はさっさと終わらせておくか。

「母上。 先程 さきほどの 一言 ことですが、 一言 ひとこと よろしいですか」

「なんです？アルベール」

「母上にはまだ話しておりませんでした。わたたくしは 告白 せんじつアントワープの 当主 とうしゅ といってもよい立場となりました。これがその 証 あかし です」

そう言って“星のサファイア”を胸元から出して見せた。祖父から受け取った指輪は大きく、指にはめることが出来なかった。指輪を鎖に通してネックレスのように首から提げて持ち歩く事にし

ただ。

「そ、それはレオポルトの……」

母が指輪に手を伸ばしてきたので、すぐに胸元に戻す。誰がオメガに触らせるかつっーんだよ。

穢れるわっ！

イヴァンのバカとイチャついて、親父殿の事なんて話題にも出さなくなつたメス豚が近よんな！

「おじう叔父上え が父上に たくされたそうなのですが、わたしが持つべきだと おじい爺様さま にわたされたのを受け取りました。アントワープの やしき屋敷 を出るときに、おじい爺様さま に次の とうし当主ゆ はわたしだとも言われております」

“ビッチ”に口を挟ませないように矢継ぎ早に話す。

「とうし当主ゆ の あかし証と おじい爺様さま の さいご最後の命があるいじ以上よう、今はわたくしがアントワープ家の とうし当主ゆ と言つてもよいでしょう。」

い以後ご他人の目があるときは、わたしを とうし当主ゆ として扱っていただきたい。さき先程ほどのように、わたしの げん言に口をはさむのは おやめください」

何か言おうとしているのを無視して、使用人が扉を開けた休憩室に入る。さっさと寝てしまおう。話すのも面倒だ。

晚餐の席でル・マレ伯爵から婿養子で次期当主マティアス・デユ・マレ、娘のノエリア、二人の孫である兄のマシューと妹のアナ「コレットを紹介される。

母上こと“ビッチ”とオレも席につく前に挨拶をする。ちゃんとこの晚餐の礼と、これから世話になる礼を言うのもわすれてませぬ。ぜ。“ビッチ”に任せてお訳にはいかない。信用してないからね、このダメ貴族のことは。

「まずは料理を楽しんで頂こう」

挨拶の後、このル・マレ伯爵の一言によって、すぐに晚餐が始まった。

動き出した使用人たちが運ぶ料理に舌鼓する。しかしぶっちゃけあんまりうまくねえな、ル・マレ家の料理はさ。

アントワープ家の屋敷があつたルーベックは海運の要衝だったから、さまざまな地域の食材や香辛料が溢れていた。言うまでもなく料理も北の国から南の国までさまざまなものが入ってきていたせいで、オレの舌は結構肥えているのだ。

その神の舌をもつオレが簡単に言ってしまうえば、味“うっすいな”な。

もちろん紳士なオレは表情に出したりはしない。一皿食べ終わリナイフとフォークを置いてチラリと周りを窺ってみる。若干一名を除いて美味そうに食事をしている。

誰かなんてもう……、オレの口からは言わせないでくれ！

おっと、オレと同一年ぐらいぐらいのアナだっけ？孫娘と目が合っ
ちまった。

彼女と兄のマ、マ、マ……何とかは、側についている使用人に食
事を手伝ってもらっているので、結構余裕があるのかキョロキョロ
とこちらや、自分の母親であるノエリアを見ていたようだ。

知らんぷりもできないからなあ。

ここは愛想よくしておくか。これから何があるかわかんないから
な。

窺い見るといづのを止めて、彼女のほうをちゃんと向いて笑いか
ける。すると彼女も笑顔を返してくれた。ちゃんと淑女出来てるじ
ゃん！でもさ、彼女スゴイの。

もう、それはスゴイ “スキツ歯” の笑顔！

ある意味、救われたか？何かかは自分でもわからん。

深くは考えないでおこう。スキツ歯はツボすぎるからな。あまり
思い出していると表情筋が耐えられず、オレの意思に逆らって爆笑
してしまう。

とんだアクシデントを乗り切ったオレは、やっと食後のティータ
イムに辿り着いた。

ル・マレ伯爵は「少々やらねばならぬ事がある」なんて言ってさ
っさと部屋に戻っちまったが、正直“アナゴさん”がいない方がい
いから不満を言ったりはしない。もちろん嫌味もね。

んで、いろいろ話をした。

マティアスはトリストインの魔法衛士隊のひとつであるヒポグリフ隊の副隊長をしていたとか。その時当主のオーギュストの目に留まり、一人娘のノエリアの婿に迎え入れられたとか。いわゆる、逆玉の輿ね。

マティアス！お前もか……。

リア充がここにもいやがった！

土のスクエアメイジであり、魔法の腕では隊長に勝っていたが家が及ばず副隊長に甘んじていた強者なんていう、どっかで聞いたことのあるような無いような話はどうでもいいぜ。

奥さんのノエリアさんも切れ長の目をしたクレイ系の美人だし。しかも“アナゴさん”のくちびるが少し遺伝したのか、ぷるんとしたエロい唇が更にいい！原タイラに3000点！

もつね。

ル・マレ家は代々火の優秀なメイジを排出する名門で、オーギュスト・ノエリアとともに火のメイジだとか。今年から孫のマシューが魔法を学び始めるといふ話題とかさ。

マジでどうでもいいよ。

なんて思っていたら、“ビッチ”がまたやらかす。

「実はアルベールも2ヶ月ほど前から学び始めたのです」

面倒なことになるから言わなくてもいいっての！

真理 『ノータッチ、ロリータ!』

我が家の恥部である“ビッチ”こと母が余計な事を言ったせいで、マティアス・ノエリア夫妻の興味を引いてしまった。

4歳になったばかりであるオレが、すでに魔法を学んでいるのは貴族社会においてもめずらしい。それをどうだと言わんばかりに語っているのだ。ただの自慢話である。

基本幼いんだよね、この人。頭がスツカスカの“ビッチ”はまるで自分の事のように自慢してるが、招待されている席ではウソでも相手を立てるのが礼儀だろう。夫妻の子・マシューが魔法を学び始めるなら「マティアス殿とノエリア殿のどちらの系統に似るんでしょうね?楽しみでしょう?」ぐらいの返しでいいんだよ。

その後「それにしても魔法衛士隊の副隊長なんてすごいですね（はあと）」とか、「スクエアメイジなんて我がベルギウム王国では10年に1人しか現れない天才ですよ（キラキラ）」とかさあテキトーに言えば、あちらさんはご満悦になるってのに、この“ビッチ”はっ!

今はマティアスを褒めて褒めて、褒めちぎるところだ。ここ試験に出るからよく憶えとけっ!

いいかげん、マジ空気読もうぜ。

「たしか4歳と聞きましたが、その歳でもう魔法を学んでいるとはアルベール殿は優秀なのですね」

「ではもう杖との契約が終わり、コモンマジックを教わっているのかい？」

興味を持ったマテイアス・ノエリア夫妻が杖の契約は出来たのかと聞いてくる。2ヶ月と言えば一般的には杖の契約の儀式が終わりコモンスペルの習い始めた頃だ。遅い者だとまだ杖の契約にさえ至っていない者もいる。

オレはもう当然杖の契約も終わったし、コモンスペルも“ライト”と“アロー”の2つを使えるようになってる。だがそれを話すとまためんどくさいことになりそうだ。

当たり前障りのないように答えるか。

「はい。杖の契約 けいやく はなんとか終わっています。ですが、やはり まほう となるとなかなか思うようにはいきせんね」

“ビッチ”はオレの魔法のことに関してはあまり知らないはずだ。なんせセイヴァンのハゲ野郎と過ごす時間のほうが重要だったので、その進捗ぐあいに興味を持っていなかった。周りの使用人にも「お心を痛められている母の耳には入れるな」と言っておいたしな。

“爺”がいればこんな事もなかったのだろうが、“爺”はトリスティン王国に向かう船には乗らなかつたので、当然今ここにもいない。いや、オレたちに愛想つかしたとかじゃないよ。自分でアントワープ領のことが気になるから、公爵の安否を調べに行きたいって

言ったんだ。

まあ、“爺”はオレらに雇われた訳じゃなくて、アントワープ公爵に雇われてるからね。詳しい事は知らないけど、オレのジジイが小さい時から“爺”はアントワープ家にいた訳だから当然のことだと思っただけ許可した。

“爺”のくせに目から涙流しながら頼んで来るんだもん。ガチホモの“自慰”なんだから“ピー”の先から“ピー”っていう液体を出しながらイキんで来るかと思っただけ、大きく予想を外れてくれてマジよかった。

ちょっと話が逸れたな。

「アルベールは杖の契約をはたし、コモンマジックを習い始めたと言っても……この2ヶ月はそれどころではありませんでしたから」

なんてお涙ちょうだいのな発言しやがんだ、“ビッチ”め。同じそれどころじゃないはずのテーマは“ハゲ”とよろしくやってたぐせによお！

あれっ？そう言えばイヴァンのハゲ野郎の頭燃やした時に、絡んできた“ビッチ”に魔法のこと話さなかったっけか？

思い出せ、オレ！
……うーん、ヤバッ確か話したはずだ。トドメの要素に必要なだけだからな。

なのになんでコイツはこんな反応してるんだ？まさかあの時「コイツしゃべんねえな」とは思っていたけど、マジで最後の方は話し聞いてなかったんじゃないやねえだろうな。

このポンコツ！

イヴァンといい感じになったら社交界で笑いものになるってあたりから、自分に都合のよくない話だから記憶から消し去りやがったな！

ああもう！さっきの発言も合わせてイラつく！

「これは失礼致しました。事情は聞き及んでおりますのに軽率なことを聞いてしまって」

ほら見る。マティアスが申し訳なさそうに頭を下げているじゃないか！

ここで過ごしやすくする為に、相手に自分の都合のいいように思わせるのはいいとしてもさ。哀れみなんかいらねえんだよ！ドージヨ！するなら金をくれ！

いか仕方がない。

都合がいいことに“ビッチ”の記憶は自己デリート完了してるっばいし。ここは不本意な流れになるが“ライト”は使えることを話して、この場の雰囲気**を強引に変えることにしよう。**“ビッチ”がいるせいで今後の展開が読めないが、このぐらいは許容範囲内か。

「気にしないでください。母上も余計よけいな事を言いました。まほう魔法は単にわたしの才能さいのうがないのでしょう。やっとライトが使えるようになったばかりですので」

「ほう！すでに“ライト”を使えるとは、それはスゴイ！」

よし、さっきの気まずい雰囲気は消えた。このままユルい話をし

て終わればいいな。“ビッチ”も記憶だけじゃなくて存在も消失してくれば、なお良しって感じなんだが。

それからしばらく淡い期待通りの展開で進む。

マティアスがその年ですでに魔法を学び始める事もすごいが、2ヶ月でコモンマジックを使えるようになるのは十分に才能があるなんて褒めてくる。普通は杖の契約の儀式に1ヶ月、初めてのコモンスペルの習得には2ヶ月はかかると持ち上げ、ノエリア夫人もそれに同意したりする。

しかし予想外の人物がこのユルい話の展開をブチ切ろうとしたのだ。

それはマティアスの息子が一つ年下のオレに対抗心を燃やした為だ。

「母上、ぼくも早く魔法を学びたい。そうすれば1ヶ月でコモンスペルを習得して見せます！」

「そうですね、マシユー。私たちもその時が楽しみですよ」

ノエリア夫人がそのエロい唇からやさしい言葉を息子にかける。この親子はちゃんとした親子のようだ。言葉から親愛の情が溢れているのが伝わってくる。いい雰囲気の流れのまままでいきそうだ。

「すぐにでも学び始めたいのです。父上、お爺様をお願いしていただけませんか！」

しかし、若い。若いのが、マシューよ。

親が他人の子供を褒めてるからって嫉妬するなよ。これは社交の場での礼儀のようなものなんだ。ホントは俺の子供が一番なのだから！ってみんな思ってるの。まあ、微笑ましいものだが、オマエも貴族なのだから早く大人になれ。

もてなしてもらっているんだから、この場はフォローしてやろう。ノエリア夫人のエロい唇に免じてな。

「マシュー殿。我がアントワープ公国はベルギウム王国のおうけに次ぐ家でした。その公国は魔法を学んでいたのです」

「これじゃあ、まだ弱いかな。もう一押しすればいい理由をつけて安心させてやろう。」

「ふつうは早くても、5歳から学ぶものだと聞いています。わたしは凡庸であるので、人より多くの努力を必要とするため、少し早く学び始めました。」

しかしマシュー殿はスクエアメイジであるマティアス殿の子。さいのうは他の誰にも負けないものでしょう。だからル・マレはくしゃくしゃもまだその次期ではないかと思っただけではないのですか？

「ですが……」

「まだゴネるか！このゆとり教育の貴族めがっ！自制する事を学ばんか！」

「まほう^{魔法}を学ぶことはたいへん^{危険}きけん^{危険}を伴います。しんちよ^重う^重に^{次期}じき^{次期}をみさだめるといふのは、ル・マレはくしゃく^{伯爵}があなたのことを、それほどたいせつ^{大切}にしつていらつしやると言うあかし^証なのだと思ひます」

マテイアスに「そら、オマエもフォローしろ」と視線を送る。

「マシユー。心配しなくてもお前には魔法の才能がある。アルベール殿が言ったとおり、お爺様はお前が学ぶべき最良の環境を整えてから、魔法の勉強をさせようとしているのだ。5歳になるウインの月にお前の魔法の先生が来る事になっている」

春にあつたラグドリアン湖の園遊会の席で、トリステイン王立魔法アカデミーの評議会の一員であるゴンドランという侯爵に紹介してもらつたそうだ。

なんでもトリステイン王立魔法アカデミーに籍を置く火のラインメイジで、魔法の実力はラインメイジでありながら失われた始祖の魔法の研究をしているとか。

ただ契約の時にこちらからマシユーの誕生の祝いが終わつてからと願ひ出たので、先方が到着するのを早める事は難しいそうだ。3カ月後のエオローの週にこちらに到着出来るようになってるので、今しばらくは待つようにとマシユーを言い含めた。

やっと納得したか、いやあの表情は納得してはないな。まったく、お子様はこれだから始末に悪い。

せつかく王立魔法アカデミーの優秀なメイジを教師として用意してくれてんだぞ。3ヶ月ぐらいがまんしろよ！

オレなんか、オレなんかなあ！

ダメ教師ソフィーナの授業（別名：イラツキ我慢大会）なんだぞ。魔法の授業なのに擬音語と代名詞マンサイで、教師に尊敬できる要素が皆無なんだぞ。

その教師は感覚で生きて、そこそこ成功しちゃう天才型なのに残念な人なんだぞ。

お前の教師とオレの教師は月とフンコロガシぐらいの差があんだぞ、きつとよあ！

ああ、なんか言ってる鬱になってきた。取り替えてくれないかな、ソフィーナと。高い金払ってんだからさ、一回ぐらいチェンジさせてくれてもいいっしょ？ねえ、チェンジの神様！

ん？

チェンジしなくてもさあ、マシューの教師と一緒に教えてもらえるように話を持ってけばいいんじゃないか？なんか理由つけてさ。そう、たとえば……何かないかな。

ソフィーナと王立魔法アカデミー出身者の違いは あっ！

ソフィーナは魔法学院を卒業してないじゃないか！そもそもベルギウム王国には魔法学院がないからね。うちの貴族どもはみんな、きちんと系統立てた知識の習得はしてない。

ただでさえ天才型のソフィーナじゃ、理論を教えることなんて夢のまた夢。

時間があるときにその辺りをちょっと教えてよ、キレイなお嬢さん！的なノリで近づこう。うん、そうしよう。これは完璧に違和感無いはず、きつと。たぶん。

その為には、まずはこのル・マレ家によく来る必要があるな。そ

うすれば言わずと、この事を願い出る機会も増えるはず。よし！この線でいこう！この先、ソフィーナでは魔法が上達するとは思えないからな。

なんていいアイデアが閃いたんだ！とオレが現実に戻ると、妹のアナが私も習いたいと駄々をこねていた。何かうるさいと思ったら、お前か。彼女の言い分は、兄も同じぐらいの年の客の子供も楽しそうな事をしているのに、わたしも何かしたいと言っことらしい。

ノータッチだ！幼女には理屈は通じん。昔からよく言うではないか！

『イエス、ロリータ！ノータッチ、ロリータ！』

と。昔の人はスゴイよね。これ、真理じゃん。時代とか、世界とか、もうそんなことホント些細な違いにしかないなんて！神の言葉だよ、神のさ。

マテイアス・ノエリア夫妻が魔法は危ないものだと諭し、やさしくなだめているとそれなりに落ち着いてきた。オレはここだ！とばかりにぐずるアナに「では自分が遊び相手になりましょう」と提案する。

さっき考えていたオレも一緒に王立魔法アカデミーの教師に教えてもらう作戦、コードネームは“オペレーション・コバンザメ”の第一歩目を発動だ。

オレは未来の為に語る。今までは領地を治めるための知識と、貴族たるべき教養と、魔法とを学ぶ為に日々の時間を費やしてきたが、

治めるべき領地をなくした今、多くの時間的ゆとりが出来たと。ならばこの時間を、これから恩を受けるル・マレ家の方々の為に何かをして恩を返したいのだと。

それはもう詐欺師のように誠心誠意伝えてみる。

結果、ル・マレ家の印象をよくする事に成功した。

ふっ、チヨロいな！

このままオレの“明るい魔法習得計画”の為に必要な教師も、ゲ
ットだぜっ！！

真理 『ノータッチ、ロリータ!』 (後書き)

目標だった10話を書き終えました。

この辛い試練を乗り越えた自分を褒めてあげたいです。

女教師ザマス

トリスティンに来て3ヶ月ほどたった。

こちらでの生活に馴染み始めた2ヶ月ほど前から、ル・マレ家の本邸にたびたび呼ばれている。

訪れるきっかけはル・マレ家の婿養子であるマティアスが、こちらの屋敷に来た時にオレが持ってきた書籍を全て読んでしまったと話した事からだ。「そういう事ならル・マレ家の本邸にある書籍を読めばいい。こちらに来る時いくつか見繕って来るよ」と言うのでその好意に甘えることにした。

それから始めのうちは週に1度、マティアスがル・マレ家の本邸にある書籍を1冊持ってきてくれていた。しかし、オレが毎週必ず持ってきてもらった書籍を読み終えている事が続いたので「直接読みたい物を選びに来るかい？」という話になった。

それは願ってもないことだと感謝の言葉を述べ、「では以前約束していたアナ嬢の遊び相手を努めさせてほしい」とこちらから願い出る。

オレは恩には恩で報いるタイプのナイスガイなのさ！

それから借りた書籍を読み終えるたびに本邸に訪れていると、結構な頻度で行き来するようになってしまった。まあその分、アナ嬢とは仲良くなってるんだけどさ。どうもあの子がアホな娘に思えてしょうがない。

まだ小さいからその分はちゃんと考慮はしてるんだよ。でも時々、思っている事を口に出してるっばいんだよね。それも自分では気づいてないみたいだし。

……病気かな？将来は治るといいな、この病気。

このままだと哀れ過ぎるだろ！今のところアホ毛はないが、このままこの病気が進行するとアホ毛が生えてくるかもしれん。なんとか完治して欲しいものだ。

しかし近頃なぜかマティアスもこちらの屋敷をたびたび訪れるようになった。はじめこそ生活に支障はないか？という様子見だったのだが、今では書籍もオレが自らル・マレ家の本邸を訪れているので特に用はないはずなのだが……。

まあいいか。特に困ることもないし。それに交流を持ち、親密になる事に利益はあっても不利益は生じないだろう。

それらの書籍を読みふけることが多くなって、ソフィーナとの魔法の訓練は少し減ったのもオレにとっては大きな利益と言えるしな。そうやってからはソフィーナが以前よりウザくなった気がするが、ガン無視すればどうと言うことはない。

そうやって以前より充実した3ヶ月を過ごしたのだ。

唯一の難点と言えば過ごしにくい土地柄だと言つことぐらいか。

このル・マレ伯爵領は湿地帯が多いせいで、かなり湿度が高い。霧もよく出るため、港町だったルーベックと比べると天候がよい日が格段に少ない。

一言で言えば　　陰気なんだよ。こないだマティアスが来た時にこのル・マレ伯爵領が好きだとか言っていたが、彼の感性はどうなんだろう？

きつとマティアスは“インキン”なんだね。

だから陰気なここが好きなんだ。まあ人それぞれってヤツか。オレは“爺”のガチホモも許したほどの器のデカイ“漢”だ。“インキン”程度どうという事はないさ。

それより重要なのは、一週間ほど前に到着した魔法の教師のことだ。名前はセシル・ド・キャンデ、29歳のアラサー独身の女性スリーサイズと胸のサイズは知らない。

第一印象は“三角眼鏡を掛けてザマスク調でしゃべって欲しい女性”だ。カッチリと纏め上げられた髪と緩みのない表情、派手ではない服装が姿勢の良い彼女をエロ女教師を連想させる。さすがはアカデミーにいただけの事はある。

お堅い雰囲気だがなかなかの美人さんだ。

オレが最初に会ったのは、借りる書籍を屋敷の書庫から持ち出した時だった。書庫の扉を開けるとバツタリって感じ。彼女はル・マレ伯爵に挨拶をし、マシューに対面した直後だったそうで、オレの事をマシューの弟だと勘違いして話しかけてきた。

オレはどうやって接触しようかと思案していたところだったので、こんな“角を曲がったら食パン加えた女の子とぶつかる”的な運命の出会いをするとは思わず一瞬キョドっちゃった。

それを急に大人に話しかけられて慌てたのかとでも勘違いしたの

か、「慌てなくてもいいのよ。私にお名前を聞かせていただけのかしら？」と微笑みながら再び声をかけて来た。今度は膝を屈めて、オレの視線の高さに合わせてくれるなんていう優しさ付きでだ。

いい女だ。

動揺から立ち直ると、オレは彼女の勘違いを正して名乗る。特に詳しくは話していないが、伯爵家には良くしてもらっていると言っておいた。オレ達の扱いを対外的にはどの程度オープンにしているのかル・マレ伯爵には聞いていなかったからだ。

結局はそんな必要はなかった。

彼女はマシューのために遣って来たただの魔法教師だと思っていたのだが、どうやら女性にはめずらしくル・マレ家に仕える家臣になると言うことだった。

そうそう。彼女からマシューに魔法を教えると聞いた時に、それとなくオレにも教えて〜と言っておくのも忘れなかったよ。ここに來てるメインの理由だからね。

その次に屋敷を訪れた時、偶然顔を合わせた当主のル・マレ伯爵にその事を尋ねられた。

キタコレッ！

とばかりにベルギウムには魔法学院がないために理論をきちんと学ばない事や、メイジたちは書物や他のメイジづてに知識を得るためどうしても知識の偏りがある事などを伝える。

そして謙虚に（ 註：ここ大事）時間がある時に「出来れば初等理論を少し聞かせて貰える機会を与えて欲しい」とか、「もちろん基礎的な知識を得るための良い書籍を紹介してくれるだけでもいい」などとお願ひしてみる。

その時は「うむ」なんてアゴをさすりながらいい返事なんて言わなかったが、数日後、オレ達の屋敷を訪れた使用人が次にル・マレ家の本邸へ来る日時を指定してきた。

いや、マティアスの“インキン”野郎がちよくちよく来てんだからその時に言えよ。と突っ込みたかったがまあいい。

事は上手く運んだらしいからな。

どうやらマティアス・ノエリア夫妻の口添えもあったようで、魔法の講義の時にはオレも同席を許された。マシューの一つ年下とは言え、ライバルのような人間がいる方が魔法の上達も早いだろうと言っ考えのようだ。

そして今日から本格的な魔法の教えを受けにこのル・マレ家の本邸に来ている。マシューが杖の契約の儀式が済むまで2日に一度、共に魔法の知識を教えてくれるのだ。

本格的な魔法の修練の始まりである。

どれだけこの時を待った事か！これでオレもいっぱしのメイジになれるかもしれん！ソフィーナの呪縛を打ち破れるぞっ！

いやマジこんなにアガるのって久しぶりだよ。

生きてるって、ほんとに素晴らしいことだね。パトラッシュ

「今日で2度目になるわね、ミスタ・アントワープ。ちゃんと名をつけていなかったから自己紹介をさせて頂くわ。私はセシル・ド・キャンデ。これからはミス・キャンデと呼ぶように」

おっと！浮かれてる場合じゃねえぜ。やるぜえ。オラア、やったるぜい。せいっ！よし、気合十分だ。

「わかりました、ミス・キャンデ。わたしも2度目になりますが、教えをこう者として今一度名乗りましょう。わたしはアルベール・レオポルト・マランド・ド・アントワープです。よろしくお願い致します」

「ええ、こちらこそ」

あっ、そつだ。

「マシユー殿。どうぞよろしく」

一応、コイツのコバンザメだからね、オレ。ちゃんと挨拶ぐらいしておこう。

「ああ、よろしくアルベール」

「挨拶も終わりましたので、さっそく始めましょう。ではまずお二人はメイジとは何かお分かりですか？」

「メイジとは貴族のことです」

さっそくですな、セシル・ド・キャンデ嬢。でもまあ、ここからは真面目モードでいきますか。

「……メイジとは魔力を持つ者、いや魔法を扱う者のことでしょう」
「お二人はなぜそう思われたのです？」

「平民には魔法が使えません。メイジとは魔法が使える人の意味だと父上から教えて頂きました」

「平民にもメイジはいるとゲルマニアの書物に記述がありました。逆に貴族にも魔法が使えない者もいるとか。だとすれば魔法を使う為に必要な魔力を持つ者かと思いましたが、平民の中には魔力を持つていても魔法を学ぶ機会がない者もいるでしょうから……ミス・キャンデの問いに最もふさわしい答えは“魔法を扱うことの出来る人間”というのが妥当かと思えます」

今日は天気がよいのでバルコニーで授業を行っている。そのためオレが答えている間、ミス・キャンデはオレ達の周りをゆっくり歩いていた。

はあ、黒のストッキング履いてくんないかな……おっとヤベ。今日はそう言うのなしかった。話に集中しよう。

「お二人の答え・考えは共に正解であり、厳密に言えば誤りと言えます」

「王立魔法アカデミーでメイジとはと聞けば、皆は一様にこう答えるでしょう。“己の意思で魔力を体外に放出できる人間”のことだと」

「一般的には貴族はメイジと言いますが、正確には“貴族とは魔力を持つ者であり、それを放出する事が出来る者がメイジである”

というのが正しい言い方です。ですからお二人がメイジになる為には、まず魔力を放出できるようにならなければなりません」

「どうしたら魔力の放出が出来るの？」

「そうですね……。ミスタ・アントワープは杖の契約が終わっていると聞きましたが、本当ですか？」

「はい」

「ではマシュー様の問いの答えはわかりますか？」

「ミス・キャンデの先程の問いが答えかと」

「具体的に答えるように。ミスタ・アントワープ」

「まずは杖の契約が必要不可欠でしょう」

「続けてください」

「杖の契約が成功”これが意味するところが、魔力の放出が可能になると同意だと考えます」

「いいでしょう。概ね間違ってはおりません。では魔力の放出が可能になるのはなぜかわかりますか？」

「これから言う事はわたしの推測ですがよろしいのですか？」

「かまいません」

なんて感じで始まった魔法講義はなかなか興味深いものだった。

簡単に言えば“メイジは魔力を放出可能な者”のことを指すと言
うこと。

そして放出した“魔力を操作できる”ようになるとコモンマジックの使い手になる。コモンマジックの習得にはもう一つ“概念を付加する技術が必要”となる。これは今後、系統魔法を学ぶにおいて必要不可欠な技術であるそうだ。

系統魔法は遺伝や環境に左右され、生来の得意不得意の系統があり、全ての系統を操るのは稀であるということ为前提に話が始まった。

系統魔法を操れるようになる事が、一人前のメイジとして扱われるようになる基準となるらしい。

そして系統魔法を操るとは、メイジが魔力によって“現象を具現化する”ことを可能にした事を意味する。ドットメイジとは現象を具現化し、いずれかの系統魔法を使えるメイジの事である。

ラインメイジとは具現化した魔法を、“融合し変化させる”事のできるメイジの事を指す。これは同系統の魔法を融合させる場合と異系等魔法を融合させる場合とがあるが、比べるまでもなく後者はるかに難しいとのことだ。

トライアングルメイジは融合・変化させた魔法を“強化させる”事の出来るメイジの事を指す。

これはほとんどのトライアングルスペルが2系統の融合・変化させた魔法に、さらにそのうちのどちらかの系統を掛け合わせたスペルであることからそう認識されているようだ。

本来の意味である3系統全てが別々の系統であるトライアングル

スペルというのは、非常に高等な技術が必要でその使い手を選ぶという事実から、3系統融合スペルの特長である“汎用”性のあるスペルはあまり知られていないとのこと。

スクエアメイジとは“強化概念付加または複数概念付加”を可能なメイジの事を指す。

スクエアメイジは魔法を極めた存在と言われるが、本来の至高への到達とはより複雑な上位概念を操る者の事を言う。スクエアメイジはメイジ全体の数%でその上、至高に至るメイジはその中でも数%であるため、始祖が操っていたと言われる失われたスクエアスペルが数多くあるそう。

彼女は最後にトリステイン王立魔法アカデミーで、その失われたと言われるスペルを研究していたとオレ達に話してくれた。

なんてわかりやすい授業なんだ！ソフィーナの教えがサルのコミユニケーションに思えてくる。ああ、目から心の汗が流れてしまっよ。

実に、実に有意義な一日である。

こんな日が来るとは思っても見なかった。

天国の親父殿。今日まさに、オレは不幸フラグを叩き折ったのかもしれない！

女教師ザマス（後書き）

目標達成したのでモチベーションなくなりました。
またしばらくの間、他の作品を読む訓練に戻ろうかな……

挿話 フォースと共にあらんことを

僕はマシュー・マティアス・フランシスコ・デュ・マレ。

トリステイン王国北部に所領をかまえるル・マレ伯爵家の嫡男として生まれ、今年で5歳になる。

父さんであるマティアス・マルセル・ド・ティボー・デュ・マレによると僕は普段は穏やかであるが、実は気性がなかなか激しく、自らの意思表示も明確にする子であるそうだ。母さんのノエリア・マリー・ル・ブラン・デュ・マレは僕を素直で活発な優しい子だが、妹が生まれてからは責任感が強い性格になったと言う。

自分ではよくわからないけど、父さんと母さんがそう言うってくれるのはうれしい。

僕は貴族として、兄として、こうあるべきだと言う理想に自分を重ね行動するように心がけている。

ル・マレ家の当主である祖父には、歳にしては大人びた優秀な子供だと言われた。お前がこのまま成長すればル・マレ家も安泰だと。

僕はこの期待に応えたい。いや応えなければいけない。

だって僕はすごいスクエアメイジである父さんの子で、名門ル・マレ家の男なんだから。

でも最近自信が少しない。

それは去年、突然屋敷にやって来て、お爺様に紹介された親子のせいだ。いやその子供・アルベールのせいと言ったほうが正しい。今は、昔マリー大叔母様が住んでいたという屋敷に住んでいて、たびたびこの屋敷をやって来ている彼は僕の一年下だ。なのに大人びた言葉遣いをし、僕もまだ学び始めていなかった魔法もすでに使えた。

その後、この屋敷にやってくるのもお爺様の難しい本を読むためだと父さんに聞いた。

僕より大人びていて優秀だ。

負けてはいられない。僕はお爺様たちの期待に応えなければいけないんだから。

君には負けないよ、アルベール。

それから3ヶ月後の5歳の誕生日を迎えるウィンの月に、僕も魔法を学び始める事が決まった。

もっと早くから魔法を教わりたかったのだけれど、先生の都合でどうにもならなかった。だからそれまでの3ヶ月間に、魔法の勉強を自分でしようと父さんに言うと、後日母さんに教わる事になった。母さんは魔法の実力はラインメイジではあるが知識は豊富で、ト

リステイン魔法学院を優秀な成績で卒業したのだという。もちろん優しい母さんに教わる事に、不満などあるはずがない。

そうして僕は母さんから魔法の話聞くのが日課になる。母さんが学んだトリステイン魔法学院で始めに教わる事を離してくれている。するとしばらくしたある日の午後、母さんに魔法の話聞く席に彼が現れた。

どうしてアルベールがここに？

彼は妹のアナの遊び相手として何度かこの屋敷を訪れていたが、僕は彼を避けていたので会うのは彼がトリステインに来た日以来だった。

僕の戸惑いをよそに母さんが事情を話してくれた。

その日彼は屋敷の書庫に本を返す為にやって来たのだが、それはついでで用件でホントの理由は一冊の本を僕に渡すために来たのだと言う。前の日に彼の屋敷を訪れた父さんが僕の事を話したらしく、そう言う事ならと彼が持つ参考になりそうな本を持ってきたのだと言った。

彼が言うには、この屋敷にある本は難しいものや、専門的なものも多く、これから魔法を学び始める者が参考にするようなものが見当たらなかったから、僕の役に立てばと思って持って来たらしい。

彼の持つて来た本を笑顔で渡され、しぶしぶ本を受け取る。

肌の色が白く銀髪の彼は、周りの空気が透き通っていくような笑いをする。妹のアナは彼の笑顔が好きで、彼が笑うと抱きつくらしいのだけれど、僕はあんまり好きじゃない。理由は僕にもわから

ないけれど、とにかく好きじゃないんだ。

だからアルベールに本を借りるなんて、本当は嫌だった。

母さんが「わざわざこの為に来てくれたんだから」と言ったので礼は言いうが、けして僕の本心からじゃない。うれしくて礼を言っただけじゃない。

だって僕には母さんが教えてくれるし、そんなもの必要ないんだから。

しかたなくだ、しかたなく。

彼は本を僕に渡すと、自分は「邪魔になるだろうから」と言うてすぐに屋敷を後にした。

その日、不本意だったけれど彼が持ってきた本を母が読んで、僕に聞かせてくれることになった。「せっかくアルベール君が持ってきてくれたのだから」と言うて、僕の横に腰をかける。

そして本を開くと、母さんは驚いた表情で「まあ！」と声をあげた。

何をそんなに驚いているのだろうと、その本のタイトルを見てみると『偉大なるブリミルの残したもう高尚たる魔法儀式・基礎儀式篇』書いてある。そして中身を見ると、なんとそこには隙間なく注釈が書き込まれていた。

必要のない部分は線が引かれて塗りつぶされ、重要と思われる部分には赤いインクで記されている。

母さんは次々とページをめくり、厳しい目で中身を確認していく。すると中に一枚の紙が挟まれていて、こう書いてあった。

「マシユー殿へ

魔法を本格的に学ぶまでには、事情がありまだ時間がかかると聞ききました。

優秀なマシユー殿のことでしょうから、早く学びたいと焦れる気持ちがあるでしょうが、今は出来る事をするのがよいでしょう。

今出来る事、それは魔法の知識を少しでも多く知る事だとわたしは考えます。幸いわたしの時とは違ってその環境も、時間も恵まれています。

マシユー殿の母上でいらっしゃるノエリア様は美しく聡明な方ですから、魔法の教師がル・マレ家に到着した時には、もう教えることがないほどになっているかもしれないですね。

もう一つ出来る事があります。

もうそろそろマシユー殿のためにル・マレ伯爵が杖を用意している頃ではありませんか？ル・マレ伯爵から杖を受け取ったら、その日から常に“手に持つ”ようにしてください。

おそらく魔法の教師が到着して、まず最初にする事は杖の契約の準備でしょう。

杖の契約にはこの本にも書いているように“常に杖を持って”その準備をするのですが、ただ単に持つだけでは効率が悪く時間がかかる場合があります。

そうならない為にいくつか注意点がありますので、よろしければ実践してみてください。

1つ、杖は服にしまったり、一時的に側に置いておく事を避ける。

2つ、常に肌に触れるように持つこと（体に縛り付けるなどして
もよい）。
3つ、魔力は体の先端から出やすいので指で握っておく事が最もよ
い。
最後に、他の魔力のある者に決して触れさせない。マシユー殿の固
有魔力を馴染ませるのに他人の魔力は邪魔になります。

これらを守れば早く杖の契約準備が出来ると思います。準備を終
えれば教師の到着したその日に、契約の儀式が出来るでしょう。少
しは参考なつたでしょうか？

この本と共にこの手紙が何かの助けとなれば幸いです。

では、またお会いする機会を楽しみにしています。

アルベール・レ

オポルト・マランド・ド・アンドワープ」

その紙は彼から僕に宛てられた手紙だった。

母さんはこの手紙を読んで、さらに感心していた。「歓迎の晩餐
の席で、他の人より多くの努力が必要と言っていたのは、こういう
事を言っていたのね」と。そして僕に「マシユーも負けないように
頑張らないとね」と笑いかけてくれた。

もちろんだ！

僕の方が年上なのだから負けてはいられない。

そう新たに決意した僕は、その日「杖はいつ来るのか」と5回も母さんに聞いてしまった。その後も毎日のように杖の到着を父さんと母さんに聞く日々が続き、結局杖が僕の手が届いたのは、僕の誕生日の祝いの晩餐がある1日前のことだった。

数日後、魔法の教師となってくれる、セシル・ド・キャンデという女の人が到着した。挨拶する為にお爺様の部屋に呼ばれ、彼女をはじめて見た印象は恐そうな人だった。

でもこれで僕のためにお爺様がトリステイン王立魔法アカデミーから迎え入れてくれた優秀な教師と、アルビオンから取り寄せた王族の方々も使われると言う貴重な木を使って作られた杖が揃い、魔法を学ぶ準備が整った。

さあ、魔法の訓練だ！

と息巻いたが、魔法教師のセシル・ド・キャンデが言うには、杖の契約の儀式をするにはもうちょっと時間があるそうだ。僕の固有魔力が、十分に杖にまだ馴染んでいない為だ。新しい年を迎え、始祖降誕祭が終わる頃には杖の契約が出来るだろう言われ、それから2週間またされることになった。

でも杖が僕のもとに届いてからまだ1週間。3週間で杖と契約できるのなら、十分優秀だと父さんに褒めてもらった。

どうだ！君には負けないよ、アルベール。

だからしばらくの間は2日に一度、魔法知識の授業をするということになった。なったのだけれど……、なぜか授業の席に彼がいた。なぜここにいるのかと聞くと、本人ではなくセシールが答える。どうやら父さんが、彼も一緒に教えてくれとセシールに話しをしたらしい。

納得がいかない。

セシールは僕の為の教師なのに。

そんな僕をよそにセシールの授業は始まる。

彼は事あるごとにセシールに質問して、話を中断させるので正直邪魔に思った。「という人の書いた本にこういう記述があったのですが、ミス・キャンデのお話とくい違うのですが？」とか「その場合、こう言った事も関係してくる場合もありますか？」とか「これはわたしの個人の推測なんですけど正しいのか聞いていただけますか？」とか、とにかく授業が進まない。

セシールも丁寧の一つ一つ答えるので、さらに時間がかかる。

それが不満だった僕は、夕食の席で父さんたちに言った。「僕は早くいろいろなことが知りたいのに、いちいち中断させないで欲しい」と。すると父さんはセシールはどう対応しているか聞いてきたので、ありのままを答えた。

たまにその場で答えられないこともあり、後日授業が始まる時に改めて答えることもあると付け加える。

ふむ、と考える父さんに代わって、母さんが僕に声をかけてきた。「マシューもアルベル君と同じ様にセシルに質問をするようにしなさい」と。

てつきりセシルに「アルベルのことには構わないで授業を進めるように」と言ってくれるかと思っていたのに、そうではなかった事が僕をすごく落胆させた。

そうして同じ様なことが続く授業だったが、回数を重ねることに少し考えが変わってくる。

一度、母さんに言われたとおり質問してみたら、「良いことに気づきましたね」と褒められたのだ。彼も「わたしは全然気がつかなかったよ、すごいね」と賞賛の言葉をくれた。

聞く事は解らない事だから恥ずかしい事だと思っていたのに、逆に褒められるなんて思ってもみなかった。その事を母さんに話したら、「より真摯に学ぼうとする姿勢が素晴らしいことなのです」と言われた。

それからだろう。

彼、アルベルの見方が僕の中で変わったのは。もちろん彼に負けたくはないという事は変わらない。でもそれだけではなくったのだ。

そう思ってから、彼とよく言葉を交わすようになった。

アナの遊び相手として来ている時にも顔を出し、魔法の事などいろいろ話す。アナが“のけ者”にされたと泣き出すぐらいに。

すると彼は思っていたよりも子供っぽかったし、すごく又けているところもあることがわかった。いつも周りの事を考えて行動して

いる事は尊敬に値するし、学ぶところも多々ある。

彼の事を友人として好きになっていく自分は嫌いじゃない。

「次はマシユー様がやってみて下さい」

いつものようにセシルを質問攻めしている彼を見て、少しボーンとしているとそう声をかけられた。今は授業中で、コモンマジックである“ライト”を学んでいる最中だったのを、すっかり失念してしまっていた。さらにセシルが声をかけて来る。

「まだ出来なくても当然ですので、まずは挑戦してみてください」

「わかった」

先日契約を終えた杖をかざし、“ライト”の呪文を挑戦してみるのが……、やはり出来ない。

魔法のスペルを学ぶ時、最初めに学ぶものは“ライト”と決まっているそうだ。

それは初歩の初歩であり、メイジとなるために必須の技術である魔力の放出をすることを、最も簡単に確認できるからだ。

魔力は体内から対外に出される、つまり杖に魔力を送り込むと杖がその魔力によって光る。純粹な変換されていない魔力は淡い光りを放つのだ。これを収束して、指定したものに固定することによって光源とする魔法がコモンマジックの“ライト”という訳だ。

魔力が光を放つと言うのは、どうしてなのかわからない。

アルベールが質問していたが、そういうものなのだそうだ。その後、彼はブツブツと「何らかのエネルギーなのだから当然と言えば当然か」とかなんとか言っていたが、彼は時に僕では理解できない事を言うので、気にしたら負けだと最近悟った。

これは後で結構重要スキルだということがわかる。早い段階でわかった僕は幸運だ。

それはさておき、コモンマジックは使う種類が違っていても同じ様に光るのだそうだ。そう言ってセシルが順に一般的なコモンスペルを唱えて見せてくれる。

ライトはもちろん、サイコネシス（念力）は動かす対象が光りだし、ロック・アンロックは扉についている錠前や鍵が光る。ディテクトマジックはかけた対象範囲の全体が一瞬光り、攻撃魔法であるブレイドは光の剣であり、アローも光の矢だ。

「ああ！わたしもライトセイバーを使えるようになり、パダワンを卒業する！」

と意味不明な事をアルベールが言っている。いつもの光景だが、ブレイドをセシルが見せたときはひときわ興奮していた。「フォー」と共に！」と天に右手を突き上げて叫んでいる。

「コオー！ハアー！」と謎の荒い息もしているが、気にしてはいけないのだ、これは。

この後、ブレイドの教えを乞う彼だが、セシールに非情な言葉で切り捨てられた。

「ミスタ・アントワープには“サイコキネシス”を憶えてもらいます」

アルベールは四つん這いになって、ガックリとうな垂れた。

アホな子たち

「“爺”。止めて」

「かしこまりました」

返事をした“爺”が馬車の前方にある小窓を叩く。その合図に気づいた御者が手綱を引き馬車を止めるとオレは馬車を降りようと立ち上がる。

「お降りになるのですか？」

「ああ、ついて来て」

“爺”が扉を開けるとすぐに降りて辺りを見渡す。

あつた、あつた。でも入れるものがないな。

俺の持ち物にも“爺”の持ち物にもお目当てのものを入れられるようなものはなかった。どうしたものかと顔を上げると御者が似合わない帽子を被っていた。

「“爺”、彼の帽子を使うから貰ってきて」

「帽子でございませうか？ いったい何にお使いになるつもりでございませうか、アルベール様」

「アナへの贈り物にちょうどよいものがあるじゃないか」

「贈り物……ああ、そういうことでございますか。では私めのコートをお使いください。女性の方は多ければ多いほどお喜びになるでしょうから」

「うん。じゃあ、そうしようか。ありがと、“爺”」

「お気になされませぬよう」

年が明けて数週間たった頃に、旧ベルギウム王国の地から戻ってきたアントワープ家の執事・レイモンは、敗戦後のベルギウム王国の現状と我がアントワープ領に関わる情報を持ち帰った。

敗戦後、ベルギウム王国はゲルマニアの進駐軍が統治し、国内で抵抗していた貴族勢力を次々に潰した。ゲルマニア軍は王都陥落後の従属は許さず、王都ゼーバッハを拠点にして次のルクスベルガ大公国との開戦準備の一環として、後顧の憂いを全て断つ方針を明らかにしたのだそうだ。

そのうちの一つでもあったアントワープ公爵領は古都ルーベックが陥落してからも、海上に逃れてゲルマニア軍に抵抗を続けていた。祖父であるアントワープ公爵はフリースランド王国への亡命を最後まで拒み、諸侯軍を引き連れて艦隊戦を挑み続けた。しかし、年が明け始祖降誕祭が始まる前に、すべてを終わらせようとしたゲルマニア軍が行った“バルゴール沖”掃討作戦で、アントワープ公爵は敗れる。艦船が沈む最後の時までゲルマニア軍を苦しめたと“爺”は話してくれた。

ジジイが死んだことに胸が熱くなる。今まではこんなこと思った事もなかったが、今アントワープ公爵家に生まれたことを誇りに思う。

春の天気は変わりやすいせいか、このところ午後から天気が崩れることが多かった為、このル・マレ家の本邸に訪れてはいなかった。久しぶりの訪問だったので今日はアナの機嫌がよくないので贈り物を持って来るオレはちゃんと貴族しているよね。

屋敷に到着するとル・マレ家の使用人には先にガーデンテラスに案内してもらい、それからアナにオレが来た事を伝えるように頼む。ちよつと今日はやることがあるからね。場所はオレが指定させてもらった。

しばらくして、貴族の淑女らしからぬ足取りでアナがあらわれた。

「アルベールさま！いらっしやいませ！」

歓迎の挨拶も思いつきりダイブしてくると言う淑女らしからぬものだったが、彼女らしいと言えば彼女らしい。今日もピンクの愛らしい服装が彼女によく似合っていた。

「やあ！アナ。今日も元気だね」

「きてくださって、うれしいです！」

「このところ来られなくて、すまなかつたね。そのお詫びがしたいんだ。こちらに来てくれるかい？」

「はい。「そんなことより、ほんをよんでいたきたいわ」

今日もさつそく、アナの特殊スキル“心の声ダダ漏れ”が発動している。オレはもう慣れたので、このように矛盾する返事があった時は『先に言った事が返事で、後に言った事が本音』だと簡単にわかる。だから戸惑うこともなく、対応もスムーズにできるのだ。

「すぐにわたしの用は終わるから、その後は一緒に本でも読もうか？」

「はい！よろこんで。「ほんよんでいたきたいのに……」」

ある意味、実に扱いやすいんだが……。この病気が治らないでこのまま育つたらと思うとこの子が不憫でならない。アホな子は一生アホなのかもしれないが、何とかしてあげたいものだ。

どうにもならないとしても、オレぐらいはアホな子の味方でいてあげよう。

彼女を贈り物を用意してあるガーデンテラスへとエスコートする。

「アナはここに座ってくれるかい？」

「わかりました。「はやくアルベールさまに、ほんをよんでいただ

きたいな」「

よほど読んで欲しい本があるらしい。

今日はマシユールと一緒にコモンマジックの訓練をするつもりだったのだが、こんなに心の声が漏れ出すほど読んで欲しいのならばかない。アナの為にちよつと多く時間を取ってやるか。

「じゃあ、これをお詫びとして受け取って欲しい」

そう言っつて腰の杖を抜き、高く掲げる。アナについていた使用者が動こうとしたので、心配ないと杖を持っていないほうの手で合図する。

そしてオレは掲げた杖をガーデンテラスの屋根に向けて、コモンマジックを唱えた。

「我が意に沿い力よ働け

サイコキネシス
、「念力」！」

オレは“念力”で、あらかじめ用意していた仕掛けを動かす。とは言っつても紐を緩めるだけなのだが。

「わあ！きれいです！」

ガーデンテラスの屋根からアナの上に、色とりどりの花が舞い落ちてくるとアナが歓声を上げた。

はじめは花束でも持つてこようと軽く思っていた。しかしオレが花を摘むと言っつたら“爺”や共の者、そして御者までもが手伝い始

めた。

しかも使用人たちが摘むので、オレには馬車で待っているようになんて言っ てきやがる始末だ。

侘びの為の贈り物なのだから、オレが摘んでこそ価値があるのだと譲らなかつたが、それでもなかなか“爺”が引き下がらなかつた。何かあるかわからないのだから、危険だと言っ のだ。

こんなことで時間をとつてもバカらしいので、オレが馬車の近くの花を摘むようにして使用人たちが周囲から集めてくることになつた。このとき“爺”は本当にしぶしぶの了承だつた。

だから“爺”は早く終わらせようとその年に似合わない動きで花を集めてくるが、さっきの事でムシの居所が悪くなつたオレは際限なく集めさせた。

それはもう、ジョータロー並にオラオラを発動して集めさせたものだ。

結果、馬車に入りきれない程の花が集まつてしまつた。

「何やってんだオレは……こんなにいらねえ」なんて思つたけれど、使用人たちがいる手前そんなことも言えない。

仕方がないので山となつたもはや花束とはいえないものから、葉や茎の部分は捨てて花の部分だけを集めさせる。

あたかもはじめからそのつもりだつたかのように振舞うのも忘れない。

使用人になめられちゃお終いだからね。

そうやって集められたたくさんの花が、アナの上に降ってくる。

目の前で上から降ってくる花に喜ぶアナを見ると、これはこれでよかったのかと思った。

意地になって失敗した事を、ちょっとした思いつきでサプライズへと変える。オレもなかなか機転が利いているぜ。

おや！？まるでデキる男のようじゃないか！靴下を履かない人も褒めてくれそうだ。

「きれい！きれい！」「きれい！きれい！」「

上から花が降ってくるガーデンテラスで、アナは椅子から立って全身で喜びを表していた。両手を広げてクルクルと回る様は、なかなか愛らしい。

現実の声と心の声がリンクしているのだから、本当に喜んでくれている事に疑いはない。

苦労したかいがあったぜ、おもに使用人たちが。

「いいか、マシユー。お前は、今ある現実を正しく見つめようとはしておらん」

「どづいづいと？」

「学んだ事を捨てるのだ」

「……」

「考えるな……感じる」

その後アナに本を読んでやって、今は予定通りマシユーとコモンスペルの復習をしている。

この3ヶ月でオレはほとんどのコモンスペルの習得が出来た。ソフイーナに学んでいた時とは進捗具合が えらい違うのには、オレ自身が一番驚いている。

一方、マシユーはと言うと“ディテクトマジック探知”に躓いていた。

ディテクトマジックは対象範囲の探知をする魔法なのだが、魔力を対象範囲全体に広げサーモグラフィのように空間把握をして感知する方法と、魔力の平面膜を操作することで3次元スキャンする方法がある。

一口にコモンスペルと言っても、メイジは個人でオリジナルスペルを開発するので、同じ魔法でも魔力の使い方が違う事はよくある事なのだそうだ。

話はずれてしまったが、そんな理由でコモンスペルは個人の感覚によるところが大きい。

イメージにもっとも左右されるのだが、“探知する”という概念になじみがないマシユーは、それをうまく魔力で再現できないのだ。

そんな現状な訳で、最近距離がなくなってきたオレにマシユーが

教えを乞う展開になっている。けど今日はアナの相手でブツちゃけ
疲れてんのだよ、オレは。

もともとマシューにそれほどの思い入れもないということ、ル・
マレ家の中ではダントツでぞんざいな扱いをしている。
今に始まったことではないのだよ。

「フォーヌはお前と共にあるのだ、いかなるときもな」

だからマジでテキトーに相手する。

オレはコモンスペルのブレイドを唱えて、ブウオン！と効果音を
口にしながら自分の訓練をする事にした。ガキで小さいこともある
ので、オレはすっかりマスター・ヨ　ダ気分だ。これはアガるぜ！

思えばコモンマジックなんてチヨロいもんだったな！

超ド級優秀教師セシル・ド・キャンデの魔法の授業は最高だっ
た。

まず初めに魔力の放出の訓練でもある“発光^{ライト}”を学ぶ。

次に放出した魔力の操作を学ぶための“念力^{サイコキネシス}”。

人によって、魔力を手触のように使ったりマニピュレーターによ
うに使う直接型と、魔力のボール状のものを操作したりリモコン操
作のロボットのように使う間接型の2種類に分かれる。

直接型は汎用性は高いが魔力消費が高く、間接型は魔力消費は低
いが汎用性は低い。

それを完全にマスターしたら、自分の魔力の把握の訓練である“ディテクトマジック探知”だ。この“探知”の魔法は、得られる情報が視覚や聴覚で判明するのではなく、魔力が一つの感覚器のように作用して脳に情報が直接伝わってくる魔法である。

探知するのは魔力であるため、魔法が使われていればもちろんの事、その他にも魔法によって現れた効果やマジックアイテム、魔力を持つ人間や亜人、幻獣などを探す事が出来る。

それから二つの応用であり、魔力の把握と操作を複合しなければ使えないスペルである“ロック施錠”、“アンロック開錠”。

これらはもちろん、鍵や錠前などがなければ、ただの扉に使っても効力はない。ただし棒の一つでもあれば、つかえ棒として施錠が可能である。

そしてコモンスペルを学ぶ最後の段階として、ブレイドとアローを学ぶ。

魔力に概念を込める訓練でもあるブレイド（魔力操作直接型）、アロー（魔力操作間接型）の習得は、この後に学ぶ系統魔法を学ぶ上で必要な技術の最後の課題だった。

セシールは教える時に魔力の流れを確認しながら適切な助言をするし、本来魔法学院で学ぶような魔法の原理の説明や、指導呪文の順番の過程も理に適っていてわかりやすい。

子供への初等指導なのでここまでする必要はないのだが、セシールの律儀な性格がそうさせているのだろう。

だがそのおかげでオレは、憧れのジェダイになれたんだ！

インキン×ビッチ” って何をぶつ “カケて” んだ？ゴラァ！

夏も終わりに近づき、もうすぐオレの5度目の誕生日が近づいてきた。

最近ではもう系統魔法を覚えてドットメイジとなったので、ル・マレ家へ魔法を学ぶためだけに行くことも少なくなった。

それは一度いずれかの系統で魔力から現象の具現化を果たせば、あとはスペルを覚える事と反復訓練により魔力を増やす事ぐらいしかすることがない事から、特に“教師と共に学ばなければいけないことがある”という訳ではなくなっただからである。

次の段階であるラインスペルを学ぶには、ドットスペルを使う時に高いレベルで魔力を現象に具現化する“変換率”が求められる。この“変換率”が高いと言う事は、自身の魔力の掌握が高いレベルで出来ていると言うことであるのだが、今のオレはこの“変換率”を上げなければならないのだ。なぜならそれが出来ない場合、ラインスペルに必要とされる現象の変化・融合が難しくなるためである。

そのため目下の目標としてオレが取り組んでいるのが、ドットスペルの習得と魔力量の増大だ。

春先にコモンスペルを卒業したオレはその後、超ド級優秀女教師セシル・ド・キャンデに系統魔法の基礎を学んだ。

隣でマシューが悔しそうにしていたが、こいつのフォローはしない。正直オレ的にはどーでもいい存在なので。まあ、ガンバレぐらいは言ってるやろう。

話を系統魔法の基礎ってやつに戻そう。

系統魔法には生まれつきの才能、つまり遺伝や育った環境によって得手不得手があり、不得手な系統は魔力の変換効率も下がってしまう。そのためまずはその人に合うと思われる系統魔法を中心に学び、ある程度のスペルを使えるようになってから他の系統に手を出す方が、アレコレといういろいろな系統に手を出すより効率がいいらしい。

オレは両親も水のメイジだし、代々アントワープ家は水のメイジを排出する家系なので、得意系統はまず間違いなく水だろう。

実際に4系統試して確認してみたが、しつくり来るのはやはり水の系統だった。もちろん初めから系統魔法が成功するわけもないのだが、失敗の中でも感覚的に水の系統がうまく行きそうと思えたのだ。この第六感的な感覚が特性であり、失敗の魔力の流れでも成功の感覚を感じることが出来るのがメイジの資質だそうだ。

その時のミス・キャンデもオレと同意見だった。そこまで条件がそろっていて他の系統になる確率は、ほとんどないだろうという見解だった。

確立・見解なんて言葉は、ダメ教師ソフィーナの口からは生涯出てこない言葉だろう。なんて心強いんだ、超銀河系女教師は！アン

タのためなら、歌でもなんでも聴いてやんよ！

そんな訳で、オレはまず水の系統魔法を学ぶ事に力を入れている。

水の基本スペルである凝縮「コンデンション」を覚え、1ヶ月はただひたすら魔法によつて生み出された水の量を増やすことに力を入れた。スペルを唱え、水の量を量る。そんな単調な日々が続くが、5日もすれば目に見えて出てくる成果に一喜一憂し、訓練に打ち込んでいく。

そうして、ある程度始めの頃に比べて生み出される水の量が増え、毎回ごとの量の差が減ったことから、具現化する魔力が安定して来たと確認できるようになる。期間的にも1ヶ月とキリがよかったので、次の1ヶ月はスペルの習得に取り掛かることにした。

ル・マレ家へアナの遊び相手として行ったついでにミス・キャンデに教えを乞い、一般的でイメージしやすく習得が容易なスペルを憶える。

水の系統魔法のドットスペルであるヒーリング（癒し）、ウォーター・シールド（水盾）、ウォーター・ウィップ（水鞭）、ウォーター・フォール（滝）などだ。

水の系統魔法は基本的に攻撃スペルの威力が小さい。殺傷能力が低いと言つてもいいかもしれない。

もちろんメイジのレベルが上がれば、スペルの威力も上がるが他の系統に劣るのは確かだ。

だが他の系統にはない水の系統唯一のスペルであるヒーリングがあるのは、他との大きなアドバンテージと言える。ヒーリングは火や風の系統魔法を得意とするメイジにはあまり扱えない・不得意であるといった傾向があり、水の系統魔法が得意なメイジが使うと効果は他を圧倒する。

しかもスクエアメイジが使うと切断された腕さえもつなげる事が出来るそうだ。さらに水のメイジが生成することが出来る水の秘薬を併用することによって、効果は何倍にもなるとのことだ。

この水の秘薬を生成するとき、多く使われる魔法が補助魔法である。

水の系統のスペルにはこの補助魔法も数多く存在し、エクストラクション（抽出）、シンセシス（合成）、デコンポジション（分解）などが一般に知られている。一般に知られていると言う表現をしたのは、秘匿され一部のメイジにしか伝えられないスペルがあるからだ。

水の系統魔法を得意とするメイジを輩出する名門と言われる家系には、代々その家の者にしか口伝されない秘匿スペルが必ずと言っていいほどあるらしい。同時に、それらのスペルを使って生成される水の秘薬の精製方法は門外不出で、その家の家紋入りの小瓶に入られ売られたりしている。

もしこの秘薬を土の系統魔法であるアナライズ（解析）によって成分を解析したとしても、複製する事は不可能なのだそうだ。

コモンスペルのディテクトマジック（探知）でもそうだが、アナライズ（解析）も術者の知らないモノの知識は“知らないモノ”が含まれているとしか判別出来ない。その上、補助魔法のシンセシス（合成）なども使えなければ、精製方法も知らないために材料を組み合わせ反応させる手順もわからないからだ。

安易に魔法で調べて簡単に魔法で作ればいい、なんてバカが考えそうなご都合主義は存在しないのだ。

いや、本当にファンタジーって何？

そのあたりがいい加減で、テキトーで、ご都合OKでファンタジーな感じが、ファンタジーってやつでしょ？

でもまあ、それが出来てるんならこんな中世的な文明レベルのはずがないし、メイジ＝神的なトンでもない世界になっちまうか……。

不老不死、瞬間移動、異空間転位とか何でもありになっちまうからな。

いろいろ言ってきたが、とにかく今は水の系統魔法の訓練に打ち込む。これ以外に考えない。

系統魔法を学び始める前は、自分自身で書籍に載っていないような魔法、例えばウォーター・ガンの新しい魔法の開発しちやるぜ！なんて考えていたが、そんな余計な事は後だ。

優先順位がはっきりした今、使えるものは何でも使っている。

トリスティン王国に来てからオレはミス・キャンデに魔法を師事していたので、モブキャラと成り果てていたやつ”がここに来て復活を果たしたのだ。

毎回屋敷の中で会えばすぐにそのあと記憶からデリートしていた女。

オレのSAN値を削る効果をもつ個体。

そう、ダメ教師ソフィーナがここに来てやっと役に立っている。

やつは火のトライアングルメイジとは言え、水のドットスペルはなんとか使えたのだ。さすがは今は亡きベルギウム王国で天才少女と言われただけはあるな。相克の系統なのに使えるなんてちょっとは見直してやろうと思ったほどだ。

「もう一回だ、ソフィーナ」

「あい！アルベールさまあ」

なんかうれしそうに飛び跳ねたが、あれは気にしてはいけない。

「いつきまゝすう！」

なんか体全体を使つて可愛さアピール的なポーズをとっているが、あれは幻だと言ひ聞かせる。

「うおるら・いる・うおゝたる」

なんかクルリと回って片足をルンツって感じで上げたが、あれは足元に虫でもいたのだろう。

「“うおゝたゝ・しーるどお”！！」

なんか人差し指でほつぺたを押さえてウインクをオレにしてくれるが、あれは虫歯が痛いんだ。

惑わされるな！あれは幻影だ！心を殺せ！そして死んだ魚のような濁った目でやり過ごせば……

『勝つる！』

「今だ！」とソフィーナが杖をかざした瞬間から、目をクワツツと劇画タッチで睨みつける。ここからが魔法の発動だから、魔法上達のためには見逃すわけには行かないのだ。

ソフィーナが杖を振るうと足元から水の壁が噴き上げ、彼女の周りを取り囲む。

「ふむ」

ソフィーナの魔力の流れ方は滑らかすぎるが力強いのでわかりやすい。

きつと魔力量が多い事と、彼女のイメージが確固たるものだからなのだろう。

教師としての評価はフンコロガシ以下だが、メイジとしての評価はミス・キャンデを軽く超える。信じられないかもしれないが世界は不思議でいっぱいなのだ。

「ど〜れすかあ！アルベールさまあ！ソフィーえらい？ねえ、えらい？！」

ウォーター・シールドの中心でアホが叫ぶ。

ダメ教師がホメて！ホメて！と叫ぶのは、水の噴出す音とそれによって生み出された壁が遮っているためだ。

「ああ、偉いぞ。だから、ちょっと黙っていてくれ」

オレも大きな声で叫んで黙らせる。

ソフィーナ使用としてのLv.も上がっているので、オレは彼女を軽くあしらうスキルを身につけた。このダメ教師は、褒められた後に頼み事をする时必须ず言う事を聞く生き物なのだ。

今も“にへら”とウォーター・シールドの中心でアホ面が笑っていることだろう。

ソフィーナが実践する魔法を注意深く観察し、魔力の流れや魔力の具現化で起こる現象、その結果を五感で感じる。そしてこの後、頭の中でイメージを作り、オレが挑戦するのだ。

「よし、やってみるか。ソフィーナ！試すから見ててくれっ！」

「あ〜〜い」

口に手を突っ込んで喉チンコ引っこ抜きたくなるような返事をすると、魔法を解除してこちらにルンルン近づいてくる。

「まてっ！」

びくん！としてソフィーナが止まる。まるで犬のようだ。従順さだけで言えば犬に勝てるが、それ以外では結構負けてる……畜生風情に負けてるとは、なんて残念な人間だ。

「それ以上近づいたらソフィーナが危ないだろ。もしかしたら、魔法が成功するかもしれないしね」

「わたしが危ないからあ〜？」

「そっだ」

「あい！」

満面の笑顔でこの返事。

ド畜生！いちいちイラつくぜ。

オレのSAN値はまだ持つのか？

たすけてえ〜、ドラ も〜ん！！

魂の叫びを発動したとはいえ「今日もいい精神修行をしたな」なんて、額の汗を拭っていると“爺”に呼ばれた。なんか“ビッチ”がオレを呼んでいるらしい。

面倒だな、実に面倒だ！面倒事ではないはずがない、いやない！今日はS A N値が枯渇しそうなんだよ。別の日にしてくんないかな？てかさ、今月の頭あたりから体調悪いんじゃないかな？ウチの母上様は。

はっ！まさか不治の病？！
だとしたら、なんて“うれしハズカシ”展開なんだ。これは行くっきゃないぜ。“ビッチ”の体調が悪いなんて、ああ心配だ。心配で心配でこんなに気分がアガってるよ、オレ！

いざ！母上様の部屋に突撃！今日の晩御飯は何だろう？ウキウキしますね、ヨネス さん。

「あなたに
弟妹きょうだいが出来るの。お兄さんになるのよ、アル
ベール」

絶望した。

予想を裏切るとか、展開的なこととか、もういろんな意味で。

聞いた話を要約すると、ル・マレ家の本邸でオレが遊び相手をしている間に、婿殿のマティアス改め“インキン”と母上様こと“ビッチ”はこの屋敷でヌコヌコしていたらしい。ガキ出来るほどやりまくってたなんてサルか？こいつらは！

しかし公爵家の女が妾に成り下がるとは、これぞ“ビッチ”クオリティってやつか。

まあ考えようによっては、商人のイヴァン・リピエッツなんて平民に困われるよりは「マシか」とも思わないでもない。

っーか何やってんのよ、この女はさ！^{アマ}

“インキン”婿殿もよくやる。

アンタ、マスオさんでしょう？アンタにも物申すよ。何やってんのよ！

ウチとは違ってあんなによい家族関係なのに、わざわざ波風立たせなくてもいろいろに。

まあ貴族社会では妾ぐらい当たり前なので、オレのように考えるのが変わっているのかもしれないが、それにしてもである。

あんなネコ系エロやさしい妻のノエリアがいながら、母のような“ビッチ”にうつつを抜かすとは残念で仕方がない。“ビッチ”はまだ20歳だし、保護欲掻き立てる清楚系未亡人っていうレアな肩書きがあるけど、オレなら断然ノエリアだぜ。ゲットしたいぜ！

あゝもう今後どーなのさ？

アントワープ家とル・マレ家の関係はさあ？

こんな昼ドラ展開ってことは、やっぱりこの後ドロドロだよな。

ル・マレ家はマティアスの魔法の實力に目をつけただけで、マティアスはマティアスで爵位目当てでの政略結婚なので愛はなしって前提なら、どうにもならないんだろっけど……なんか起こりそうだな。

オレの不運補正は未だ健在なの？

…。
だとしたら、また安住の地を求めて旅立つ事になるのだろうか…

エロ、それは男の哀しい“性”

衝撃の「お兄ちゃんになるのよ」発言から半年後。

驚くほど何事もなく時間が過ぎ、そして妹が生まれた。

名をエリザベート・テレーズ・ル・プラティーヌ・ド・アントワープ。

もちろんオレの母・テレーズとマティアス・マルセル・ド・ティボー・デュ・マレとの間に生まれた子だ。しかし妾であることや、アントワープ家がこの領地に匿われていることが公おおやけになっていないことなどから、ル・マレ家の名を冠する事はなかった。

もしそうなってしまうとウチからしてみれば、公爵家の家柄なのに始祖の国の貴族とは言え伯爵家に格下げになるのだから、その選択は当然なのだ。

オレはあの衝撃の発言から妹が生まれる月までの間、いろいろと身の振り方や身の周りの危険などを考えたのだが、それらはすべて杞憂に終わった。

やはり妾が出来る程度は、貴族にとって“日常のちょっとした出来事”に過ぎないらしい。それに妾腹の子供は女の子であり、その上マティアスはル・マレ家の後継となる男子のマシユーをノエリア

との間に設けていたので、お家の問題としては取るに足りないことだったのだ。

まあその程度の出来事だったのだけれど、オレはル・マレ家へは行きづらくなった。ノエリアと顔を合わせるのが申し訳ないのだ。

だってアレだぜ。

寝取った“ビッチ”が、いやまさに“ビッチ”なのだが……それがオレの母親なんだもん。

この気まずさと言ったら、エレベーターでオナラしちゃったのに「30階まで直通のやつだからしばらく扉開きませ〜ん」ってのと同じぐらいの気まずさなんだ。

屋敷に行くだけで居心地が悪い。

一秒でもその場から早く居なくなりたいと思うし、もし可能ならば無色透明の存在になりたかった。

そう空気になりたかったのだ、ガスだけに。

マティアスこと“インキン”野郎もあれから1年に半分以上は、王都トリスタニアの別邸で執務を取ることが多くなった。

自らそうしたのか、ル・マレ伯爵からそうしろと命じられたのかは定かではない。

それでも月に1度は“ビッチ”に会いに、こちらの屋敷へと来るのだが、会った時にギクシャクするので正直こないで欲しい。

別にこれは“パパ”と呼びたいのに呼べないとか、母上を盗られた男と顔を会わすのがイヤだとかいう、かわいい理由がある訳ではない。結果的にオレが好意を持っている“エロい唇のノエリア”を軽く扱っている“インキン”野郎を見ると、ブン殴りたくなるからである。

だからマジでウチの屋敷に来た時に、わざわざオレを探して話をして来るのはヤメれ！

オレは自分の母親よりもエロい唇の味方なんだよ。
ノエリア様派なの。仕方ないだろ！

身内よりエロをとるのは男の悲しい性さがなのだ。

だから次第に足が遠のくようになった。

1週間に1度が半月に1度になり、1ヶ月に1度になり。

そして3ヶ月に1度になった。

そしてそんな日々が続き、月日はいつしか3年以上過ぎ去った。

オレは8歳になっていた。

3年半という月日は、オレには十分な時間とは言えなかったのかもしれない。

貴族の礼儀作法、立ち居振る舞い、心得、義務など学び、修めるものは確実に身につけた。

しかしメイジとしてはどうかと言われれば、思うようにはいかなかった。

コモンスペルを半年、ドットスペルも得意である水の系統は1年かからずに一般的なものは使えるようになった。だがそこから土の系統の基本スペルの習得に1年以上、風の系統の基本スペル習得にも1年の時間を費やし、火の系統に至っては未だ最も初歩的なスペル“イグニション発火”が完璧には使えない。

やはり当初思っていた通り、オレは火の系統は不得意なようだ。

わかってはいた。

わかっていたことなのだが、自身の才能のなさに凹みっぱなしだ。

そんなこんなで、今日は久しぶりのル・マレ家への訪問だ。

先日、妹のエリザベートと母に会うために屋敷を訪れていたマティアスとばったり会い、少し話した。

実際はばったりもクソもなく、いつものごとく“インキン”が“ビッチ”との逢瀬の後に、オレを探して屋敷をうろついていた結果なのだが。

出会ってしまった自分の不甲斐なさが悔しすぎるので、ばったり

と言つておいておく！

話はマティアスが首都トリスタニアで購入した新しい本があるという話で、それを本邸に取りに行くといいとの事だった。

ついでにアナにも会ってやって欲しいと言われた。

どう考えてもそつちが本当の理由だろうとわかるが、口にはしなかった。それを口にする、本もオマエがこつちに来るついでにその本持つてこいや！ゴリア！と言ってしまいそうだったからだ。

まあ、そんな理由で3ヶ月とちよつとぶりにル・マレ家に来ているのである。

まずは表向きの訪問の理由のために書庫へと使用人に案内させる。オレがトリステイン王国に来てからこの書庫も大きく様変わりした。

当初は領地経営の執務に係る書籍が中心だったが、オレがこの本を借りて読むようになったので月に一度は商人から新しいものを購入するようになった。そのため魔法に関する書籍が増え、さらにミス・キャンデが来た事でその蔵書が倍に増えた。

今では部屋一面が書籍で埋め尽くされ、昔の本を置いておく部屋から“書庫”と呼ぶにふさわしい部屋へと変貌したのだ。

だからお目当ての書籍を探すのにも一苦労するようになった。

オレが入り浸っていた時は、オレがジャンル別に整理していたので全てを把握していたのだが、今はミス・キャンデが管理している。

性格はきつちりしているので整頓はオレの時以上にされているのだが、昔のように勝手知ったると言つわけにはいけなくなった。

少し時間がかかったが“インキン”の言っていたモノを見つけた。

それはマジックアイテムに関する書籍で、ガリアの王立魔法アカデミーのメイジが著者の非常に貴重なものなのだそうだ。貴重かどうかは知らんが、トリステインのメイジが書いたものよりは期待できそうだとは思った。

本当にトリステインのメイジの『オレつえ〜』『オレすげ〜』勘違いは酷いからな。

オレはドラゴンボルのミスター・サンといい勝負だと思っている。そのぐらいヒドい。

くだらない事を考えるのは帰ってからにしよう。

オレは一つ目の用件はこれで終わったので、早くもう一つも終わらせて帰ろうと勢いよく書庫を出る。すると書庫から出たところでミス・キャンデに出くわした。

ヤベツ。調子に乗って“扉にキックしてブチ開ける”なんて少年誌的な行為に及んだ自分を恥じた。

と、とりあえずここは取り繕おう、オレ貴族だし（意味不明）。

「すみません。ミス・キャンデ。驚かせてしまいましたか？」

ぶつかりはしなかったはずだがと思いつながら、纏め上げた髪を直していたセシル・ド・キャンデその人に謝罪する。

いいかげん三角ザマ眼鏡をかけてくれないだろうか。

力強く宣言するが、眼鏡属性は貴重なのだよ！

「いいえ、大丈夫ですよ。それよりしばらくぶりですね、ミスタ・アントワープ」

彼女も一瞬戸惑ったような表情をしたが、すぐに初めて出会ったときのように微笑んでくれる。

あの時のように目線を合わせるためにしゃがむ事はしなかったが、それがいつそう時の流れを感じさせた。しかし、そのやさしい笑顔はあの時ままの変わらないものだ。

はぐう！

思わずワケワカメな声を上げてしまいそうになるくらい残念だ。

三角眼鏡があればギャップ萌えが発生するものを！

口惜しい、自分の力のなさにガツカリだよ！アルベール。

「はい、ご無沙汰しておりました。ミス・キャンデの引き込まれるような微笑みほほえみはお変わりありませんね」

「あなたはすっかり大きくなってしまって、見違えたわ」

さすが大人の女。ガキのお世辞などさっくりスルーしたか。だが悪い気はしないぜ。

「身の丈は成長しましたが、それだけです。魔法などは、なかなか

自分が思うようにはいきません」

「そうなのですか……。でしたら、私で力になれる事があれば話を聞きましょう。あなたの師匠として捨て置くわけにはいきませんかね」

「よろしいので?」

オレは書庫の先にあるル・マレ伯爵の執務室に視線を送り、そして彼女を窺う。

ここにいると言う事は、てっきり報告などの要件でこの先のル・マレ伯爵の執務室に向かうものだと思っていたのだ。あのタラコ唇“アナゴさん”のもとに。

「大丈夫ですよ。今日は時間もありませんから。では庭のテラスにでも行きましょうか」

立ち話もなんだと言うことで、すこし肌寒い季節になってきているがテラスで話すことになった。

彼女はオレがノエリア様やル・マレ家の者に会うのを避けている事を察してくれたようだ。まあ、結局は礼儀の関係で、ル・マレ伯爵かノエリア様には挨拶に行かなきゃ行けないんだけどね。

今はそのやさしさに甘えて、あなたのぷりぷりしたケツを眺めさせていただきます。合掌。

「それで魔法のこと悩んでいるのはどう言ったことなのですか？」

ガーデンテラスに着くと早速、魔法の相談が始まった。

オレは水・土・風の3系統のドットスペルは大体使えるが、火の系統に苦戦していることを話す。もちろん真面目モード全開でだ。オレだってケツを見るのには“時と場合”を考えている！

「では実際に見てみたほうが早いかもしれませんがね。“発火”を唱えてみて下さい」

ミス・キャンデが実際に使ってみせてくれと言っているので、杖を抜き“発火”を唱える。

「わかりました。ではいきます」

久しぶりにミス・キャンデの前で魔法を見せると言うことで少し緊張する。脳内で補完された彼女の三角ザマズ眼鏡がキラリッと光る。

「ウル・カーノ、
“^{イケニション}発火”！」

オレが池に向かって杖を振ると、小さな火が杖の先から燃え上がった。小さいとは言え何とか成功する。よしっ！

「成功しましたね。では次は“凝縮”を唱えてみてくれますか？」

「えっ？“凝縮”ですか？……わかりました」

次に“凝縮”を使ってみせてくれと言う。そのミス・キャンデの言葉に面食らったが、言われたとおりにスペルを唱える。オレは女

性には従順であるのだ。

もちろん“ビッチ”は例外だけだな。

「イル・ウォーター

、
「コンデンセーション凝縮”！」

これはもちろん成功する。

得意な水の系統であり、系統魔法を学び始めたときにイヤというほど唱えたスペルだ。

今ではそのスペルによって生み出される水の量は、目の前の池の水の量をも遥に超えるほどである。そのため今回は随分と魔力を加減をして水の量を減らす。

「ミスタ・アントワープ。本当にすばらしいわ！」

ミス・キャンデがすばやい詠唱とその変換率に驚き、オレを褒める。水の系統のスペルを唱えた時は、魔力のロスがほとんど見られなかったと我が事のように喜んでくれる。

ここまで手放しに褒めてくれると、弟子冥利に尽きるというほどだった。

今は火の系統にこだわっているようだが、それはやはり不得意な系統ということが関係しているだけで、それ以外に問題な点は見当たらないと言う事だった。

「あなたの今の実力ならライセンスペルもたやすい事でしょう」

「本当ですか？ミス・キャンデ」

おお！思っても見なかった良い知らせだ。ラインメイジになれるとあの超銀河系女教師セシルにお墨付きを頂けるとは！

「ええ。せつかく今日は時間もありませんから、ひさしぶりに私の授業を受けていきなさい」

「ミス・キャンデさえよろしければ、わたしに断る理由はありません。是非お願いします」

こうして水のラインスペルを中心にミス・キャンデの授業が始まった。

ラインスペルの中でも同系統を掛け合わせる比較的簡単なスペルから始まり、オレがすでに習得している土・風の系統と水の系統を掛け合わせる難しいスペルもいくつか学ぶ。

3時間ほどであったが本当に懐かしく、非常に充実した時間だった。

途中でオレたちに気づいたマシユーがやってきてそれに加わる。

目聡いやツめ！

マシユーは土のドットメイジになり、そのドットスペルを学んでいる段階であったので、オレがラインスペルを習っていると知ると酷く悔しがったがスルーした。

時間がもつたないからな、マシユーごときに関わっていると。

……しかしうるさいな、コイツ。
仕方ない、か。

オレももう8歳だ。ここは大人の対応ってヤツを見せてやるか。

ホレツ！

ハナクソでも飛ばしてやろう。

1000万パワー（前書き）

前話の続きです。

1000万パワー

こうして久しぶりに受けたミス・キャンデの貴重な魔法講義は、あつという間に時間が過ぎた。

集中力を高め、一言も聞き逃すまいと傾聴し、理解できない部分は積極的に質問する。そして途中から加わった邪魔なマシューには、スキを見てはハナクソを飛ばす。それはもう全力全開でやったさ。ホンキになりすぎて、鼻血が出そうなほどにね。

そんな有意義な時間も終わりを告げ、ミス・キャンデに感謝の言葉を告げると。

「ふふ。私もあなたに魔法を教えるのは楽しいのですから、それほど感謝しなくてもよろしいですよ」

なんて微笑み付きの返しをくれる。

初めて会ったときから思っていたことだが、アンタ実にいい女だ。

彼女が嫁に行かないのは、オレの中で世界の七不思議になるぐらいのことだ。早く幸せになってもらいたいものだ。年齢的にどうやってもオレが嫁に貰ってやるのは無理だからな。

いくらフェミニストのオレでも、アラサーと一ケタ年齢じゃさすがにね。

ひとつオレからアドバイス出来ることがあるとすれば

『三角眼鏡をかけなさい。さすれば道は開かれん』ってことぐらいか。

講義の後、「そういえば会うのは1年半以上ぶりですね」という話になる。

まあ、3ヶ月に1度しか来てないのだから当然の話なんだが。

ミス・キャンデはマシユアの魔法の教師であると同時に、ル・マレ家の家臣でもある。家臣としての仕事があり、本邸にいないこともしばしばある。マティアスについて首都のトリスタニアに1ヶ月以上逗留することもあるくらいだ。

だからオレと彼女は倦怠期の夫婦並に交わることがなかった。

この長い間にマシユアも系統魔法を使えるようになり、「師匠としてはうれしいのですが」なんて話しを聞いていると思いついたことがあった。

土の系統魔法である“アルケミー錬金”についてだ。

このマシユアも得意とする土の系統魔法の初等基本スペルは、現象としてはありえないほど驚異の魔法だ。

任意の物質に“錬金”のスペルを唱えると、術者のイメージで指定した物質に変換できるというもの。まさにオレの知識にもある中世の錬金術だ。

たしか錬金術は科学の前身として発達し、化学・薬学・医学などさまざまな学問を複合した魔術的な意味合いも含んだ学問の産物だったはずだ。

しかしこの世界の“錬金”はそんな怪しい要素はまったくなく、ただスペルを唱えれば金・銀・宝石が出来ると言っ単純でチートじみているものだった。

前回ミス・キャンデの教えを受けた時と言っても1年半以上前だが、ミス・キャンデが錬金のスペルを実演してくれた。オレは彼女の作った青銅を持ち帰って参考にしていたところ、5日ほどで元の石ころに戻ってしまったのだ。

その事を彼女に直接聞く機会がなかなか無かったので、不本意だったがダメ教師のソフィーナに“錬金”を使ってもらい、その後同じ様にもとの石ころに戻るのか検証をした。

結果はソフィーナが石ころから生み出した青銅は、9日でミス・キャンデの青銅と同じ様にもとの石ころに戻った。

そこで“錬金”は物質を変換しているのではなく、擬態させているのではないかと仮説を立てた。

それからオレも1年をかけて土の系統魔法を学び、ドットスペルの基本的な一般スペルを習得する。

アルケミー（錬金）、クリエイト（創作）、コンサベイション（固定化）、アース・ハンド（土腕）、ストーン・バレット（土弾）、サンド・ウォール（砂壁）など土の系統魔法は守勢に使用する魔法

が多い。それに“錬金”のほかにもクリエイトやコンサベイションなど非常に興味深いスペルもある。

それは気まずささえ克服できれば、土のスクエアメイジである“インキン”マティアスに教えを乞いたいと思わせるほどのものだ。

しかし、オレには無駄にS A N値を使う事は出来ない事情がある。それはイラつき製造マシンのソフィーナに魔法を学んでいるという残念な現実だ。

さいわいオレは水の系統を得意とするメイジである。土の系統はラインスペルやトライアングルスペルの時に、融合・変化させられればいいだけだ。

極める必要は無い。

という事で、一般的なスペルを習得した後は“錬金”のスペルを使い倒し、土の系統の習熟を図った。

来る日も来る日も水の系統の訓練の時のように、繰り返しスペルを唱える“錬金”地獄である。出来上がった金属の質・量・種類・耐久持続時間などを記録し、自身の成長具合と“錬金”の検証も同時に行う。

この作業は魔法を学び始めてもっとも魔法に踏み込んだ時間となった。ちよつとした研究のようなものだ。

それでわかった事はいろいろあった。

これを始めるにあたり、一応は簡単に“錬金”によって起こる現

象から考察した仮説を立てていた。

- 1．“錬金”は金属を生み出す魔法ではない。
- 2．つまり対象物を元素変換する現象ではない。
- 3．魔力を擬似陽子、擬似中性子として込める作業である。
- 4．結果、対象物は一時的に欲した金属へ擬態する。

以上である。

この仮定を踏まえて実験をし、検証を試みた。

まずわかった事は、やはり“錬金”は魔法をかけた素体を魔力で変換して、異なる物質を生み出す魔法ではないと言う事だ。

オレが生成し、記録してわかった事は、“錬金”によって生み出された金属は、術者の実力・魔力量によって長短するが、時間が経過するとともに物質に戻る。

同じ青銅を“錬金”すれば、ドットメイジであるオレが作ったものより、ラインメイジであるミス・キャンデが作ったものが長持ちする。また、ラインメイジのミスキャンデが作ったものより、トリアングルメイジのソフィーナが作ったものが長持ちした。

優秀なメイジの方が魔法の効果が持続すると言っつのは、同じ土の系統魔法である“固定化”と同様の理屈のようだ。

このことから“錬金”は金属を作るのではなく、魔力によって擬似的な金属として存在させる魔法であると言える。

“錬金”は擬態の魔法なのだ。

まあ少し考えればわかることかもしれない。
もつとも初歩の魔法と言いつことから、考えてもそうだ。

元素変換とはつまり核融合・核分裂のようなものだ。
ある元素の同位体を作るのにも莫大なエネルギーが必要なのに、
元素変換ともなるとそれだけではすまない。いったいどんだけのエ
ネルギーがいるんだ？と言いつ話である。

さらには技術的なものも考えなければならぬだろうから、知識
も必要だ。

昔新聞で見たが、筑波だか神戸だか場所は定かではないが、大金
を投じて建設された数キロにも及ぶ加速器を使った実験でやっとこ
さ元素変換が出来るとあった。核分裂の場合は原子炉だ。

原子炉？加速器？そんなものの代用が1人のメイジで可能な方が
おかしい。魔法とは言っても“なんでもあり”って訳じゃない。

何百万世帯分の電気量のエネルギーを個人の魔法力で賄えるはず
ねーじゃん！

何？あんたバカなの？！

昔の自分に言ってやった。

そうなのだ。あくまで魔法は“世界への干渉”である、
改変じゃないんだ。

そのために必要なものである魔力が無ければ、魔法と言えど出来

る事は少ないのだ。

やはり魔力を擬似陽子・擬似中性子と存在させるといふ説が濃厚なのかもしれない。

検証を進めて次にわかった事は、“錬金”は術者の実力・魔力量によつて、生み出す事の出来る種類と量が異なるということだ。

ゲルマニアのスクエアメイジであるアマデウス・フォン・ホーエンシュタウヘン著者の書籍『“錬金”大全 ー我が人生を“錬金”に捧ぐー』によるところがある。

ドットメイジは鉄や青銅、ラインメイジは真鍮（亜鉛を含む銅）や洋銀（亜鉛と少量のニッケルを含む銅）、トライアングルメイジは白銅（ニッケルを含む銅）や宝石、スクエアメイジは銀や宝石と言つた具合に、メイジの実力で生み出すことが出来る種類が異なる。

さらには“錬金”という魔法なのに、金を生み出す事はスクエアメイジでも難しいとの事だ。

この記述から元素の周期表なんてものを、前世の知識から引つ張り出して考えてみた。

詳しくは憶えていないが元素番号で比較してみる。

3周目までぐらいなら高校生が憶えているのは常識だからな。童貞だったとは言え、そんなことも憶えていない“平均以下の知能しか持っていないティーン”ではないのだよ！オレは！

ふっ、ザクとは違うのだよ！ザクとは！

鉄は26、銅は29、銀は銅の1周期下で47、金は銅の2周期下で18足して65だったかな？いや金の次が水銀で、たしか……80だったはずだから、違うか。

だとすると金は79？途中でいくつか番号が飛ぶのは記憶にあるがこれが正しいかは微妙なところだ。

まあ、この数字であると仮定して考えてみよう。

- ・ドットメイジが29番まで生成可能。(鉄26、銅29)
- ・ラインメイジは30番まで生成可能。(ニッケル28、銅29、亜鉛30)
- ・トライアングルメイジは29番まで生成可能。(ニッケル28、銅29)
- ・スクエアメイジは47番まで生成可能。(銀47、宝石は不明)

あれっ？

おかしな事になっている、そう気付く。

元素番号は関係が無いのか？もしくは要因の1つに過ぎないという程度で、他の関係要因があると言ふことなのかもしれない。

しかし魔法の習い始めで“錬金”するのが26番の鉄で、成長したら29番の銅、強化概念を付加できるスクエアレベルになると一気に47番の銀、そしてその中でも限られた者が79番の金というこの流れを見るとやはり間違いとは言い切れない。

しばらくこれに躓いてしまいが、困った時は基本に立ち返ると言うミス・キャンデの言葉を思い出して進展があった。

魔法の基本。それは魔法とは“魔力で世界に干渉すること”である。

ここで閃いたのが、埋蔵量だ。

この世界ハルゲニアは魔法の存在を除けば、遙か懐かしの母なる星“ジ・アース”こと地球に似ている。

だとするならば、元素というか金属の埋蔵量も近いのではないかと思ったのだ。

貨幣を見てもわかるとおり、金が最も高価な貨幣で次いで銀、もっとも安価な貨幣は銅だ。この程度の文化レベルならば中世ヨーロッパと同じで、貨幣はその稀少価値から用いられていたはず。

この知識が埋蔵量の考えを後押しした。

金は地球でも数千トン、銀は数万トン、銅の桁は億を超える。実に銅は金の数万倍ある。

このハルケギニアでも金属の埋蔵量が同じと仮定するならば、次のことが言えるのではないか？

・銅1リーブルを“錬金”する場合は、全埋蔵量に対して0.0000000000000000数%の変化、つまりそれだけ世界に干渉する。

・一方、金1リーブルを錬金する場合、全埋蔵量に対して0.000000数%の変化、これは銅の場合に比べて10万倍も世界に干渉力を及ぼす事になる。

・同じ量の金と銅を“錬金”使用とした場合、世界に干渉する程度が10万倍、言い換えれば10万倍の魔力が必要となってくるのだ。

さらに銅を鉄に変え、鉄と金とで考えてみれば10000万倍いくんじゃね？

うほっ！1000万パワーだぜ！？

バッファーマンとタッグを組まねば！

ちよつと脱線したが、これはかなりいい線だろう！と確信めいたものがあつた。

例のアマデウス・フォン・ホーエンシュタウヘンの著書『錬金大全』我が人生を“錬金”に捧ぐ』の記述と比較してみる。

・亜鉛は銅の半分程度の埋蔵量だったはずから、必要な魔力は銅の

約2倍。

・ニッケルは亜鉛の1/3程度の埋蔵量だったはずだから、必要な魔力は銅の約6倍。

・銀は金の10倍ほどある。なら必要な魔力は銅の1万倍。

・金は銅の10万倍。

書籍にあった金属である銅、真鍮、洋銀、白銅、銀、金に必要な魔力量を、これらから概算して順に小さい方から並べてみる。

銅<真鍮<洋銀<白銅<……………<銀<金

まあ！なんとということでしょう！匠の記述と一致するではありませんか。

さすがは匠だぜ！ビフォアもアフターもどっちでもいいって？いやオレは断然、同伴よりはアフター派だ！（残念な事に未成年で死んだのでキャバクラには行った事はないが）

この事実は広く公表しなければなるまい！同じ意見を持つ同士を募るためにも。

同伴はいいように金をむしり取られるだけだが、アフターは何かが起こるかもしれんのだという可能性を秘めている。

「あえて、その夢をみる！」と声を大にして言うんだ。

青年よ。大志を抱けと！

つまりどういふことかと言えば、これらの事を踏まえれば“錬金”の魔法は、変換でも置換でも生成でもなく、ただの“擬態”の魔法なのだという推察がさらに濃厚になったという事だ。

そんなことを1年間していたとミス・キャンデに伝え、自分の考察が正しいかを聞いてみた。

ミス・キャンデはその結果ならばトリスティン王立魔法アカデミーでも言われているものだが、途中の検証と考察は面白いと真剣な顔で答えてくれた。

原子量という概念の真偽や金属の埋蔵量の確認などが困難ではあるが、参考にした書籍との比較や“錬金”の魔法原理などをまとめれば、簡単な論文が書けるなんて高評価だった。

ミス・キャンデに褒められるのは素直にうれしいが、その評価には「ハルケギニアはとんだだけレベル低いんだ!」とつつこむのも忘れない。

厨房の夏休み自由研究レベルですよ、これ。

そうそう。

この時感動したオレは、知識の習得には必要ないと思って読んでいなかった後書きに目を通すことにしたんだ。

一応この書籍のおかげで、かなりの達成感を味わうことが出来たからね。そのお礼と言うわけでもないけど、読んでみる気になったんだ。

そこにはこう書かれていた。

“私、アマデウス・フォン・ホーエンシュタウヘンが生まれてから61年たった。この時の流れの間には、ゲルマニアにとつていくつもの大きな出来事が起こっている。皇帝が数度代わり、近隣の国々をいくつか飲み込み、エルフとも一度争った。しかし私は47年、およそ半世紀もの間、錬金の研究に没頭し続けてきた為、それらの事をよくはしらない。だがわたしは唯一、誰よりも知っている優れた知識を得た。錬金の知識だ。ただ残念なことに研究の日々は、私に伴侶をもたらさしはしなかった。ゆえに伝える子がいない事が、私の心残りなのである。だから、この知識の一部ではあるが後世のメイジの為に残そう”と。

匠よ。

アンタもしや、……童貞か。

いや、もうアンタのことはこつ呼んでもいいだろう。

ゲルマニアの

偉大なる“童帝”と。

1000万パワー（後書き）

錬金チートはありえない設定です。

普通に考えて土の初歩スペルである錬金が、永遠に持続性のある効果があるとは思えませんのでした。

私には当たり前の結論でした。

理由としてはアニメでギーシュが青銅のゴーレムを出していたのを見てそう思いました。

ドットのギーシュが青銅で、トライアングルのフーケが作ったゴーレムはただの土。

フーケのゴーレムは、巨大化と再生力が付加されていたのでトライアングルスぺル並みの効果を持っていると納得です。

しかしドットのギーシュが、土のゴーレムよりも性能のよい青銅のゴーレムをどうして生み出せたか？

その理由は錬金が、初歩の造作もないスペルであるからだと考えました。

エッセンス程度の魔法技術でゴーレムを青銅にすることが出来ることから、ドットメイジであるギーシュにもそれが可能だったという訳です。

もう一つの理由はギーシュのゴーレムは破壊された後、土に戻っていました。

この事から魔法が解ける、もしくは魔力が霧散すると魔法によって錬金されたものは元に戻ることがわかります。

これは本文にも書きましたが、同じ土の系統魔法である固定化は時間^間が経過すると効果をなくす事からも、それが証明されているような気がします。

まあ、二次創作の独自解釈なので、どういつふうに解釈してもアリなのだと思います。

オレの妹がこんなに可愛すぎ……るのですよ

春頃に一冊の本を読んだ。

そのアルビオンの貴族ベンジャミン・オブ・プレストンの著書、『貴族の品格』という書籍である。

それに影響されたオレは今、何かしら始めようかなと思っている。

そこには、“貴族たる者、趣味のひとつやふたつ嗜むものだ。心に余裕や潤いが無い者は、優雅さに欠ける。優雅でない者は気品を失い、ただのメイジに成り下がるのだ。この平民に落ちぶれるがごとき品位の無さは、高貴なる始祖ブリミルの末裔としていかながなものか？ならばどうすればよいのかという疑問をもつ者もいるだろう。簡単なことだ。絵画、彫刻、音楽など芸術に関心を向けるのも良いだろう。室内を出て行くものならば、園芸や散策などはどうだろうか？また魔法を使って、狩猟なんていうものを趣味にする強者じやものなどもいる”なんて書いてあったからさ。

刺激を受けちゃった訳よ。

お忘れの人がいるかもしれんから、ここらで今一度言っておくと、オレも貴族なんです。

だから“冷やし中華始めました”って感じで“アルベール趣味始めました”と言いたい。

まあ、ぶつちやけて言えばなんとなくだよ、なんとなく。

そんな漠然とした事を考えていると、ある日行動を起こす時がやって来た。

使い古された言い回しをするなら、物事は唐突に始まりが訪れるのですと言ったところか。

その日は“爺”に「狩りに言ってくるから。じゃ!」って、軽い感じで屋敷を出ようとしたらスゲー勢いで止められた。

“爺”のアブ脳が復活し、「危のうございますから」を連発してオレの前に立ちふさがるんだ。

その騒ぎを聞きつけて他の使用人も集まり、ウゼーウゼーと思っ
ていたらマティアスが現れた。

出来るメイドである“豊満”のアニーが、偶然屋敷を訪れていた
こいつに告げ口しやがったのだ。

たしかにコイツが出てくると、困った時のオラオラ（ジョー タロ
I・Ver）が出しにくいからな。止める立場の選択肢としては最
上のモノだが……。

アニー、出来すぎるってのも考えモノぞ!

アルベール哀しい!

でも、偶然ってのも言い方がおかしいかもしれないな。

この時は、こいつが来てたから屋敷から出ようと思ったんだもん。
その口実にオレは狩猟を思いついたってのが正確な流れだ。

このことオレの前にやってきたマティアスに、「テメー、ヒトの

屋敷で当たり前のように存在するんじゃないか」と言ってみてもいいが、今では一応義父的立ち位置にいるこの“インキン”野郎に楯突くのは愚策だ。

何かとオレの母上こと“ビッチ”と妹のエリザベートに会いに来るこの男は、屋敷の使用人たちの信頼も厚い。屋敷で働く平民の使用人たちにしてみれば、なんの収入も無いオレたち親子に明確な後ろ盾が出来たことは、歓迎すべき事ではない。

甲斐性のある男とちびっ子当主様では、前者に軍配があがるのは当然なのかもしれない。

「マティアス殿、どうされたのですか？」

妹が生まれてからも5年になる。

その間には“ビッチ”経由で“インキン”の事を「お義父様」と呼ぶように何度となく言ってきたりしてるが、オレにそんな気はサラサラない。

だから初めて会ったときからの「マティアス殿」と言う呼び方をするのだが、最近こう呼ぶと“インキン”が少し寂しそうな顔をする。

キモッ！

そんな歩み寄りとかいらなから！と毎度ツッコミを心の中に入れるが、まったく“インキン”には伝わらない。当然んだけどね。

「どうかしたのはアルベール、君の事だよ。突然、狩りに行くと言
い出したそうじゃないか？」

「はい。そうですが……それが何か？」

「周りを見ればわからない君じゃないだろう？どうして急にそんな
事を言い出したんだい？」

お前がウチにやって来たからだよ！

察しろよ。

もしかして超鈍感スキルなんて発動してんじゃねえだろうな。ひ
とこと言っておく。

そのスキルは、ハーレム系ライトノベルの主人公しか使っちゃダ
メなんだぞ！

知っているかもしれないが、大事な事を言う。よく聞いとけよ。
あれはそうしないと、タイプの違うヒロインを登場させて幅広い
萌えで読者を獲得できないし、場合によっては物語が成立しないか
ら必須みたいになっているが、みんな心の中じゃ「またあゝ？」っ
て思ってる。

だけどスルーしてるんだ。

スルー。

昔の人は言いました、見て見ぬ振りと。

そんなことがマナーであるかのように振舞えるラノベ読者は、み
んな器がデカいんだ。ストーリーが面白ければ許す度量があるんだ。
たとえば作者や編集者の思惑どなりに、多種のヒロインの中に自分

の好みが出て、それきつかけでその作品のファンになったとしても！踊らされているとわかっていても！許す度量があるんだよ！！

それに比べてお前はどうか？

妾の機嫌を取ろうとその妾に産ませた子に自ら服を選んで買ってきたり、妾の連れ子であるオレに気に入られようとトリスタニアに行けば本を買ってきたり、妾のことで後ろめたさがあるのか最近じゃル・マレ伯爵のいいなりじゃないか！

自分の人間の小ささに恥じて、主人公スキルを使うのは自重しろってんだ。お前の事は嫌いじゃないが、とても主人公属性を持っているように見えん！だって“インキン”メインなんてありえないでしょ？ふつうさ。

だから断じて、否だ！

だがあえて今、こう聞こう。

「わたしの考えを言う前にマティアス殿の考えをお聞きしたい」と。

もし自覚していないなら、あんたピエロになっちまうよ。

袖すり合うも多少の縁ぐらいにしか思っではないが、かわいい妹・エリザベートの父親だ。妹の為に、場合によっては“修正”してやるう！肉体言語を使っても良いぐらいにホンキでな。

もちろんその時は“ビッチ”もグーで殴る。これ決定事項です。

こんな流れで、しかたなく“インキン”の話聞くことにしたが、やはり狩りには否定的だった。

オレもなんとか否定的な流れを断ち切ろうと「魔法の鍛錬にもなる」とか、「このル・マレ伯爵領のことをよく知るいい機会である」とか聞こえのいい事を言っただけ丸め込もうとするが、なかなかうまく行かない。

婿養子の“マスオさん”のくせにナマイキな！

いや“マスオさん”だから自分の意見が言える人間、つまりオレに強気で押しつけてきているのか。強者へつらい、弱者を叩くとは！
ますます主人公属性ゼロだな。

がっかりだよ、アンタにはさあ。

そんながっかりマティアスの主張は「テレーズ」“ビッチ”ことオレの母上」に心配をかけるな」、「獣はもちろん、もしかしたら亜人と遭遇する可能性もあるから危険だ」という2点。

あとは……

「坊やだからさ」

的な態度が、また癪にさわる。

トリステインのエリートである魔法衛士隊にいたことなんかもち出し、上目線がとにかく気に入らない。そして事あるごとに「心配なんだよ、アルベール」と来たもんだ。

おやおや、父親面ですか？

いい加減ダルくなってきたので話を早く終わらせたい。

とりあえず「坊やだからさ」発言は聞かなかったことにしてやるう。

それについて話し始めると長くなるからな。だから「危険ならば護衛を連れて行けばいい」「それなら危険も減り、母も心配はしないだろう」なんて言ってやった。

さらに母には「狩猟」ではなく「散策」に行く」と言うことにすればいい。「護衛が付いて危険が減れば、「散策」と変わらないだろう」という論法だ。

マティアスはその後もゴネにゴネたが、なんとか話を終わらせた。大の大人がゴネても可愛くもなんともないんだよ、「インキン」野郎。

“インキン”面を見ない為に言い出したことが、鬱タイムへの突入フラグだったなんて……。

オレもまだまだだな。

その日、結局狩りには行けず、その後妹のエリザベートの相手をするハメになった。

「兄様^{めにさま}。エリーはもうすぐ魔法を学ぶのですよ」

うっん、愛らしいのう。

会うなりハグをしてきた我が妹を、ギュッと抱きしめ頼ずりする。

エリザベートはアントワープ家唯一の癒しだ。今までSAN値をガリガリ削ってくる鬱キャラしかいなかったからな。

だから今のオレにとってエリーは精神を安定させる為に必要で、日々の生活において本当に貴重な存在になった。しかも、かわういしね！

“ビッチ”も顔だけは整っているからな。将来は美人さんになる事は間違いないだろう。スタイルも似てしまうと、今から将来のことが心配になる。マティアスの“インキン”野郎みたいなのが寄って来ちまう。

こんな可愛い妹なのだから、オレがエリーと愛称をつけてしまうのも当然だろう。今から将来どこの馬の骨が、「いとこのエリー」なんて囁きやがるのかと想像するだけで腹が立つ。

妹萌えの輩は見つけ次第、デストロイだ！

サーチ・アンド・デストロイ！

うん、いい言葉だ。今日からオレの座右の銘にしよう。

「エリーもそんな年になっただか」

魔法を学ぶ年か……。ついこの間までオシメを代えてあげていたと思っていたが、もうこんなに大きくなりやがったのか。グスツ。どんどん成長していく様は、嬉しいやら、寂しいやら複雑なものだな。

「はい。昨日母上に言われたのですよ」

「じゃあ、エリーをレディとして扱わないといけないね」

「そうなのです。エリーは立派なレディなのです」

腰に手をあてて、エヘンと胸を張るエリーはカワイすぎる！

はい！頂きました。脳内メモリーに保存です。消えてしまわないように、ちゃんと保護もしとかないとね。

しかしマジでヤベエな、この可愛すぎる生き物は。

早く魔法を使っているところも見てえ！

ん？

ここでオレの脳裏にちょっとした疑問が浮かぶ。

「そう言えばエリーは誰に魔法を習うんだい？」

「????？」

ん？と小首をかしげるエリー。これも頂いちゃいます。保存、保存。

「母上は誰に習うか言ってなかったのかい？」

「エリーは聞いていないのです」

今までの楽しい雰囲気が一転したように感じる。
嫌な予感がするのだ。

口に出してもいいもののかとしばらく躊躇ったが、これはエリ

「の将来のことだ。避けて通る事は出来まい。自身の闇の記憶を思い出し、あの悪魔の名前を言ってみる。」

「……まさかソフィーナじゃないだろうな」

「兄様はソフィーナに習ったのですか？」

今さら言うが、呼び方が「お兄様」じゃパンチが弱かったので、去年から「兄様」と呼ばせている。ちょっとしくじったかもしれない。

特に話が怪しい雲行きになっている今、そう感じるの勘違いか？

「まあ、そうと言えばそうだが。違うと言えば違うな」

いくら目に入れても痛くないと思うほどに可愛がっているエリーとは言葉、その問いには正直答えたくはなかった。今、オレの頭が、口が、体が肯定する事を全力で拒否しているのが、それを証明している。

「じゃあエリーもソフィーナに魔」

「待て！待つんだエリー！それ以上は言うてはいけない」

うお！あぶねえ。それを言っちゃあお終いだぜ。

「????何をです？兄様。ただエリーもソフィ」

「のおーーーーーん！」

ヤメレエ〜！本当に言っちゃダメなんだって。

「エ、エリーも」

「ばっかも〜ん!」

エリーの将来の為なんだ、これは。

そのためならば、今ここでちゃんと怒ってあげるのが愛なのだ。

「エ」

「しゃああああ!!!」

「ぎゃ!」

思わず威嚇してしまった……。

しかしその程度では言わせません、言わせはせんよ!

高ぶってしまったって正直スマンな、エリー。

でも可愛いお前の為なんだ。わかってくれ。

この兄の気持ちは大人になれば理解してくれるはずだ。

今はその驚いた可愛い顔を、愛でさせてくれないか? 当然、脳内メモリーに保存するためにだ!

おっと、趣味に入り込み過ぎちまったかな。先に変な事を“ビッチ”や“インキン”に言わないように、釘を刺しておかないとな。

「エリー。魔法を誰に習うかはわたしが母上と相談しておこう。だからその話はもうしてはいけないよ。いいね?」

「は、はい。兄様」

返事をする可愛すぎる妹の後ろを、尻尾を立てた黒猫が通り過ぎ
て行く。

何ッ！それは不運フラグかあ！？

森のクマさん

「エティアンは何処に？」

さて。

突然ですがオレ、迷子です。

最近、始めた趣味の“散策”と言う名の“狩^{かり}獵”に訪れた森の中、オレはひとりポツンと佇んでいた。

どうして“散策”なんてものを始めたかって？そりゃあ“散策”ぐらいするさ、だって貴族だもの。BY相みつを。

っていうか、前の話を読んでね。書いてあるから。

先日の『散策に行こうよ！』イベントの後、“ビッチ”にも当主の自覚がどうのこうのと言われたが、それは当然聞き流した。

オメエが言うか、そのセリフを！

逆に“ビッチ”には「公爵家の人間だっという自覚を持ってよ」「って言ってやりたいぐらいだからな。

フラフラとケツ振りすぎなんだよ、このアバズレが。

まあ“ビッチ”の意見なんてあってないようなものだ。

マテイアスが一旦この話をル・マレ家に持ち帰ったという事は、アントワープ家の後見的な立場である、ル・マレ家の意向に沿わなければならぬという事でもあるしな。

伯爵様の言うとおりってなものだ。

オレは正直どっちでもよかったので、それからも大して気にしないで過ごしていた。

1週間もしないうちにル・マレ家から知らせが来て、差出人であるマテイアスからの手紙の内容は「自分で決めた事は強い意思でやり通す君に、やめると言っても無理な話だろう。」

だから条件付で“狩猟”の許可を出そうと思う「的な事が書いてあった。

1．“狩猟”ではなく“散策”という名目であること

2．“散策”必ず護衛と共に行くこと

3．護衛はル・マレ家から付けること（普段は屋敷の警備を担当する）

4．“散策”は今の時点では、以下の場所に限る（舟は使わない事）

屋敷の西の森、北西にある丘周辺、本邸との間でマル又川を超えない地域、サニエの村近隣

内容を要約すればこんな感じだ。

貴族はどうして回りくどい説明しか出来ないんだろうと常々思う。バカなの？

こうして後日、ル・マレ家から派遣される護衛が来ることになった。

手紙を読み終わるのを待っていた使用人に、了解の旨をマティアスに伝えてくれと言うと、旦那様からアルベル様にお伝えするよう言付かっていると言われた。

「決して一人で“散策”に行くような事はしないで待つように」だそう。そんなことしねえよ、この“インキン”野郎！

しっけえ！オレはガキかつーの！

しっかし思いつきの発言から、いろいろ面倒くさいことになったもんだな。

大体マティアスこと“インキン”野郎がウチの屋敷に来なければ、それほど屋敷から出る必要も感じないんだよ、オレは。

ル・マレ家の書籍があればある程度は知識は得られるし、魔法の訓練だつて庭でやればいいだけのことだ。

それを好奇心が旺盛だとか、向上心に溢れているとか勝手に思い込んで、必要以上に干渉してこようとするのはマジうざいんだよな。そもそもオレが“散策”に興味を持っていると言う前提からして勘違いなのに。

そうして護衛が来るのを待っている間は、妹のエリザベートに魔法の事を教えてやる事にした。

やはり母の“ビッチ”はソフィーナに魔法を教えさせるつもりだったようで、それを聞いた俺は有無を言わず阻止した。

マジで取り返しのつかないことになる寸前だったのには、寒気が走ったものだ。

すぐにオレはル・マレ家を訪れ、トリスタニアに出発寸前のマテイアスにエリザベートの事を相談した。どうにかセシル・デ・キャンデに教われないかと。

それはもう必死にね。

ミス・キャンデも数日後にトリスタニアに行き長期滞在をする予定だったが、細かく日程を調整することで月に2、3度ではあるがミス・キャンデに時間を作ってもらうことに成功した。

マテイアスに頭を下げるなんて屈辱だが、ここは可愛いエリーの為、オレのプライドなんて安いものだ。

ミス・キャンデがいない時はオレが面倒見るのがいいだろう。
ダメ教師ソフィーナには絶対可愛い妹を任せてはおけん。

とりあえずは杖の契約か。

オレの時は1週間もかからなかったが、エリーはどうだろう？

オレの父上であるレオポルトはトライアングル、エリーの父であるマテイアスの“インキン”はスクエアだからオレよりは才能があるはず。

3日とかで契約準備が終わって次々と魔法を覚えていっっちゃうかも。

あの有名なガリアのオルレアン公が持つ、最年少スクエアメイジの記録を塗り替えてしまいかもしれない。

さすが我が妹、これほど可愛いのも納得だぜ！

1ヶ月ぐらいすると護衛の男がやって来た。

名をエティアンと言った。

この話を聞きつけたル・マレ伯爵が連れて来た平民の傭兵という話だった。

どうやらマティアスが話す前に伝わっていたらしい。うちの使用人の中に伯爵と繋がっているやつがいるかもしれないな。うん、これは心に留めておこう。

エティアンは魔法が使えない剣を振るうガチムキの筋肉マンだが、野盗のように粗野な感じは無い壮年の男だ。

だが騎士と言うほど洗練されてもいない感じが、傭兵なのだと納得させられた。

エティアンは基本あまり話はしない。

“散策”を始めた当初はしゃべれないのかと思っていたほど無口だった。

まっ、どうでもいいんだけどね。

“散策”では、週に2度ほど屋敷の近くの森や丘に出向き、護衛の者と共に鳥や獣を追う。

基本、護衛のエティアンと共に十分に気をつけながら、ディテクトマジックで動物を探しつつ進む。

キジを見つければマジックアローで撃ち落とし、ウサギがいればアースハンドで捕まえる。

キツネが出るとエア・カッターやアクア・エッジでブツタ斬り、イノシシが現れるとウォーター・ウィップでシバキ倒す。

さすがに大型の熊や、動きの素早い狼なんか遭遇するとオレ1人では身の危険を感じるが、エティアンという盾がいるので実際に怪我を負った事はない。

獲物がいない時は、適当に魔法の訓練をしてストレス発散をする。

これがなかなか楽しい。

「やっぱオレ男の子なのね」と実感する。

だって、ホラ。オレまだ覚醒してないっつーか、アソコが目覚めてない年頃だからさ。メイドの豊満な母性を見ても、ノエリア様がエロい唇を舐めるのを見ても、アソコはおつきしないんだもん。

だからこういうヤンチャなことが好きなオレは、将来ちゃんと男になれるんだって自分に男を感じて、改めて思う訳よ。

生まれ変わって失われた人間の3大欲求のひとつが、近々復活するんだって予感をね。

イチャラブの野望の為にも早くその時が来て欲しいものだ。

“散策”は始め週1のつもりだったのが、1ヶ月も経つと週2になつて、月に10日ほどになり今に至る。

訪れる場所も半日で往復できる本邸と屋敷の間の地域から、往復で1日かかる北西の丘まで行くようになった。最近では一泊してサニエの村に行くのもいいかなと思うほどハマっている。

一昨年から始めたラインスペルの習得が順調で、そのスペルの試し撃ちの機会にもなっているこの“散策”は、趣味と実益を兼ねてるってやつだ。

“散策”でのラインスペルの試し撃ちを獲物にするとオーバーキルになるから、実際はあんまりしてないんだけどね。

だって潰れたウサギとか、穴の開きまくったキツネとかさあ、ただの肉片だよ？

結構慣れてきたけど、気分の良いものじゃないしね。

だから“散策”で使うラインスペルはもっぱら“アクア・スナイプ狙撃水”だ。

これは水と風のラインスペルで、風の力で水滴を高速で打ち出して狙撃するという魔法だ。

正式な魔法名は“シルフイー・ウォーター水矢”なんて言うユルい感じの名前だ。どっかのミネラルウォーターの商品名みたいだったので、オレが勝手に呼び方を変えた。

まあ、魔法が発動するスペルさえちゃんと唱えれば、魔法の呼び方なんてどうでもいいんだよ。

逆に同じ魔法の効果なのに、風のメイジと水のメイジが使うって
違いだけで、名前とスペルがちよっと違ったりするって具合に、結
構いい加減だつたりするんだ。

オリジナルスペルなんてものがありぐらいだから、スペルの使い
方さえ決められた法則に則っていれば、魔法は発動する。

話をラインスペルの“狙撃水”に戻そう。

ん?“水矢”じゃないのかつて?あくまで“狙撃水”だ、これは
ゆずれん!

このスペルはあまり使い勝手がよくない魔法なのだが、威力がそ
こそこのので獲物を必要以上に傷つけずに狩ることが出来る。

オレはそこが気に入ってる。

その威力は金属をぶち抜けはしないが、木なら決ることが出来る
し、獲物の骨を砕く事が出来るぐらいのちょうど良い程度だ。

今日もこの“狙撃水”で獲物をゲットだぜ!

と行きたかったところなのだが……。

やっと説明が終わったので、状況を教えよう。

このアルベール10才は“散策”の途中、護衛のエティアンとはぐれてひとりなのです。

うん。

孤独を噛みしめていてもラチがあかないので歩くか。

そして、

こんな日、森の中、クマさんに出会った

花ない森の中、クマさんに出会った

クマさんの言うことにゃ、「がああ！ぐうお！」意味不明

スタコラ、サッサッサのサ

スタコラ、サッサッサのサ

ああ！今クマから逃げてるから話しかけないで。きっとクマさんの意味不明な鳴き声は「お嬢さん、お逃げなさい」なんだからさ。

「おい！クマさん。オレはお嬢さんじゃないぞ！」なんて、今は突っ込むヒマもないんだ。

「くそっ！我が意のままに敵を撃ち抜け、マジックアロ

ー！」

不意を突かれたオレはコモンスペルの“アロー”を撃ち込んでやったが、このクマ公にはあまり効かなかった。

レベルアップしたオレの“アロー”は投擲ナイフ並みの威力があ

るはずなんだが……

はっ！貴様、ただのクマじゃないなっ！

なんてフザけながらもう一度“アロー”をかましてやるが、やはり効果あまりない。ちゃんと血が出てるのになあ。

というか、逆効果？

「とりあえずは、逃げる！イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ

、^{フライ}“飛行”！」

ふっ。我ながら迅速な判断だ。戦場では一瞬の躊躇いが死を招くからな。

アルベールはアローを使った　　クマは鼻息が荒くなった！

アルベールは逃げ出した　　失敗した！　　アルベールは

フライを唱えた　　クマはさらに鼻息が荒くなった！　　アル

ベールは木に登っている　　クマは木登りを始めた！

えっ？マジっすか！？クマって木に登んの？

うわっ、爪立て過ぎだから。

爪、鋭っ！

あれで抉られたら痛いんだろうなあ。

てかガシガシ登ってきやがる。

あっ、滑った。

ププッ、マジウケるんですけど！

オレはフライで飛び上がった木の上から状況を把握している。

冷静さを欠いては生き残れないからな。相手が動物でも油断はしないぜ。

さすがオレ！

それにしても……、クマ公！興奮し過ぎだよ、てめえ。

なんでかしらんが興奮してるな。

発情期か？

今夏だけ、違うだろ。

うーん、さっぱりわからん。

考えても無駄だから、コイツを今日の獲物にしよう。

ちよつとデカイが問題ないだろう。

つーか距離さえとつた今、メイジのオレ様に負ける要素はなくなつたのだ。

いいか？クマ公。

確かにテメエのスペックはオレを遥かに超えるものだろう。

「だが性能の違いが、戦力の決定的な差ではない事を、教えてやるぜ！」

ショータイムの始まりだ！まずは這いつくばらせてやる。

「行くぜ！クマ公。フォル・ダーナ・イル・ウォータル
ウォーター・フォール
“水滝”！」

水のドットスペルである“水滝”を唱える。まずはクマ公に一撃を加えて様子見だ。

でも、ただ振り落とすだけじゃねえ。

今日はいつもより多く水を出しています。

盛りに、盛ってやるぜ！

くっはっはっは！

クマ公のやつ、「がう」なんてベタなりアクションとりながら昏倒しやがった。なかなかいいヤラレっぷりだな、見直したぜ！

まるで曙のようだ。

だが手は緩めんぞ。

さっきの盛りに盛った“水滝”は布石なのだよ。

「トラップ発動！水属性のフィールド発生により、次の魔法でさらにたたみ掛ける！カエノサス・ウォータル・ビビ・マーシユス

マッド・スワンプ
、
“泥沼！”」

クマ公が倒れた周囲一帯に、水と土をかけたラインスペル“泥沼”を発生させる。

オレはまだ1メートルほどの深さで身動きが取れなくなるぐらいの威力しかないが、スクエアメイジぐらいになると一度ハマったら抜け出せない底なし沼を作ることが出来るらしい。

“飛行”フライを使うメイジには効かないが、傭兵や昏倒した相手には十分通用する魔法だ。

泥沼に体が半分ほど沈んだクマ公は、未だ目を回しているようだ。仰向けに倒れ、アホ面を曝している。

フンツ、雑魚が！

「いいか、クマ公。オレに前フリはねえ！最初から最後までクライマックスだぜ！」

かなり余裕が出てきたオレは、「俺、参上！」的なノリでトドメをさしてやる事にした。それが拳を交わした敵への礼儀ライバルつてモノだからな。

「フォースの力を見よ！（これまったく必要ありません）敵を切り裂く剣アックスと成せ　　、　　“ブレイド”いやライトセイバー！！！！」

杖を魔法の剣にしたオレは、雄叫びと共に3メートルほどの高さから跳躍する。さすがにマスター・ヨダのように、クルクルと回転しながらと言うわけにはいかなかったが、許容範囲だ。

狙いはクマ公の口。

真下に飛び降りるだけの位置だったので、魔法の剣は狙い通りに突き刺さる。

外側はなかなか丈夫だったが、いくら野生の力を持ってしても内側までも同じ様にはいかない。

口狙いは、クマ殺しの基本ですよ。

「オレが“飛行”で木に登った時に勝負は決していたのだよ、クマ公。木に上ることから魔法の選択まですべてが計算の内。戦いとは2手、3手先を常に考えておくものだ。畜生風情のお前には無理な話か」

よし！キメセリフも言えて満足した。感動した！

念のためオレはブレイドもといライトセイバーで、「ブオン」と言う効果音を口にしながら何度かぶっ刺しておく。

実はまだ死んでいなくて主人公ピンチ！なんて展開のフラグを折っておくためだ。なんせまだ、オレの不幸属性脱却が確定したのか怪しいからな。

「ふう〜」

オレはクマ公に乗ったままクマ公に“レビティション浮遊”をかけ、泥沼から死体を引き上げてから一息ついた。

“ディテクトマシック探知”を使って、周囲に何もいないのも確認しておく。

つーかエティアン、何処行きやがった？！

周りの沼も魔法の効力が消えてもとの土に戻った頃、護衛のエティアンが現れた。

しとめたクマ公を見ると無言で頷く。

なんだそりゃ！？

さっぱり意味不明だぞ！

なんで頷きやがった？

のんきにクソでもしてやがったんじゃねえだろうな！

この、エテ公めっ！！

森のクマさん（後書き）

魔法名・スペル共にWikiに載っているもの意外はテキストです。

独自設定です。

わたしはアニメ第一期しか見ていないので、原作に載っているスペルと違うという事があるかもしれません。

その点をご不快に思われる方がいらっしゃる場合、ご指摘があれば訂正いたします。

「マシユー消える」

今はル・マレ家の本邸の一室にいる。

今日は実妹のエリザベートが、魔法をミス・キャンデに学ぶ為に訪れるのについて来たのだ。

なんの間違いかはわからんが、エリザベートは杖の儀式の準備が3週間ほどかかっている。まだ準備が完了しないのは、たぶん杖が悪いのだろう。

マティアスの“インキン”め、安物をエリザベートに買いやがったな？

甲斐性のないヤツめ。

こんな事ならオレが持っている宝石を換金して買ってやればよかった。

そんな不満を持ちながらここにいるのだが、授業が始まって少しの時、マシユーが現れたのだ。

どうやらオレ達が来ている事を使用人から聞いたようだ。

そんなマシユーに挨拶代わりに、「消える」と言っちゃった。

「いきなりなんだ？」

「消える」

「なぜだ？アルベール」

「いいから消える」

邪魔だから消えると言っているのに、どうやらコイツは消えるの意味がわからないらしい。

大事な事は2度言う。ならば3度も言ったのだから、何も言わずに出て行けばいいものを。

「ただ消えると言われても、理由を聞かなければ納得いかん」

「お前がいるとアナが来る」

「アナがいるとまずいのか？」

「お前の頭は飾りか？この間の授業の事を思い出せ」

「たしか僕がエリーが来ているのに気づいて、アナも途中から一緒に」

「結果どうなった？」

「アナがエリーを連れ出した」

その後、授業はお開きとなり、アナのアホがエリーを連れ回したのだ。

「わかったか？アナが来るとエリーが魔法を学ぶ邪魔になる」

「……そう、だな」

「わかったら、さつさと消える」

「お兄様いつてしまわれるのですか？」

オレとマシユーが会話をしているのを、ちらちらと窺い見ていたエリザベートが会話に入ってくる。言わずともわかると思うが、本当に愛らしい声だ。

しかし……。

「エリーは僕にいて欲しいかい？」

「いて

よ。ここは心を鬼にしなければならぬ。すまん、世界一可愛い妹

「エリー！ミス・キャンデに失礼だ。ちゃんと話を聞きなさい」

「すみません。兄様おにさま」

シヨボンとする我が妹・エリザベート。

カワユす

よし。脳内メモリーに保存だ！まだまだオレの脳内フォルダには

記憶可能だぜ！オレの脳みそ100テラバイトオオオ！

いかん。エリザベートのこととなると無駄にテンションが上がってしまう。

モチつけ、オレ！

「エリー。謝る相手はわたしではないよ」

「すみません。ミス・キャンデ」

「かまいませんよ。では続きを話しましょう」

微笑ましいと言った表情で許してくれるミス・キャンデは、やはりいい女だ。

そっだ！

今度ミス・キャンデの為に三角ザマス眼鏡を買ってあげよう。かわういゝ妹の魔法の勉強まで見てくれているんだ。何かお礼のひとつでもしなければ、アントワープ公爵家の当主としての名折れだ。

うまく行けば、オレの悲願でもあるミス・キャンデの結婚も決まるかもしれない。

眼鏡属性はけて多くはないが、ハマれば威力はデカいはずだからな。

きっとミス・キャンデは幸せになれるはずだ。

「はい。お兄様、あとで」

「エリー！」

「す、すみません、なのです」

うむ！かわういゝから許す！

やはりマシユーがいると邪魔になるな。オレは愛らしい妹の成長記録を、この目に焼き付けておきたいのだが……。

「しかたないな、マシユー。邪魔になるこちらに来い」

オレは扉を開けて、マシユーの腕を引っ張って無理やり部屋から出す。風を入れるために開け放たれていた窓の前に来ると、杖を取り出しマシユーのほうに振り返る。

未練たらしそうに出てきた部屋を見ているマシユーが、オレの方も見ずに文句を言っていた。

話をする時はちゃんと人の顔を見て話せと、親から教えられなかったのか？こいつは。

まあ、ちようどいいか。

「アルベール。僕はエリーに会うのはひさし」

「フル・ソル・ウィンデ、
“レレテーション浮遊”」

「う、うわつ。ア、アルベール、僕の話をして」

「黙れ、落とすぞ。」

オレは窓からマシユを“浮遊”で庭に降ろして、後から自分も庭へ降り立つ。

「あぶないぞ！アルベール」

先に庭に降りていたマシユがまだ文句を言ってる。
カルシウムが足りないのか？
ミルクを飲め、ミルクを。

「そんなことお前に言われなくてもわかっている」

「じゃあなぜ僕を窓から落とした？」

「人聞きの悪い事をいうな。落としてなどいない、“浮遊”で降ろしただろう。メイジの癖にそんなこともわからないのか？」

さすがはオレ。簡潔で一部の間もなく、真実のみを話すなんて。

「大して変わらなかったじゃないか」

「お前にはそうかもしれんが、わたしはそう思わない」

「いや、今のは誰が見てもそう見えるよ」

細かい奴だ。お前みたいなのは、女に嫌われるぞ。

「じゃあ、勝手にそう思っている。そんなことより、魔法の方は少しぐらい上達したのか？」

「そ、そんなこと……？」

いつまでもくだらないことを話していてもしょうがないとは考え
んのかね、こいつは。そんなことより実のある話をしようじゃない
か。

「土以外の系統魔法は順調に習得しているのか？」

「君は本当に僕の話聞いてくれないんだな」

「なんだ？習得できていないのか？」

「はあ〜」

オレの前でため息なんてつきやがって、何様のつもりだ？

ノエリア様の息子じゃなかったら、鼻にピーナッツ詰めてブン殴
ってるところだぞ！

「やっぱりそうなのか。情けないヤツだ。それでもノエリア様の子
か！」

「待て、アルベール。出来ないとは言っていないだろう」

「出来たのか？お前にしては上出来だ。ほら見せてみる。わたしが
見てやるっ」

「……どうして君は、いつもそんなに偉そうなんだ？」

鼻。ピーナッツが何か言っている。

年がひとつ上だからって、自分の方が偉いとも思っているのか
ね。チミは？

「ん？嘘だったのか？マシユーのくせに見栄を張るなんて100年早いぞ！」

「ああ！わかったよ！僕の問いに答えないのもわかった、いや君に何を言っても無駄だと言うのが改めてわかった。やるよ。やればいいんだね」

「いったいどつちなんだ？やるのか、やらないのか？わたしの話をちゃんと聞いているのか？御託はいいから、さっさとやれ」

「……………」

「ホレッ！どうした？ホレ、あつ、ホツレ」

「じゃあ、覚えた風の系統魔法を見せるよ」

そう言つてマシユーが杖を抜き、魔法を唱える。いつも最終的には、しょうがないなと言つ表情で折れる。そんなお兄さん気質なマシユーは嫌いではない。

よし、ひさしぶりにマシユーの魔法の上達具合をみてやるか！

「フル・ソル・ウインデ、
「レレレレレレ浮遊マシユーン」」

「……………」

足元を見る。

あれ？オレ、全然浮いてないんすけど。

視線をマシユーに戻すと、なぜかドヤ顔。

「どうだい？」

「何、自信満々な顔してんだ？失敗してるだろ」

「成功しているじゃないか！ほらっ、君の前にある石が浮いているだろ？」

見てみると……、確かに親指の先程の小石が、地面から5センチほど浮いていた。

何？これ？

「どうだい？僕も成長してるだろ？」

「イル・アース・マーケ、クリエイティブ “創作”」

スパコーン！オレは“創作”で作った便所スリッパでマシューの頭をはたく。さすがアナの実兄と言っべきか、頭の中が空っぽなのだろう。

なかなかいい音がした。

このようにオレは男のマシューには“創作”で作ったスリッパで突っ込むが、女のソフィーナには当初の予定通りに“創作”で卓袱ちゃぶ台だいを作っだてひっくり返している。

フェミニニストは女に手を上げてはいけないのだよ。男には容赦しないけどね。

「痛っ！なにをするんだ？」

「どうしてお前がそんなに自信満々な顔がしてられるか、わたしには理解できん。その程度なら軽く石を蹴り飛ばせば、誰でもそれ以上の高さに浮かせられるぞ」

「でも成功しているじゃないか」

めげずに自分の成功をプッシュしてくる。

これだから「蝶よ、花よ」と甘やかされて育った坊ちゃんはダメなんだ。

世界は違えど、このハルケギニアにもゆとり教育の弊害ってやつの実例が、わんさかいる現実にはガツカリだ。

しかし、これをそのままにつけあがらせるオレではない。

「ドライブシュート！」

浮き上がってちょうどいい高さにあった小石を、池に蹴り飛ばす。いい軌道だ。

スパーがんばるコールキーパー

SGGKのモリ キ君でも、この軌道なら止める事は出来ないだろう。きつといつものように、フツ飛ばされるはずだ。

お約束、乙。

その緩やかに縦の弧を描いて飛んでいく石を満足げに見つめるオレ。

「ああ〜」

なんていう、情けない声を上げているマシュー。

バカめ、その程度で調子に乗るからだ。

「もういい。他の系統も見せてみる。“浮遊”でその程度なら、他の風の系統魔法は“起風”ウインドぐらいしか覚えていないんだろう?」

「これだけだ」

「自信満々で言うなと言っているだろう。それより他の系統魔法を見せてみる」

「これだけだ」

「何?」

こいつは壊れたカラクリ人形か?

同じ事ばっか繰り返し言いやがって。

もしかして実妹であるアナの病気がうつったのか?

しかしアホがうつるなんて、聞いたことがないぞ。

いやファンタジーならありえるのか?

「僕の得意な土の系統以外で使える系統魔法は、“浮遊”だけだよ」

おっと期待を斜め下に、ぐっと下回る返事が返ってきてしまったよ。

基礎スペルの“起風”さえ使えないとは予想を軽く超えやがった。

「なぜだ?」

このオレの疑問は、誰もが当然発せられるものだと理解できるだろう。

「セシールに1系統ずつ習得していくようになって言われたんだ。君も言われたことがあるだろう?」

「そんなことはわかっている。わたしはなぜ風の系統を訓練したのかと聞いている」

「だってカッコいいじゃないか。魔法衛士隊の歴代の隊長も風系統のメイジが多いし。ほら!疾風のカリンとかさ」

スッパコーン!再びマシユーの頭をはたいてやる。

ん?突っ込みスキルのLv.が上がったか?
さらにイイ音がしたぞ。

なんだか便所スリッパが手に馴染んできやがった……、これはヤダな。

馴染みすぎていつも持つようになったら、二つ名になっちまう。

将来の二つ名が“便所スリッパ”とか……………、鬱過ぎるだろう。

兄妹たちの日常（前書き）

前話の続きです。

話はまったく進みません。

兄妹たちの日常

「い、痛いな」

なんかマシユーのやつが頭を抑えて痛がつてるが、それは置いておこう。

ついでに便所スリッパの事も、今はひとまず忘れてしまえばいい。きつと時が解決してくれるさ。

それよりもこのバカなことだ。

「お前の得意な系統はなんだ？」

「もちろん土の系統さ。父さんは土のスクエアメイジだしね」

「だったら土の系統と最も相性の悪い、風の系統が苦手なのは、自分でもわかっているだろう？」

「あゝ……そうだね」

コイツ今、目が泳いだぞ。

これは完全に失念していたな。

コイツは真面目なんだがヌケてるんだよな。

女の子のそういう天然はカワイイが、男の天然はイラッとさせら

れるだけだから殺したくなるぜ。

「その様子だと、あまり考えずに風の系統の訓練をしてたな」

「……わかるかい？」

キモいから恥ずかしそうにモジモジ照れるな！

そういうのはシヨタの前だけでやってろ。

「マシユーじゃないんだ、当然だろう。どれだけわたしのことを見くびっているんだ？」

「きびしいね、アルベール」

オレが厳しいんじゃないよ、お前の頭の中がユルすぎるんだよ。

「せっかくミス・キャンデのような素晴らしいメイジに教えを受けているのに、お前がこうもバカだと台無しだな」

「僕だってガンバっているんだ」

また自分アピールかよ、もういいって。

頑張ればいって話じゃねえんだよ。

世の中すべて結果なんだ。

お前のそれは甘えだ！

ダメな人間ほどそう言うんだ。

頑張ったけどダメだった、でもその途中経過を評価するってのは

身内だけなんだよ。

周りの人間にとっちゃ、その努力はゴミだ。

同じ様に頑張って結果を出した奴がいる。そいつの頑張りに比べて、お前は頑張り具合が足りないってことだからな。

自己満足甚だしいぞ！

このゴミ人間がっ！

「ゴミはもうしゃべるな！とりあえず風の系統の訓練はやめる。今日から火の系統の訓練だ」

「どうして火なんだい？」

「まあわたしも水の系統のほうが、土の系統との相性がいいのはわかってる。だがノエリア様とル・マレ伯爵は火の系統のメイジだらう？」

「ル・マレ家は火の系統のメイジが多いからね」

「だったら火の系統のほうが、お前には相性がいいだろう。それになにより、火の系統を覚えるとノエリア様が喜ばれる。お前は嫡男なんだから、その辺りのことにも気を使え。この考えながっ！」

オレはエロい唇党だからな。

ノエリア様が喜ばれるのは何よりだ。つーかオレに言わせればマシューには、ノエリア様を喜ばせる事が出来るという価値以外に、存在意義はないのだ。

お前はその唯一の意義の為に、生きていればいいんだよ。

「ひどい言われようだけど、確かにそうだね。じゃあ、基礎スペルの“^{イグニッション}発火”の訓練をするよ」

「よし、心意気だけは褒めてやる。その他は土台無理だからな。“発火”のスペルは知っているか？」

「母さんに教わったと思うけど……、ちょっと覚えてないや」

「チエストオオオーー！」

マシューの聞き流せないセリフに、本気の飛び蹴りをしてしまった。

あつ、おいしい！

あと30サントで池にダイブさせられたものを。

この恨み、はらさでおくべきかっ！次の機会は必ず事を成して見せるぞ、アントワープの名にかけて！

「い、今、蹴ったな！父さんにも蹴られた事ないのに！」

そりゃそうだろう。

普通に考えて親父に蹴られる息子なんていないだろう？ましてや飛び蹴りだ。

そんな貴族の親子がいたら会ってみたいものだ。

なんて当たり前のことしか言えないヤツなんだ、マシューは。

つまらん男だ。

「つまり男がピーピー騒ぐな！ノエリア様がお前に教えたのは、お前に火の系統魔法を使えるようになって欲しいと言う親心なのがわからんか！もう許せん！今日は魔力が尽きるまで“発火”の訓練だ！さあ唱えろっ！」

「いやだからスペルが……」

「さつさとやらんか！ウル・カーノ

、
“イグニション発火”」

「のわあああ！あぶないじゃないか！」

「何、口答えしてんだ？ゴラア！燃やすぞ！」

「何言ってるんだよ。今、燃やしたじゃないか！？」

ちっ！些細な事を。

蛆虫みたいな存在価値しかないお前に口ごたえされるとはな。ノエリア様を笑顔にさせると言う榮譽の為に尽力している、このオレ様に向かつていい度胸だ！

竹 力に刃向かったチンピラが、Vシネマでどういう末路を辿るか教えてやろうか？

「ぐだぐだとしつけえ野郎だ。ラグドリアン湖に沈められてえのか？ああん?!」

しばらくして、妹のエリザベートの魔法の勉強もそろそろ終わる

かなと思っていると、オレのいた庭にアナが現れた。

マシューのやつは“発火”スペル1万回詠唱の途中で力尽き、池のほとりの木の下に這いつくばっている。オレは放置してエリーの様子を見に行くか、アナに会いに行くかと迷っていたので、ちょうどタイミングが良かった。

使用人の侍女を伴って、こちらに小走りで向かって来たアナは一見普通の女の子だ。

「アルベール様。いらしてたのですね」

「やあ、アナ。お邪魔しているよ。今日は一段とカワイイね」

「ふふっ、ありがとうございます。うれしいですわ」アルベール様もいつもカッコいいって言いたいけれど、恥ずかしくて言えないわ」

オレのお世辞にアナは、手を頬にそえて恥ずかしそうにうつむく。

だがこのとおり、非常に残念なことにアナの病気はまだ治っていない。

“心の声がダダ漏れ症候群”は不治の病なのか、今のところ良くも悪くもなっていないのだ。

ただアホ毛がまだ生えてきてはいない状態なので、極端に進行したという事はないだろう。

せつかく可愛く育ってきているのに、アホ毛が生えるかもしれないなんてカワイイそ過ぎる。

せめて早く乳歯が生え変わって、スキッ歯だけでもどうにかなっ

て欲しいものだ。

顔がカワイイのに笑ったらスキツ歯なんて、絶対みんな大好物だろ？笑わないやつは感性が歪んでる。

いっそ薬品を水のスペルで調合して、アナを眠らせた隙に抜いちまうかとも思ったぐらい、一時期思いつめちゃってたよ、オレ。

アナはなぜかオレを慕ってくれているし、残念な人間カテゴリーから救い出してあげたいんだけど……。

いろいろ対策を講じようとはしてるんだ。

さりげなく「考えてる事言っちゃってるよ」的な事を伝えたりさあ。

でも、フォースの力を操るオレでさえ、世界の意思の前では無力な存在だったんだよ。

不甲斐ないオレを許してくれ、将来アホ毛の子！

「近頃は特に暑いけど、元気だったかい？」

「はい。ですが1週間以上もいらしてくれないから、寂しかったですわ「今日もいらしてたのなら、すぐにお会いしたかったのに」「

「それはすまなかつたね。ちょうど今マシユーと魔法の訓練が終わったんだ。お詫びに今からアナのために時間を使わせてくれ」

「よろしいのですか？「うれしい！何を一緒に頂こうかしら？お部屋で本？テラスでお茶？それとも魔法を見て頂こうかしら！」「

実にわかりやすく対応しやすいんだけど……。

「アナが今一番したい事はなんだい？」

「一番ですか？うん……」「そ・れ・は、もちろん！ぎゅ〜ってアルベル様に抱きしめて欲しいわ！」「」

こういう時は正直困るな。

オレとしても、アナの希望どおりにしてやりたい。しかし童貞のオレには、ハードルが高すぎるんだよな。

たとえその相手が幼女でもね。

「どりあえずここは暑いからテラスにでも行こう」

オレは腰を抱いてアナをエスコートする。いきなりアナの心の声にしたがって抱擁するなんて、怪しすぎるからな。

病気を認知させるのにちょうどいいとは思うのだが、以前試した結果、「アルベル様はなんでもアナの事をわかってくれる」と思わせただけだった。

つまりまったく効果がなかったのだ。

「はい。アルベル様「ああ！手が腰に！もう今日は十分満足です。願いを聞き届けていただいて感謝します、ブリミル様」」

てな具合にね。

正直、オレの手にはあまる。もうこれはノエリア様とマティアスの“インキン”に任せるしかないだろう。

“インキン”はまあまあ信頼できるし、ノエリア様はエロい唇してるしな。

あのエロい唇がきつと何とかしてくれると祈っておこう。
ああ、オレはブリミル教の信者ではないので、ブリミルに神頼みなんて事はしないよ。

「ちょっと待ってくれるかい。フル・ソル・ウィンデ
、
“
レベテーション
浮遊”」

「あれ？マシユーお兄様、いらしたんですか？」なぜあのような所に？」

始めにマシユーと魔法の訓練をしていたと言ったはずだが。アナのマシユーに対する扱いも、実の兄の割には結構軽いな。

オレとしては問題ないのだが、あまり酷くなるとよろしくないかもしれない。

兄妹だしね。仲が良いにこした事はない。

「一人置いていくのも可哀想だからね。一緒にテラスまで連れて行ってあげてもいいだろ？アナ」

「アルベール様がそうおっしゃるのなら……」あの様子ならいてもいなくても変わらないでしょうし」「」

手遅れにならないうちにマシユーの株でもあげてやるか。

お荷物のマシユーを“浮遊”で運びながら、アナの侍女に頼み事をしておく。

「君。アナはわたしがエスコートするから、テラスにお茶を用意してくれないか？」

お茶をしていれば、そのうちエリザベートもやって来るだろう。

アナと二人でお茶を楽しんでいるとエリザベートがやって来た。

その頃にはマシューも一応の復活を果たし、イスに座っていたのだが、お茶を飲む気力まではないらしい。ぐったりとテーブルになだれていた。

エリザベートが来るまでは、最近ドットメイジになったアナの魔法を見てやっていた。

アナは母親であるノエリア様と同じ火の系統魔法が得意らしく、

火の基礎スペル“ファイヤー・ボール発火”を当然のように使えた。

他にも“ファイヤー・ボール火球”と“ファイヤー・ウォール火壁”も使える。

オレの人生でも3本の指に入るアホな子なのに、魔法の才能は並以上かもしれない。このことに気づいた時は少し救われたような気がしたが、身近にいるダメ教師・ソフィーナのことを思い出すと油断は出来んと気を引き締めたものだ。

アナが将来ソフィーナのように成り果てれば、彼女の未来は真っ暗だからな。

しかしマシューが思っていたほど才能がなかったのも、最終的にはマシューより上達しそうだとおレは思っている。

いや、今はゴミのようなマシユーのことなんて考えるより、魔法の勉強をしていたエリザベートを褒めてやろう。

「エリー。こんなにも長い時間よくがんばったね」

エライ、エライと頭をなでてやろう。

「はい、がんばったのです。兄様^{あにさま}」

両手を胸の舞えて握り締めて、笑顔で答える我が妹はマジでパねえ！その笑顔はグラップラー級の破壊力だけ、妹^{マイ}シスター。

「ごきげんよう、エリー。エリーも来ていたのね「魔法の勉強かしら？」」

「ごきげんよう、アナお姉さま」

ドレスの裾をつまんで可憐に挨拶をするエリザベート。

はいっ！頂きました！脳内メモリーに保存完了。

副題は“妖精の生まれ変わりエリザベート、可憐にご挨拶 5
歳の夏、ル・マレ家にて”だ。

そんなエリザベートをアナは「エリーはガンバリ屋さんね」「よくがんばったわ」「とやさしく抱きしめている。

アナもエリザベートを溺愛しているのだ。

「ん？アナは知らなかったのかい？」

もちろんオレはすつとぼけて言ってるんだが、エリザベートの頭をなでる事は止めない。

「知っていたら、すぐにカワイイ妹に会いに行きましたわ」「会いに行くに決まっています!」「」

心の中で二度言ったな。

ずいぶんと力強い言い方だ。教えていたらエリザベートが魔法を学ぶ邪魔になっていたな。

オレの判断に間違いはなかったようだ。

「マシユーお兄様はどうされたのですか?」

エリザベートを愛でる二人をよそにテーブルでくたばっているマシユーを見つけ、エリザベートが心配そうに尋ねてきた。

「ちょっと疲れたみたいなんだ。そつとしておいてあげてくれ」

役立たずなばかりか、こんなにもカワイイ妹を心配させるとはなんてダメなやつなんだ。このゴミ人間め!

そんな奴には絶対“癒し”^{トリッキング}なんか使つてやらん。

ああ、そうだ!

エリザベートが疲れているだろうから“癒し”をかけてやるう。マシユーのやつめ。もしかこの展開を予想して自ら犠牲に?

……兄として十分に義務は果たしたぞ。もう楽になれ、マシユー。

お前のことは忘れない。たぶん2日ぐらい。

それからはやはりマシユールは放置して、アナと一緒にエリザベトを愛でた。

それはもう、やんや、やんやと楽しんだ。

オレが“水砲”^{スプラッシュ}で天高く水を噴き上げて空に虹を架けたり、エリザベトが頑張つて魔法の勉強をしたご褒美に、抱きかかえて“飛行”^{フライ}を使った空中散歩なんかをしてあげた。

途中、ル・マレ伯爵の執務室の窓にミス・キャンデの姿が見えたりした。

夏の日差しを遮るためかすぐにカーテンが閉められたが、こんな暑い日に上司の部屋で仕事してるなんてかわいそすぎると同情してしまう。彼女の婚期が遠退^{とほの}いている現実を目の当たりにしてしまい、改めて誓ったものだ。

三角ザクマス眼鏡を買ってあげよう！と。

その後、ル・マレ家の正門の前の木に登っている護衛のエティアンを発見する。

あいつは何をやっているんだ？

なぜ木に登っていやがるんだ？

エティアンはこちらに気づいて頷いたように見えた。
だからなぜ頷く？

いつもの事だがあいつの行動は意味不明すぎるな。

いや、エテ公の考えを理解できる方がおかしいのか？

終始エリザベートが楽しそうにしていたので、それらの事はどうでもいいかと思ってしまう。

マジ可愛すぎるってこの生き物は！
なんなの？ いったい？ 妖精？ 女神？

テンションが上がったまま空中散歩から帰ってくると、エリザベートを独り占めされてすこし立腹のアナと、相変わらず死体なマシューがいた。

今さらだがマシューのやつ、死んだようにぐったりしていたが大丈夫なのかな？

いやきつと放置が好きなのだろう。
そう思って個人の意見を尊重してやったオレは、なんて大人なんだ！

しかし放置プレイなどに目覚めなければいいが……。

まあ、目覚めたとしてもエリザベートの教育上よろしくないのでデストロイ！するけどね。

だって、オレの座右の銘は“サーチ・アンド・デストロイ”
なのですから。

兄妹たちの日常（後書き）

予約投稿致します。

当初の目標だった10話を超えてからもなんとなく書いていますが、友人にいろいろ指摘を受けています。

プロットと言う筋書きみたいなものを考えていないのが、もうダメダメらしく叱責を受けました。

絶対にすぐに書けなくなるんだそうです。

嫌々の趣味である為、限界は近いだろうとの事。

ムカつきましたので、もうちょっと頑張ります。

目標は30話です（ちよっと大風呂敷を広げすぎたかも……）。

近頃のフタちゃんはオシヤレさん？

暦の上では二イドの月、エオリーの週。

夏の終わりも近づき、もうすぐ秋がやって来ようとしている。
しかし暑い。

このル・マレ伯爵領はマルヌ川の蛇行によって生み出された湿地帯が多く存在する為、夏は湿気のせいでハンパなく蒸し暑い。

その上、湿地帯であるが故に虫が多く、当然刺されると痒いあのブーンという羽音でご存知の蚊が大量にいる。

時には夕方になると沼地の水面上に黒いモヤがかかったように、何千いや何万匹というヤツラの大群が現れるほどだ。

毎年の事だが辟易してしまう。

蚊取り線香や殺虫剤が当たり前のよう存在しない、このハルケギニアを呪いたくなる季節だ。

ある時、自分でそれらを調査もしくは生成しようと思ったが、何で出来ているのかさっぱり知らないことに気づく。

まず殺虫剤だが、これは間違いなく人工的に合成した化学物質っぽいので、おそらくオレには作る事は出来ない。
てか絶対に不可能だ。

言い訳じゃないけどさあ。

オレがバカなんじゃないよ？

普通に生きている人間が、自然界にない物質の化学式や生成方法

を憶えている方が不自然だろ？

もやっとした“虫を殺す気体”なんていうイメージだけで、殺虫剤を作り出せるはずがないんだ。

次に蚊取り線香。これは何かの植物を乾燥させて燃やしている事はわかる。

見た目からして、そのぐらいならオレもわかるさ。

原料が草っぱい何かって事ぐらいはさ。

しかし、オレは前世では大学受験シーズンにご臨終致しましたので、高校生までの知識しかない。

高校生で蚊取り線香がなんの植物から作られているか、なんてのを知っている奴が何人いるだろう？

そんなこと普通に暮らしててさあ、知る機会ってある？今はコンセントタイプでしょ？

てか、それ教えてくれる人っていったい誰よ？

もっとさあ、雑学を教えてくれるTVショーでやってそうなネタとか、実験好きのでんろう先生がやりそうな面白実験のネタとかさあ、あるでしょ？

この手の知識って、なんとなく見ていた割には意外に憶えていたりするじゃん。

そついうのを使える機会をくれって言いたいね、オレは！

つまりオレが悪いんじゃない！時代が悪いんだ！

実際、こちらの生活で役に立ってるのって、夏休みの自由研究ネタばかりだし。

義務教育こなしでいれば、こちらじゃ結構な知識量と言えるんじゃないだろうか。

しかし、“カユイところに手が届かない”知識つてのが、転生クオリティなのだ。

当たり前すぎて気にも留めなかったことが、普段の生活に溢れていたつてのを気づかされる。

便利すぎるつても、こつこつ感じて人を鈍感にしてしまい、あの意味で人を退化させていると言えるのかもしれない。

これも一種のゆとり教育の弊害？いや違つか。
えつと、この場合は便利な世の中に慣れすぎた事例？のひとつ、つてな感じなのではないかとも思う。

人間生きている時には、日々のいろいろな人や物に感謝しなければいけない事と、“当たり前事”つてやつに疑問を持たなければいけない事に気がついた。

死んでわかることもあるつても哀しいものだ。

まあ、あれだ。

死んでひとまわり大きく成長しちゃつたつて訳よ、オレもさ。

そんなオレは今日も護衛のエティアンと共に、趣味の“散策”^{かり}に出ている。

昨日、マティアスの“インキン”野郎から「明日戻るから、そちらの屋敷にも行く」という鷹便が“ビッチ”のもとに届いた為、オ

レは朝早くから屋敷を出たのだ。

妹のエリザベートとならまだしも、“インキン”と語らうなんて罰ゲームを好き好んでしようとは思わない。

考えただけで、どこか体の一部が痒くなりそうだからな。

そう言う訳で、今回の“散策”の目的地は、今までに3度ほど訪れている西の森だ。

このまま森を突っ切ってひと山超えれば、人の足でも1日で海に
でる。

山を降りると海岸は崖のようになっていて、人が住むような場所ではないし、舟が着くような場所もほぼない。せいぜい小船で岩肌に取り付けるかと言うレベルで、そこから切り立った崖のような場所を登らなくてはいけない事から、人も寄り付かないと“インキン”から聞いた。

“インキン”の野郎が好きそうな、陰気な場所なのだ。

そんな事情もあってこの西の森には、野生の動物がかなり多く生息している。

今日も「前回来たときのように鹿を狩ればいい」とか、「それがダメなら猪いや、野豚なんてどうだろう?」とか思っていた。

鹿肉がゲットできた時は、クセのある肉をワインで煮込んだ料理がなかなか美味かったので、帰ったらそれをリクエストしよう。

豚肉がゲットできた時は、こちらに来て豚肉なんてのは食ってない気がするので、豚肉料理界のNo.1のシヨウガ焼き的なものでも作って貰おうと思っている。それが無理ならただのポークステーキでもいいし。

獲らぬなんとかの皮算用ってやつだか、考えるだけはタダなのだ。

さあ！張り切っていこう！

護衛のエティアンには「ガンガンいこうぜ！」の命令を指示しておいたしね！

とりあえず獲物が見つかるまではヒマだから、オレはいつものようにエティアンに話しかける。

「ねえ、エティアンは鹿肉と豚肉だったらどっちが好みだい？やっぱり鹿肉？」

ブンブンと頭を横に振る。どうやらエティアン豚肉の方が好みらしい。

「へえ、食卓に豚の肉が並ばないから、豚はあまり食べないのかと思っていたよ」

今度はコクンとうなずく。

オレ達貴族の食事の際には、運ばれた料理一皿一皿の説明を料理人がそのつどするんだけど、豚なんてハルケギニアに生まれてからは一度も聞いた事がなかった。だからオレは機会があれば自分で手に入れて、生まれ変わりぶりに食べようと思っていたのだ。

とりわけ前世で好きだった訳じゃないけど、なんとなくなね。

「あれ？やっぱ食べないの？じゃあ、なんでエティアンは豚肉好きなの？傭兵だからとか関係ある？」

ブンブンと大きく頭を振る。肯定と否定のアクションにもそれぞれ微妙な違いがある。

「じゃあ、わたしとエティアンの違いかな？貴族は牛とか鹿とかを好んで食べるけど、平民は豚も食べたりますってこと？」

コクンと力強くうなづく。

オレの予想が当たっていたようだ。これは会話でもあり、連想ゲームでもある高等なコミュニケーションなのだ。

それを容易くこなすオレ様、なんてスゲーヤツ！

「ふーん。なんでだろう？豚が雑食だからかなあ。そのせいで身分の低い者の食べるものだとか考えているのかな？」

うーんという感じで首を捻る。

どうやらその理由はエティアンにもわからないらしい。

しかし、こんな仕草にも微塵の愛嬌もないな、コイツ。

今までのオレの質問でわかったと思うが、エティアンとのコミュニケーションにはちょっとしたコツがある。

例えばオレから向こうにコンタクトをとる場合、つまり注意をうながしたり、命令したり、質問したりする時、それぞれに伝える手順や方法があるのだ。

具体的には今のよう質問をする時はイエスかノーで答えられるように簡潔に質問するとか、もしくは選択肢の場合はそのうちの一つの選択肢を提示し、コレであるかと聞くようにしなければならぬとかだ。

逆に向こうがオレに何かコンタクトをとってくる場合は、エティアンがオレの視界に入り、身振り・手振りでオレの反応を窺う。ボディランゲージで理解できない時は、オレからこういうことか？と聞いてやらなければならない。

以上のように、なぜかオレから歩み寄ってやらねばならない、この現実。

おかしくね？！

オレ 主人、エテ公 護衛。

であるはずなんだけど……なんでオレ気を使わなきゃいけないのよ？

どう考えてもパワーバランスにねじれが生じてるって！

しゃべれよ！てか、コイツ普通にしゃべれるんだよ。知ってた？

こないだ、とは言ってもつい2週間ほど前の話だ。

“狩り”もとい“散策”で得た獲物を持って帰るために、血を抜いたり内蔵を取り出したりしている時だった。

エティアンが不意に「アルベル様はこの先、どういった事をなさろうと思っているのです？このままこの地に残り生きてゆくのですか？それともトリスタニアに行き王家や、他家に出仕したりする事をお望みで？あるいはゲルマニア、ガリアなど他国に行こうとお考えになった事はないのですか？このように狩りが出来ればわたし

のように傭兵家業も出来るでしょう。学のあるあなたなら商人も難しくはない。アルベール様はメイジなのでわざわざ野に下る事はしないとは思いますが、このように選択肢はいろいろあるように思えるのです。未だ10じゅうの年ではありませんが、そろそろご自分の将来のこともお考え人なるのではありませんか？」なんて一息にすらすらと、のたまいやがった。

普段まったくしゃべらないのに、よくそれだけ舌が回るものだと感心したが、同時にそのギャップのある高い声に悶絶もした。

なぜにアニメ声？！

なんとなくしゃべらないのはこの声のせいだと理解はしたが、お前の立場を考えると言いたい。

そういうのはちゃんと人を選んで使い分けるってのが、大人ってやつなんだからな。

その時もオレが「今はこのル・マレ領を出ようとは考えていないな。それ以上のことも特には考えていない」と言うと、コクンといつものサイ スの呪文がかかった状態に戻った。

突然の発声とその甲高い声から沈黙。

何かの呪いが一時的にかかっているのかと本気で疑ってしまっ。

そんなことはありえないと、その考えを振り払うと非常にイラついてくるが、忍耐力の修行を小さい時分から強制的に行ってきたオレにとっては、足の小指をタンスの角にぶつけた程度のダメージしかない。

いろいろ気にしたら負けなのだ。

相手はエティアン、エテ公だ。人間じゃない。サルだとも思っ
ていよう。

そんなふうにはエティアンになれた対応をしていると、辺りがかな
り静かなことに気づく。

まあ、森なので静かなのはおかしくはないのだが、鳥の鳴き声す
らないと言うのは変だ。嫌な予感がする。

「……おかしいな。ちょっと“ディテクトマジック探知”で調べてみるか」

突然、オレが厳しい表情をしたのに気づいたのか、エテ公は神妙
な顔をしてうなずく。

「索敵範囲を限界まで広げてみるか。エティアンは周囲を警戒して
てくれ」

そう言っただけ魔法を使おうと、杖に手をかけた矢先。
オレ達が歩いてきたであろう方向から音がした。

当然、オレたちは戦闘の構えをとって振り返る。周囲は適度に陽
の光が差し込む林で、視界もそんなによくはない。

木に登っても、いざと言う時の対応が限られてしまうので、この
まま警戒態勢を続ける。

その間も聞こえてくる音は、だんだん大きくなっていく。
どうやら確実にこちらに向かってきているらしい。

それから10秒もしないうちに2体の何かが、オレ達の前に現れた。

そしたらさ。

こんな事もあるんだね。

出ちゃったよ。

期待通りのつていうか、期待以上の獲物がさ。
丸々と太ったその体躯に、特徴的な鼻。

ブヒブヒ言うそれは大きな野豚がさ！

いったい何人分のしょうが焼き定食が作れんのかって感じ。
まあ、でも……。

なんか二足歩行しちゃってるのが、気になるっちゃあ、気になるかな。

他にも、前足は蹄の筈なのに、こん棒的な何かを手に行っているのも変と言えば、変かも。

体に人間が纏うような鎧っぱいものも着けてるが、最近の豚はオシヤレだし？野豚でもこれぐらいは……普通なのかもしれない。

それにしてもこのメタボなブタちゃん、八ノ息荒すぎっ！

なんて事を思っていたら、スツーとオレの前に進み出たエテ公が口を開く。

「オーク鬼。その体長は一般的には2メートルほどで、大きいものに至っては2.5メートルにも及ぶものも確認されている二足歩行の亜人である。その身長と人間の5倍の体重でありながら、見た目とは裏腹に、鍛え上げられた傭兵のような動きをする凶暴な種族。一番の特長はその顔だ。体型にそぐわぬ期待どおりの豚の顔をしていて、仲間と意思疎通が出来、人間の言葉もある程度理解可能という知能も持ち合わせていて、その戦闘能力は手だれの戦士5人に匹敵する。鬼の名の通り人間を好んで喰らうと言われている。その固体数も多く、亜人の中でもエルフ同様に最も忌み嫌われている種族だ。オーク鬼は人や村を襲うだけでなく、人間が多く集まり死んでいく戦争などが起これば、これに参加して来て人間を喰らう」

エテ公が甲高いアニメ声で、オレに現実を突きつけた。

説明口調でスラスラとよどみなく早口でしゃべるエテ公がなんて、にく憎しいんだろう。

もついやだ！

ル・マレ領の危機管理はどうなってんのさ？ねえ、誰か答えてよ？！

この辺りには亜人なんていないんじゃないのかよ、「インキン」野郎！

女とヌコヌコばっかしてないで仕事しろや！ゴラア！？

目の前に、お肉大好物のブタちゃん出て来ちゃってるじゃ
んよあ〜う!!!

近頃のフタちゃんはおしゃれさん？（後書き）

次話に続きます。

2匹の汚ブタ

「ブヒッ、ブヒッ」「ブビィー」

現れた2匹のオーク鬼は、オレの身長ほどの木のこん棒を持っていた。

片方は担いでいたが、もう片方はそれを引きずっている。

これが先程オレ達の耳に届き、警戒をしていた音の正体だった。

2匹とも身長は2メートルほどだろうか。エティアンより頭一つほど高い。

しかしその横幅は比較にならないほど厚かった。樽というか、もはや風船のように膨れ上がった巨体と言ったほうが正しいだろう。

その巨体の上に醜悪なブタの顔が張り付いて、オレがイメージしていた愛嬌のあるブタの顔ではなかった。

なんか下あごから牙みたいなのが生えてるしね。

見れば見るほどオーク“鬼”と呼ばれている事が、納得できる風体だ。

オレが現れた醜悪なこのブタちゃんを観察していると、じりじりと距離を詰めていたエティアンもといエテ公が飛びかかった。

10メートルない距離だったが、それを一息に駆け抜けたエテ公は、先制攻撃とばかりに一方のブタちゃんの頭に剣を振り下ろす。

飛び上がって振り下ろされた剣は、その狙いに届く事はなく、途中でブタちゃんの手にあったこん棒にはじかれる。敵に簡単に迎撃されたとは言え、空中でとっさに迫り来るこん棒に対応する能力は結構なものだ。

そのまま弾き飛ばされたエテ公は、たいしたダメージは受けていなかったようで、空中でくるりとひるがえり着地し膝をついた。

いやいや、ガンガン行こうぜ！ってコマンド入力はしたけどさあ。今は状況が変わったんだから、考えて行動しようよ。

俺の指示もなくオートプレイしちゃダメでしょ！

ホント世話が焼けるな！このサルはっ！

「我が意のままに敵を撃ち抜け、マジックアロー！」

突然の飛び出したが、それにオレも気づくと同時にアローのスペルを2匹めがけて放っていた。迎撃されたエテ公が追撃されないように、フォローをしたのだ。

条件反射的なこの攻撃は“散策”^{かり}成果の一つと言える。

身の危険を感じた時などに、相手を牽制する為にマジックアローを放つ。以前の森のクマさんとの遭遇以来、この習慣が身についた。

“散策”はいろんな意味でオレの血肉となっている。

今もその経験が、驚異対象にダメージを与え、生存の確率を高めた。

醜悪なブタちゃんの1匹の腕に傷をつけ、エテ公に注意が向かっていたもう1匹のブタちゃんには顔面にアローをブチ当ててやった。無残、ブタちゃんアローにて左目負傷。

おお！痛がつてる痛がつてる。

これが普通の反応なんだよな。

だって投擲ナイフ以上の威力があるんだぜ！

人が手で防いだとしても、簡単に突き刺さるぐらいの。

以前のクマは興奮しまくりで、アローが刺さって血が出てするのに、なぜかまったく怯まなかったんだけどさあ。

このブタちゃん達のリアクションが普通な訳よ、実際。

見た目はダチヨ 倶楽部の「聞いてないよお」的な感じだけど、効いてんの。

ヤラセじゃなくリアルリアクションだから、アレは。

森のクマさんがちょっとおかしかったんだよ。

目が血走ってたし、マジでヤクでもキメて、ラリってんのかと思っただくらいだったもん。

それに比べてブタちゃんはいいいねえ。

ちゃんと効いてるみたいでマジ安心した。

想定外の亜人との戦闘となったけど、出鼻をくじけた上に、こちらの戦意も上がってる。

敵の1匹は負傷で視界が狭まって戦力も低下したと言ってもいい。うん、いい流れだ。これでこちらが有利に戦えるぞ。

よし！

「エティアンいったんこちらに戻って来い」と言おうとすると、ちょうどオレの方を振り向き目があった。

そしてうなずくエテ公。

ああ！ やつとアイコンタクトで意思疎通が出来な。

今までワケワカメなうなずきでオレを翻弄してきたが、エテ公もさすがはひとかどの傭兵。

こういった危機的状況においては、一味も二味も違う。

「ブビイー！」

その時、オレのマジックアローで左目をやられたオーク鬼は怒り心頭の様子で、近くにいたエテ公にこん棒を振るった。

片目だけで遠近感がないその一撃を楽々と交わしたエテ公は、この機を逃さず動き出す。

いいぞ、エテ公。

隙を突いたその動き、なかなかやるじゃないか。お前はやれば出来る子だったんだ！

エテ公、その名の通りに身が軽いのはわかった。十分にわかったから、早くこちらに戻って来い。

そしてオレを守るのだ！

さあ、青い地球を守るんだっ！

さあ……あれ？

「おーい！」

思わず場違いな呼びかけをしてしまう。

エテ公のやつが片目を負傷したオーク鬼を誘うように、あらぬ方向に駆け出した。

アレレ？何やってんの！？

戦力の集中は兵法の基本でしょーが！

何、「オレがコイツをひきつける！そっちはまかせた！」みたいな行動してんのさ？自分カッコいいつもりなの？てか、バカなの？
前言撤回っ！お前はダメな子だ。

残念な人間だ、いやサルだあ！

大前提忘れていませんか？！

あなたはオレの護衛なお！

アナタ、ワタシヲ、マモル。OK？

ねえ、エテ吉さんよお。ハルケギニア語通じてる？

危険をそのままにして護衛対象置いてけぼりって、どんだけ自由な仕事の仕方してんのさ？

許されんの？そんな公務員的な仕事の仕方さあ？

戦闘開始と共に主人公置いてオートで離脱って、どんないやがらせイベントキャラなんだよ。

こんなトラップイベントありえん。ありえんぞお！

シナリオライター、出て来いやああ！！オマイはクビだあ！
トラップの危険度が高すぎなんだよっ！

てか、マジこの状況でどうしろってんだ？！

有利な状況が一転、リスク増えてんじやん。

左目を負傷して戦力の低下したオーク鬼を、エテ公が引き付けてこの場から去った後、オレは元気なブタちゃんと二人きり。

しかもオレが放ったマジックアローで、腕を傷つけられたブタちゃんはお立腹のご様子だ。

「ピギーーーーッ！！」

魔法使い一人で敵と戦わせるなんて、マジどんなクソゲーだ。そんなRPG見たことねえよ。

同人か？同人ゲームなのか？！主人公が必ず死ぬ仕様の同人ゲームなのかあ？

つか、見るからにガチンコ肉弾戦が得意の敵相手にどーしろと？
盾役の戦士系がいなきゃ、魔法使いなんて防御力の低いただの村
人Aだせ。

ムリゲーやらせんじゃねえ！

「クソツ！エテ公のやつどんだけ頭悪いんだ？！」

思わずひとり愚痴ってしまう。

あのアイコンタクトと力強い頷きはいつたいたんだったんだよ。
オレを油断させる為の罠だとしか考えられん。
ある意味期待は裏切らんヤツだが、この戦闘の後で生きてたら泣
かす。

絶対に泣かせてやる！

「ピギーーンッ！！」

「マテマテー！」

お怒りのブタちゃん。

戦闘開始の音楽が流れ始める前に、先制攻撃を仕掛けて来た。

「まだお前のターンじゃねえだろっ！」

思わず無駄な事を口走ってしまっが、身の危険を感じて後退する。
右手で大きく振りかぶって、こん棒を振り下ろしてくる。

「ちっ！話を聞けっただよ。デル・ハガラーズ

、
“ ライトウェイト 軽量

”

“軽量”をかけて横っ飛びで避ける。ドゴーン！という轟音と共に地面が20 سانتほど決れる。

「しゃれにらん！くらつたら即死じゃねえかつ！」

転がりながらオレはその様子を見て、背筋が凍るように感じた。立ち上がるとブタちゃんの様子を窺う。

これほど接近されたんじゃ、威力の高いスペルを唱えるために集中する隙がないな。

とりあえず距離を置かねば、ジリ貧だ。

「ブビイイー！」

ブタちゃんがこちらに振り向き、またもこん棒を振り上げる。

「我が意のままに敵を撃ち抜け　、　“マジックアロー”」

魔力を撃ちだすだけの簡単なコモンスペル、アローで隙を作る。集中力を必要としないこのスペルで牽制する、今はこれが最善だろう。

こん棒を振り上げたブタちゃんの顔めがけてアローを撃ち込むと、ブタちゃんはこん棒でそれを受け止める。

ブタのクセに器用なヤツだ。

この隙に後方の木の陰に走りこむ。

この辺りは木もまばらで、あのデカイこん棒がブンブンと振り回すことが出来る。もっと木がたくさん生えているところに逃げ込めば、こん棒を封じる事も出来るし、小柄ですばやいオレが有利にな

るだろう。

今はとりあえず逃げの一手だ。

「三十六計、逃げるに如かずってな！あばよっ！」

柳沢しごを意識して、オレは斜に構えカッコをつけてからトンズラする。

意味ねえことしないで、早く逃げるなんて言わないでくれ。

これがないとオレ様クオリティが保てんだ！

とにかく逃げる。

そつと決まれば、走る走る。

走るうゝ 走るうゝ おれえたくちい

血反吐く吐くまで、そのまゝまゝにい

まあ、血反吐は吐かんだろう。

“軽量”のスペルで身が軽くなったオレは、通常に比べ走る速さはもちろん、疲れもあまり感じないからな。

スペルの効果は1時間もないが、それでも十分だ。

追いかけっこの相手はブタちゃんだ。

亜人の身体能力がどれほどのものかは未知数だが、追いつかれたり、オレより持久力があるって事はないだろう。

「ブビ、ブビイーンッ！！」

後ろの方でブタちゃんが何やら叫んでいるが、聞く耳は持たん！
オレは走るんだ！

なんか走っているうちに、気分がアガってきた。

これはランナーズ・ハイってやつか？！

ただでさえ戦闘でアドレナリンが先走って出てんのに、走ってさらに分泌されたようだ。

おお！イケル！イケルぞお！！

オレは今、風になる！

なんてちょっとふざけた途端に、ゾゾゾッと悪寒がした。
振り返ると、オレの頭ほどの大きさの石が飛んできていた。

「なっ！あぶっ！」

ズザーーーーッ！とヘッドスライディング状態でかわす。

キレイなエビ反りの芸術点が加点されたせいか、ギリツギリで事なきを得た。

しかし飛んできた石が小さな木に当たり、それをへし折るのを見ると冷や汗が出る。

当然その石はブタちゃんが投げたのだが、その肝心のブタちゃんは思っていたより近くに迫ってきていた。

5分は走っていたのに、30メートル程しか離れていない。

「“軽量”がかかっている状態なのに、全力で走っても少ししか引き離せないのかよ」

巫人の身体能力恐るべし！

オレがガキだったのもあるけど、相手を外見で侮ってしまっていた。

ヤレヤレだぜ。

オレが枝なんかを避けながら走るのに対して、ブタちゃんはそれを巨体でへし折りながら突貫してくるのだから、純粋な速さで勝つてはいても引き離せなかったらしい。

「仕方ない。ここでやるか。いい感じで木も茂っているしな」

「ブ、ブイ！ブ、ブビ！」

オレが立ち止まったのを見ると、ここぞとばかりにブタちゃんはこん棒を振り上げたまま襲い掛かってきた。

動きが鈍くなっているな。

やはり体力はあまりないみたいだ。

「デル・ウォーター 、
“水刃”！」
アクア・エッジ

オーク鬼は平民の戦死5人分の戦力に相当するらしいから、土のドットスペルである“クリエイト・ゴーレム創作・土偶”でゴーレムを6〜7体作れば倒せるかもしれないが、ここは直接魔法の戦闘で倒す事にしよう。

ブタちゃんは多少傷も負ってるし、走った事で息も上がって動きが鈍い。

勝つる！

オレは勝機を見出した……、たぶん。
よ、よぉーし、強気で行くぜ！

このブタ野郎！そんな体でリングに上がったを後悔しなっ！！

2匹の汚フタ（後書き）

さらに次話に続きます。

死闘、紅のブタ

水の系統魔法は攻撃にあまり向いてはいない。

戦闘において、火の系統魔法は攻撃に触れたものを燃やし、風の系統魔法は不可視の攻撃で翻弄する。

それに比べて水の系統魔法は視認出来るので回避が容易く、攻撃が命中しても殺傷性が低い。そのうえこれらに比べて速度が劣る。

それは土の系統魔法にも言える事ではあるが、魔法が命中すればその衝撃も殺傷力も最も高いのが土の系統魔法なのである。

これを補うためにはラインメ이지以上の実力が必要とされるのだ。

水の系統を2つ掛け合わせ、氷の属性にすれば殺傷力が高まる。

魔法が放たれる速度を上げたいのであれば、水の系統と風の系統を掛け合わせればいい。

速度ではなく衝撃・威力を上げたいのであれば、土の系統を掛け合わせればいい。

さらにトライアングル以上の実力になれば、他の系統にない幅の広い攻撃が可能になる。

眠りを誘い、精神を混乱させ、視界を奪い、幻を見せる。

補助魔法が多い水の系統だからこそ、3つ以上を掛け合わせたときに操る事が出来る魔法の多様性は他の系統を圧倒しているだろう。もちろん殺傷力のみを引き上げるなど、純粹に威力を高める事も

可能だ。

最終的にはスクエアほどの実力になれば、使用をはばかれるようなスペルまで存在する。

だが、如何せんオレはまだ水のラインメイジ。

単体の魔法で敵を殺傷することが難しいドットスペルしか使えないわけじゃないが、単純に魔法の力だけでゴリゴリ押し切るなんて戦い方は不可能だ。

戦術を練って、効率よく魔法を使い、計算して相手の戦闘力を奪う。

オレが“散策”でやっている事はこう言う事だ。

今はまだ力が足りない。

残念だがそれは真実なのだ。

だから今は自分の力量不足を自覚して、相手の動きをコントロールする戦い方をしよう。

まずは牽制して自分に有利な流れを作るんだ。

うーん……………。

よし、大体の戦い方は決まった。

「デル・ウォーター

、
「水刃」！」
アクア・エッジ

オーク鬼に向かって水のドットスペルを放つ。

数個の水の刃がオーク鬼改めブタちゃん目掛けて飛んで行く。

ブタちゃんはマジックアローを防いだ時のように、こん棒を横薙ぎにして「水刃」を打ち落とそうした。

しかし、そうは問屋がおろさねえってな。

前の方の数個の刃はそれで防げたが、後から迫り来るものには対応できずに攻撃を受けた。打ち落とされずに残った2個の水の刃が2マイルもあるブタちゃんをフツ飛ばす。

さまあ、ブタちゃん。

アクア・エッジ
「水刃」とは言ってもラインメイジ程度の実力では切り刻む事は出来ない。

エア・カッター
これは風の系統魔法である「風刃」にも同じ事が言えるが、水刃の切れ味はドットで木刀、ラインで模擬刀、トライアングルでやつと切る事が出来、スクエアでようやく切断可能なものになる。

厳密に言えば「風刃」の方が弱い。

「風刃」は一段階ずつ「水刃」より威力が弱いのだ。

まあ当然のことだから今さら言わなくてもわかると思うが、水より風つまりは液体より気体のほうが分子が少ないのだ。

いくら「切る」という概念を魔力によって付加したからといって、根本的に質量差があるのだから、その威力には絶対的な差がある。

同じ程度の風のメイジと水のメイジが同じ程度の魔力を込めた“水刃”と“風刃”を衝突させたとすれば、この時“風刃”がかき消されて“水刃”が風のメイジを襲う。

だから風のメイジは水の系統と掛け合わせて氷の刃を打ち出した
り、火の系統と掛け合わせて殺傷力を上げるのだ。

まあこんな感じなのは理解してもらっただろうけど、オレの“水刃”が“風刃”より威力があるって言うてもさあ。命中した時でも敵をブツ飛ばして、命中箇所にもミス腫れが出来る程度のものなのだ。

けど、負けないもん！

貴族たるオレが擬畜生のブタの亜人に負けちゃあ、今まで否定してきたダメ教師・ソフィーナと肩を並べる男になってしまう。

そんなのは許されることではない！断じて許されないのだ！

だからオレのちっぽけなプライドにかけて、この勝負、絶対に負けるわけにはいかない。

そうと決まれば、命令コマンド“呪文を使え！”を入力だ。

「イル・ウォータル・テイル、
、
「ウォーター・ウィップ水鞭”！」

杖から2本の水の鞭を伸ばす。

それは5〜6メートルの長さで、ブタちゃんとそれなりの距離を保つて戦えるようにした。

立ち上がったばかりのブタちゃんに向かったオレの“水鞭”は、1本がこん棒を持つ右手を捉えて締め上げ、もう一本が頭部を打ちつけた。

メイジのレベルが上がれば上がるほどに、その鞭の数を増やしたり、長さを伸ばしたり出来るこのスペルは使い勝手がいい。スクエアレベルになると岩を砕いたり、体を貫いたり出来るようになるらしい。

今はブタちゃんの視界を奪うか、攻撃力を削ぐためにこん棒を手放させたい。

「ブビ、ブヒィー！」

「おーおー、畜生のクセにスゲエ怒ってんのな」

右手を吊り上げられ、頭部をムチで叩かれている様は、いつけんSMクラブで女王様にいたがらわれているM男のように見えなくもないが、どうやらキモチよくはないようだ。

「ンゴ！ブゴツ！」

「何言ってるのかわかんねえよ、ブタちゃん。だが一つ教えてやるう。快感とは苦痛の向こう側にあるのだよ！そらそらっ！」

ビシビシと“水鞭”で叩くたびにゾワゾワとしてくる。

ヤベー。

これはオレの方が新しい世界の扉を開いてしまっそうだ。ブタちゃんの肌を打ちつける音と、苦痛を訴える声。

赤く腫れ上がってくる顔を見ているだけで、更なる嗜虐心が湧き上がってくるんだ。

悦に浸るとはこういう事なのだろう。

「ピギッ。ブヒー！」

「さあ、オレにすべてを委ねるんだ。コワくないから。ソラッ！ソラッ！このブタ野郎ー！！！」

もう強情なヤツだな、このブタ野郎は。

コワくないって言ってるのにさあ。

キモチよくなるには苦痛の壁を越えなきゃいけないって言うてるだろ！

ピリオドの向こう側へ行こうぜ！

「ンゴビィー！！！」

突然ブタちゃんは、締め上げられていた右手を力いっぱい振り落として“水鞭”から逃れると、ものすごい勢いでオレの方に突撃してきた。

引っ張られて体勢を崩したオレは、前によろけて何かに躓くように倒れる。

ブウン！

その頭上を、ブタちゃんが渾身の力を込めて横薙ぎにしたこん棒

が通り過ぎる。

ガゴォーン！

轟音と共にこん棒によって破壊された木の欠片が、辺りに飛び散った。

冷や汗がこめかみを流れる。

アレくらってたら死んでたな、オレ。

やけに冷静にそう思える自分がいるのにもびっくりしたが、その時同時に“水鞭”をブタちゃんの両足に巻きつけて転倒させたもう1人の自分にも驚いた。

一瞬の忘我から自分を取り戻し、オレはすぐに立ち上がった。そのまま前方に走り、次の魔法を唱える為に“水鞭”解く。

「カエノサス・ウォータール・ビビ・サージエ
、
「泥波」！」
マッド・ウェイブ

水に土の系統を掛け合わせたラインスペル“泥波”を唱える間に、ブタちゃんも立ち上がった。こちらの方に体を向けていた。

とにかく距離をとりたい一心で、押し込む威力のある“泥波”を使う。高さが2メートルほどもある泥の波はオレが使える攻撃魔法の中でもトップクラスの破壊力なのだ。

しかしここで予想を超える出来事が起こった。

オレがまた距離を置こうと、倒れていた巨木を乗り越えていたら見えてしまった。

「ブゴゴゴッ！」

ブタちゃんが“泥波”に向かって、走り込んで来ていた様を。

「なんてアグレッシブなブタだ！」

さすがのオレもこの行動にはビックリだ。

まさかブタのクセに波乗りなんてしようと思ってんじゃねえーだろっな。

陸サーファーなんて今どき流行らないのに、何やってんだか。

つか、ブタのクセにカッコつけてんじゃねえ！

ブタちゃんの背と同じぐらいの高さがある“泥波”を超えて来るとは思えないが、用心にこした事はない。ここで様子を見ながらスペルの準備をしておくか。

「ラゲーズ・ウォータル・ダーナ」

スペルを唱えながらブタちゃんの足掻きを見守る。

ブタちゃんは両手でこん棒を握り締め、恐れも知らずに猛烈な勢いで走り込んでくる。

“泥波”がブタちゃんを飲み込もうとする寸前、飛び込むようにこん棒を振り下ろし波に打ちつける。その時、ありえない光景を目にした。

こん棒を打ちつけた勢いで“泥波”を乗り越え、クルリと一回転して着地したのだ。

さすがブタちゃんは腐ってもオーク鬼だ。
飛んでこれを避けるとは！

飛べないブタは、タダの豚だからな。

だが、サヨナラだ。

「フォーリング・アイシクル
“氷柱落”！」

着地したタダの豚ではないブタちゃんの頭上に、水の系統を2つ
掛け合わせたラインスペル“氷柱落”をお見舞いする。

使いどころが難しいこのスペルでも、相手の着地を狙えば簡単に
命中させられる。

空から振ってきた氷柱つらに気づくことなく、ブタちゃんはある
く脳天に穴を開けた。

「ピギイイイ！」

憐れな断末魔と共に崩れ落ちる。

オーク鬼は最後には自らの血で、紅い豚になったのだ。

ふゝ、今までの苦戦が嘘のようだな。

最後は意外と呆気あつけないってのは、王道なのか？

まあ、一応戦術みたいなものを考えてはいた。

始めからこの“氷柱落”でトドメを刺そうと思っていたので、オ

レはそれに合わせて戦い方を選んでいたんだ。

“氷柱落”は空から数十本の氷柱を落とすとは言え、効果範囲がそれほど広いつて訳じゃない。

だからオレはブタちゃんに攻撃を仕掛ける時は、水平方向に効果を発揮する魔法を使うようにした。

オレが魔法を使うときは、「前から攻撃が来るぞ」ってね。

途中であせつて“泥波”なんかも使っちゃったが、これも水平攻撃だったからオレの戦術は破綻しなかった。正直なところ、思わず使っちゃった後でヤベツ！って思ったけどね。

そうやって十分相手の意識を前方、つまりオレの方に注意を向けた上で、トドメがさせる隙が出来た時に垂直方向からの攻撃を仕掛ける。

ブタちゃんが泥の波を飛び越えて着地するのは、理想的な隙の出来方だったね。

着地する時は誰だつて、たとえ亜人のブタちゃんだつて足元に視線を向けるからさ。

何はともあれ、一件落着！かつかつかー、てか？

でも、とりあえず。

「杖よ、敵を切り裂く剣と成せ、
イトセイヴァー……」
、「ブレイド」！改め、ラ

“実は死んでないんだよ〜ん” イベントを断ち切るために、ライトセイヴァーで切り刻んでおく。これは一番大事なお仕事なのだ。ちよつと生命力強そうだから、首をチョンパしておこう。

グロイがここは我慢だ。

オレは「ブオン！」と言う効果音と共に、後始末に取り掛かった。

ん？

顔だけ見れば完全にブタだな……マティアスの“インキン” 野郎に、オーク鬼だとは黙って食わせてみるか。

あとで泣かす！

オーク鬼をブチ殺したオレは、遭遇ポイントに戻る事にした。

これはエティアンに合流すると言っ事ではない。
このことについては、断じて否である。

オーク鬼を倒した後、このままフライで屋敷へ帰ろうと思ったが、
ちよつと気がかりがあつただけなのだ。

もしエテ公がオーク鬼にやられていた場合、手負いのオーク鬼に
よつて近くの村などに被害が出るかもしれないという件だ。街道に
出没した場合も同様である。

オーク鬼が生きていた時、おそらくオーク鬼は傷を癒すために食
事を必要とする。その食事とはつまり人間だ。人間を求めて村や街
道に向かうのは必至だろう。

だからオーク鬼の生存、または傷の程度を確認しておく必要があ
る。

まあ、オーク鬼があの時のもう1匹だけだった時は、たいして問
題ないと思つている。オレはまだ魔力は半分程度は残つているので、
左目を怪我した手負いのオーク鬼なら、さつき殺したオーク鬼より

楽に倒せるだろう。

オーク鬼が始めに確認した2匹だけではなかった時は、素直に“飛行”^{フライ}でトンズラする。オーク鬼の数が増えていた場合は、他人の心配した自分が死んでしまふという結末も十分に考えられるからな。マテイアス率いるル・マレ家の家臣団に丸投げした方が、安全・確実である。

以上のように、エテ公の生存の有無はまったく考慮しなかった。

護衛対象であるこのオレを危険に曝すようなバカである。助けてやるうとか、戦っていれば協力してやるうとか思う奴がいれば会ってみたいものだ。

ヤツのせいで命の危険を感じたオレは、そんなお人よしにはなれない。

だからエテ公の事を中心に考えて、行動決定を行う事は前提から外した。

まあ、始めの遭遇ポイントに行けばわかることである。

死んで死体があれば、あとでル・マレ家に伝えてやるぐらいはする。

オレも人でなしではない。

しかしその場合はオーク鬼が生きていると言う事なので、ル・マレ家の討伐兼死体回収部隊が到着した時には、食料として喰い散ら

かされてエテ公とは判別不能になっている事だろう。

死体が見つからない場合は、すでにオーク鬼の腹の中か、無事に逃げおおせたと言う事である。結局、エテ公の事を考えても以後の行動に大して影響はないのだ。

ただ生きて逃げおおせていた場合は、絶対に泣かせてやる。

あのアニメ声をバカにしてやるんだ！

そうすればきつと半泣きは確実のはず！

サルだけに「キイーツ！」ってな感じで、逆ギレするかもしれんがその時は“マッド・スワンプ泥沼”で沈めてやるだけだ。

もちろん、それだけで済ましはしない。

逆ギレの代償は、沈んで身動きがとれないエテ公に向かって、“

おしっこ”をお見舞いしてやるに決定。

あっ、これはさっきの戦闘で変なプレイに目覚めた訳じゃないよ。

べ、別にSMプレイが好きじゃなければいいんだからねっ！

ほ、本当なんだからねっ！

……もうこのネタはいい加減飽きたな。先を急ぐか。

オレはいまだ効果の切れていない“軽量”のおかげで、身が軽い

状態を維持して森を駆け抜けている。

オーク鬼と遭遇し、戦闘をして今に至るまで40分程度。
とりあえずまだ“軽量”の効果は持続するので、切り落としたオ
ーク鬼の首を持ってポイントへ向かった。

「エティアン。生きていたか」

最初の遭遇ポイントに向かう途中に予想外の出会いがあった。

もうオレの言葉でわかっているとは思うが、その相手はオレの護
衛であるエティアンである。

生きていやがったか。

オレの護衛であり、本来オレの盾として存在するこの傭兵は、オ
レがいた方角を正確に目指して向かってきていた。体には大した傷
もないようすで、身のこなしも普段と変わらない。

オレでもちよつとばかり苦戦したオーク鬼相手に、メイジでもな
いタダの平民が無傷だと？

ありえん！

ル・マレ家御用達の傭兵はバケモノかっ！

たとえオレの魔法で負傷していたオーク鬼相手とは言え、腕利きの傭兵が5人で囲んでやっとな倒せる亜人だぞ。

エテ公1人であるのブタちゃんを倒せるはずがない。不可解すぎるな、これは。

本来なら手放してコイツを賞賛したいところだが、違和感が拭えない。……何かあった、もしくはは無傷でいられる理由があるはずだ。

だが、このサル並の知能しかないエテ公相手に、それを聞き出すのは一苦労しそうだ。

可能性としてはいくつもあるが、こいつの報告はマティアスに任せて、後でマティアス経由で聞こう。

今は、正直メンドイ。

この一言に尽きる。

「生きていたか」という問いかけにコクリとうなずいたエテ公に、オレは手土産を放り投げる。

もちろん本日の狩りの成果であるオーク鬼の生首だ。

「見ての通り、わたしのほうは始末した。そっちはどうなった？」

途中経過は後で報告させればいいだろう。

今は早急に、これからどういう行動をとるべきかを決めなくてはならない。残りのオーク鬼次第で大きく変わるので、その点だけは

はつきりさせておく。

「転がったブタの生首をしゃがんで確認してから、エテ公はこちらに向く。」

その首を横に振るしぐさから、始末つまりオーク鬼を倒してはいない事がわかる。逃げられたか？それとも逃げ切ったか？

「逃げ切ったのか？」

また首を横に振るエテ公。

「倒したわけじゃないだろう？いくらエティアンが腕利きとは言え、1人でオーク鬼を倒す事は出来ないだろうからな」

コクンと首を立てに振るエテ公は、オレが狩ってきたオーク鬼の耳を握って持ち上げた。そのまま立ち上がった後ろに体を向けた。

「ん？遭遇した場所に、まだいるかもしれないのか？」

体をそのままに、顔だけをこちらに向けてうなづく。

エテ公の相手をしていたオーク鬼は左目を負傷していた。

その死角について戦闘から離脱したのだろうか？

一時的に敵の戦力を引き離して、折を見て敵を出し抜き離脱。オレと合流して、戦闘力の高いオレのほうの敵をまず倒す。

それから追ってきたもう1匹を、または逆に探し出したもう1匹を協力して倒す。

こつこつという流れだったのかもしれない。あまりいい作戦とは言えないな。

一時的とは言えこちらにも戦力を分散させているし、敵は弱い方から叩いて数を減らすのが常道だ。

それにせつかくこちらには魔法のアドバンテージがあるのだから、それを最大限に利用する戦いをしないでどうするんだよ、まったく。

まあ、何でもいい。

どうせエテ公は後で泣かすんだからな。

「じゃあ、警戒しながら戻る。オーク鬼の首は持ってきてくれ。マティアス殿に渡すから」

コクンとうなずくとオーク鬼の首を手を持ったまま、先導するようにオレの２マイルほど前を歩いて行く。

遭遇ポイントに近づくまでは、ディテクトマジック“探知”は使わなくてもいいだろう。出会い頭って事になっても、エテ公を壁にすればいいだけの話だ。

少しはコイツにも仕事をさせないと、タダ飯ぐらいになる。

別にアントワープ家が金出している訳じゃないけど、一応仕事なんだから責任を果たさせてやらないとね。

エテ公の沽券にも関わるかもしれないし。

……どうでもいいけど。

オレ達は注意深く進み、目的の場所まで戻ったが、オーク鬼の姿は見えなかった。

時間的な余裕も、体力（魔力）的な余裕もあつたので、周囲を警戒しながら探索してみたが発見することは出来なかった。

手負いの人喰い亜人を野放しにしたままってのは気が引けたが、この日は屋敷に帰る事になった。あとはル・マレ家に報告して、ル・マレ伯爵なりマティアスなりに対応させればいいだろう。

どうせ、もともと亜人の討伐は領主の責務なんだから、オレが気にする事じゃないしな。

屋敷に戻ったオレはオーク鬼の生首を“氷結”^{フリージング}で凍結し、ル・マレ家にあてて本日起こった事の顛末をしたためた手紙を鷹便で送った。

あとは翌日、直接訪れて詳しい話をするという内容だ。

今日は本当疲れた。

オレは亜人と戦って、へトへトに疲れて帰ってきたのだ。

なのにオーク鬼の生首を見て「ふぎゅ〜」と変な声を上げて倒れたソフィーナを“浮遊”^{レベテーション}で、部屋まで運ばなければいけないし、その生首を明日まで自分の部屋に保管して置こうとしたら“爺”がやってきて、いろいろうるさい事を言ってくるし……。

マジ勘弁して欲しい。

何度も言うけど、つ・か・れ・て・ん・の！

この屋敷にはオレの心安らぐ場所はないのかっ！
妹のエリザベートに会いに行けばいいのだが、オーク鬼を殺した
後と言うこともあって会うのを止めた。

亜人とは言っても“人”がつくのである。

首を落とした後の体なんて、巨体なメタボ親父ってイメージと大
差はなかった。

近頃の狩りで動物たちの命を奪い、それをエテ公に教わりながら
自分でさばいたりしているせいか、命を奪った罪悪感や、道徳心に
訴える恐怖みたいなものは不思議となかった。

しかし、あの愛らしいエリザベートを思い浮かべると、どうして
も足が進まなかったのだ。

この世界は前世と違い“死”が身近だ。

自分たちが食事として口にする動物たちは、村や街中の屠殺場で
普通に殺されているし、日常生活の視界の中でさばかれる。

命が奪われる光景を、当たり前のように目にしているのだ。

人の死を目の当たりにする機会も多い。

乳幼児の死亡率はかなり高く、前世の途上国を上回る。

近代で乳幼児は3〜4割が死んでいたと言うのだから、中世ヨーロッパ仕上がりなこのハルケギニアでも、それと同等、もしくはそれ以上だろう。

実際に使用人に聞いてみたところ、彼らの兄弟たちは3人に1人程度の割合で乳幼児期に死亡していた。

その上、疾病での死亡率もかなり高い。

いくら魔法があるとは言っても、それは貴族だけに限られたことだ。たかが人口の数%である。

平民はただの風邪でも、簡単に死ねる世界なのだ。

それに加えて、平民には餓死等の死因も含まれて来る。

貴族の気分一つで命を奪われることが、ザラな社会でもある。

平民が死に遭遇する機会は、貴族の数倍、現代人の数十倍になるだろう。

これらの他にも、“死に慣れる”原因はある。

一つは道德教育が、しっかりと行われていない事だ。
せいぜいブリミル教の教えと、司祭の説教ぐらいだろう。

もう一つは死が“娯楽”の一つとなっていることだ。

オレはこれが、かなりの要因だと思っている。

このハルケギニアでも中世のヨーロッパよろしく、公開処刑がな
んてものが行われる事がある。それはブリミル教の教えに反したも
のを罰する場合と、罪を犯した貴族を罰する場合だ。

前者は教えに反した罪や異端認定された者が、ブリミル教の司教
の教区で処刑される。ロマリア連合皇国に送られる事も稀にあるら
しい。

そして後者はよほど高貴な者の場合を除き、首都の広場にて公開
処刑される。領主のいる都市でも行われるが、下級貴族だとそもそ
も裁く相手、つまり自分より低い位の貴族が自領にいないので、
あまり例がない。

せいぜい王家に次ぐ血筋である、公爵家の領地で行われるぐらい
のものだろう。

これらは中世ヨーロッパと同じ様に娯楽の少ない庶民たちにとっ
て、一種の娯楽となっているのだ。

世界が違えど、そういった点で同じ様なことになっているのは非
常に興味深いが、人の死を娯楽として捉える事は現代人の感覚では
あまり理解できない。

だが、ごくたまに行われる貴族の処刑などは、普段虐げられてい
る平民にとって溜飲を下げるいい機会なのだ。

見物に来る平民たちは誰一人、処刑される貴族を哀れむこともなければ、その光景から目を逸らす者はほとんどいない。もちろん小さな子供を含めてである。

処刑の前に朗々と読み上げられる罪が、いかに罪人が処刑されて当然かなんてのを伝えていることも関係しているだろう。

庶民にわかりやすく、ブリミル教の教えなんてのも持ち出したり、同情することがもはや罪だと言い切る演説が、その場の雰囲気をついに空気に作り変えていく。

その空気に中てられた民衆が罪人の死を叫べば、群衆心理も働き、誰もが罪人の死を待ちわびるようになる。

まるで怪しい宗教の映像のようだと思うだろうが、それは真実なのである。

かく言うこのオレもアントワープ公爵領にいた時に、1度だけ公開処刑を見た記憶がある。

父が戦場にいた為、今は亡きアントワープ公爵である“じじい”の代理として、領主の席として設けられた椅子にオレが座らされたのだ。

このことからオレの母こと“ビッチ”が、貴族の責務など果たさずに遊び惚けていたことがわかるだろうが、今は置いておこう。

屋敷のあるルーベックの街の広場で、貴族が処刑されるのに立ち会ったのだが……。

その時の民衆の熱気と言ったら、凄まじいものだった。

処刑の後でアントワープ家・筆頭執事である“爺”に、「これは民衆の不満を逸らし、貴族への鬱憤を解消させる政治の手法の一つなのです」と教えられた。

たしかに一理あるし、あの熱狂を一度見れば納得する。

そう。

オレは納得した。

そのような人間の死を許容できるのだ、オレは。

亜人の討伐で凹んだとは言え、オレは死について拒絶反応が、
少ない。

こんな世界に10年もいるんだ。

オレもこのハルケギニアの世界観に毒されているのかもしれない。
いや、これは当たり前だろう。

逆に10年いて感性や、価値観に影響を受けない方が人間として
どうかしている。

よほどの不感症なのか、精神障害がある場合、もしくは10年間
外界との接触を断っていた場合くらいしか、影響を受けない人間は
いないのではないだろうか。

特にオレは前世でユルク歪な国、世界から“極東の島国”なんて
呼ばれているところの出身だ。

オレは通うことが出来なかったが、大学生なんていい例だろう。大学の卒業旅行で、インドに1週間旅行しただけで、「価値観が変わった」なんて簡単にほざく人間がわんさかいる。

途上国の多いアフカの国々に1度訪れただけで、人生観なんて大層なものを180度変化させ、戦場カメラマンになったりする輩やからまで普通に存在する。

そして彼らはそれらの事を恥ずかし気もなく、まるで自慢話のように他人に語る。

オレはこんな民族の一員として育ったんだ。

オレの価値観が少しばかりいや、かなり変わっていても、けしてオレのせいじゃないんだ！

きつと民族の、いや武士サムライの血がそうさせるんだ。

……流れているかは、正直わからないけどさ。

今日はストレスがMAXに限りなく近いから、そういうことにしてもう寝よう。

あれ？ん〜、なんか忘れてる気がする。

何だったっけ？

まあ、
いいか。

あつ！エテ公を泣かすのを忘れてたんだ！

ハゲ再び

オーク鬼を血祭りに上げた翌日。

オレはル・マレ家の本邸を訪れ、西の森であった亜人との戦闘報告をした。

本邸に到着すると使用人が開口一番に「大旦那様がお待ちしております」と言つて、ル・マレ伯爵の執務室へと通された。

執務室は屋敷の一番奥にあるせいか、空気が重い。

オレがよく利用していた書庫からさらに奥に突き当たった場所にあるので、よく知っている場所ではあるのだが、部屋の中に入ると空気が一変する。

この濃密な空気はまるで肌にまとわりつくようで、オレは不快極まりなく感じるのだ。

「失礼致します」

オレが部屋に入ると窓辺に立っていたル・マレ伯爵がこちらに体を向けた。

おお！今日も立派な唇だな、“アナゴさん”。

下唇が異常進化を果たした“アナゴさん”ことル・マレ伯爵は、もう初老に差し掛かっている年齢である。

しかし、じじいと言うよりはおっさんと言ったほうがいいほど、“アナゴさん”には若々しい力がみなぎっているように見える。動きも老人のように緩慢ではなく、常々精力的に動き回るタイプなのだ。

それはオレがこちらに来た6年前から変わらない。

それが逆に威厳を半減させている原因でもあるのだが、伯爵という地位ならばこの程度の威厳でもいいのだからとも思う。

威厳を感じさせない要素は他にもあるしね。

「伯爵。お忙しい中、時間を作って頂き感謝致します。今日は、昨日の件で伺いました」

「うむ、大体の話はエティアンから聞いている」

この声である。

外見に似合わないこの高めの声が、一番威厳を感じさせなくしている要因なのだ。

ん？

エティアンだって？

“アナゴさん”のその返事の後で、部屋にオレ達以外の気配を感じた。

気配を感じた方向を見てみると、エテ公が控えている。オレが入って来た扉から左手の奥に、彫刻のように1人たたずんでいた。ちようと窓辺からは反対の位置になる為、右手の“アナゴさん”に注意がいくと死角になる位置だ。

忍者か、暗殺者のようでイヤな感じた。

ってゆーか、なんでここにいやがるんだ？このエテ公は。

たしかに今日この本邸に来る前に、護衛であるはずのエテ公がいねえなどは思っていた。

いつもなら屋敷から出る時は、必ず馬車の御者席に乗り込む。それなのに姿が見えないから、昨日の戦闘でどこか怪我でもしていて治療でもしているのかと思っていたのに……。

ここにいやがるって事は、昨日のうちにこの本邸に戻って、“アナゴさん”にオーク鬼と遭遇した事を報告したってことだろう。

いくら伯爵に雇われてオレの護衛をしているからって、仕事のしすぎだろ？

次の日にオレが行くって言うてんのに、あの後夜にもかかわらず馬を走らせてわざわざ報告？

伯爵に忠誠心でもあるのか？

ああ！声つながりかつ！

その高い声がシンパシーとか、同族意識とか発生させてんのか？

そうか。そうなのか。

つーか、普段の護衛任務の時に仕事しろっつーんだよ、エテ公！

まあいい。

今日は話が早くて助かる。

そう自分に言い聞かせて、オレは持ってきた手土産を“アナゴさん”に渡す。

「そうですか。ではわたしから話す事は特にはないと思いますが、こちらをお持ちしましたのでご確認を」

氷漬けにしたオーク鬼の生首である。持ってくるのときに入れていた皮袋から出して、執務室の机の上に置く。

それを見た“アナゴさん”は、目を細めて小さな唸り声上げた。

「おおよその事は聞いたが……、おぬしがオーク鬼を倒した時の事を話してくれぬか」

「オーク鬼を倒した時ですか？」

「そうだ。エティアンと二手に分かれた後、何があったのかを」

ふーん。想定範囲内だな。のらりくらりとかわしてやるか。

「特に何かあった訳ではありませんが？わたしはメイジですので、魔法を使ってオーク鬼を倒しただけです」

「オーク鬼はコボルトなどに比べれば凶暴だ。どんな魔法で対応し

たのかと思つてな」

「お持ちしたオーク鬼の首を見ていただければわかるとは思いますが、^{フォーリン・アイシクル}“氷柱落”で殺したまです」

「ではおぬしはラインスペルが扱えるという事か？」

「扱えますが、それが何か？」

話の流れからして、オレが先日心配していたことが当たってしまったかもしれない。めんどクセー事にならなきゃいいが。

「なに、おぬしの使う魔法に興味があつたのだ。他にはどんなスペルを使うのだ？」

「エティアンから報告がありませんでしたか？伯爵がお聞きになつたものは使えます」

「報告？そんなものはないが……。ただワシはもうすぐ11とは言え、その年でラインスペルが使えるのはなかなか優秀なことだと思つたのでな。聞いてみただけだ」

タヌキじじいがよく言うぜ！

今日すでにここにエテ公がいること自体おかしいでしょ？

絶対知ってんのにガキ相手だから舐めてんのか？

「そうでしたか。ではこれからはエティアンからお聞きになればよいでしょう。そのために彼をわたしのところに寄越したのでしょうから」

「何の事を言っているのだ？」

「違いましたか？まあ、それならそれでかまいませんが……。今日はもうよろしいですか？」

「うむ」

「あつ。重要な事をお聞きするのを忘れていました。オーク鬼の探索と討伐はいつ、どの程度の規模で行われるのですか？」

「まだ詳細は決まっておらんが、気になるか？心配せずともワシに任せておけばよい」

「わかつてはいますが、わたしは当事者ですからね。逃したオーク鬼の首をこのように目にしないうちは、安心しろと言う方が無理な話でしょう」

机に置かれたオーク鬼の生首を見て答える。含みを持たせた言い方に、“アナゴさん”が厳しい目を向けてきた。

「ワシのことが信用できんか？」

「そのようなことはありません。伯爵は今から討伐の事でお忙しくなるでしょうから、わたしはこれで失礼致します。左目を負傷したオーク鬼の生首、見せて頂く機会を心待ちにしておりますよ」

凄みを出したからって、ビクつくほどヤワじゃないんだよ。

オレは優雅に一礼して執務室を出た。

そう言えば、ル・マレ家には久しぶりに訪れた。何週間ぶりだろうか？

せっかくだからノエリア様に挨拶に行く事にしよう。
ル・マレ伯爵のプレッシャーなんて、なんのそのだ！

使用人にノエリア様にお会いしたいと言って、彼女のいる場所を聞き出すと庭にいるとのこと。

なにっ？庭だと？！

その答えを聞くや否や。

オレは案内する使用人に先んじて歩き出す。エロい唇を求めて。

だつてさあ。

庭にいるって事は、テラスでお茶でもしているのかもしれないって事だろ。

だとすれば、あのエロい唇がハムハムと動いている様や、ぷるんぷるんしている様子が見られるかも知れないのだよ！

これは1秒でも早くたどり着かねばなるまい、その桃源郷へ！

マシューやアナもいるかもしれんが、あいつらにはモザイクをかけておけば問題ないだろう。

そうすればノエリア様のエロい唇を、十分に集中して楽しめるともんだ。

あいつらは腐ってもノエリア様の子供だからな。エロい唇を楽しむぐらい自主規制をしてやろう。

そうしなければオレが萎える！

うへへっ！顔が緩んじまうぜ。

庭に到着するとそこにはノエリア様だけでなく、不快な面が見えた。

不快な面の正体は商人のイヴァン・リピエッツ、そうイヴァンのハゲである。

イヴァンのハゲもオレを見ると顔を歪めた。

生意気な野郎だな。

何年経ってもリピエッツ商会を継げない無能野郎が、貴族様のオレに反抗的な態度とろうなんて10年早いんだよ。まあカリカリすることもないか。

せっかくのエロい唇タイムだ。

「お久しぶりです、ノエリア様」

オレはイヴァンのハゲを無視して、ノエリア様に最上級の笑顔を

用意して挨拶する。

「アルベール殿、いらしていたのですか」

「はい。ル・マレ伯爵に少し用がございましたので」

「何かあったのですか？今日は朝から屋敷の中が少々慌ただしいようでしたが……」

「大した事ではありませんよ。それよりリピエツツ殿がいらっしやると言う事は、今日は何か求めになられたのですか？」

「水の秘薬を持って来ていただいたの。近頃、マシユーがよく怪我をするものだから」

「マシユーが？」

「そうなの。あの子、“飛行”^{フライ}の制御がうまくいかないみたいで

あのバカ。まだ風の系統魔法の訓練してやがるのか？！

「水の秘薬を使うほどの怪我をしたのですか？」

「3日前に高いところから落ちて腕を痛めたの。今はマティアスも王都に行っていないから、わたくしが治療をしたのだけれど……。火のメイジである、わたくしでは“癒し”^{ヒーリング}の効果もあまりなくて」

「我がリピエツツ商会の取り扱う水の秘薬は、モンモランシー家の秘薬だからね。トリステイン王国で一番の水の名門であるモンモランシー家の秘薬を使えば、どんな怪我でも病でも、たちどころによ

「くなりますよ、夫人」

イヴァンのハゲが自信満々に口を挟んでくる。
ウゼーな、コイツ。

今はオレのターンなんだよ。

ルールぐらい守れつての！

ノエリア様のエロい唇から言葉を頂くのはオレなんだ。
薄汚いその口を今すぐ閉じろつてんだ！

「秘薬はもうお求めに？」

「ええ。こちらに」

オレがイヴァンの言葉を無視してノエリア様に尋ねると、明らかに不機嫌そうにしているハゲ。
てめえは邪魔だから消えろ！

「では、わたしが“癒し”^{ヒーリング}をかけてみましょう。わたしは水のメイジですから」

「じゃあお願いできるかしら、アルベール殿」

「ノエリア様が気を落とされている顔は、あまり見たくありませんので。わたしの力でいつもの笑顔が戻るのなら、なんだって致しますよ」

「ふふっ、お優しいのね」

「ノエリア様は特別です。そういう事だから、リピエッツ殿はもう

よいですよ」

「そうね。ごくらうでした」

ノエリア様がイヴァンのハゲに言葉をかける後ろで、オレはシツシツと汚いモノを追い払うかのようなしぐさをとる。

それに反応して顔を歪めるイヴァンのバカ。

おいおい、そこでそんな顔をしたらノエリア様に対して不満があるように見えるぞ。

そう思ったとき、ちょうどノエリア様はイヴァンの表情に気がついて、冷ややかな視線を送った。

ワツハツハツハ！コイツ、マジでバカでやんの！

「こ、これは」

イヴァンが言い訳を言いそうになったので、オレはそれにカブせてノエリア様に話しかける。

「ノエリア様。一刻も早くマシユーの治療にあたりたいのですがよろしいですか？」

「もちろんです」

「で、ですから」

イヴァンしつこい。まだ言い訳するか！

だが、言わせねえよ！

「できれば！ノエリア様にも、ご一緒していただきたいのですが…」

「ええ、かまいません」

そういつて立ち上がるノエリア様は、もうイヴァンのことを顧みる事はなかった。

オレは汚物を見るような視線をイヴァンに送ってから、後をついてマシューの部屋に向かった。

その後、ノエリア様のエロい唇に精神を高ぶらせたオレは、「フオ~~~~~！！！」という奇声を上げてスーパーアルベールに変態して治療を試みる。

奇声を上げてわかったことだが、この叫び声は本当に高ぶりをもたらす。

過去の自分はハードゲイが叫んでいたのを見て理解できなかったが、実際に自分が体験してみると納得し、理解出来ることもあるのだと知るいい機会となった。

こうやって人間は成長していくんだね。

オラ、また大人の階段をひとつ上っちゃった。てへっ

そうして精神の高ぶりを感じたオレは、普段よりも格段の効果を
見せた“癒し”^{ヒーリング}によってマシューの怪我はを回復させたのだ。

それはもう水の秘薬を使わなくてもいいぐらいの効果だったね。

恐るべし、エロい唇！

翌日、西の森に向けて、ル・マレ家より討伐隊が差し向けられる。あいにくマティアスは、王都の別邸にて執務を執っていたので不在だった。

だからオレはル・マレ伯爵自らが指揮をして、亜人討伐の準備が進められると思っていたが、そうはならなかった。

討伐隊自体は家臣のメイジー人が指揮をし、案内人のエティアンと共に出発したのだ。

領民の為に早く討伐できるといいのだが……。

オレは“狩り散策”を当分の間は禁止され、屋敷から出ないようになされた。

だが、そんなん関係えねー！

ちよつくらサニエの村にでも行ってみるか。

一回行つとかないとさあ。

ルーラ使えないしね。

っつじやぶ、行ってきまーす！

浪漫飛行またの名をルーラ

今日はサニエの村に向かう。

サニエの村はル・マレ家本邸の南西に位置し、王都トリスタニアに向かう街道沿いの宿場町的な集落である。

というのも、トリステイン王国の最北に位置するル・マレ伯爵領を流れるマルヌ川が、その起因となっている。

領内を蛇行し、帝政ゲルマニアのオウオモエラ伯爵領を通って外海へ流れ出るマルヌ川は、トリステイン王国と帝政ゲルマニアを結ぶ交易路となっている為だ。

そもそも交易路となった原因はゲルマニアとの戦争であった。

ゲルマニアとの国境に所領するル・マレ家は、たびたびゲルマニアの侵攻を受けた時期がある。しかし国境は山脈に隔てられているため、その侵攻経路は自然と絞られていた。

その侵攻経路こそマルヌ川である。

マリヌ川は緩やかな流れである為、雨季でもない限りはオウオモエラ伯爵領のある河口から、ル・マレ領のある上流へさかのぼる事が容易であった。故に侵攻のたびにゲルマニア軍は、マルヌ川をさかのぼって行軍して来たのだ。

しかし、大きく蛇行したマルヌ川を遡上する過程で、川岸に伏せられていたトリステイン諸侯軍が撃退するという結果に終わることが多く、侵攻は過去に1度として成功はしなかった。

そして1000年ほど前、もつともゲルマニアからの侵攻が頻発した時代。

時のル・マレ家当主が領内から王都へ向けて街道の敷設を始めた。その街道は一直線に王都トリスタニアへ向けて整備されるもので、ル・マレ家が侵攻を受けた場合、速やかにトリステインの王軍を領内へ迎え入れることが出来るようにするためのものであった。

たびたびある侵攻のせいで、街道の敷設は遅々として進まなかったが、中止される事はなく代々続いて行く。

その後も数代に渡り街道の整備は行われ、南のクリユヴェイエ子爵領の協力もあり街道は王都へと着実に伸びていった。

時代を経るごとに、王都との間にある他の領主の土地にも街道は整備されて行き、数100年前にはル・マレ伯爵領と王都を結ぶ街道が開通に至る。

その頃には侵攻もほとんどなくなり、マルヌ川を上ってくるのはゲルマニアの商人たちだけになっていた。もちろんトリステインの商人もマルヌ川を下流へ下り、同様にゲルマニアに商いに行く。

王都からゲルマニアに向かう商人はちょうどこの村で馬車から船に乗り換え、逆にゲルマニアから来た商人はここから馬車に荷物を乗せ換えると言った風景が、このサニエではよく見られるようになる。

領主の屋敷からも程近いことから治安もよく、これより先は容易にマルヌ川を遡上することが出来なくなる為、平和な時代には流川の経路となるのは必然だったのだ。

こうしていつしか、特にこれと言った特産品などはないこの村が、ゲルマニアとトリステインを結ぶ交易路を行き交う商人が集まる場所となった。

まあこんな感じでサニエの村は、ル・マレ領でもっとも人が集まる集落の一つなのだ。

王都のような街にはなりきれではないが、それなりに大きな集落で、マリヌ川沿いには商会の支社や倉庫が並ぶ。

村の中は馬車や荷物が行き交う為、倉庫からの道と大通りは石畳で覆われていてその道幅も大きい。商会の支社が並ぶ一角には、ル・マレ家の家臣が居を構え治安の維持と、商人の統制を行っていた。荷物が集まる場所であるため、村の2つの入り口と船着場には兵が常駐しているしね。

この村の中での商人の保護をル・マレ家が行うのは、当然と言えば当然なのだ。だってこの村、もしくは商会の支社を構える商人たちからの税収が、ル・マレ家の重要な収入のひとつであるんだから。なんかあったら税収減って、損するのはル・マレ家だからね。

そう言った理由から領内で最も安全な村であり、常時ル・マレ家の者が20人以上はいる。

こんな感じの村だから、オレでも行く事が許されたんだ。

今回に限っては、厳密に言うと微妙なところではあるが……。

どうしてかって？

そりゃあ今は護衛のエティアンが、オーク鬼討伐部隊に参加してるからいい訳じゃん。

屋敷からあまり出るなとも言われているしさ。

“散策”が許された条件の中に、護衛も一緒に行動するのがあったから、エテ公がいない今は“散策”しちゃいけない。だけどオレはこう思うんだ。

「これは“散策”ではなく、“飛行”^{フライ}の高度・速度・継続使用可能時間を把握する為の訓練であるのだ」ってね。

だから“散策”に出る時の条件である、『護衛をつける事』や『行動範囲の制限』は関係ないでしょ？

まあ屋敷から出ることに変わりないから、屁理屈なんだけどね。

どうせ後で、どうとでも言い訳できるから深くは考えないでおこう。

イヴァンのようにハゲでもしたら、オレのイチャラブ計画が破綻しちゃうぜ。

ささつとカツ飛ばして行って、サニエの村を“ぶらアルベ”もしくは“アル散歩”して来よう。

以前マティアスに聞いたところ、本邸から“飛行”^{フライ}のスペルで30分もかからないと言ったいた。ならこの屋敷からでも距離的には変わらないだろうから、同じくらいで着くだろう。

そのぐらいの距離なら途中でちよつと休憩を取れば、オレの“飛行”でも往復できる。

さあ、ウゼーやつが現れる前に浪漫飛行しちゃいますか

おおっと！

その前に……つと、これでいいか。

オレは屋敷に飾られている手ごろな花瓶を、持って行く事にした。先立つものがないと、せっかくサニエの村に行っても何にも出らんからな。

商人もそれなりにいるだろうから、きっといい値でもとい、言い値で売れるだろう。

「イル・フル・デラ・ソル・ウインデ、
トベルーラ！」
、「飛行」^{フライン} もしくは

やってきましたサニエの村。

そしてinnなんとか商会。

さっそくパクツた花瓶を売り払っています。

「おじさん。この壺は“ホクソウ”だよ？商人なのに知らないの？
これはいいものだ」

どこぞの大佐のように蕙蓄^{つんちく}を並べ立てたが、目の前の商人はいま
いち反応がよくない。花瓶を小さめの壺と言いつつ切ったのもマイナス
材料だったか？

やはり商人相手にかけ引きをするのは、オレにはまだ早かったよ

うだ。

「ホクソー」？んー？やっぱり聞いた事がないな。たしかにイイ物だが……坊ちゃんはこれをどこで？」

「見てわからない？この服装で“ホクソウ”の壺を持ってる。それにホラ。杖、さしてるでしょ」

「ここいらで杖をさしている貴族様といやあ、ル・マレ家の方で？」

ル・マレ家の関係者だとわかると、すいぶんと真剣な面になったな。まあ、このサニエの村はル・マレ家のお膝元だからな。

関係者の小僧とは言え、万が一伯爵の耳によくはない話が入れば、それだけで平民である商人なんて商いが出来なくなる。このおじさんはイヴァンなどとは違って、ちゃんと想像力のある商人のようだ。プライド云々じゃなくて、利益を中心に物事を考えられて、賢い選択をとることが出来る。

「さっしがいね、おじさん。で、どう？いくらで買ってくれるの？」

「んんー……“ホクソー”ですか」

だが、もう一押し必要かな。

別に高くなっていいから、オレ的には買ってもらえれば御の字ってやつだから、多少エグいやり方で行くか。

その分、金にはこだわらないでおいてやる。

だって、元手がかかってないんだもんよお。

「おじさんほどの商人なら、ここまで言わなくてもわかると思うけどさ。“ホクソウ”は東方のものの中でも最上級品だよ？ちよつと理由があつて今回は手放すけど、本来よつぼどのコネがある貴族ぐらしいしか手に入らない一品さ！この白磁に気品溢れる藍がシビれない？玄人にしかわからないのが、残念なところだけどさあ。いい買い物だと思うけど……そんなに迷うならいいよ。他の商会に行つてみるから。ノエリア様が言つてたけど、このサニエには目利きの商人が何人かいるつて話だし」

エグいやり方。

誰もが知るル・マレ家の若奥様にして、エロい唇党の党首であるノエリア様の名前を出してみる。あたかも近い関係のようにな。

まあ、実際オレは夫の妾の連れ子だからさ。近しい関係つて言つても嘘じゃないし、いいつしょ？これぐらい。

「ちよ、ちよつと待つてください。んー、70エキユーでいかがでしょう？？」

「おじさん、本気で言つてるの？東方の貴重な“ホクソウ”だよ？100エキユーは下らないでしょ？」

「では80ど」

「90、これ以上なら他をあたるから譲らないよ」

「いいでしょう！では90エキユーでお引取り致します」

いかんいかん。ついアメ横気分だしまつたぜ。

調子に乗つてるとこのかけ引きを楽しむ為だけに、まったくいら

ないものを買ったまうからな。ちょっと気をつけなきゃな。

「じゃあ、1エキュー分を銀貨にして、あとは金貨にして」

「わかりました。89エキューに100スウでお支払いします」

「おじさん、いい買い物したね。王都で売れば150エキューぐらいの値がつくよ、きつと」

「では代金を用意いたしますので、少々お待ちを」

そういうと元の世界では、もう中学生ぐらいかなって感じの男の子に指示を出し、代金を用意させていた。丁稚奉公ってやつなのか？

もう中学生かどうかなんて、どうでもいいか。

それよりこれから本題なのよね。

よし、気張っていこう！

「それよりおじさん。聞きたい事があるんだけどさ」

「なんでしょっ？」

「最近、王都の方はどうなの？変わった事とかあった？」

「トリスタニアですか？特に変わった事はなかったと思いますが…」

…

アレ？オレの思い過ごしだったか？じゃあ、あっちか？

「ここは王都のほかにはどこを回って商いをしてるの？」

「ご存知かとは思いますが、サニエに店を構えている商会はゲルマニアと王都の交易が商いの中心です。うちも例には漏れず、ゲルマニアから鉄やガラスなどを仕入れています。細かな商いとなりますと他にもいろいろと」

「へえ、ゲルマニアからガラスなんか仕入れてるのかあ」

「はい。ゲルマニアのものは質がよいですから。ああ、でもここ数年は鉄が高かったので困っていたんですよ」

「鉄が？……ああ、北の国と戦争してるんだったね」

「そうなんです。そのせいですと品薄状態だったんですが、2ヶ月前に戦争が終わりましたからね。やっと値が下がるって言つので、どの商会も一安心しているんですよ」

チツ！ビンゴかよ。

「……………北の国は負けて滅んだんだ。知らなかったよ」

「このサニエには先月辺りにその知らせが届きましたよ」

その話はマジいい情報だ、おっさん。

いやオレにとってはいい情報ではないんだけどさあ。今後の事を考えると、為になったねえ。為になったよ。

「結構長引いていると聞いていたからね。やはり大国のゲルマニアにはかなわないか」

「そうでしょうね。でもきっかけは裏切り者が出たせいだっすよ」

ちょうどその時、代金を持って中学生が現れた。ん？やはりもう中学生ではなかったのか、ダンボールの小道具は持っていないようだ。

「では代金の方をご確認ください。1、2、3、4……」

商人のおっさんはオレに見えるようにして金貨を数えていく。今のオレにとっては、1エキューぐらいちよるまかされていても大した事ではなくなっているため、その様子をぼんやりと眺めながら考えをまとめていく。

これでここ最近、気になっていた事に大体説明がついたな。理由がわかったからと言って解決できる類のものではないのがやっかいなのだが……。

このままでは最悪の事態もかなり高い確率で起こることが考えられる。オレ自身はどうとでもなるとは思っているんだが、それだけではないからな。

何かしら手をつっておきたいが、どうしたものだろうか……。

「79、80」

「おじさん。それでいいよ」

「はっ？」

「金貨は80でいい。銀貨は数えなくてもいいよ。おじさんを信用してるから」

「よろしいのですか？」

「そのかわりちよつと頼まれてくれないかな？」

「ご注文か何かでしょうか？」

「9エキュール分の仕事にしては簡単なものだよ」

簡単な頼み事したら、もうここに用はない。

オレは重い足取りで、代金の袋を受け取り店を出た。

しかし、……また裏切り者か。

ゲルマニアが下種ばかりなのはわかるが、フリースランド王国もバカがそろってるな。

ベルギウムが落ちた時と同じだなんて！

じじいたちは何をやってたんだ？

あのクソ王子も、自分の国が滅んだ時と同じような手をうたれないように、フリースランド王家に働きかけたりしなかったのか？

まあ、生きているかもわからない人間を責めてもしかたないか。

でも、ああ、わかった。
うん、そう言っことね。

もうサニエの村には用はないな。
さっさと帰らなまぢ。

アルベールは“ルーラ”を唱えた……………、何も起こ
らなかった。

浪漫飛行またの名をルーラ（後書き）

明日からしばらく趣味の時間をゲームにあてます。

友人から手に入れたシークレットゲームというものなのですが、10時間ぐらいでクリアできるそうです。

この小説を書いている趣味の時間は、1日3時間程度と決めておりますので、ゲームは3、4日で終わると思います。

拙作をお読みいただいている方はあまりいないとは思いますが、評価を頂いた方、感想を頂いた方にはご連絡すべきだと考えましたので書かせて頂きました。

再開は来週になりそうなので、ここでそのお詫びとご連絡をさせて頂きます。

その日のまえに

「アニー、暇いとまをやる。今日中にこの屋敷から出て行け」

些細なことだ。そう、本当に些細なことだった。

「お待ちください。アルベール様！」

「口をはさむな!“爺”は黙っている」

「しかしっ!」

オレの言葉にめずらしく“爺”が反論している。

まあ、それも無理の無いことだ。“爺”の言いたい事はわかる。理不尽な事を言っているのはオレなのだから。

「以前から言っていた事だ。何度もエリーを甘やかすなとね」

「エリザベート様は未だ幼く」

「先程黙っていると云ったぞ、“爺”っ!」

「では……、一言だけお許しください。このことは奥様には?」

「今決めた。たとえ母上がなんと言おうと変える気はない」

「……………」

「……………」

オレと“爺”が向かい合う形で相対しているその側で、話の中心人物が身じろぐ。そして沈黙の中、意を決したようにやっとのことで言葉を発した。

「……………も、申し訳ございません」

普段の彼女からは想像出来ないような弱々しい声は、オレの心を抉る。しかし突き放さなければならぬ。

この生真面目で、心優しい使用人を悲しませなければならぬのだ、今は。

「……………アニー。いくらわたしが生まれた時から仕えているとは言っても、君は使用人だ！増長するなっ！！」

「申し訳」

「もういい！さがれっ！」

言葉を遮るように放った一言でアニーは絶望したような表情をしたが、オレは背を向けてこれ以上は話は無いという態度で彼らの退出を促した。

「ふーっ……………、そんな役回りだな」

オレは二人が出て行った後、椅子に深く沈みこみ大きなため息をつく。
嫌な役を演じなければならなかった疲労が、思いのほか大きかったのだ。

しかし、来るべき時に備えて準備をしなければならない。

いくら彼女のためでもあるからと言っても、本心からじゃない罵倒は心が痛む。

それが生まれた時からもっとも長い時間を共有した相手なら尚更だ。

ときに母のように、あるいは姉のように接してきたアニーは、オレの中ではただの一使用人でないのだから。

だが、少しでもマシな未来の為に、今はやらなければならない事をやっておこう。

あとで後悔しないためにも。

さて、“今そこにある危機”について考えよう。

これを回避するにはどうすればよいだろう？

答えはいくらでもあるが、オレの求める結果になるモノはどの場合だろうか。

一番簡単なのは、このトリステイン王国を離れる事だ。とは言ってもゲルマニアへ行く事はありえないから、逃れるならアルビオンかガリアだろう。

しかし、母上こと“ビッチ”はマティアスの妾だ。

二人の間にエリザベートが生まれたこともあるし、オレの言葉だけでは確実にここから離れる事はないだろう。

「そんなことはありえない」「思い過ぎだ」とか言って聞く耳を持たんに決まっている。

脳みそ腐ってるしな。

だからここに残ることは確定事項となる。

その前提をもってして、いかに危機回避をするか考えるべきなのだ。

オレが最優先に考えなければいけないのは、妹のエリザベートのことだ。

これだけは全てにおいて優先する。

他のどんな事象よりも、他の誰の命よりも、そしてもちろんオレの命よりもだ。

まあ、マティアスの子だと言うこともあるし、女の子だ。

ベルギウム王国公爵家の血筋とは言え、重要視される事はないだろうし、ル・マレ伯爵領に来てからの出生となる彼女の存在自体がゲルマニアに認知される可能性は低い。

絶対とは言えないが、オレや“ビッチ”ほど危険な立場じゃない

だろう。

オレはアントワープ家の直系の嫡男だからどうしようもないけど、オレや“ビッチ”が死ねばエリザベートが生き残っていても、わざわざ血眼になって探し出して殺されるなんて事にはならないだろう。

そうなるならエリザベートの命を優先させるならば、オレと“ビッチ”が二人で出かける用向きを考えればいい。そこで襲撃でもなんでもされればいいのだ。

だが“ビッチ”も一緒となると、ル・マレ家の本邸へ向かう用事はまずない。

それ以外でも“ビッチ”が屋敷を出ることなんてあまりないから、不自然になるかもしれない。

これは現実的ではないな。

となると逆か。

エリザベートをひとりで屋敷から出す。

これは自体は本邸へ行くと言うことにすれば、まったく難しい事ではない。

しかし、日中の時間に限られるだろうし、長時間になる事はないので、そこをピンポイントで狙わせる事は可能だろうか？

これも難しいか……。

本邸に宿泊するなんてことが出来ればいいんだが、ル・マレ家とうちの関係はいろいろ微妙だからなあ。それを考えると、今まで

にもなかった事からしても現実問題、無理だろう。

うーん……。

オレ達だけが狙われるようにするのは、かなり困難だな。
状況設定が制限され過ぎている。

比較的簡単に狙えるのって、好き勝手やってるオレぐらいだもんな。
な。

最近オレの周りだけで、おかしい事が続く理由も納得だ。

しかし、本当にエリザベートの身の安全を確保する事は本当に出来るのか？

今はエリザベートが安全だと思っているのはオレの推測でしかない。すべてにおいて確たる証拠もないし、マジどうすりゃいいんだ？
やっぱり身近においてその時が来たら護り切るしかないのか。

327

あーっ！クソッ！！

足りない！足りなすぎるぜっ！！

メイジとしての実力も、貴族としての権力も、危機的状況を回避させることが出来る頭脳も、何もかもすべてが足りなすぎる。

ついでに言えば、身長も、男性機能もだ！

ぐおおお！こんなときにオレは何を言ってるんだ？

マジでバカ丸出しじゃねーか。

オレ様クオリティにガツカリだな。

落ち着いて考えてみれば、肝心のエリザベートの身の安全を確実に確保もしてないのに、エリザベートが生き残った後の為にアニーを屋敷から出すなんて事やってる場合か？

つーか、自分でどうにか出来るなんて思ってる自信は、何処から出てきたんだ？

“絶対条件でエリザベートの身の安全を図る”？
はっ！オレは何様？

どこの諸孔明のつもりだつーの？！

ちっ！自己嫌悪の時間ももったいねえ。

今はとにかく考えろ、無い脳みそから知恵を搾り出せ！

どっつする？

どっつする？

どっつすんのよ？！

とにかくだ。いったんモチツケ、オレ。

単純に、そうシンプルに考えよう。

身を守るのに一番いいのは腕利きのメイジを雇い入れる事だ。今の情勢ならゲルマニア方面からサニエの村にやってくる傭兵も増えているはずだし。

これは金次第と言う面もあるが、それさえクリアできればもっとも簡単な手段だな。

しかし、リスクもある。

これにはいかに信頼できる者を見出せるかにかかっているし、相手にオレが狙われている事を感じていると知らせる事にもなる。

……博打だな。

ならば次に考えられるのは手持ちの駒の強化か。

手持ちの駒、メイジは母上とソフィーナ。

あとはエティアンだが、あれはオレの駒ではないから除外だ。むしろ悪玉菌、バイキンマンだと言える。

母上こと“ビッチ”も論外として考えよう。

じゃあ、消去法でソフィーナにと言う事になるが……、無理だろうな。

ベルギウムからトリステインに来るときに護衛と言う名目だったが、まったく役にたたなかった。魔法も剣も使えない平民の船乗り相手に、いい様にされていたからな。

元来、天然アホアホキャラのソフィーナには争い事が向いていないのだろう。

……てか、手持ちの駒ねえし。

ま、まあいい。

鬱になるのも、凹むのもいつでも出来るぞ。

それよりも母上は無理だが、ソフィーナは何か理由をつけて近いうちに屋敷から出さなければいけないな。

アニーのことがあったばかりだから、同じ様に難癖つけてこの屋

敷から追い出すのはおかしいだろう。普通に何かしらの用を考えて王都にでも送り出すか。

このまま屋敷に留まらせ続けるのは危険だ。

うん、そうすべきだな。

適当にオレが欲しがっている本でも探させてればいいだろう。

詳細は明日にでも考えようか、早いほうがいいしな。

てか、これまでの事から導かれた結論は、最終手段である自身の成長、もしくは強化が必然って事になるのか。

結局そこかよっ！

それが一番難しいってのにさあ！

それに今は、成長なんて悠長な事を言っている時ではない。

一夜漬けで魔力量の絶対値やメイジの実力があがるチートがあれば、今頃オレはどこぞの国の王様やってるだろうしな。

出来ることは微々たる強化ってところだな。

具体的に強化と言う事なら、新たな魔法の習得がもっとも手っ取り早い。

これも簡単な話ではないが、当面は魔法の習得に力を入れよう。

一から新たなスペルの開発は不可能だから、組み合わせで考えていくか。

本当に時間との勝負になってくるな、これは。

考えが一段落着いたかと息をついた時、コンコンと部屋の扉を叩

く音が聞こえて来た。

「アニーか？」

「なんだ？」

オレの問いかけに、扉が開きノックをした人物が入って来た。予想とは違った人物だった。

「“爺”？」

「アルベール様、アニーが荷造りを始めております」

「……そう」

他人の口から実際にこういう話を聞くと結構クるものがあるな。だがこれは必要なことなんだ。

「よろしいので？」

「母上には？」

「いえ、まだお伝えしておりません」

「……悪いけど、ふたつ頼まれてくれるかな」

“爺”のことだからほつといても、そのあたりの事は恙無く済ませるだろうが一応、念を押しておくか。

「なんとお伝えすればよろしいので？」

オレの一言で、“お伝えすれば”なんて察しのいい事を言っていることは、始めからそのつもりで来たのか。
かなわないな“爺”には。

「ひとつはわたしの怒りが収まるまで、アニーをル・マレ家の本邸で働かせてやれるようにしてはどうか、と母上に進言して欲しい。おそらく母上はわたしが発言を変えないと思っているはずだから、それがいいと言うはずだ。もうひとつはその時にマティアス殿に宛てて、その旨を書いた手紙をアニーに持たせておくのがいいと言って、母上に一筆書いてもらってくれ」

「かしこまりました」

「それと」

オレは机の引き出しを開け、用意していた金貨の袋と銀貨の袋を取り出す。

「アニーはこれまでよく仕えてくれた。少ないがこれを渡しておいて」

「承りました」

“爺”もオレが一度決めた事は変えないとわかっているので、淡々とオレの指示に従ってくれる。

不器用な子供だとも思ってくれば有難いのだが……。

出来るだけ悟られないようにしているオレの手から2つの袋を受け取ると、“爺”は恭しく礼をして部屋を出て行くこととする。

「爺”っ！」

ひとつ気がかりがあったのでオレは“爺”を呼び止めた。

「はっ」

「……………エリザベートは、この事は？」

聞きにくいこと故になかなか切り出せずにいたオレは、ゆっくりと窓辺に近づいてから、ようやくその言葉を搾り出した。

「お耳には入れておりません」

「そう……………。ならいい。今日はもう、この部屋に誰も入れないで」

「かしこまりました」

きっとエリザベートがこの事を聞けば、すぐにオレのところによってくるだろう。

そしてあの美しい顔を歪ませてアニーの許しを請うはずである。

「アニーのことを許してあげてください」と。

アニーはエリザベートが一番懐いている使用人だから、まず間違いないくそうなるはずだ。

だがそれは出来ない。

二人の為に出来ないことなんだ。

オレの独り善がりだがここは押し通さなければいけない。

これはたぶん卑怯なことなんだろう。

そして逃げているだけだ。

ただでさえ精神的に参っているのに、エリザベートにまで悲しい顔をされたら決心に揺らぎが出るかもしれない。

こんなのはオレのキャラじゃねえし、御免こうむりたいが今だけは仕方がないだろう。

“ やれる事はやる ”。

数年前、ベルギウムのあの屋敷で決めたことだ。
不意にあの時の事を思い出した。

「いつまで経っても変わらないこともある……か」

思わずつぶやいた自分の声に苦笑してしまう。

窓から空を見上げれば、明るい空に気の早い緑色の月が一つだけ見えた。

今日の夜の散歩は行けそうにないな。

「すまない」と心の中で謝ったオレは、頭をこれからのことに切り替える。

その時、誰に対しての言葉だったのか、オレ自身にもわからなかった。

お誕生日会の招待状は送っていませんか？

その日の夕食は通夜のような重い空気だった。

無理もないことだとは自分でもわかっている。

昼間にアニーを追い出したことを知っている使用人は、オレと目を合わせようとしてもしない。

それに“ビッチ”も最近ではオレのすることに口出しはしないので、今回も自分からオレに干渉をする事は避けている。

未だ何も知らされていない妹のエリザベートは、雰囲気がおかしい事に気づいているようだが、“ビッチ”やこちらを窺うように視線を彷徨わせているだけだ。

「居心地が悪いか」と聞かれれば間違いなく「悪い」と答えるが、これはわかっていた事なので気にはしない。

ただ残念であるのも確かだ。

わかっていた事なのに何が残念かと言うと、今日という日に関係がある。

今はラドの月、ティワズの週。

そして今日はオレの誕生日の前夜であるのだ。

考えてみればこの時期は碌なことが無い。

ベルギウム王国が滅んだ時もそうだし、“ビッチ”に妾になるよ宣言（お兄ちゃんになるのよ宣言）された時もこの時期だった。ノロマな使用人・ミネットのドジで、ホールの階段から突き落とされた時も今の時期だったのを憶えている。

オレからはどうしようもないので、さっさとメシ食ってこの場を離れることにしよう。

夕食後、サニエの村から商人の知らせが遣って来た。

オレが頼んでいた情報を持って来たのは、オレが壺を売った時に見たあのもう中学生的な丁稚の少年だった。少年といってもオレよりは年上であるが。

彼によれば夕方、傭兵の一団がサニエの村からル・マレ家の本邸へ向かうのを目撃したとの事だった。

ゲルマニア方面からサニエの村に入ったその一団の人数は24人。そのうちローブを羽織っていたのは7人で、おそらくメイジだろうと言うことだった。

その報告を聞いて、意外に早かったという印象とメイジの多さに驚く。

人数はオレの事を知っている相手なのだから、2、30人はカタいとは思っていた。しかしメイジを7人も雇い入れるとは想定外もいいところだ。

メイジの実力自体は定かではないが、こちらの戦力に比べると過剰だと言える。

こっちはメイジ3人だけなのだから。

オレと“ビッチ”はラインメイジ、ソフィーナはトライアングルメイジ。

しかも実戦経験者は1人もいない女子供だ。

おそらくソフィーナ対策にトライアングルメイジは1人か2人はいるだろう。多く見積って2人を想定していたとしても、素人ラインメイジに5人のメイジと傭兵が10人以上。

当然、逃がさないように確実に殺す為だろうが多すぎる。

本気度がうかがえてマジ嫌気がするな。

これはもう明日にでも何かが起こると思わない方がおかしい。

まだ本当に準備も何も出来ていないのに……。

オレが甘かったと言うほかない。

明日、朝一番にソフィーナを王都に遣ろうと心に決め、商人の使いを帰した。

そう、オレが甘かったのだ。

何もかもが。

仮寝の夢もまだ見ぬ夜半過ぎ、オレはガラスの割れる音と共に起きた。

正確に言えばいくつかの魔法の強化に目処がつき、寝台に入っただけのところで、眠り掛けていた意識を引き戻されたと言うのが正しいだろう。

「っ！」

その時刻に相応しくない物音の原因にはすぐに思いあたった。それにしても

「今日の今日かよっ！早過ぎんだろ?!」

最近愚痴ってばかりだな、オレは。

悪態をつきながらも飛び起きたオレは、着の身のまま部屋を出る。行き先はもちろん隣の部屋、エリザベートのもとだ。

「誰かつ！誰か起きているかぁーっ!?」

勢いよく飛び出した廊下で使用人を呼びつける。

賊を呼び寄せる事にもなるが、躊躇いはしなかった。人でなしの考えだが、肉の壁は多い方がいい。

オレがその返事を待たずにエリザベートの部屋に入ろうとした時、またガシャンと大きな破壊音が聞こえてきた。階下からは不穏な物音が聞こえ続けている。

悠長にしている暇は無いな。

「エリー。エリーっ！」

部屋に入ると一直線にエリザベートのもとに歩み寄り、安らかに眠りに落ちている妹の肩を優しく揺すって声をかけた。

良い夢でも見ているのか、微笑みの表情をたたえたエリザベートを起こすのは忍びないが、今は命に関わる緊急事態だ。

しかし……、愛らしいエリザベートの寝顔はやはり愛らしい。

オレの妹は本当に妖精のなんじゃないだろうか？と毎日のように疑ってしまうのは無理も無いだろう。安い言葉では表現できないような天使の寝顔に、一瞬事態を忘れそうになった。

エリザベート、恐ろしい子っ！

「……ふあ。兄様？」

「エリー。起きるんだ！」

寝ぼけ眼の表情も脳内保存しておく。これから起こる事態でもしもの事が起これば、確実に走馬灯のスタメン確定だ。

こんな残念なオレだが、くだらない事を考えながらも行動を止めるバカではない。

寝ているエリザベートの布団を乱暴に剥がして、抱え上げるとベットの縁に腰掛けさせた。

眠そうに目を擦っているエリザベートをそのままにクローゼットの扉を開けて中に入る。その中から黒い色のローブを手に取ると、

寢室に戻り幾分意識のはつきりしてきたエリザベートに羽織らせた。

「エリー、よく聞くんた。今、屋敷に悪い人たちが押し入って来ている。彼らはわたしたちを殺そうとしているんだ。だから彼らに見つかっちゃあいけない」

寝起きの状態の5歳児がどれだけ今の言葉を理解しているかはわからない。

でも、オレの必死の表情に何か感じるものがあつたのか、しっかりと意思のこもった目で見つめ返してきたエリザベートは頷いた。

「わたしは今から1階に行つてソフィーナと母上を助けに行く。エリーはご本が置いてある部屋の側の物置に隠れているんだ。アナとのかくれんぼと同じさ。静かに息を殺して見つからないようにしているんだ。わかつたかい？」

今は出来るだけエリザベートを不安がらせないように最後は優しく笑顔を作つて話しかけるが、どれだけうまくいったらう？

そんなオレの不安を感じ取つてか、エリザベートは両手でオレのシャツの裾を掴みコクコクと首を縦に振る。

「大丈夫だよ。すぐに母上とソフィーナを連れて来るから。出来るね？」

オレは嘘をついた。

「ソフィーナは連れてくる」が正しいのだが、エリザベートを安心させる為だ。

「はい、兄様」

今度は小さいがちゃんと声に出して返事をしてきた。

1人で残していく事に不安は残るが、少しの時間なら大丈夫だろう。

「よし、いい子だ。じゃあ、行くぞ」

そう言って部屋から出ると、エリザベート付の使用人であるミネツトと鉢合わせた。

「ア、ア、アルベルさま、っ」

隣の使用人部屋に詰めていた彼女は、オレの声を聞いて起きてきたようだ。寝癖もそのままに青ざめた表情でオレに声をかけてくるが、階下から聞こえてくる悲鳴などに混乱しているようで、舌を噛む。

「ミネツト。今は詳しく話している暇は無い。エリザベートと共に物置に隠れている。絶対に音を立てるんじゃないぞっ！」

「は、は、はいい」

ミネツトに任せるのは正直頼りない。

しかし今はミネツトでもいる方がまだマシだ。

そのミネツトは何がなんだかわからないと言った表情だが、長い間使用人として仕えているだけあって主人の命令には疑問も持たずに従ってくれる。手がかからなくて助かる。

「ちよつとまで」

エリザベートを連れて物置に向かおうとしたミネツトを止めて、

身につけていたエプロンを剥ぎ取る。白色は目立つからな。
隠れておくには邪魔でしかないので文句は言わせない。

これで2人とも隠れるのには、ちょうどいい黒くて目立たない格好になった。

「よし、ミネット。エリザベートを頼んだぞ」

「は、は、は」

オレは返事を聞かずに走り出す。ミネットがいるから物置に入るまで見守らなくてもいいだろう。

それよりもソフィーナだ。

ソフィーナは母上こと“ビッチ”の部屋の隣に詰めている。

一応、アントワープ家の護衛的立場の家臣という事になっているからだ。

本来、当主であるオレの側に控えるのが普通なのだが、ウザがったオレが適当な理由をつけて“ビッチ”の護衛にまわした。

「一番信頼している」とか「ソフィーナに任せていれば安心」などと言ったら易々と納得して、嬉しそうに胸を張っていたのを思い出す。

こんな事ならオレの部屋の側に置いておくべきだった。

正直、階下から聞こえてくる悲鳴を聞きながら間に合わないかもしれないと思っっている。

“ビッチ”は死んでも問題は無い。
というかこうなってしまう以上、それ以外に選択肢は無いだろう。

しかし、ソフィーナには本来関係の無い事だ。いくらアントワーブ家に仕えているからと言って、オレは主人と心中する必要が無いと思う。

本来であれば、事が起こる前に王都にでも遣るつもりだったが、起こってしまった今となってはエリザベートの護衛をしてこの屋敷から逃がしたい。

「無事でいてくれよ。ソフィーナ」

廊下の角を曲がると同時にスペルを唱える。

「イル・ルーナ・スペクトリ

、
「ナイト・スコープ暗視」」

賊が1階から進入したという事は、2階のオレ達の部屋に来るには、この通路を通ってこなくてはいけない。

逆に言えば、オレが出会った賊である傭兵なりメイジなりを確実に殺して行けば、しばらくは2階の安全は確保されるだろう。

問題は7人のメイジだ。

問題は7人のメイジだ。
“フライン飛行”で自分が2階を襲撃することも出来るし、もしくは“レベリ浮遊”で傭兵を送り込むことも出来る。

なのに今のところその様子は無い。

その考えに思い至ったオレは、窓に張り付いて月の光に照らされる屋敷の周りを注意深く観察した。

「やっぱり、周囲を固められているか」

“暗視”で暗闇であるはずの周囲の森を見ると、鈍色の動くモノが確認できる。おそらく傭兵たちの鎧や武器だろう。

ならばメイジであるオレや“ビッチ”が“飛行”で逃走する場合を考えて、外にメイジも待機しているのは間違いない。

正面は確実に1人以上のメイジがいる。裏の庭にも同様だろう。ただの傭兵も合わせれば5〜10人はいるに違いない。

仮に待機している人数を最も多く見積っても、屋敷に侵入してきた手勢は、メイジ4〜5人に傭兵10人前後だ。

3人の実戦経験の無い女子供のメイジと10数人の使用人たちを始末するには十分だろう。

「ん？あれはメイジか？」

平民の傭兵のように月明かりに光るものが無いのでわかりにくかったが、“暗視”の効果で平民の傭兵から20メートルほど離れた裏の庭側に、ローブを被った人影が見えた。

「逃走の時を考えれば減らしておくか。イル・ウォータル・イス・
イーサ・ウインデ、アクア・スナイプ“狙撃水”！」

そつと窓から狙いをつけて放ったシルフィー・ウォータ“水矢”改め“狙撃水”は見事

にヘッドショットをブチかまし、メイジを撃ち倒した。

「あと6人」

あつけないが50メートル以内の範囲なら確実に狙撃できるオレの腕を褒めてもらいたい。“散策”で磨いた腕は伊達ではないのだ。

魔法の威力的に頭蓋骨を軽く打ち砕いているはずなので、あのメイジは死んでいるだろう。

しかし感傷のようなものは、一切無かった。

今は時間を含めて全てに余裕は無い。

人殺しもただ作業としてやるべきだと割り切り、思考を働かせる。だから魔力を無駄に減らす訳には行かない事もすぐに思い出した。

報告があつた時20人を超える人数を相手にするのだから、平民の傭兵にはラインスペルである“狙撃水”などは使わないと決めていたのだ。もちろんオレひとりで相手にする訳ではないのだが、何が起るかわからないのだ。用心に越した事は無い。

その結論が極力、平民の傭兵にはコモンスペルで対応するだった。

おそらく相対したとしても今のオレならば、コモンスペルの“マジックアロー”で倒せるはずだ。

もともとオレには間接系魔力操作の才能の方があつたのは間違いない。本来、コモンスペル習得の最終段階で学ぶ“マジックアロー”を、オレは独学で“ライト”の次に憶えたのだ。

その後の系統魔法の習得でも操作や制御が得意なことから、手元から放つた魔法が、距離を離れても狙い通りに命中させることが可能だった。これは教師であるミス・キャンデが手放しでお墨付きをくれたほどのものだ。

だから今戦闘で想定される数メートルの近距離で動いている^ま的への攻撃でも、狙ったところを撃ち抜けるし、威力も鎧や兜以外のところにてれば死に至らしめることが出来る。

運がよければ不意を突いて、これでメイジも倒せるかもしれない。

「我が意のままに敵を撃ち抜け　　、」

オレはスペルをいつでも放てる状態を維持して、1階にある目的の部屋に急いだ。

間に合えっ！

スニーキングはまたの機会で

「マジックアロー」!

魔法はオレの狙い通りに喉下をブチ抜き、短剣を持った傭兵は血を噴き出しながら倒れた。

側にいたもう1人の傭兵は、剣を手にしたまま動揺して後ずさる。

メイジ相手なら、一にも二にも距離を詰めるのが常套だと思うのだが、それをしないでわざわざ距離をとってくれるという事は、もう1人の傭兵は手練れではないのかもしれない。

メイジ殺しでもないのならば、大した驚異では無いだろう。

「我が意のままに敵を撃ち抜け、マジックアロー」!

今度はこちらに気づかれているので、確実に中てるために胴体を狙う。胸部を覆う形の鎧を身につけていたので、やや下方の腹部に魔法を放った。

「ぐああっ!」

狙い通りに魔法の矢は腹部に突き刺さり、空けられた大きな穴からどす黒い血が流れ出る。

一応の無力化には成功したが、これからトドメを刺さなければいけない。万が一にもこの先に進まれては困るからな。

「て、てめえ」

新手が現れないか確認を怠らないように廊下の奥を注意しながらオレが近づくと、くぐもった声と怯んだような目でこちらを見ている。

明らかに虚勢を張っているだけなのだが油断はしないよ。

主人公属性の無いオレにはそれは即、死を意味するからね。

「アルベール。あなたを殺した男の名だ」

決まった！

このセリフは一度言ってみたかったんだよ。きっと実力のある敵には言う場面なんてないだろうから、こんな格下のモブキャラにしか言えないのが残念だが十分満足だ。

「ターゲットのガ、ガキかつ……」

月明かりが少ししか入り込まない屋敷の中は暗い。傭兵たちは松明を持っていたが、松明では視界なんて1、2メートルがいいところだ。

オレのように“ナイト・スコープ暗視”の魔法でも使っていない限り、数メートル離れた敵などわずかな音やぼんやりとした気配ぐらいしか感じ取れない。

初撃で灯りを持った傭兵を殺したので、床に落ちた松明ではさらにこちらの事なんて見えなかったのだろう。

一人殺した時に後ずさったのも納得した。

奇襲であったのもその理由ではあるが、暗がりにいるメイジが子供であり、しかもターゲットだとはわからなかったからだっただ。

「我が意のままに敵を　っ！」

「フンっ！」

うづくまつた傭兵が持っていた剣を投擲してきた。

おいおい！唯一の武器を簡単に投げるなよ！

予想外もいいところだぜ。

間一髪で避ける事は出来たが、戦場で生き抜く傭兵はなかなかしぶといな。

「チツ……よけ、たか」

あぶなかつたっつーの！

注意深く、油断しなくて良かったぜ！

ノーマルキャラのオレは身体能力も普通だからな。あんなにくらったらシヨンベンちびるほど痛いはずだ。

コイツを殺したら“ライト・ウェイト軽量”の魔法をかけて、ステータスの素早さを10上げておこう。

「こつち、に来……やが、ね。殺して、やる」

腹に穴あけてるマヌケのくせに、元気なもんだな。

あと、それは死亡フラグだぞ。

しかしこの傭兵、どうしてくれよう?!

雑魚は雑魚らしくやられてりゃいいものを、このモブ野郎め!

少し血が頭に上りかけたが、ここは時間が惜しい。

さくつと殺して1階に下りよう。

「撃ち抜け　　、　　“マジックアロー”」

“アロー”の呪文をそのまま続け、放つ。

結局モブ傭兵Bの言葉には答えずに近寄って、確実に殺す為に頭部に魔法を放った。まあ、結果は言うまでもないだろうが、グロい事になったとだけ言っておく。

「これで雑魚はあと15……」

足元に落ちていた短剣を拾い上げてホールに足を向ける。

とりあえず“軽量”の魔法はかけておくか。

「デル・ハガラス　　、　　^{ライト・ウェイト}“軽量”」

ホールにたどり着くと階段の上部に1人の傭兵が居たが、背後を見せた隙に喉を狙って“アロー”で倒した。

倒れて階下の敵に気づかれては意味が無い。

すぐに駆け寄って抱きとめる。大きな音がしないように、崩れ落ちる傭兵を床に寝かせておく。

なんだかスークのようで気分が高揚してくるが、本格的なスニークキングはもつと余裕のあるときにしておこう。今はおフザケするには賭けるチップがデカすぎる。

階段の手すりの間から下を覗くと、玄関ホールに続く扉の前に3人の人影があつた。

「……（メイジが1人に傭兵が2人か。メイジを殺ればどうともなるな）」

ホールは、おそらくそこにいるメイジが使つたであろう“ライト”の魔法で、かなりの明るさが保たれていた。メイジの杖が光ってるんだから、まず間違いないとは思っけどね。

しかし、これは都合がいい。

“ライト”で敵の近くに光源があると言う事は、オレから明るい向こうは丸見えだが、逆に向こうからは暗闇になるこっちは見えな
いはず。

“ライト”を使つてるんだから、あのメイジがオレと同じ様に“暗視”を使っている事はないだろう。ならば先に向こうがオレを見つける事はまずない。

タイミングさえ計れば、狙撃でメイジを殺して、高い位置から楽に残りの傭兵も始末できる。
その流れがベストだろ！

いいイメージを思い浮かべる、オレ。
いいイメージ、いいイメージ……。
1発目の狙撃さえうまく行けば。

「イル・ウォータル・イス・イーサ」

その時。

「きゃああああ！」

今日、何度目かの悲鳴が聞こえたかと思うと、数人の人影がホールに入ってきた。

「ガキどもはどこだと聞いているっ！」

すでに血塗られた剣を持った傭兵がその後から入ってきて問いた
だす。

……何人が使用人が殺されているようだ。胸糞悪いな。

「……」

「さっきの奴のように死にたいのか?！」

忠誠か恐怖かはわからないが、沈黙を保つ一団にその傭兵は剣を
振り上げた。

「まってえ！」

「止めるっ！」

血濡れの剣を向けられた一人の女が声を上げるが、それを止めようと料理人の男も声を上げ、その女の発言を制止する。

「止めんのは、てめえだっ！」

振り上げられていた剣が無造作に振り下ろされた。制止の声を上げた料理人の男の首に、傭兵が振り下ろした剣が吸い込まれる。

「（っ！！）！」

目の前で起こっている無慈悲な光景に、オレは知らず知らずのうちに奥歯を強く噛んでいた。

その理由は簡単だ。

知った顔の使用人に目の前で危機が迫っているんだ。助けなきやっと思つて当然だろ？

オレはメイジを狙っていた“狙撃水”を、無意識のうちに剣を持つ傭兵に放ちかけた。

だが、傭兵に魔法を放つてはダメだ！！

ここは始めの予定通り危険度の高いメイジを狙つて、注意を引くべきだろう？という考えが魔法を放つ事を止めた。

「ぐあああ
」

その一瞬の躊躇の間に、料理人の男は肩口を切られてしまい、うつ伏せに倒れる。……すまん。

「「きやあー」」

目の前で共に働く人間が死んで行くのを目の当たりにして、使用人の一団がいつそう大きな悲鳴を上げた。

「まっつて！は、話すからっ」

その中でも先程、傭兵に話そうとしていた女は1人だけ様子が違っていた。ほかの使用人たちはオレの目から見ても顔から血の気が抜けたような様子だったが、その女は逆に顔を赤くして必死に訴えかけているのだ。

「よし。女、話せ」

「こ、子供たちは上の階の一番奥の部屋よ」

「本当か？上に行ったやつらは戻ってきたか？」

ホールに待機していた傭兵に問いかけたが、首を振って否定の意を返される。

そのやりとりに反論がある女は、今度は立ち上がって声を張り上げた。

「本当よっ！2人とも上にいるの！奥様とは離れた部屋にいるのよ。私はベーナと言うの。ル・マレ伯爵にこの屋敷の事をいつも報告していたのは私！部屋のことも伯爵に伝えているはずだわ。伯爵から私の聞いているでしょ？ねえ？！」

「ああ、聞いているぞ。ベーナだな」

「そう！そうよ。だから私は」

傭兵に自分の存在が知られていた事で、助かると喜びの表情を浮かべたその時、傭兵の剣がベーナの胸を貫いた。

「ど、どう……」

「お前はちゃんと殺しておくようにと、依頼があったからな。ちゃんと知っていたよ、ベーナ」

力なく床に倒れ伏したベーナはすぐに動かなくなる。

「伯爵め！ガキどもの部屋まで知ってやがるなら、教えておけっんだ！」

倒れたベーナの死体を足蹴にしながら、悪態をつく傭兵を見てオレは行動を起こす事にした。

これ以上は待てない。

犠牲が増える前に、 殺る！

「ウォータル、 “狙撃水”！」

待機させておいたスペルの続きを詠唱し、灯りを持つメイジを狙って魔法を放つ。

次の瞬間、なんとも言えない硬い何かが潰れたような音とともに、杖の先に“ライト”を灯していたメイジが倒れた。狙い通りヘッドショットをかまして即死だ。

メイジが死んで杖を放したが、“ライト”は消えない。しかし焦

らず次のスペルを準備する。

階下で怒号が飛ぶ中、オレは残った傭兵を始末する為に次のスペルを唱えた。

「我が意のままに敵を撃ち抜け　　、　　“マジックアロー”！」

狙うは　　、先程床に落ちた、杖だ。

「上だっ！」

傭兵の1人がオレに気づいたのか、そんな声を上げた瞬間。魔法の矢は杖の先を破壊し、“ライト”の魔法を打ち消した。

こうなるとオレの独壇場だ。

この暗闇で周囲が見えているのは“暗視”を使っているオレだけだろう。

急に光を失って動きが止まった傭兵を、コモンスペルの“アロー”で1人、2人と倒していく。使用人の近くに居た3人目の男の喉笛にデカイ穴をあけてやった後、ふっつと一息ついて力を抜く。

「これで残りメイジ5人に、雑魚11か　　」

「おやおや。死ぬために自分から出て来てくれるなんて、貴族のお坊ちゃんしっけはちゃんと躡しっけられていいねえ」

新たな声と共にホールに光源が出現した。続けざまにホール内に“ライト”の光がいくつか灯される。

カツカツとゆっくりと歩いてくる足音と、その落ち着いた女性の声にオレは寒気が走った。

ここに居ては危ない、と。

「おい！お前たちは玄関ホールの方角はわかるな？そっちに隠れている！」

本来なら使用人を肉の壁にでもして、敵の不意を突くべきかもしれないが、考えよりも先にそんな言葉が出ていた。

「し、しかしアルベル様は？」

「わたしの事はいい。これは命令だ。ここに居られては邪魔だからな。それより1つだけいいか？母上とソフィーナの事だ」

「わかりません。寝ているところに部屋に押し入られたもので……」

「そうか、ならいい。行けっ！だが外には傭兵が待ち構えているから、死にたくなければ外にはまだ出るんじゃないぞ」

「は、はい」

走り去る使用人たちを横目に、オレは現れた女メイドから一瞬も目を離さなかった。

「話は終わったのかしら？」

随分と余裕だな。

それが余計に不気味だ。

オレたちが会話をしている間、特に魔法を放つわけでもなく、ゆっくりと近づいてきただけなのだ。そしてホールに横たわった数人の仲間に目をやると、フンと鼻で軽く笑った。

この女、トライアングルメイジか？

なぜだかわからないが直感的にそう思った。確信はないが、ソフィーナがトライアングルという事を知っているはずだから、ドットメイジやラインメイジだけを送り込むという事はないだろう。

傭兵たちの死体を前にしてこの落ち着き。

間違いないか。

「待っていてくれたのですか？」

「だってあなた、あたし好みの可愛い顔してるんだものお。それよ、こいつらあなたが殺ったの？」

「……そうだとしたら、都合が良くないですか？」

「別にそんなことはないわよ。こいつらと行動は共にしているけど、仲間って訳じゃないしね」

「仲間じゃない？じゃあ……、わたしを見逃してくれる、と言う事は可能ですか？」

「残念だけど、それは出来ないわ。あなた、アルベールちゃんですよ？ならあたしの用事はあなたにあるの」

「わたしは先を急いでいるのですが、その用事は後でという訳には

「 いかないわ」

その言葉にオレは杖を前に構える。

ソフィーナの事が心配だが、おそらく今は目の前の事だけを考えなければ生き残れないだろう。

さっきからの戦闘で随分と精神が高揚している。

魔法の威力も上がっているであろう今なら、格上の相手でも何とかなるかもしれない。淡い期待だが、そう思わないと挫折そつだ。

この女メイジを殺す！

そしてオレは生きるっ！

「わたしはアントワープ家当主・アルベール。推して参るっ！」

「あら、勇ましいのね。じゃあせつかくだから、あたしも名乗っておこうかしら。あたしはヘルミーネ。“つむじがせ旋風”のヘルミーネよ。切り刻んであげるわ。フフツ、いらっしゃいー！」

黒皮のボンテージ。ポロリもあるよ

「ボウヤ！そんなヤワな魔法じゃ、あたしを殺せやしないよ。デル・ウインデ、^{エア・カッター}“風刃”！」

迫り来る見えない魔法を、相手の杖の向きから目測で避ける。

“^{ライト・ウエイト}軽量”で身軽になっているとは言え、室内と言っ限られた空間で完璧に避けきるのは困難だ。

オレは戦い始めてから一方的な攻撃にさらされ、体にいくつかの裂傷を負っている。けして深くはなく、致命傷足りえてはいないが、精神的な疲労が大きい。

10メートル程しか離れていない目の前の敵は、その場からほとんど動く事はなく、たまに放つ反撃の“マジックアロー”を簡単に“風刃”で相殺、または最小限の動きで回避する。

敵のメイジ・ヘルミーネは魔法の実力だけでなく、戦いの場数と言う意味でも当然このオレを上回っているんだろう。すべての動きに余裕がある。

「時間をかけていていいのかい？今頃“爆砕”と弟があんたの母親殺しちまつてるかもしれないよ」

時折、このような挑発をしてくるが、積極的に接近戦を仕掛けてきたり、隙の大きいライン・トライアングルスペルは使ってこない。職業柄用心深いのか？それともオレを侮っているのか？判断に迷

う。

まあ、残りのメイジの情報を得られたので、オレには損は無い。

今のところ、切り刻むの宣言どおり“風刃”^{エア・カッター}で攻撃をしてくるヘルミーネに対して、オレはそれを避けた後に commonspears の“マジックアロー”を放って反撃はしている。

しかし彼女にしてみれば、オレの反撃は牽制程度にしか感じないようだ。

まあ、それはそうだろう。その事はオレ自身が一番、理解しているんだし。

それに対してヘルミーネの魔法の切れ味は結構なもので、すでに風の刃がホールの床や調度品をいくつも破壊していた。

おそらく切れ味はオレの“水刃”^{アクア・エッジ}より上だろう。

しかし破壊力に乏しい風の系統魔法だ。

トライアングルメイジと思われるヘルミーネの“風刃”なら、ラインメイジであるオレの“水刃”で相殺可能だろう。速さ・鋭さでは負けてはいても、威力では絶対的なアドバンテージがある。

水の分子密度は空気の1000倍だぜ！

魔力の概念付加があるからといって、その差をひっくり返すなんて相当な魔力量が必要とするはずだ。

魔法が物理法則の一時的な改変だとしても、その改変の度合いが大きければ大きいほど困難なのは自明だ。

だから、たとえヘルミーネの“風刃”が鋭さに特化していて人体を切り刻めるとしても、迎撃時に“水刃”で対処すれば凌げるんだろうけど……。

それでは持久戦に持ち込まれば、こちらが簡単にやられてしま
うからな。

メイジの実力で劣るオレは、あまり無駄弾は撃てないのだ。

「デル・ウインデ 、 “風刃”！」

「おっと！」

「ちょこまかとよくやるねえ！だけど、いつまで続くかしらね。デ
ル・ウインデ 、 “風刃”」

続け様に放たれる魔法に、オレは近くに横たわっていた傭兵の死
体を盾にしてなんとか凌ぐ。

切り刻む事は出来ても、切断するほどの威力ではないトライアン
グルメイジの魔法なのでこういう事が可能なのだ。

何酷いつて？ここは戦場だ！死体損傷なんて気にしないし、死者
の尊厳なんて知ったことか！

「仲間を切り刻むなんて酷い人だ」

内心はまったく逆の事を考えながら、相手には非難の声を投げか
けてみる。

「仲間じゃないって言うてるだろ、ボウヤ。それに盾にしているのは
あんたじゃないか？」

やっぱり。

戦闘が始まってまだ短い時間だが、今まででわかった事がある。

彼女は問答無用というタイプじゃないようだ。

こう言った会話も戦闘のエッセンス程度に考えて、それすらも楽しむ傭兵。

戦いにおいて貴族とは根本的に考えが違う。

ならばたとえ杖を奪ったとしても、それで戦闘が終わる事は無いだろう。たぶん互いのどちらかが死ぬまで勝敗は決まらない。貴族の決闘の勝敗とは違う。

厄介だな。

貴族とは戦いにおける執念が違う。

オレがこんな事を考えながら傭兵の死体に隠れたまま反撃してこないのも、ヘルミーネはその長い栗毛の髪をかき上げて一息ついている。

普通に美人のカテゴリーに属する容姿の割に言葉が乱暴な彼女は、ある一点を除けばSMの女王様のように見えなくもない。

その一点は、服装。

大体、ゲームやアニメの女性敵キャラは破廉恥な衣装と相場が決まっているのに、彼女・ヘルミーネはハルケギニアで一般的なメイジのローブを羽織っていてイマイチ露出に欠ける。別にオレは防御力を疑う水着のような鎧を着ているとか、無駄に扇情的な格好をして欲しいと言っているわけではない。

だが彼女がミニスカートでもなければ、大きく胸元が開いた服を着て谷間を見せるわけでもないのがなんとなく納得がいかない。だって、ここはファンタジーなんだよ！

『夢がいつぱい、胸がおっぱい』の世界なんだ。

傭兵が“黒皮のボンテージ”着ててもいいじゃない!？

彼女もおそらく傭兵と言つ職業柄、メイジとは言えある程度は引き締まった体をしているはず。
なんてもつたいない！

オレを見下す態度と視線。
キツ目の容姿と乱暴な言葉。
相手をいたぶって楽しむ精神構造。
どれをとつてもSMの女王様の素質十分なのに！

こんなところで、いたいけな少年をいじめる暇があったら転職してくれ！今すぐに！

そして心から叫ぼう！
見逃してくれ！

そんなオレの心の中を見透かしたようにフン！と笑う様は、本当に堂に入っけてももうお手上げだ。

彼女の様子を死体の千切れかけた頭越しに見るオレは頭を切り替

え、どうにか相手の油断を誘えないかと言葉をかけ続けてみる。

「わたしとしてはこいつらを切り刻んでやりたいと思っていたので、このくらいの仕打ちはちょうどいいのです。盾の役割も果たしてくれて一石二鳥ですから」

「ボウヤは貴族の坊ちゃんなのにエゲツないねえ。まあ、そういうのは嫌いじゃないけどね」

「わたしもコイツをバラしてくれている、あなたの事を好きになれそうです。あなたは傭兵にしておくにはもったいないほど美人です」

目の前で屋敷の使用人を殺した傭兵を、見るも無残な状態に出来たのは溜飲が下がる思いだが、ヘルミーネとの戦闘はギリ貧だ。

そう、今のオレは困っている。

こんな時だが、困った時は「とにかく相手を褒めてみる！」と靴下を履かない人が言っていたのを思い出した。靴下を履かない人の言葉には、これまでもかなりお世話になっている。

なら実行するのがオレ様クオリティ！

状況が状況だし、相手も親しい訳じゃないが、女性なので有効かもしれない。

そんな打算から軽い気持ちで美人だと褒めてみたのだけれど……。

「かわいいこと言っじゃないのさ。虎視眈々と隙を窺いながらそんな事が言えるなんて、将来が楽しみだね」

いとも簡単に、見透かされてるし……。浅い自分の考えに凹んでしまい、思わず本音がポロリ。

「将来があればいいんですが……」

「たしかに。デル・ウィンデ　、　“風刃”！」

会話が一区切りついたと思ったら、速攻魔法を放ってくる。オレが盾にしている傭兵の死体の頭が、今にも千切れそうにグリングリンしている。

やりたい放題だな！

魔力量に余裕があるトライアングルメイジはこれだからイヤなんだ！

オレは意を決し、風の刃が途切れたと同時に玄関ホールに向かって走り出す。

「おや？逃げちまうのかい？デル・ウィンデ　、　“風刃”！」

どんどん魔法を放つ彼女は、さっきから大して疲れた様子を見せない。まだまだ余裕がありそうなので、距離をとるのは正しい選択だろう。

動き回ることが“軽量”で軽くなった自身の体を最大限に利用することであるので、思いついたら多少のリスクがあってもすぐに行動に移す。

オレは玄関ホールへ向かう途中に倒れていた傭兵の死体に隠れるように飛び込み、迫り来る魔法を避けるが。

「ぐっ！」

飛び込んだ時に空中で直線的な動きになったところを狙われたようだ。もうイヤになるほど冷静な判断をしてくれるな！

戦闘で相当なアドレナリンが分泌されているはずなのだが、左肩をかすめた風の刃の衝撃には顔が歪む。

今日イチのダメージだな。

そんな確信が脳裏によぎった時、ヘルミーネがゆっくりとこちらに向かってきた。今の一撃に手ごたえを感じたのかもしれない。

「ここいらで終わりにしようか？ボウヤ」

「もう付き合ってくれないのですか？つれないんですね。（我が意のままに敵を撃ち抜け）」

ここにきて何か仕掛けてくるのかと思わせるセリフを言い放つヘルミーネを牽制するため、オレは小声で“マジックアロー”を放つ準備を整える。

「フツッ。デル・ウインデ」

不適に微笑むヘルミーネのスペルは今までと同じ“風刃”のもの

だったが、それには構わず牽制の“マジックアロー”を放つ。

「、マジックアロー！」

オレの行動を予測していたように、彼女は魔法の矢が放たれると同時にバックステップをして攻撃をかわした。

チッ！お見通しかよと言葉にする前に、彼女の詠唱が終わっていないことに気づく。

「・ヴォルタ・クラウディ

、
ライトニング・クラウド
“雷雲”！」

「なっ！」

“風刃”だとばかり思っていたスペルには続きがあった。

戦闘を始めた当初から、ヘルミーネが宣言通りに切り刻む魔法を使い続けていたため、聞こえてきたスペルからまた“風刃”だと勘違いしていたところに違う魔法。先入観なんていうマヌケな思い込みで、命取りになる読み違いをしてしまった。

しまったと思った瞬間、“散策”で得た経験からオレの体が動く。

傭兵の死体の影に隠れていても無意味な魔法。

だからその場から離れようとしたのだ。

それでもオレの周りに発生し始める雲に、オレはとっさに懐から短剣を取り出して宙に放り出した。ホールに来る前、2階で2人の傭兵を殺した時に奪っておいた短剣だ。

それと同時にだった。

魔法によって生み出された雷雲からバチバチと雷が生み出され、それを襲うが、大半の電流は短剣に向かってその効果を緩和した。

ちゃんと考えての行動ではなかった。

まさにとつさの判断。無我夢中であつただけの行動。

だけど結果、“雷雲”の雷は放り出された短剣にも分散されたため、気を失うほどのダメージを受けなかった。

結果オーライってやつです、はい。

「しぶといねえ。今ので終わりかと思つたけど、ずいぶん楽しませてくれるじゃないか、ボウヤ！」

アンタ、いやらしい戦術使つてくんなよ！

なに楽しそうな顔してんのさ。

こっちは全然、楽しくねえってのに！

マジ、めっちゃ痛いだけなんツスけど！

だって、オラはM男じゃありませんから！

黒皮のボンテージ。ポロリもあるよ（後書き）

なんだかんだで延長した目標の30話まで投稿する事が出来ました。

感想をお書き下さる方や評価をして頂ける方も少しは増え、誠に有難い限りです。

次の目標も“何話まで書く”と今までのように決めようかとも思っていたのですが、出来ない事は言いたくはありませんので“可能な限り書く”を目標に頑張りたいと思います。

女王様に聞きたかった事、オレ様が知りたくなかった事

「しぶといねえ。今ので終わりかと思ったけど、ずいぶん楽しませてくれるじゃないか、ボウヤ！」

ただでさえ不利なこの状況の中、とっさの機転でなんとかライトニング・クラウド“雷雲”を凌げたのは僥倖だった。

とは言っても、まるっきりダメージが無いわけではない。マジで困ったことに、この女メイジはそうとう魔法での戦闘に慣れているようだ。ダメージが少ないと判断した瞬間、歩みを止め、次の魔法を放とうと杖を向けてきた。

「わたしは運が悪い。あなたは相当名の知れた傭兵なのでしょうね」

「自分でも分が悪いと理解しているのに、そんなセリフが言えるのならボウヤもいい傭兵になれるのにねえ。残念だよ、まったくさ。

デル・ウインデ

「デル・ウォータル

「エア・カッター“風刃”！」
「アクア・エッジ“水刃”！」

2人を結ぶ中間の位置よりかなりオレよりの空間で、魔法が激

突し相殺した。

思ったとおりだ。

速さと鋭さでは敵わないが、威力の点ではわずかに勝っている。

「へえ、やるじゃないか！ “水刃”であたしの魔法を防ぐなんてねっ！ デル・ウインデ “風刃”」

まだ少し痺れが残っていたが、横に飛ぶ事で何とか避ける。それによって、オレを狙っていた“風刃”が直線上にあったメイジの死体を切りつけた。

「打ち合いはさっきの1回きりかい？ つれないねえ」

はいはい。挑発に乗ってあげるよ、“女王様”。

「デル・ウォータル」

「デル・ウインデ」

「“水刃”！」「“風刃”！」

またも2つの魔法がぶつかり合ったのは、ふたりを結ぶ直線上でよりオレに近い位置だった。ヘルミーネは後から唱えたにも関わらずオレに近い位置で相殺したと言う事は、やはり彼女の風の魔法の速さが上回っていると言う事だ。

威力が上でも、中らなければどうと言う事はないのが口惜しい。

「あら、うれしい。今度は挑発に乗ってくれるのかい？ でも、あなたの方が押してるよ。ボウヤ」

「力くらべという訳ですか？」

「そうだねえ。それも面白い。でもいいのかい？ボウヤ。このまま距離を詰めて行けば、どうなるだろうかねえ？」

いったん止めた歩みを再開し、微笑みながらこちらに向かってくるヘルミーネこと“女王様”。

どうなるかだって？そりゃオレが魔法の詠唱に間に合わなくなるに　、っ！

「デル・ウインデ　」

「っ！！デル・ウオータル　」

「“風刃”！」「“水刃”！」

考える暇もくれないなんて、DSだな！“女王様”よお。

しかも魔法は、オレの2メートルぐらい前まで迫ってきていたし。

「フッフ。結構楽しかったけどこの調子じゃ、次か、その次で終わりのようだね」

「デル・ウオータル　」

「無駄よ！デル・ウインデ　、　“風刃”！」

「　・ブラド　、　^{ブラッド・エッジ}“血刃”！」

「なっ！」

オレは、盾にして散々切り刻ませた死体から流れ出た血を使った
“血刃”を放つ。

“水刃”の応用であるこの“血刃”は、血液中の鉄分を使った刃
で相手を切り倒す“血の水刃”アクア・エッジ、オレのオリジナル魔法だ。

鉄分を刃状にしてあるため切れ味は格段に上がり、当然威力も“
水刃”よりある。

しかも液体の中で、もつとも魔力との親和性の高い血液だ。

魔法の威力は、使用者のレベルより一つ上のメイジが放つものに
まで近づいている事だろう。

「きゃあああ！！！」

だから当然相手の“風刃”を打ち消しても、“血刃”は相殺され
ることなく敵に迫り、“女王様”を切り倒した。

倒れる時に杖を放したが彼女は傭兵だ。オレは立ち上がって用心
深く近寄った。

「あなたほどの人が油断しましたね」

「な、なぜ……」

「あなたはわたしの実力では適う相手ではないと、始めからわかっ
ていました。だから切り札を用意して、あなたの油断を誘った」

「コモンス、ペルも、傭兵、たちも……そ、のため？」

「そうです。わたしがわざわざ傭兵を次々と盾にしていたのは、こ
の場に大量の血が流れていて欲しかったからなのですよ。ブラッド・エッジ“血刃”

は体外に流れ出た血液が必要です。体内にある血液は、その人物の魔力が流れているため操る事は困難ですが、流れ出してしまうえばただの液体。もう他者の魔力が流れているわけではありません。しかし血液はさまざまな儀式に使われるほど、最も魔力が流れやすいと知られている液体です。水のメイジであるわたしがそれを操れば、本来の実力以上の魔法を放つことも容易なおわかりでしょう？」

「……だから、それを切り、札に」

「この場に大量の血液。わたしの肩の負傷による驚異度の低下。あなたの魔法の優位性の確認。材料が揃い、あとは確実性を増すためにあなたの隙が欲しかった。あなたは慎重なのでこれが一番難しいと思っていたのですが、その機会はあるあなたがくれた。“水刃”を打ち合う流れは、わたしが切り札を使うのにこれ以上ない状況だ。わたしが一度魔法を打ち合わずに避けた後、あなたの挑発を受けたのも、あなた自身がこの流れを作っていると錯覚させるためです。案の定、あなたは疑うことなく自身の勝利を確信して、これに簡単に乗ってきてくれた。最後の最後であなはわたしに油断してしまっただんですよ、“旋風”^{つむじかぜ}のヘルミーネ」

オレが“女王様”ことヘルミーネの足元に立つと、彼女の傷は右の肩から右の脇の辺りまでに及んでいるのが見えた。その傷は鋭く剣で切りつけられたように、肩口は背中まで達していそうな勢いだ。

致命傷だな。

これは水の秘薬を使ったとしても、水のスクエアメイジでも直せないだろう。

「もう長くはありませんね。最後に誰があなたを雇ったのか、聞か

せてはもらえませんか？」

「言う……とで、も？」

「いえ。だけど聞くのはタダでしょう？」

「かわ、いくな、い……ボウ、ヤ………」

「それは褒め言葉として受け取っておきましょう」

結局、その言葉を最後に返事が返ってくる事はなかった。

最後のオレの言葉が届いたのか、女メイジは最後に口元を吊り上げてから動かなくなった。

これでメイジが4人に、雑魚11か。

このうち半分以上は屋敷の周囲にいるだろうが、まだまだ賊は多いな。

“旋風”のヘルミーネとの戦闘に大きく時間をとられてしまった。ソフィーナが心配だ、先を急ごう。

っと先を急ぐんだが、とりあえずその前に動かなくなったヘルミーネの体をまさぐる。

いや、えつちい意味じゃなくてね。

傭兵なんだから水の秘薬でも持つてるかなと思ってさ。

ほ、本当なんだからね！

胸に触れたのは水の秘薬と母性を探していたからで、けしていやらしい意味じゃないんだから勘違いしないでくれ。よくわからないがCカップぐらいだとか、Dカップまではいってないだとか脳内討論会を開催した事実なんてないんだ。

っ！！！

ほくら！やっぱりあったよ。見事なおっぱい……じゃなくて、水の秘薬が！

常に命の危険性のある戦場に身を置く彼女なら、水の秘薬は持っているんじゃないかと思っただよな。

ましてや名の知れていそうな凄腕のメイドだ。多少値が張るからといって、手に入れてないはずがない。

どうだ！言ったとおりだろ？恐れ入ったか！？

これだけは言っておかないとね。

オレのサバイバル精神を下衆に勘繰る奴がいるかもしれないからな。

さて誤解も解けたし、この秘薬とさっき命拾いさせてくれた短剣を拾って先を急ぐとするか。

短剣と水の秘薬を懐にしまって、オレは足音に気をつけながら1階を進む。

残った賊のメイジも少なくなったため、“探知 デイテクトマジック”で敵の位置や数を探ろうとも思ったが、やはり止めておいた。

“デイテクトマジック”は魔力を探知するコモンスペルだ。

メイジのみならず平民の傭兵もまったく魔力を持ち合わせていないという事はないので、簡単に相手の情報が手に入るのだが、使えば敵のメイジにはこちらの事を感じかれてしまう。

レベルの高いメイジ・魔力の流れに敏感なメイジなら、使った途端に術者の位置もある程度特定されてしまう。

敵の数を知らただけだったり、味方の安否を確認するためだけならいいのだが、オレはこの後エリザベトを守らなければならない。そんな気はさらさらないが、使用人も場合によってはオレが逃がす必要が出てくる。

さらに鋭いメイジがいたなら、魔法の効果からこちらの実力もある程度は見極められるため、そのメイジに実力が把握されてしまう。そうなるとオレがやらなければいけない事には、都合が悪いし、いろいろ厄介だ。

魔力をかなり消費している今のオレには、さらに生き残る道が狭まってしまう。

残っている賊の中に、先程の“旋風”のヘルミーネほどの使い手がないとも言え切れないのだから、事は慎重に進めるべきだろう。時間と手間はかかるが、“暗視”の優位性を活かして、先に敵を捕捉し不意を突く。

今まで通りでいこう。

ホールから食堂の前を通り過ぎ、使用人たちの使っている部屋の一角とは逆の方へと進む。

先程、使用人たちを連れ出してきた傭兵とヘルミーネがそちらに向かっていたのなら、もう奥には傭兵はいないだろう。

略奪をしている傭兵がいるかもしれないが、こちらにかまわないのなら放って置いてもいい。

それよりも考えなければいけないのが、ヘルミーネの口から情報が上がった“爆碎”^{ばくさい}と弟の2人だ。

“爆碎”はもちろんメイジの二つ名だろう。ヘルミーネの弟もメイジの姉弟なのだから、当然メイジだと考えるのが妥当だ。

2階、ホール、ヘルミーネたちを思い返してみれば、賊は2人1組で動いているのかもしれない。基本はメイジとそのメイジを守る役の傭兵との2人1組で、後は平民の傭兵が2人1組と言った具合にだ。

そして2階の階段と、1階の玄関ホールへ続く出入り口にそれぞれ1人、見張りを置いて行動していたとすれば、かなり統制されて動いていると考えられる。

統制されていると言う事は、それだけの経験・力もしくはカリスマがあるという事で、オレには面白くない情報だ。

指揮官は屋敷の中に入ってきているだろうか？

メイジだし慎重を期するタイプなら、襲撃には加わらず周囲の警戒についているはず。オレが一番最初に“アクア・スナイプ狙撃水”で殺したメイジがそうであつたらラッキーだが、幸運補正のないオレに限ってそんなことはありえない。

……不幸属性か。

嫌な事を思い出したな。このタイミングでこの言葉が思い浮かぶという事は、確実にこの先にその指揮官とやらが居そうだ。

今までの情報から考えれば、賊の指揮官はヘルミーネか“爆砕”と考えるのが普通だろうから、この先に居るのは“爆砕”か？

これから向かう先には、指揮官格のメイジを含むメイジ2人と傭兵が2人。

決めてかかるのは危険だが、とりあえずその想定で動く事にする。

オレのやるべき事。

一番奥の“ビッチ”の部屋にまで行く必要はない。

とにかくソフィーナを連れてエリザベートのもとに戻る、それだけだ。

そう思って“ライト”の光が灯った廊下の角を曲がり、やっとも思いでソフィーナの部屋が見えた時、足が止まった。

止めざるをえなかった。

「おいおい！おめえ、ターゲットのガキじゃねえのか？なんだよ、おい！俺様、今日はツイてるぜ。こんなにツイてていいのかよ？！クックック」

「……」

オレはツイてない。

不幸属性どうこう考えた途端にこれかよっ！

目の前に現れた男はローブを羽織ってはいなかったが、手にした杖がメイジである事を物語っている。

「ヒヤッハッハ！恐くて声も出ねえってか？俺様は今、ヒツジヨゝに気分がいいからな。俺様の質問に答えないのはまあ、1度くらいなら許してやるうじゃねえか」

「……」

男は半身でこちらを見下すように、言葉を投げかけてきているのは、どうやら“爆碎”かヘルミーネの弟だろう。

ともに動いているはずである平民の傭兵がみえない。どこに行った？

「おめえよお？“当主の指輪”ってのを持ってんだろ？殺されたくなけりゃ、さっさと渡せ！」

何？なんでそんなことを聞く？傭兵がする質問にしては不自然だ。

「どっして指輪のことを？」

「おいおい、クソガキい！質問しているのは俺様だ！命令してんのもなあ！おめえは素直に質問に答えて、俺様に従ってりゃいいんだよ！死にてえのか？ああん？！！」

「……答えても答えなくても、渡しても渡さなくても同じだろう」

ダメだな。

コイツはヘルミーネとは違うタイプだ。
話すだけ無駄だ。

なぜならコイツは人の話なんて聞かずに、自分の要求だけを通そうとする人間だ。チンピラやゴロツキに類する、理屈の通らない危険なタイプだろう。

「ちっ！せつかく気分が良かったのによお、台っ無しだぜ！まあいい。おめえもイタブってから殺してやるっ！決定だ！今、決めた。もっ、決めたからなあ！」

「っ！今、何と言った？！」

相手が聞き逃せない事を口にしゃがった。

フザケンな！　フザケンな！　フザケンなっ！　フザケンなよ、
てめえ！

「グダグダうるせえな！クソガキ！おめえもバカ女みてえに殺してやるっ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

フザケたこと言っ
てんじやねえ！
……！！

ソフィーナのことかあー！ー！ー！！？

「うおおおー！！！」

フザケンじゃねえぞ！

目の前の男の言葉に激昂したオレは、走りこみながらガムシヤラにスペルを唱えた。

「イル・ウオータル・テイル、
ウォーター・ウィップ
“水鞭”！」

オレの杖から生まれ出た2本の水の手触が、走り込むオレと共に斜に構えた男に迫る。

「ちっ！ガキのクセにメイジだったのか！ウォルテ・ウル・カーノ
ファイヤー・ウォール
“火壁”！」

迫り来る水の手触に動揺もせず、守りの魔法を使うこの男は相当の使い手なのだろう。いちいち悪態をつく余裕さえ見せたのだから、厄介な！

オレは5メートルほどの距離をあけて2本の手触を操る。
男の周りに生まれた炎の壁に“水鞭”が襲い掛かるが、本来の狙った目標にはその手触が届く事はなかった。

上下左右、何度となく打ちつけられる鞭は、じゅっじゅっという

音と蒸気を上げて炎の壁に阻まれる。

「無駄無駄無駄アアアア！！！！この程度の魔法じゃ、俺様に毛ほどの傷もつけられやしねえぜ！」

この魔法の威力は、ソフィーナの“火壁”以上かもしれない。どうやらこの男もトライアングルメイジ以上の実力を持っているらしい。

しかも火のメイジ。

ならばコイツが“爆砕”か？

そんな事を頭によぎらせながらも、操る手触にフェイントを入れ攻撃するがうまくいかない。

それならばと炎の壁の上を乗り越えて天井近くから相手を狙うが、そのたびに炎が天井近くまで燃え上がり“水鞭”を遮る。その事を見せ付けるように蒸気があがるのが、マジで忌々しい。

男を中心に半径1メートルほどの炎の円柱は、“水鞭”ほどの水量の魔法じゃ突破できないのか。
ならば！

「フォル・ダーナ・イル・ウォーター、
“水滝”！」
ウォーター・フォル

“水鞭”を“水滝”に切り替え攻撃してみる。
炎の壁のない頭上の攻撃ならどうだ？！

「あめえ！甘すぎんぞ、クソガキイ！」

男は天井から床に降り注ぐように襲い来る“水滝”を、チラリと

見るほど余裕を持っていた。

予想していたとばかりに“火壁”を解除して、後ろに下がって“水滝”を避ける。それと同時に杖をこちらに向けた。

「ウル・カーノ・エルエク

、
イラフシヨン
“火柱！”」

危険を感じオレも後ろに飛び去る。

今度はオレがさつきまでいた足元から、天井に向かって“火柱”が建ち上がる。

「見え見えなんだよ。おめえら水メイジのやる事はよオ！ウル・カーノ・エルエク、
“火柱”！」

立て続けに魔法を放ってくる男は、先程のヘルミーネのように隙の少ないドットスペルを使ってくる。常に盾役がいるとは限らない傭兵メイジは、自然とこう言う戦い方を憶えるのかもしれない。

オレはヘルミーネとの戦いの時のように反撃はせず、ひたすらそれを避ける。

まるで下手なダンスを踊らされているようでムカつきがMAXだ！

「ヒヤッハアーーーー！！！！ワロンを思い出さず！踊れ！踊れえ！！」

「くっ！？ワロン……だと。貴様はベルギウムの、ワロンの戦線にいたのか？」

「ああ？なんでおめえが、んな事聞くんだよ？ウル・カーノ・エルエク、
“火柱”！」

「っ！聞いてないのか？わたしが、ベルギウム王国の、人間だったって事を。はあはあ」

先程から何発も“火柱”を放っているのに、目の前の男はまったく余裕の表情で笑みすら浮かべている。

戦闘狂か？

ハッ！まさかコイツも、ドSなのか？

コイツがヘルミーネの弟ならばそれも十分に考えられる。

敵を^{なぶ}翫って快感を覚える変態兄弟、そんなキャラ設定はラノベ的にはないはずなんだが……。大体はどちらかが、DM設定となるはずだ。

しかしこの世界はファンタジー。

ドS兄弟も十分考えられるな。

……すると、この戦闘中にオレ相手にハアハアしてたって事か？

キメエ！キモ過ぎんぞ！

うわっ！

あのイツてしまっている目は、間違いない。

同性相手に射精までかましていそうな変態さんの目だ。

オレにはわかる！わかるんだっ！それもただの変態じゃないってことが。

きつと、ヤツはドSの変態で“両刀”使いだってことまでもなあ！

魔法を避けるのに必死でハアハア言ってるオレと、いたぶるのに快感を覚え目がイツちゃっている男。

アレ？……これって、ハタから見たらヤバクね？

いやあ〜！オレにはそんな趣味ねえっーの！

助けてえ〜！キテレ くう〜ん！！！！

「あんだおめえ。面白い事を言いやがんな。ベルギウムの国内に入ってから、俺ら傭兵に与えられたあの任務があつたつてえのに、まだ生きていたヤツがいたなんてなあ」

ニヤニヤしながらこちらを見るのが正直キモい。

だが少タイムツちゃった目をしてはいるが、男がオレの話に食いついてきたのは、ちよつと意外な展開だ。

息を整えられるのは願つてもない事だ。

慎重に言葉を選んで、会話を引き伸ばさねば。

「それはどう言う事だ？」

「クツクツク！思い出しただけでもゾクゾクしやがるな。いいだらう！教えてやるよお。ワロンの戦いの後、傭兵に与えられた任務は“略奪”と“虐殺”だあ」

「なっ?!」

会話を引き伸ばそうと思つていたのだが、オレはその言葉に絶句してしまつた。

そんな話は聞いていない！

「すべてを奪いすべてを殺せと仰せだったのさ、ゲルマニアの貴族

様はなあ」

今の状況でこんな事でオレに嘘をついても、コイツの得にはならない。

どうやら本当の話だろう。

後のルクスベルガ大公国とフリースランド王国との戦いの事を睨んでのことか？

貴族だけでなく平民も殺し尽くして、ベルギウム人を根絶やしにすれば、後顧の憂いもない。

糧秣も現地調達出来るし、傭兵たちに略奪を推奨すれば、不平不満を解消できる。同時にその旨みを憶えてしまえば、その後の戦いにおいても我先にと略奪を望む傭兵が働くだろう。

それだけで随分傭兵の士気が保てる。

そのことが伝わればルクスベルガ大公国・フリースランド王国の士気も上がるかもしれないが、もともと国力に大きな差がある。

時間が経てば経つほど形勢は傾くばかりで、保身に走るものが出てくるのも時間の問題となる。そうなればベルギウム王国が滅んだ時と同じ道を辿るといふ寸法が。

もちろん攻略の手は正攻法・謀略ともに二重三重に張り巡らされていたのだろう。

イヤになるね、大国はさ。

兵力・物資・人材が豊富でとれる戦略の幅がとんでもなく広い。

今代の皇帝であるアルブレヒト3世は謀略に長けているらしいが、即位の時につくった内の敵を相手にしつつ、他国を侵略するんだからドンだけだよ？

オレにもそれだけの才能があれば、今目の前の不愉快なチンピラとも運命の出会いを果たしてなかったんだろうな。

「しっかしベルギウムの人間が生き残って、目の前にいるなんて事ありえんのか？ ああん？ ワロンの戦いの後は南から王都へ向かって掃討戦だったんだぜ？ フリースランドに逃げ込むならまだしも、なんでトリステインにいやがるんだ。なあ、おい！ 答えろ！」

「どうしてそんなことを気にする？ たかが1人の生き残りぐらいで」

「うつつせえ！ ただ俺様の質問に答えりゃいいつつてんだらうがっ！」

男は杖をこちらに向けて、答えなければ魔法を放つぞという仕草を見せてきた。

「……船だ。海を使って来た」

「そうか海路か！ ああ、そりゃそうだよな。あんだけ殺したんだ。平民も貴族も女も子供も、あんだけ手当たり次第に燃やしてやったんだ。その俺様たちが見落としたはずがねえ。アーハッハッハ！ ああゝ！ スッキリしたぜ。もし俺様たちの目を盗んで逃げおおせていたとしたら、仕事を手え抜いたみたいで気分がわりいからな」

「下衆がっ！」

「あゝ？おめえ、今なんつった？」

「ベルギウムの民をどれだけ殺したんだ？！」

「ああゝ！おめえもメイジっつーことはベルギウムの貴族だったつて訳か？そうかつ！それで怒ってんのか？ヒヤッハッハッハ！傑作だなあ、おい！雑魚がイキがつてんじゃねえぞ、こらあ！！？」

「どれだけ殺したかと聞いているっ！」

「なんだ？よええくせに敵討ちとかしてえのか？いいねえ！そういうのを叩き潰すのはサイツコーに面白れえからなあ。その憎悪を増やすために、優しい俺様がいろいろ教えてやるうじゃねえか。」

俺様が参加したのは最後の1年だけだけだなあ。ベルギウムのクソどもを打ち破った最後の戦は、本当にゾックゾクしたぜ！

いつまでもワロンを突破できないボンクラ貴族に、業を煮やした皇帝が送り込んできたのはなんとかつつー貴族だった。そのゲルマニア貴族、たしか辺境伯だったはずだが、そいつは最高だったなあ。あいつらが進んだ後は、燃やされ尽くした焼死体がゴロゴロ転がってやがるんだ。ベルギウムの水のメイジの魔法が無意味なくらいに、すべて消し炭だよ。

消し炭。

なんて名前だったかあ忘れちゃったが、あの燃えるような“赤髪の伯爵”の炎は簡単には消えねえんだよ。水の魔法でやっとして程の炎だ。あれにはさすがの俺様でも正直ブルっちまったもんさ。

ベルギウムのシヨボイ水のメイジが、消えない炎の中でもがき苦しんでんのは笑いが止まらなかったがなあ。

そうそう、たしかおめえみたいな銀髪のメイジがいたんだが、なかなかしぶとくてな。辺境伯と戦っているところを、俺様が後ろから“炎球”フレイム・ボールを打ち込んでやったもんさあ！」

「貴様！」

「そろそろ飽きて来たな。おめえもさっきの舌つ足らずな女メイジと同じ様に、俺様の“炎球”で消し炭にしてやんよあ！」

「舌つ足らずな女メイジ？……それはソフィーナのことか。……ソフィーナのことかああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「うるせえ！死ぬ。ゼークデイ・カーノ・イス・ラー・ウインデ、
“炎球”！」

「シンセシスデメエがしねええ！イル・ウォータル・デル・アース
“合成”！」

月光に輝くアメジスト

轟音。

オレはスペルを唱えてから後方へ思いっきり飛び、うつ伏せで頭を抱える格好をとろうとしたが、後から来る爆風に吹っ飛ばされた。魔法を放った時は7、8メートルほどの距離があつたとは言え、それと同じぐらいの距離を転がされる。

廊下の壁に打ち付けられたオレは、一瞬意識を飛ばしそうになりながらも必死で頭を上げた。

見える範囲に立っている人影はいない。

当然か。

さっきの威力は、屋敷を震わすと思われるほどだった。

辺りの窓も破壊されているし、廊下に飾られていた絵画などもなくなっている。

精神の高ぶりがあつたせいか、かなりの量の“合成”シンセシスを行つてしまったようだ。まあ、あのフザケた野郎をあの世に送るのには、不足がなかったようなので良しとしよう。

オレは先程の衝撃と疲労で気だるい体を起こし、トドメを刺しに向かう。

かなりの威力だったのでよもや生きているとは思っていないが、確認を怠るなんて事はしない。オレは自分の不幸属性を甘くみてはいないからな。

前に歩みを進めながら懐に手をいれ、目当てのものを取り出す。

「よかった。入れ物は壊れていないようだな」

“旋風”のヘルミーネから拝借した水の秘薬だ。

まだ賊はメイジ3人に雑魚が10以上も残っている。フラついて
いるこの体の状態じゃあよろしくないと思い、精神が最高潮に高ま
っている今、治療をしておこうと言う訳だ。

いやオレは最初から最後までクライマックスなのだが、そのクラ
イマックスの最高潮クライマックスって意味でね。

「イル・ウォータル・デル　、　癒ヒールンゲし」

歩みを止め、スペルを唱えた。

精神の高ぶりの効果なのか、水の秘薬の効力なのか傷や火傷がみ
るみる治っていく。その回復速度は、使用人の怪我や、エティアン
の負傷に“癒し”をかけている時とは比べ物にならない速さだった。
ヘルミーネの魔法を受けた肩の大きな傷さえも、キレイに傷口が
塞がり痛みが消えていく。

スゲーな、水の秘薬もしくはオレの高ぶりっぷり！

おかげで身体的には回復したが、精神的というか魔力のほうが心
許ない。

早いところ死体の確認と、自身の治療を済ませておこう。

さっきの“合成”を使った誘爆は屋敷どころか外にまで筒抜けだ
ったはず、賊が集まってくるのは時間の問題だろう。

シンセシス
“合成”。

スペルは「イル・ウォーター・デル・アース」で、水の系統魔法の基礎“凝縮”と土の系統魔法の基礎“錬金”をかけたラインスペルである。

本来、“合成”は補助魔法として様々な秘薬を作る時に使用するものらしい。

これは水のメイジを代々輩出するアントワープ公爵家に伝わるスペルの内の1つで、オレが唯一教えられたものだ。とは言っても当然母親である“ビッチ”にはない。

アントワープ家を出る際に、“爺”がまとめた荷物に入っていた祖父・アントワープ公爵の書籍に書かれていたものであった。

オレの使った“合成”は、集めた水を自己反応性物質へと変換するものだ。簡単に言えば液体爆薬的なものを作ったのである。

自己反応性物質は、発火温度の達すると爆発的に反応して一瞬で燃焼するが、この燃焼には酸素を必要としない。

火の系統魔法である“爆発”^{アトネーション}のように、まず“凝縮”^{コンデンセーション}で空気中の水分を集め、それを“錬金”^{アルケミー}して火薬を生成し、わざわざ“起風”^{ワインド}で酸素と混ぜ合わせてから、最後に“発火”^{イグニッション}で点火させるなんていう面倒な手順を必要としないのだ。

“爆発”は掛け合わせる系統・その手順が共に多いため、ルーンが多くスペルが長い。しかもスクエアスペルなので使うメイジを選ぶ。
ぶ。

ラインメイジであるオレなんかには到底扱えるものではない。“発火”が超苦手だし。

しかし、“合成”で自己反応性物質を生成するのであれば、掛け合わせる系統は2つ。

発火温度に達する熱源つまり火種さえあれば、生成した物質で爆発を引き起こす事がオレにも可能になる。火種は魔法を使った後に自分で“発火”を放つのもいいし、マッチ的なモノを作って携帯しておいてそれを使ってもいい。

今の時点では罫等に有効なだけで、戦闘中に使うには無理があるが、相手が火のメイジなら話は別だ。

相手が火のスペルを唱え、炎が現れたところに合わせて“合成”を使えばいいのだから。

ドットスペルに合わせて使うのは、タイミングの予測やスペルの待機などを使わないと至難だが、レベルが高いスペルに合わせるのは比較的楽だ。

スペルも長く、相手の集中する時間も長いのだから。

そして相手の炎で自己反応性物質が爆発するため、必然的に相手の至近での爆発となる。

しかもあたかも魔法が失敗したかのように敵の手元で暴発するので、場合によっては周囲の敵も動揺させることが出来る。

しかもその爆発による衝撃の威力は、敵の魔法の威力を使用してあるのでかなりのものだ。

今のところ水のメイジにとって相性の悪い火のメイジに、最高に相性の良い魔法と言える。

もう少しで倒れている男のメイジの確認が出来る距離というところで、後方から走ってくる音が聞こえた。

金属音が混ざっていると言う事は、どうやら新手の傭兵のようだ。

「まったく何人いやがるんだ？」

一瞬、後方に気を取られたが、そんな場合ではないと前方の死体の確認を行う。

「半分焼けてんな。……生焼け？」

コイツは杖を持っている右手を前にして斜に構えていたので、右半分が爆発で焼け爛れていた。

「いや、生焼けって言うよりさあ。半焼けって言った方がいいだろう、これは」

たしかにその言葉どおりなのだが、オレにとってはそれを言った人間が重要だった。

「だれだっ!？」

「誰だ、はないだろう？ 賊だよ、賊。ここ、君の屋敷なんだから？ いやあ、知らない顔の人間は賊だって考えない？ 普通さあ」

落ち着いた様子でオレの問いに答える人物が、男のメイジが倒れている廊下の角から現れた。まるで顔見知りの人間に話しかけるような軽いノリに面食らう。

「ああ、これはひどいねえ。“火柱”のヘルムートともあるう者が、炎のスペルでやられちゃダメだろう。これじゃ、“火柱”って言うよりも“半焦”とか“半焼”って二つ名のほうがしっくりくるな。君もそうは思わないかい？」

「……………」

マイペースな男は片膝をつき、半身が焼け爛れて倒れている男を観察している。

今のこの男の言葉から、オレが戦っていた男のメイジは“爆碎”ではなく“火柱”のヘルムートと言うようだ。その名前からも“旋風”のヘルミーネの弟なのだろう。

この事実から、自然と目の前に現れたマイペースな男の正体がかがえる。

「あなたは“爆碎”ですね……………」

消去法で導き出したオレの答え。

その言葉に“爆碎”らしきメイジから、一瞬鋭い視線をこちらに向けられた。

なんてこった！正解かよ！？

どうしてこうも立て続けにオレよりもレベルの高い使い手に遭遇しちまうかね、オレはさ！

しかもさっきの視線は明らかに敵意丸出し。死亡フラグのイベント発動しちゃった？

ヘルミーネ・ヘルムート姉弟との戦闘で、魔力を8割以上消費してしまったオレにどうしろと？

この後、ノベライズゲーム的な選択肢は出てくんのか？
いや、今までも傾向からしても無理そうだな。

……もうBADエンドルートに乗ってしまったとしか思えん。

良くない考えが頭を過ぎっていると、男の視線がオレの後方に動く。

「おや？数が少ないな。たった2人？」

ちょうど後方から傭兵がやってきたのだ。

その数を見て“爆碎”は驚きの表情を浮かべる。

オレは前後を挟まれたのだが、目の前の“爆碎”から目を離すことが出来ない。

これって……万事休すですか？！

「……“ディテクトマジック”！」

傭兵を牽制するために杖を後方に向け、チラチラと視線を動かして逃げ場を探る。

じりじりと窓側の壁を背にして後づさるオレの耳に、“爆碎”が探知のコモンスペルを唱えるのがかるうじて聞こえた。

くっ！

詠唱が早いな。

しかも魔力に敏感じゃないオレでも、その流れの力強さに相手の実力を思い知らされてしまう。

コイツが親玉だ！

「嘘だろう！？私達以外はこの屋敷にたった4人しか残っていないじゃないか。どうなっているんだ？さっきのメイジ殺しのじいさんとい。双子がやられている事とい、おかしい計算違いばかりだ。戦力は女子供のメイジ3人じゃなかったのか？」

探知の魔法を使った“爆碎”は考えるように手をアゴに持っていて、宙を見上げるような格好をしている。動くなら、こちらから注意が逸れた今しかない！

後方の傭兵に目をやり動こうとしたその時。

「まあいいか。それより最後のターゲットにはちゃんと死んでもらわないとね」

聞こえてきた言葉に視線を戻すと、すでに“爆碎”の杖がこちらに向けられていた。

ままよ！

オレは背にしていた壁を全力で後ろ手に押し、“火柱”のヘルムートが出てきたソフィーナの部屋に飛び込む。

同時に破壊音が轟き、オレがいた場所の壁が崩れていた。

今はとにかく逃げよう。

そう思って窓を指し走る。

部屋のベツトを乗り越え、窓に手をかけた時に見てしまった。

ベットと窓の間の空間にあったモノを。

それは無理やり衣服が剥ぎ取られて、犯されたであろうソフィーナだったモノ。

あらわになつた下半身は血と精液に汚れ、上半身は魔法に焼かれ見る影もない。

いつもユルイ表情で愛らしと言えたあの笑顔は、焼き爛れ赤黒い何かになっている。

けして頭は悪くはないのだが、舌つ足らずで小動物のようなソフィーナは、いつもオレをイラつかせていた。

感覚的な言葉で何でもこなす天才肌な彼女に嫉妬し、邪険に扱っているにも関わらず懐いてくるソフィーナに辟易していた。

思いのままに行動し、直感で物事の正解を導き出すソフィーナを、オレは意識的に距離を置いて接していた。

だけど。

人を傷つける事を嫌い、魔法を使わないので平民の船乗りに絡まれている時は、助けなければと勝手に体が動いていた。

生まれてきた妹のエリザベートをオレ同様に可愛がってくれているのを見て、ソフィーナがいてくれてよかったと自然に笑みがこぼれた。

今回の事が起こるかもしれないと感じた時、エリザベートとソフ

イーナの2人は助けなければと真つ先に頭に浮かび、まずはその方法を思案した。

どれだけイラついても、どれだけウザくても、いなくなればいいと心から思つた事なんて1度もない。

オレはそんなソフィーナを慕っていたんだから。

……………ソフィーナは、オレにとってどうしようもなく手のかかる、残念な“姉”だったのだ。

胸が痛い。

ぼつかりと黒い穴が開いたように、感情がそこに流れ落ちていく。頭にはソフィーナとの思い出が浮かんでくるのに、彼女はいつも笑顔なのに……………そのすべてが失われてしまった。

オレはどうしようもなく心が痛くて胸を掴むが、その穴は塞がってはくれない。

それに耐え切れず、とにかくオレはもうその場を離れたかった。廊下のほうから聞こえてくる声を言い訳にして、変わり果てたソフィーナから逃れるように窓から飛び出す。

間に合わなくてごめんな、それとさよならだ、ソフィーナ。

彼女の腕には、一昨年オレが誕生日に送った腕輪がはめられていて、

その腕輪のアメジストが月の光で輝いていた。

鼻水を拭けっ！

オレは窓から中庭に出ると、その場に座り込みスペルを唱える。

ソフィーナのこと呼吸が浅くなり、普段のようにスラスラとは
いかなかったが何とか言葉を紡ぐ。

「我が意のままに敵を撃ち抜け」

振り返って立ち上がり杖を窓から部屋の扉に向ける。

まだ“アロー”を放ちはせずに、しっかりと狙いを定めるに止めた。

狙いは大人の頭の高さだ。

迫る鎧の音でタイミングを計りながらも、視界に動く影が現れたらいつでも魔法を放てるように準備をする。

もうすぐだ……、焦るな。

確実に息の根を止める、ヤツラはソフィーナを殺した賊どもだっ！

「っ！ “マジックアロー”！」

傭兵が入って来たと同時に“アロー”を放つ。

どうやら訓練された兵士ではなかったようだ。

傭兵たちは入り口で仲間と合図を送り合い、身を低くして突入のタイミングを計るなんてことはしてこなかった。21世紀の特殊部

隊並みの連携をとられても困るが、こつも狙い通りに行くと思わな
ってしまふ自分がある。

この世界に来てからの不幸属性のせいで、面倒な性格になつてし
まつていたのが恨めしい。

しかし、この攻撃は足止めの牽制だ。

だから命中しているとは思うが、死体の確認はしない。

さっきの“マジックアロー”が命中していれば、残りは2人。と
は言つてもこの際、人数なんて関係がない。

傭兵は不用意に突入してくれば同じ様に“マジックアロー”でや
られると思ひ躊躇するだろうし、“爆砕”はこちらが部屋のどこに
いるかわからないため、魔法の打ち合いになると一歩で遅れる。

賊の統制をしっかりと執っていたし、頭も悪くはなさそうだった。
その“爆砕”が不利を承知で、いきなり飛び込んでこないだろう。
まあ、この足止めも10秒程度のもだろうが、それだけあれば
十分だ。

オレがスペルを唱えるのには、時間が短すぎると言う事はないか
らな。

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ　っ！！」

“飛行”^{フライ}で姿を見失わせると同時に、エリザベートの待つ2階へ
向かつて飛ぼうとした。その時、後ろから人が迫る気配がした。

集中を切らさないように注意しながら、ギリギリの間合いで真横
に飛ぶ。

ブンツ！という音と共にオレの顔があつた場所を剣が通り抜ける。

「……勘がいい」

勘じゃねえんだよ！気配は感じていたし、ナイト・スコープ“暗視”の効果を甘くみんな！

この三下野郎がつ！！
さんした

「、フライ“飛行”！」

なぜ傭兵が中庭にいたかなんて、今はどうでもいい。

オレは魔法で飛び上がり、当初の目的である2階へと向かう。幸い傭兵は弓などの飛び道具をもつてはいなかつたので簡単に逃れる事が出来た。

あんな三下は無視だ、無視。

本当のことを言えば傭兵は皆殺しにしてやりたいが、今は感情に任せての行動はしないように自制する。

ソフィーナが鍛えてくれたオレの鋼の精神力を持つてすれば、この程度は造作もないっ！

このまま中庭に面した窓やバルコニーから2階に入っては、下にいる傭兵達に簡単にバレてしまうと思つたオレはそれを諦める。

小細工の類だが、この屋敷からどこかへ逃げ去つたように思わせるために、一度勢い良く屋敷の屋根を飛び越えてから、反対の外側に面したバルコニーに降りることにした。

けれど、これも屋敷の周囲を警戒している傭兵たちに見つかっては仕方がないので、最初に“狙撃水”アックア・スナイプでメイジを殺した側から屋敷の中に戻る事にする。

無駄な事かもしれないが、少しでも見つかる可能性は低い方がいい。

「エリー！ミネット。いるか？」

オレは慎重に2階に飛び降りると、すぐさま2人の隠れる物置へと急ぎ、その扉を開け放つ。

「ア、ア、アルビツ！」

「お、兄様あにさま！？」

舌を噛むミネットと、オレの声に走り寄ってくるエリザベートの声がすぐに返ってきた。

よかった無事だったようだな。

「遅くなってすまないな。怖い思いをさせたか？」

首を横に振るエリザベートの頭に手をのせ、オレ自身が妹の無事を確認する。

「わたしが戻るまでに、お前たちを探す人間の気配を近くで感じたりはしたか？」

「い、い、いえ。だ、誰も来てはい、… いただっ！」

傭兵は来なかったと言っ返事を、エリザベートの後ろに控えていたミネットが舌を噛みながら返してきた。

「そっか、ならいい。では逃げるぞ」

この言葉に、オレが頭に手を置いていたエリザベートが勢いよく顔を上げる。

「兄様。は、母上は？ソフィーナは？」

「……………」

なんと答えるべきか……………。

「母上は？」

「……………」

消え入りそうな2度目の問いに、オレはじつとエリザベートの目を見つめた後、黙って首を横に振った。

「では、…」

「母上は殺された」

伝えたくはない。

伝えればこの愛らしい顔が、悲痛に歪むのがわかっているから。

しかしこれはオレが伝えなければならないことだ。

エリザベートにその言葉を言わせないように、強い調子で言葉をかぶせる。

その言葉は、オレは世界で最も愛する妹の母親の死を告げるものだった。

母上こと“ビッチ”は死んだ。

実際にこの目で“ビッチ”の死体を見た訳じゃないが、まず間違いないはずだ。

オレの事を見て最後のターゲットと言った“爆碎”の口ぶりど、“ビッチ”の部屋の方からあの場に現れたと言う事実から生きているとは考えにくい。

本来なら逆だが、ソフィーナが逃げ出す時間ぐらい稼いでから死ねばいいものを！

マジで最後まで役に立たない残念貴族だったな、“ビッチ”め。

「ほう、はは、母上ええ、ぐずつ。ははっ……うえつぐ……」

オレがいろんな意味で顔を歪めるのを見て、エリザベートが本当に母親が死んでしまったんだと感じとっただらしく、大粒の涙を瞳に湛えて嗚咽をこぼし始める。

「エリー。エリー聞くんた、エリー」

「えつぐ、えつぐ。うあああ」

死の迫るこの状況の中で焦るオレは、それを表に出さないように出来るだけやさしい表情を作る。そして優しく声をかけるが、ほとんど効果がなかった。

横目で使用人のミネットにどうにかしると視線を送るが、そちらも両手で顔を覆って肩を震わせている。

こ、こいつも本当に役に立たないなっ！

この際、“ビッチ”の死なんてどうでもいいが、ここでオレたちが死んではソフィーナの犠牲が無駄になる。

「泣くなっ！エリー！母上もソフィーナもわたし達を生かすために死んだんだ！今、ここで泣いてはその想いに報いることは出来ないぞ！」

「うっ、うっ、ううう」

「エリー。母上もソフィーナもお前を死なせないために、賊に立ち向かったんだ。そして誇り高い貴族として死んでいった。母上たちのようにお前も貴族たる振る舞いをしなければ、2人の想いを無にする事になる。」

エリー、悲しむのは後だ。賊がわたし達を殺そうとして、まだ屋敷の中を探し回っている。今は母上たちの願いを無駄にしないためにも、わたし達はこの屋敷から逃げ出して生き残らなければいけないだよ。

わかるね？エリー」

今の事態に焦りながらも、オレは可能な限り優しく、ゆっくり、言い聞かせるようにエリザベートに語りかける。

何度もエリーと名前を呼びながら、エリザベートに語りかけられている事を意識させた。

少しはオレの言葉が届いたのか、エリザベートは目から涙を流しながらも小さく首を縦に振る。

そして、ひしっ！とオレの腰に抱きつき、泣き声を必死で抑えようとする。

……もう少し時間がかかるか。

ならその時間を無駄にする事はない。

「ミネット！こちらに来い」

オレの呼びかけに、涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしたミネットが、傍であわあわとうろたえている。

「ミネット。よく聞け。この屋敷にいるアントワープの者は、もうわたし達3人だけだ」

“爆碎”が“ディテクトマジック”で屋敷内の魔力を探知した時、オレとアイツを除いて「もう4人しか生き残っていない」と言っていた。

そのうち2人は後方からやってきた傭兵で、残りの2人はエリザベートとミネット。

オレの計算では他にも、“火柱”のヘルムートと“爆碎”にしていたはずの傭兵2人と、オレが玄関ホールで待っているようにと言っておいた使用人たちも居ると思っていたのだが、どうやら彼ら

は屋敷から何らかの理由で出たと言う事になる。

こんな事で“爆碎”がオレに嘘の人数を言っても仕方ないので、間違いはないだろう。

使用人たちがいなくなった理由はわからないが、メイジ2人に付いていた傭兵はもしかしたら中庭にいた傭兵なのかもしれない。

“爆碎”が何かを命令して中庭に待機していたと考えるのが妥当だろう。

あの傭兵に見られたこともあるし、“爆碎”の頭がよほど悪くなければ、“探知ディテクトマジック”の結果からもすぐに2階にやってくるのは想像に難くない。もう一度“ディテクトマジック”を使うことも、っ！！

言っているそばから“爆碎”が使ったらしい“ディテクトマジック”の魔力を感じた。

ここを離れる準備を一刻も早く整えなければならぬ。

「えっ？あ、アル、アルベードさま。どっいったい……」

また噛んでいる。

ミネットは相当テンパっているんだろう。もうカミカミで何を言っているのか、さっぱりわからん。

「ミネット。お前は話さなくていい。オレの言うことに首を振るよ
うにしろ」

彼女のテンパった時の噛み癖は自分でもわかっている事なので、オレの命令に従う事にしたのだろう。ブンブンと大きく頭を縦に2

階振った。

「これは了解の合図だろう。」

「じゃあ、魔法をかけるからそこにじっとしている。デル・ハガ
ラス、ライト・ウエイト “軽量”」

杖を自分に向けられた瞬間、ミネットは目を瞑って身を縮こまらせた。

「これで身が軽くなったはずだ」

魔法をかけ終わったオレが声をかけると、恐る恐る目を開けたミネットが自分の両手を不思議そうにキョロキョロと見つめている。何をされたのかわからないんだろうが、説明をするのが面倒臭いのでは今は放っておこう。

てか、鼻水を拭けっ！

お前はエリートは違うんだ。20歳超えた淑女がそんなことではお嫁にいけんぞ！

「エリー。今からエリーにミネットと同じ“軽量”の魔法をかけるから、少し離れるんだ」

未だぐずついてはいるが、少しは落ち着いたのかオレの言つとおり、オレの服を離し一歩下がる。

「デル・ハガラス、 “軽量”」

軽量を魔法をかけるとオレはすぐに膝まづいて、エリーを抱き上げる。

「エリー。両手をわたしの首に回して、そう、しっかり捕まっているんだよ」

エリザベートがオレの言葉に、顔の横で身じろぎした。おそらく頷きでもしたのだろう。

「よし！ミネット。書庫に行くぞ。着いて来い」

ブンブンと首を縦に振るミネットを連れて、隣の書庫に向かう。ゆっくりと扉から廊下の様子を伺い、人影が見えないのを確認してから隣へ移動する。

正直ミネットは足手まといだが、この際仕方ないので連れて行くことにした。

ここで見捨てるのは夢見が悪いしな。

「それとこれを持っておけ」

書庫の扉を開け中に入ると、ミネットを素早く招き入れ扉を閉める。そしてオレは懐から短剣を取り出し、ミネットに渡す。

「ア、アル、アルベールずあつ！」

お前はしゃべると舌噛むから、しゃべんなつってんに世話が焼ける。いつか舌なくしそうな勢いで噛み倒すしな、コイツ。

「しゃべるなど言っただろつ」

ミネットは「しまった」という表情で、条件反射のように口を両

手で押さえる。

そしてそのオレの言葉に首を縦に振りながらも、視線は手にある短剣とオレの顔を行ったり来たりしていた。

「これは護身用だ。賊に襲われそうになったら使っただ。使い方はミネットが決める。ほら」

オレが促すと口を押さえていた手を離し、両手で短剣を受け取る。しかし表情は硬く、何か聞いたそうに口が半開きになっている。

世話が焼けるヤツだな！

「使っ方と言うのは……相手に向けるか、自分に向けるかの選択だ。最後まで抵抗するか、辱めを受ける前に自ら命を絶つのかを、今決めておけと言っているんだ。一応言っておくが、賊に慈悲はないぞ。もうこの屋敷に生きて残っているのは、わたし達3人だけなんだからな。この意味はわかるな？」

震えながら両手の短剣を握り締め、ゆっくりと首を縦に振るのを見届けると、オレはミネットをバルコニーへと続く窓辺に下からせた。

「フル・ソル・ウインデ、
レビテーション
“浮遊”」

書庫の本棚を扉の前に移動させる。

これからやってくる傭兵たちを待ち受ける罠を仕掛けるためだ。

これでなんとか、逃げ出す時間を作り出すことが出来ればいいのだから……。

残り少ない魔力を搾り出したオレは、書斎の外のバルコニーで“爆砕”を待ち受けた。

鼻水を拭けっ！（後書き）

予約投稿させて頂きます。

この襲撃篇を書き始めた時は、前の目標である30話までの2・3話のつもりでしたが長々と書いてしまいました。

次話で一段落着きます。

脱出行

少し前、オレは書庫に入ると罨の準備にとりかかっていた。

相手は“探知ディテクトマジック”の魔力感知によって、こちらの位置を正確に把握できるのだ。罨を張ってもオレ達が別の場所にいると、その罨に誘引する事が出来ない。

そのためギリギリまで書庫に立てこもるそぶりを見せなければならなかったが、どうやらうまくいったようだ。

「ミネット。バルコニーに出ている」

オレはミネットに指示しながらも、扉を開けようとする傭兵たちの気配から注意を外さない。

“施錠ロック”の魔法によって閉じられた扉を、ただの傭兵が開ける事は出来ない。

ここにオレ達がいるとわかれば、必ず“爆碎”が魔法を解きに来るはずだ。この屋敷の中に残っているメイジはヤツだけだからな。

いきなり先程オレを狙った“爆碎”の魔法で扉を破壊されると、オレまで巻き込まれるので魔力の流れに注意する。

すると小さな魔力の流れがあった。

扉の外に“爆碎”が来て“開錠アンロック”のコモンスペルを唱えたようだ。

よし。

これで第一条件と第二条件はクリアだ。

「エリー。逃げ切れるかもしれないぞ。しっかり捕まっておくんだよ」

もしもの時に備え、バルコニーにすぐに飛び出ることの出来る位置で待機していたオレは、抱き上げているエリザベートに声をかける。

エリザベートは声を出さなかったが、その身じろぎで返事が返ってきた。

“アンロック”^{開錠}で鍵を開けた後、傭兵たちが扉を開けようとする。その時にもう一度“ディテクトマジック”でこちらの探知をされたのには、一瞬ヒヤツとした。あの威力のある“爆砕”の魔法をいきなり放たれたのかと思ったからだ。

ガチャガチャと扉を開けようとする音が室内に響く。しかしわずかな隙間が開くも、扉の前の柵のせいで開かない。その事を扉を開けようとした傭兵が“爆砕”に言っているのが、わずかな隙間から聞こえてきた。

急がなければ！

うまく“爆砕”を誘導できた今、罠が効果を上げた時を狙って、逃げる機会に備えなければいけない。

しかし“爆砕”が想定通りの動きをしてくれるかは、正直不安だった。もし想定外の事態になれば他の方法を選ばなければならず、

逃げ出す事が可能になるパーセンテージがぐつと落ちる。

簡単にポンポンと逃亡のための良い方法が浮かんでくるなんて事は、オレの頭ではありえないからな。

けれど“爆碎”が、今のオレにそれほど驚異を抱いていない事が幸いした。

“旋風”のヘルミーネと“火柱”のヘルムートの姉弟を倒したオレが逃げの一手になったことから、“爆碎”もオレの魔力が乏しいのではないかと判断したのかもしれない。

実際にヘルムートの焼けた死体を見てはいても、オレの魔法を実際に見ていた訳ではない。

ヤツが現れた時、「“火柱”のヘルムートともあるう者が、炎のスペルでやられちゃダメだろう？」と言っていた。その発言からヤツはオレが炎のスペル、つまり火のラインスペル以上の魔法を使えると誤解していると考えられる。

その威力からそう何度も使えない魔法なのではないか、もしかしたら魔力の乏しいと思われる今、その魔法を使うことが出来ないの
で逃げているのではないかと判断したのだろう。

使えるのなら逃げる際に牽制で“マジックアロー”を使う必要などなく、その魔法で反撃すればいいだけの話なのだから。

だから“爆碎”にとって今のオレは、魔法で抵抗できるメイジではなく、か弱いターゲットの子供に近いのかもしれない。

オレはバルコニーに出るとミネットうをながし、隣の書斎のバルコニーに移動する。

ん？あれは？

対処しておくか。

「我が意のままに敵を撃ち抜け　　、　　“マジックアロー”！」

バルコニーから屋敷の東にいた傭兵を撃ちぬく。この短い時間では1人しか発見できなかったが、そこから包囲を抜ければ何とかなるかもしれない。

「イル・フル・デラ・ソル・ウインデ　　」

もう準備は出来ている。

後は“爆砕”が扉ごと本棚を吹き飛ばしてくれれば、オレが“合^{シン}成^{セシス}”で生成した自己反応性物質が誘爆する。

その爆発の際に、“飛行^{フライ}”で屋敷の包囲網を突破するだけだ！

結果を言えば屋敷からの脱出には成功した。

あの罫で“爆砕”がどうなったのか、オレは知らない。

あの場を“飛行”で離れることの方が優先される事だったからな。

しかし“軽量^{ライト・ウエイト}”で軽くなっているとは言っても、2人を抱えての“飛行”は困難だった。

数メートルの高さの木ギリギリをやっと飛んでいける程度で、速度もいつものようには出ていない。脱出は出来たが、逃げ切れなかった

言つと微妙なところだ。

だが今はとにかく東へ向かおう。

ちらりと後方を見る。

そこには炎に照らし出された屋敷が、遠ざかつて行くのが見える。きつと炎の灯りで明るい屋敷の周囲からは、“ナイト・スコープ 暗視”と“テレスコープ 遠視”を併用しなくてはオレ達を見つけるのは不可能だろう。

だが油断は出来ない。

今は1リーグ、いや100マイルでも遠ざからなければ。

ある程度“飛行”で距離を稼いでから、オレ達は地上に降り、自らの足で東を目指していた。

“軽量”の魔法のおかげで使用人のミネットも、エリザベートを抱えたオレに簡単に着いて来ることが出来ている。大きな道は待ち伏せの可能性を考えて通つてはいない。北のマル又川に沿って続く細い道を使って東へ向かう。

その途上、思いがけず見知った顔に出会った。

「ミス・キャンデー！」

彼女は2度聞こえた爆発音に、嫌な予感がして駆けつけたと言う。伯爵には2人の部下を借りるとだけ言って出てきたようだ。

……2度だつて？

「ミスタ・アントワープ。あなた方の様子を見れば、おおよそ起こった事はわかります。今はとりあえず急ぎル・マレ家の本邸に戻りましょう」

「……」

暗闇の中、男女2騎の部下を引き連れて来た彼女はそう言うつと、それぞれ騎乗して戻ろうと提案してきた。

なぜ主道でなくこちらの道を使っている？

「ではボリス、侍女の彼女を。イネス、あなたはエリザベート様を頼むわ。ミスタ・アントワープは私とでよろしいねすね」

オレの疑問をよそに、ミス・キャンデは部下に指示を与えている。ミス・キャンデの言葉に「はい」と言って馬を降りるイネス。ボリスと呼ばれた男は騎乗したままこちらに近づこうとしていた。

「……待ってください、ミス・キャンデ。ミネットはエリザベートを抱いて一緒に騎乗させたいのですが」

「3人も騎乗しては速度が落ちてしまいます。今は一刻も早く安全な本邸に戻らなければいけないのだから、私の指示に従って下さい。ミスタ・アントワープ」

やはり……そうきたか。

「ミネットとエリザベートには“軽量”をかけています。ミネットは女性の中でもかなり小柄なので、二人合わせても普通の女性1人分の重さにもならないでしょう。だから速度が落ちる事はありません

んよ。それとモル・マレ家の家臣は子供を抱えた女性と一緒に騎乗させる技術もないのですか？大人の男性1人を乗せるよりも簡単だと思つのですが？」

「女性を男性の馬に共に乗せるのを危惧しているのでしたら」

「そのような事を言っているではありません！心配しないで下さい、ミス・キャンデ。わたしがミス・イネスの馬に乗りたいたいと言っているではありません。2人をミス・イネスの馬に乗せてくれと言っているだけです。あなたの希望通りに、わたしはあなたの馬に乗ります」

理屈を捏ねて引き下がりそうにないミス・キャンデに、オレと言つ餌は与えてやると暗に伝える。

「キャンデ殿。わたしならミスタの希望通り、2人を乗せて騎乗する事は可能ですが……」

そんなオレ達のやり取りに、イネスはミス・キャンデを窺つようにオレの言葉を肯定する。

「……」

ミス・キャンデはいろいろ頭の中で計算しているのだろう。この際だ、オレから提案してやるか。

「なんなら2人を乗せたミス・イネスに先行してもらつて、わたし達は後ろを警戒しながら後を追う形でもいいですから。お願いできませんか？ミス・キャンデ。そうして頂けないのなら……。しかたありません。わたし達は歩いて向かいますので、そのまま騎乗して

護衛をしてもらうことになりませんが」

「アントワープ殿、子供のわがママを聞いているヒマはないのだ！」
今まで黙っていた男が声を荒げて馬を寄せてくる。

「あなたは……たしかボリスといいましたね。なぜですか？」

「危険が迫っている今、そんな事を聞いている時間はないと言って
いるのだ」

「危険？誰がそんな事を言いました？わたしは自身に危険が迫って
いるなんて、一言も言っではいませんよ」

「っ！先程、キャンデ殿が言っていたであろう？」

「それはミス・キャンデが勝手に想像しているだけで、わたしが言
っている事ではありません。それともあなたはわたしの身に何が起
こったのか知っているのですか？」

「夜中に女子供がこんな場所にいれば、誰が見ても何かがあったと
思うであろう！」

「ふむ、それはそうですね。では、その問題の女子供自身が言いま
しょう。わたし達は特に何か身に危険が及ぶ事があって、ここに
いる訳ではないと」

「いい加減にしろっ！」

「いい加減にするのはボリス、貴様だ！わたしはアントワープ

家当主、アルベール・レオポルト・マランド・ド・アントワープだぞ！不敬にも程があるっ！」

「ボリス！あなたは少し黙っていないさい」

オレの提案に押し黙っていたミス・キャンデが、オレの怒りに反応して会話に入ってきた。

「しかし、キャンデ殿！」

しかし、このクソ野郎のことは利用させてもらう。ミス・キャンデはなにかの“利”を持って妥協点を考えているんだろうが、オレには譲る気はないからな。

「死にたいようだな、貴様！トライアングルメイジのわたしを怒らせるとどうなるか……身をもって教えてやる！」

オレは抱き上げていたエリザベートをミネットに預け、杖を掲げる。魔力がほとんど残っていない今、その言葉も行動もすべてが虚勢だ。

しかし、オレのメイジとしての実力を知っているミス・キャンデならば、もしかしたらオレがトライアングルになったかもしれないと考えてもおかしくはない。

「ミスタ・アントワープ。杖を降ろして下さい。部下の非礼はわたしが謝罪しましょう。許してください」

「わたしはあなたの謝罪が聞きたい訳ではない。ミス・キャンデ」

そう言ってクソ野郎に視線を向ける。

「ボリス！」

「くっ！……非礼をお詫びしよう」

ミス・キャンデの言葉にクソ野郎がオレに謝罪をしたが、そんなもん知るか！騎乗したまま、頭も下げん謝罪なんぞ認めん！

断じて認めんぞ！

「馬をおりろ！カスがっ！それで謝罪のつもりか？本当に死にたいようだな。ラグース・ウォータル」

「ミスタ！」

スペルを唱えはじめるオレに、ミス・キャンデは声を張り上げてボリスのクソ野郎との間に割って入る。

「……あなたも死にたいのですか？わたしはあなたの実力程度なら、2人を相手にしても問題ありませんよ」

「怒りを静めていただけませんか？アントワープ殿。今はそのような事をしていないはずですよ」

オレ達の剣呑な雰囲気にもう1人の仲裁者が割って入る。

「……ミス・イネスには申し訳ないが、ヤツの謝罪がない場合は出来ない相談です。ヤツもミス・キャンデもわたしは本気だと理解していない。わたしへの不敬は、アントワープを軽んじると言うこと！家名を誹^{そし}られて、ヒヨるわたしではない！

しかし、どちらかが死ねば嫌でもわかるでしょう。わたしの怒り

と、わたしという人間のことを。ヤツの実力はわかりませんが、ラインメイジ2人程度なら先程よりも組しやすい。すぐに始祖プリミルのもとに送って差し上げますよ」

「先程？やはり何かあったのですね？では、なおさら今はここに留まるべきではないでしょう。それにわたし達はル・マレ家の者です。何かあればあなたにも都合が悪いのではありませんか？」

冷静だなイネス。コイツは有能な人間のようだ。タヌキじじいの“アナゴさん”のもとに置いておくのはもつたいない。

「都合が悪くはなりませんよ。ここで2人を殺しても、不敬を働いたという事実が残った者が証言すればよいだけです」

「2人をあなたが殺めた^{あや}として、わたしがあなたに有利な事を証言するだけでも？」

「部下と妾の子供。どちらを信じるかわたしには興味深いところですが、常識から考えてあなたの言を取る事はないでしょう。マテイアス殿もいる事ですね。

ん？もしかしてあなたも不敬を働いたそちら側につくと言う意思表示でしたか？それは残念ですが……わたしには些細な問題だ。トライアングルメイジ3人を相手にこうして生きてここにいるわたしを、あなたがた3人がどうこう出来るとは思いませんし」

「っ！」

「……」

オレの言葉にボリスのカス野郎があからさまな反応をしたが、ミ

ス・キャンデはオレとイネスの会話をじっと見守っている。

「トライアングルメイジ3人を相手に?!アントワープ殿それは

」

オレの盛りに盛った話にいちいち食いついてくれるイネスは、なかなか好印象だがオレ自身もすぐにここを離れたい。

オレがどうこうと言うよりも、エリザベートの安全を確保したいからな。

「これ以上話す事はありません。その貴様!すぐに馬を降り、わたしの前で膝を折って手をつけ。それ以外の謝罪は受けん。たとえミス・キャンデが同じ事をしてもだ。そう長くは待たんぞ」

さっさと土下座しやがれっ!このカス野郎がっ!!!

脱出行（後書き）

アレレ？

モブキャラ出したら何やら変な展開に……。
次こそ襲撃篇に区切りがつけられるように致します。

あなたもわたしの敵だ

今夜は月夜。

空に浮かぶ2つの月がマル又川に沿って続く細い街道を照らしている。

オレ達が合流した地点から3リーグほど進んだらどうか、月明かりが差し込んでいた林を抜け高台に出た。

と言うよりも正確には崖と言った方が正確かもしれない。

眼下に流れるマル又川から夜風が吹き上がってきて、なんとも心地が良い。

騎乗して東に向かっていていることから、もうわかっているとは思いますが、オレとボリスのひと悶着にも決着がついた。

先頭に行くイネスの馬に乗ったミネツトがエリザベートを抱えている事から、言わずもがなである。

ボリスの名誉の為にあって詳しくは言わないが、そういうことだ。

なにになに？

よくわからないって？仕方ない。

では、クソ野郎の名誉を傷つけない程度に簡単に言っておこうか。この世界に来て初めてジャパニーズDOG E Z Aを満喫させてもらったと言っ事だよ。

事の次第はこうだ。

ミス・キャンデの致し方ないという表情でボリスに視線を送る。それにしびしび従い、ボリスのクソ野郎が馬を降りて膝をついた。それがオレの意に反して片膝だけだったので、オレはカチンと来る。

もちろんオレは修正してやった。

持っていた杖で頬を叩いて、両手両膝を地面につけろってね。

月明かりしか差し込まない林の中で、うつむくと普通は顔は陰になっって見えない。

けれどオレは“ナイト・スコープ暗視”の効果で、顔を真っ赤にして屈辱に震えるクソ野郎の顔を見ることが出来た。

オレ、満足。

最後、ボリスに「以後、口のきき方に気をつける」と言っってやって、その件は治まったと言っ訳だ。

もちろんそのことがあっったので、騎乗の件はオレの提案通りになっった。

イネスの馬にエリザベートを抱いたミネットが乗り、そのイネス

を先頭にオレが乗ったミス・キャンデの馬、最後尾にボリスという順で東に向かっている。

……ここらでいいか。

頃合だろうと思ひ、林を抜けた辺りでオレは声を上げる。

「ミス・イネス！ボリスの馬が落蹄したようだ。わたしたちは蹄鉄を打ち直してみるから、あなたは先に本邸に向かつてくれ！」

突然のオレの言葉に、3騎はそれぞれその歩を止める。

「後方より危機が迫る今、それは危険かと。馬には可哀想ですが、このまま強行した方がいいのではありませんか？」

「いや、あの様子だと緩んだ程度でしょう。どうです？ボリス」

「ナイト・スコープ 暗視”で暗闇でも視界が明るいオレに、どういっつもりだという表情を向ける。」

「……ああ、歩調が少し乱れている程度だ」

怪訝そうにはしているが、ボリスはオレの話に乗る返事をした。

まあ、それはヤツの望むところでもあるしね。

「ならそれほど時間をくう訳ではありません。このままにして危急の際に落蹄となると致命的でしょう。わたし達が残れば、賊が追いついても対処は出来ますし、明るく見通しの良いここで作業をして

おいた方が良いと思いませんか？ミス・キャンデ」

「そうですね。……イネス、先にエリザベート様を本邸にお連れしておいて下さい」

ミス・キャンデももちろんこの話に乗る。

「ミス・キャンデ。よろしいので？」

しかしイネスは、騎乗時の争いいさかで対立していた3人を残しておく事を危惧したのだらう。優秀な彼女はそれは大丈夫なのかとミス・キャンデに念を押してくる。

「かまいません」

「兄様あにさま！」

この危機的な状況の中、先程のやりとりを見ていたエリザベートが、心配そうにオレに呼びかけてくる。オレ達の会話になにか感じるものがあつたのだらう。

我が妹が聡い事は単純に嬉しいが、2人の為にオレもやならくちやいけない事があるからな。

「心配いらないよ、エリー。すぐに追いつくから。本邸に到着したらエリーはわたしの代わりに、アントワープの者としてル・マレ家の方にお礼を言うておくのを忘れてはいけないよ。いいね？」

「……」

「返事はどうしたんだい？」

心配そうに視線を交互にオレとミス・キャンデに送る。オレが大丈夫だと笑顔を見せると小さくコクンと頷く。

「わかりました。兄様」

「よし、いい子だ。ではミス・イネス頼みました」

「はっ！お任せください。では先に屋敷でお待ちしています」

オレに一礼した後、ミス・キャンデに軽く目礼した。そして馬首を翻して、本邸へと向かう東の方角に進んでいく。

すまないな、エリー。

一緒に行けない理由があるんだよ。

オレは目を伏せ、妹に嘘をついた謝罪をする。

ミス・キャンデの後ろの馬上で、もう二度と会うことのない妹の顔を心に刻み込んだ。

そのイネスの馬が見えなくなった頃を見計らい、ミス・キャンデがオレに声をかけて来る。

「ミスタ・アントワープ。いったいど

それがきっかけだった。

その言葉を聞き終える前に、オレはミス・キャンデの腰に回していた手を解き、馬上から飛び降りる。

着地と同時に先程までつぶっていた目を開ければ、すでにオレは心を切り替え、戦闘態勢に入っていた。

「我が意のままに敵を撃ち抜け」

「っ！」

オレの詠唱に馬上のミス・キャンデの息を呑む声が聞こえる。警戒を怠りすぎだ！やはり王立アカデミーにいたミス・キャンデは、実践が豊富という訳ではないようだな。

「マジックアロー！」

魔法を放つと同時にミス・キャンデは馬の首に抱きつくように身を屈め、オレの攻撃に備えたがもう遅い！

「ぐっふ……」

オレの放った魔法の矢は、狙いどおり寸分違わず喉をブチ抜いた。“暗視”の効果の続くオレの目に首から大量に血を噴き出す様子が見える。

そして馬上から手綱を握ったまま、力なく地面に崩れ落ちる、ボリス。

「ヒヒイイーン！」

その時に引つ張られた手綱のせいで、馬が嘶いななく。

イネスの馬はもう見えなくなったので、この馬の声で戻ってくる事はないだろう。だから、今オレが考えなくてはいけないのは、目の前のミス・キャンデのことだけだ。

オレはミス・キャンデからの反撃を警戒して、ミス・キャンデの馬の後方に潜り込むように移動し、その尻を蹴りつける。

その蹴りに驚いた馬は、「ヒヒイイイン」と非難の声を上げながら立ち上がる。

振り落とされそうになったミス・キャンデは、馬を落ち着かせるため、手綱を絞るのに必死だ。

今のうちに先程倒したボリスに駆け寄る。

馬の手綱を握り、ミス・キャンデから隠れられるように馬を動かし、目的のボリスの死を確認する。

ちゃんとクソ野郎は死んでいるようだ。

オレの“アロー”が首の右半分にあけていた。これで実は生きていたなんて事はありえない。

コイツはモブとは言え、一人前に噛み付いてきたキャラだからな。何があっても不思議じゃないから死亡確認は怠らない。

「いきなりボリスを殺すなんて一体どういうことですか!？」

「惚けなくても結構ですよ、ミス・キャンデ。こういう事を望んでいたのでしょうか?」

「何を」

「わたしがきつかけと機会を設けたのです。不意を突いたぐらいで、

卑怯なんて言わないで下さいね」

「……いつから、気がついていたので？」

「始めからです」

「始めから？」

「出合った直後、あなたは2回の爆発を聞いて伯爵に許可を貰い、屋敷を飛び出したと言いました。しかし2度目の爆発からはその時間が経ってはいない。装備を身につけ、伯爵の許可を貰い、部下を連れてここまで来られるはずがない。1度目の後に準備を整え、屋敷を出てから2度目を聞いたとしても対応が早すぎる」

「わたし達があの時現れるのが不自然だったと？」

「そうです。しかもこの道を使うのもおかしい。

たしかにこの道はこの辺りの土地に詳しい者なら使う可能性はある。この辺りの土地に明るくない賊が、使う可能性も低い。

しかし、屋敷から逃げてくる人間を助ける為ならば、普通は主道である広い街道を選ぶ。逃げる者も逃げるのに必死で、賊の待ち伏せなどまでは考えも及ばないでしょう。

それに救援に駆けつける者にしても、距離・時間共にこちらより主道の方がかからないし、普通は逃げる人間がわざわざ薄暗く危険なこちらの道を選ぶとは考えないでしょう」

「だから私達を信用しなかったと？」

「はい。あの時この道にあなたたちが現れられるのは、襲撃の事を知っている人間がいないと無理だと思いました。

始めはあなたが賊の手引きをしたのかとも思いましたが、馬に乗ってからよくよく考えてみれば、あなたの役割はそうではないだろうと思ひ至りました。

手引きしたのはおそらくエティアンでしょう。彼は今頃、屋敷の周辺を賊と一緒にわたしを探しているんでしょうが、今は彼のことではなくあなたの事だ。

あなたに与えられた役割は『賊とエリザベートの取引きをする事』ではないのですか？」

「……」

「襲撃を知っていて、あの時間にわざわざこちら道に現れる。わたしの持つている情報を整理すれば、この結論以外はしっくり来ない出会った時のあなたたちの驚き様にしてもそうです」

「それは不思議ではないでしょう？この時間にぼろぼろの格好をした貴族の子が現れたのですから」

「いいえ。そんな驚き方ではありませんでしたよ。

ああ、ミス・イネスだけはそんな感じでしたが、あなた方2人は違った。ミス・イネスはわたし達を確認するとすぐに杖をしまいましたし、あなたの指示に従って馬も降りた。しかし、ボリスとアナタは杖を握ったままだった。ボリスはあなたの指示があつたにも関わらず、馬を降りずにいましたしね。

おそらく、ミス・イネスはあなた方2人にとってもイレギュラーだったのではありませんか？本来は2人で行動する予定だったが、彼女が屋敷を出るあなた方に気づいてしまった。話して思ったのですが、彼女はなかなか優秀なようですからね。

まあ彼女の事はさておき、わたしはその時の様子にさらに違和感を感じたという訳です。

まるであなた方は何かに警戒しているようでしたのでね。考えられたのは、あの時わたし達だけで現れた事を賊の罠ではないかとあなた方は疑った。違いますか？

賊は24人もいて、その内7人もがメイジだ。トライアングルメイジが何人いたのかも知っていたのかもしれない。なら当然その包囲を女子供だけで突破してこんな所に現れられるはずがないと考える。しかも足手まといの使用人まで連れて。

ならばこの状況は、賊が取引きを有利に行うための何らかの罠なのではないか？と疑った。

ずっと杖を掴んだままだったボリスの焦りようからも、間違いはないと思いますが？」

「……」

返事のないミス・キャンデから隠れるような位置で、オレはクソ野郎の体を探る。

「きつとそちらのシナリオでは『賊に捕らえられていたエリザベトをル・マレ家の者が救い出す』と言う感じだったのでしよう。おそらく賊ともそれで話がついていた。取引きはそういう芝居のようなものをするつもりだったのでしよう。」

それなら領内に賊が侵入して、領主の別邸を荒らされた事実でル・マレ家の評判が傷つく事よりも、その時に迅速に家臣を送り出し、賊を殲滅し別邸の人間を救出したという事で逆に評判が上がる。ル・マレ伯爵は領内の蛮行を許すような領主ではない、とね。

傭兵たちはわたしに最後のターゲットだと言った。わたしは確実に殺せと名指しだったのでしようけど、その事からもエリザベトは最初から殺される予定はなかった事がわかる。予定がないのならどうやって、辻褄を合わせて生き残らせるか。簡単な方法は一芝居うつことだ。

どうせ別邸の生き残りはエリザベート1人。

賊から助けられた人間は、普通助けた人間が賊と繋がっているなんて考えない。これは本人さえそう信じればいいだけの話だから、それで十分だと考えたのでしよう。

所詮、アントワープ家は公式にはトリスティン王国のル・マレ領にはいない事になっている。この件に関わった傭兵たちには襲う場所とエリザベートを連れてくるだけの情報しか与えていないのでしようから、この件を言いふらされても特に問題はない。傭兵たちは家のごたごた位にしか思わないでしようしね。

まあそんな事なんかを考えてみると、あの場所に現れるのは賊との取引きの場所に向かっていた人間だと考えるほうが、わたしにとっては自然な結論だったのです。

あつた！これでしょう？エリザベートの身柄と引き換える代金は「っ！」

ボリスの腰に付いていたずっしりと重い袋を、ミス・キャンデの方に投げる。地面に落ちた袋からは中身がこぼれ出し、それは月の光に鈍く黄金色に輝いた。

「……それがわかっていたから、ボリスを躊躇なく殺せた」

「それはちよつと違いますね。あなたとボリスは、わたしとミネツトを殺す気満々だったじゃないですか。だから殺してやったままです。エリザベート以外の生き残りは始末しろとでも命令されていたのかもしれませんが、そんなものはわたしには関係ありませんから」

「その理由だとあなたは私も殺すつもりなのですね」

「そうなりますね。出来ればル・マレ伯爵いや、オーギュスト・デュ・マレを殺してやりたいのですが、今のわたしには実現不可能で

すからあなたで我慢しておきます。でも、いつか必ず殺してやるつもりですよ。今回のことでソフィーナ・ド・ゴージェイエが死んだ。彼女の敵討ちはする。関わったすべての人間を殺すまではわたしは死ねない！もちろんあなたもわたしの敵だ」かたき

伯爵の裏でどの国が動いているかなんてわからないが、計画したヤツは必ず殺す！死んだソフィーナの敵だからなっ！かたき

「そう……そこまでわかっていたのですね。あなたは初めて会ったときから優秀すぎるとは思っていたけれど、今は恐ろしいわ。でも、なぜわたしが自分の判断で事を起こしたとは思わなかったの？そんな可能性もゼロではないでしょう？」

昔、どっかで聞いたような言葉を言うなミス・キャンデは。しかし彼女は何を言っているんだ？すべて独断なんて誰も考えないだろう、普通。殺すと言っているオレが、そんなことを答えてやる義理はないのだが答えてみるか……。

「以前、ル・マレ伯爵とミス・キャンデが2人である場面を見たことがあります」

あまり口にしたくないから、この言い方で伝わればいいけど……このニュアンスで納得するか？

「そんなことは普段からあることでは？」

ダメか。

「では、書庫の前で会った時に髪を直していた、と言つのはどうでしょう？」

「そんなこと？……髪が乱れば直すでしょう」

少し間があつたな。

オレが何を言いたいか察したが、認めたくないのか？

しかし、ル・マレ家の書庫の先には伯爵の執務室しかない。その執務室でいつもキツチリ纏められている髪が乱れる理由なんて、それぐらいしかないだろうに。

「じゃあ、マシユと“飛行”^{フライ}で屋敷の外に黙って出た時に伯爵の部屋に2人がいるのを見た。もしくはエリザベートを抱えて“飛行”を楽しんでいた時に2人が執務室にいたのを見た、ではどうです？」

「……………家臣だからいることもあるでしょう？」

だいぶ間があいたな。それでも白^{シラ}を切りとおすのか？いや、この流れはオレに言わせたいのか……。

まったく気が進まないが、仕方がないな。

「そうですね。では逆にこちらからお聞きしましょう。ミス・キャンドはわたしがル・マレ家にどのくらいの頻度で来ていたか知っていますか？」

「？テレーズ様がエリザベート様を生んだ頃から、3ヶ月に1度ほど本邸を訪れている」

「いえ！わたしは週に一度はこちらに来ていましたよ」

「……どういふことですか？」

ミス・キャンデは怪訝な顔で聞き返してきた。オレから質問したのも不思議に思っているようだが、その答えも思っても見なかったものだったようだ。

「この1年、わたしは夜の散歩を趣味にしているのですが……、ご存知でしたか？」

「いえ。それが何か関係が？」

「その夜の散歩と言うのは、わたしがアナに頼まれた本を読むために、夜密かにル・マレ家の本邸を訪れていることなのです。ナイト・スコープ“暗視”を使い、黒いローブを身に纏って夜の闇にまぎれ、“飛行”で直接アナの部屋のバルコニーから訪れていたので、ル・マレ家の者には気づかれなかったのでしょうか？」

「もしそんな事をしていたとして、それをあの子が話さないはずないでしょう？だってあの子は」

「言わせねえよ！それ以上は言わせねえ！」

「アナには！本を読みに来る約束をした時にもう一つ、“自分の部屋にいる時にしか私の事を考えないように”という約束もしたのですよ。その約束を破ったら2度と本を読みには来ないと」

きつと彼女はアナの“心の声がダダ漏れ症候群”の事を言おうとしたのだろう。だけど、いくらミス・キャンデとはいえ、アナを将来アホ毛の子呼ばわりはさせねえ！

今はあなたのことだ！ミス・キャンデ。

「……」

「心当たりはあるでしょう？おそらく彼女のことですから、わたしの事を思い浮かべるたびに「アルベル様のご事は考えてはダメ」とでも漏らしていたのではないのですか？実際、わたしが正式に訪問した時にも、その言葉を聞いたことがありますしね。

彼女はノエリア様やマシユーから「たびたび屋敷に来るように催促して、困らせてはダメだ」と言われていた事を、わたしも聞いています。あなたを含めたル・マレ家の者は、彼女がわたしの事を口にしたとき、そのことを言っているのだと勘違いした。しかし本当のところは夜の密会、もとい読書会の事を言っていたのですよ、彼女は。

「ここまで言えばわたしが何を言いたいのかお分かりでしょう？」

「……そう、見られてしまっていたのね」

「はい。わたしは夜に」

オレは馬の陰から身を曝さらして、ミス・キャンデの目をしっかりと見据え、心にしまっておいたモノを吐き出す。

「あなたがル・マレ伯爵の寢室しんしつに居るのを何度か見ているのです」

あなたもわたしの敵だ（後書き）

昨日、操作ミスで8000字ほどの文章が消えてしまいました。
モチベーションが底をつきそうな状態でしたので、書き直した文章
のボリスには3秒で死んでもらいました。

というか……全然終わりませんよね、この話。

終わる終わると言っておきながらどうしてなのか作者にもわかりま
せん。

この先、どうなるのかもサッパリです。

独白

「あなたが、ル・マレ伯爵の寝室に居るのを何度か見ています」

「……」

「だから、傭兵の口から“伯爵”の言葉が漏れた時にはすでにあなたを疑っていましたし、さつき出会った時に確信もしていました。そして、今までのいろいろな事が全てが繋がったのです」

「あなたを……さぞかし失望させてしまったのでしょね、私は」

月明かりの下で寂しそうに呟くミス・キャンデは、オレが知っている彼女ではなかった。

「わたしはアナタを尊敬していました、本当に。わたしの知るメイジで最も尊敬し、敬愛していたと言ってもいいでしょう。だから今は残念でなりません」

「そう」

オレが杖を向けていると言つのに、月を見上げながら小さく返事をするミス・キャンデの様子に、思わず心の中で思っていた事を口に出してしまふ。

「月並みですが、なぜこんなことになったのかと聞いてもよろしいですか？」

「……………こんな事とは、あなたとあなたの母上を殺す為に手を貸したこと？それともル・マレ伯爵との関係？その両方かしら」

「家臣だから、という理由ではないのでしょうか？あなたはそんなにバカな人ではない」

オレはどちらの問いにと言っわけではなく答える。

「ミスタ・アントワープ。教師として最後に教えておきます。……………もう少し、人というものを学びなさい」

そう答えた彼女の表情を見たオレは後悔した。まったく生気を感じられない顔が、操り人形のように口を開き、抑揚のない言葉を発したからだ。

そして焦点の合っていない目でオレを見つめ、答えの言葉を続ける。

「私、セシル・ド・キャンデがマティアス・マルセル・ド・ティボーを愛していたから、
ただそれだけのバカな理由よ」

「マティアス殿を？」

「さすがにあなたでも、そこまではわからなかったようね」

「それでは……」

「そう。そして彼女たちが憎かったのよ」

ミス・キャンデの整った顔が憎悪に歪む。口調も女教師然としたものではなくなった。これが本来の彼女なのだろう。

そう感じながらオレは話を促した。

「それはノエリア様とわたしの母上ですね」

「……わたしは15の時魔法学院で出会ったマティアス様に恋してしまっただの。」

その時マティアス様は2つ上の学年だった。

その魔法の才能と人柄で多くの取り巻きの女の子たちがいたわ。

わたしは……その取り巻きの中の1人。

彼は卒業と同時に魔法衛士隊に入るだろうと言われていたほどの魔法の実力者だったの。

私の恋する相手はそんなエリートだったから、当時のわたしは必死に勉強したわ。

幼さゆえの盲目さだったの。

家柄も、容姿も、スタイルも、私には誇るものがなかった。

だからメイジとしての実力が上がれば、彼の目に留まるかもしれないと思っていたのよ。

来る日も来る日も学院の図書室にこもりつきりだね。
他の子たちが、広場で彼と楽しそうにお茶をしているのを見ては、
学院の図書室に逃げるように向かったわ。

けれど私にはメイジとしての実力がなかった。

そんなことは両親の事を見ればわかるのだけれど、考えないよう
にして本を読み続けた。

知識を得れば得るほど、その事実は私に語りかけるの。

お前には才能がない、自分でもわかっているだろう。

ほら！こんなスペルも唱える事が出来ない。

諦める。

無駄だ。

夢はもう覚めているだろう？

ってね。

でも私には諦めることが出来なかった。
それに縋るしか思いつかなかったから。

そんな毎日が続いて、夏期休暇が始まるうとしていた頃に奇跡が
起こった。

図書館に探し物に来たマティアス様が私の読んでいる本を見てこ
う言ったわ。

「君の読んでいる本は、ひょっとして“失われた魔法とマジック
アイテムの関係性”かな？」

その時に声をかけてくれた事は今でもおぼえているのよ。
一言一句間違えずにね。

だってそれがマティアス様との初めての会話だったのだから。

それから図書室で会うことが多くなり、次第に話すようにもなつた。

結局は恋人にはなれなかったけれど、マティアス様が卒業しても手紙のやり取りはしていたの。

マティアス様が魔法衛士隊のヒポグリフ隊に入ってから1年、2年と続いた。

その後、私が王立魔法アカデミーに入ってからもね。

でも突然だったわ、彼の結婚は。

結婚の事を手紙で知った時は、ノエリア様の事が憎くて憎くて仕方なかったわ。

その後に来た手紙に、これが最後の手紙だと書かれていた時は、私の中に積み上げられていたモノがすべて崩れていくのがわかった。

だからノエリア・マリー・ル・ブラン・デュ・マレを呪った。

地位と名誉を約束して私から彼を奪ったと。

でもどうすることも出来ない。

それから全てを振り払うように、王立アカデミーでの研究に没頭したわ。

皮肉な事に魔法の才能はなかった私だけけれど、研究は認められるようになった。

評議会でも私の名前が挙がるほどに。

その頃の私はゴーレムのように決められた研究をこなすだけの存在になった。

毎日、毎日同じことの繰り返し。

奇しくも学生時代にマティアス様に声をかけてもらった時期のようにな。

そんなある日、研究の資金を得るための後ろ盾を探すため、評議会の議員と共に園遊会に行く事になったの。

その園遊会で運命が私に味方した。

後ろ盾を探すために、議員が最初に紹介してくれたのがル・マレ伯爵よ。

私からマティアス様を奪った伯爵家の当主だったの。

伯爵の「跡取りの魔法教育のためによい教師を探している」という言葉に私はこれだ！と思った。

「私からマティアス様を奪った憎いノエリアという女に復讐するチャンスだ！」

「始祖ブリミル様が、失われた魔法を甦らせようと研究している私にその機会をくれたんだ！」

そう思ったわ。

すぐに暗い感情が私の中を埋め尽くした。

復讐してやるうなんて思っていたの、はじめはね。

でもここに来てから次第にそんな事考えないようになってしまった……。

ノエリア様は私が考えていたような方とは正反対のお優しい方だ

つたし、マシユー様やアナコレット様の無邪気さが私から暗い感情を濯いでくれた。

もちろんあなたもね。

あんなに苦しかったのに。辛かったのに。

それらを全部同じ様にノエリア様に味あわせてやるうと思っただのに。

暗い感情はどこかに流れて行ってしまったの。

そしていつしか今までにないような、心を満たされた感覚を感じるようになった。

あなたは本当に不思議な子だったわね。

まだ小さいのに落ち着いていて、大人びていた。

それなのに好奇心旺盛で、ヤンチャで、すぐ子供っぽいところがあるんだもの。

どんどん私の教えた事を吸収して成長していくあなたを見ていて、あなたのような子が欲しいと思ったわ。

アカデミーで研究に没頭していた頃には考えられないぐらい穏やかで安らぎを感じる日々だった。

……でも、あなたの母上がその日々を狂わした。

ノエリア様のような方がいらっしやるのなら仕方がない。

マテイア様を忘れられると思っただのにあなたの母上はマテイア様の子を身籠った。

それを聞いた時に、また私の中で暗い感情が生まれてしまったの。

前よりもずっと深く、ずっと重い感情が。

私も側に居るのに、私のほうがずっと長い間思っていたのにつて。

だから許せなかった。

あなたの母上のことを今までの誰よりも強く憎んだわ。

マティアス様にも関係を辞めるように言った、私は卑怯だからノエリア様やお子様たちの事を使ってね。

今からでも遅くはないって。

そして伯爵にアントワープ家をル・マレ伯爵領から追い出すべきだとも進言したわ。

それは結局聞き届けてくれなかったけれどね。

ただどなんとか出来ないか、手段はないかって諦めはしなかった。しばらくそんな事ばかり考える日々が続いて、それが終わる日が来た。

456

ある日、ル・マレ伯爵から呼び出されたの。

私はアントワープ家を追い出してくれるものだとばかり思って、急いで伯爵の執務室に向かったわ。

すると唐突に言われたの。

「セシル。君は学生時代マティアスと恋仲だったそうだな」と。

伯爵が何処からそんな事を吹き込まれてたかは知らない。

けれど私は否定したくなかった。

そんな事実はなかったけれど、ただ手紙のやり取りをしていただけなんて、それだけなんて言いたくはなかった。

それを勘違いした伯爵は「昔のような関係に戻りたくてこの屋敷に来たのなら……見てみぬ不利をしてやらん事もない」と切り出されたわ。

あなたの母上とのことがあるから、マティアスを王都の別邸で執務をさせようを思っている。

その時、わたし1人をつけて身の回りの世話をさせてもよいと。ノエリア様や子供たちへの後ろめたさは少しはあるだろうし、あなたの母上と引き離された義息子はきつと気を落とすだろう。

その時、側に居て励ませばもとの関係までとは行かないが、君の望む関係にはなれるのではないかと。

かつて憎んだ人間が、もっとも欲するものを与えてくれる。その申し訳なさと、この上ない喜びが私の心を満たした。

その時は今までの人生の中で、最も歓喜した瞬間だったかもしれない。

でも次の瞬間、私のすべてが凍りついた。

ル・マレ伯爵がそのための条件を提示してきた、その内容に。

その条件は“私がル・マレ伯爵その人に抱かれる事”だった。

愛人になれと言うことだったのよ。

その時、悟ったわ。

この男だ！

この男がマティアス様を私から奪い、ノエリア様を怨まさせていた男だったのだとね。

だけど結局、私は恋焦がれる人と結ばれるために、恋する人の父

親に抱かれたの。

わたしの初めてを！

わたしからマティアス様を奪っていった憎い彼の義父に捧げたのよ！

それでも……マティアス様に抱かれ、側に居る事が出来るのなら

……

私は幸せなの！

そうやって私は望みを叶えたわ！

ずっと思い続けてきたマティアス様に抱かれる事が出来た。

嬉しいはずなのに！

念願が叶ったはずなのに……。

抱かれた後には幸せよりも、ノエリア様への後ろめたさと、あなた達への申し訳なさで一杯になる。

私の事を尊敬していると言ったわね？

敬愛していると！

こんな自分勝手に、醜く、汚い私を知った今でもそんな事が言えるのっ！？

私はこんなにも自分の事を軽蔑してるのに、あなたはっ！！」

そこには凜とした彼女の姿はなかった。

オレには10代の少女が恋に破れた姿に見えた。

だからオレは、泣き崩れ、自分の言葉に取り乱すミス・キャンデ

に、今思っている事を告げなければと思った。

「変わりません」

「えっ？」

「たとえミス・キャンデが今話したことが事実でも、あなたがわたしに教授したくれたことが消えてなくなってしまうことはありません。たとえミス・キャンデが自分の事を嫌っていたとしても、あなたがわたしやエリーに微笑みかけてくれた笑顔をわたし達が嫌いになる事はありません。もちろん敬愛している事も、尊敬している事もこれからずっと変わりはいしないでしよう」

「どうして……、どうして私じゃなかったのかしら。結局、私を抱いてくれたのに。どうして最初から私を選んでくれなかったのかしら。どうして……」

その問いにオレは答える事は出来ない。

聞かなくてもよかった事を聞いてしまったオレは後悔しているが、やらなければいけない事はやろう。

それはきつと後悔はしない。

「……でも、ソフィーナの敵かたきだけはとらせて頂きます。死んでください、ミス・キャンデ」

話はもう終わりだ。

杖を掲げたオレは次の瞬間、前身を襲う痛みを受けた。苦痛の中、驚いた顔のミス・キャンデが逆さまに見える。

いや違うな。

どうやら逆さまになっているのはオレらしい。

視界の不自然さから、やっと自身が吹き飛ばされた事を理解した。

宙に浮いていた時間は意外に長く感じられたが、思考ほど体は思い通りにはならなかった。

その後、地面に打ちつけられた衝撃は感じたけれど、それ以前の痛みのせいでそれ以上に痛いとは思わなかった。

まるで自分の思い通りに動かない体を、どうにかして動かそうとするが、まったくうまくいかない。

やっと頭だけを動かし、定まらない焦点で視線を彷徨わせると、居るはずのない“爆碎”が見えた。

ド畜生っ！！！！

そう言えばあいつの死体は確認してなかったな。

こんなところで“実は敵が死んでいなかったイベント”が起こるなんて聞いていないぞ！ファツキン・ゴッド！

このままソフィーナの敵もとれずに、死ぬのかオレは……。

“爆碎”が見えた方向から、傭兵らしき人影がこちらに歩いて来ている。

トドメを刺すつもりだろう。

クソツ！おめえらに殺^ヤられるなんて冗談じゃねえ！

「……………いる……………」

「こんな事になって残念です、アルベール様。わたしもいろいろな貴族を見てきましたが、未だかつてあなたの様な方に会った事はなかった。平民を見下すことなく、わたしの様な者にも何度も話しかけて下さる。そんなあなたは嫌いではなかった。“狩り”ではわたしの優秀な弟子でもあった。だからこれは本意ではない。けれど伯爵様の命は絶対なのです。だから、せめてこの手でトドメを刺して差し上げましょう」

このアニメ声野郎めっ！

よりもよって貴様にトドメを刺されることになるとはな！エテ公おおお！！

「……………ら・そ……………」

「何か言い残す事はありませんか？」

「……………いんで……………」

「なんですか？」

ボソボソと小さく声を出しているオレに、エテ公は膝を付いて耳を傾けてきた。

しかし今日はホントによくしゃべりやがんな。

けどその声じゃ、すべてが台無しなんだよ！
死ねっ、サル野郎！！！！

「……いつか、コロ……す！」

オレの啖呵に目を閉じ頭を軽く振った後立ち上がり、エティアンは腰に差していた剣を抜いた。

「残念です。……ではさらば！」

てめえに殺られるくらいなら
！

「フライ飛行”！」

残りのすべての魔力を使って、オレは崖の下に自殺とんだ。

独白（後書き）

これでやっと一区切りついたんじゃないでしょうか？

最後の2話は途中で、ブツた切ったので変な感じになってしまいましたが、後々時間を見て修正致します。

2ヶ月近く続けてきた私の“活字嫌い克服計画”も、これで一定の成果を得ました。

次はハードカバーの本でも初体験してみようかなと思っておりまして、今後はコンスタントな更新はないでしょうが、目標である“可能な限りの”更新をしていければと思っております。

挿話 アニー My Love

先日、アルベール様が亜人退治をなされた時は本当に驚いたものです。

その日もアルベール様はいつものように“散策”にお出かけになられ、わたくしたちはエリザベート様のお世話を命じられておりました。

わたくしがエリザベート様に午後のお茶をお持ちした後の事。

散策からアルベール様がお帰りになったと知らせを受け、わたくしはいつものように足を拭くための水を桶に入れて、ミネットと共に玄関ホールに向かいました。

玄関ホールに到着し遠目に見れば、取り乱したご様子のレイモン様がいらっしゃいます。

「もしかや散策中にお怪我でもなされたのか？」という心配から、はしたなくも足を速めて玄関ホールのソファに座るアルベール様の下へ駆けつけてしまいました。

レイモン様の後姿越しに見えたアルベール様は少しお疲れのご様子。

しかし、そのお姿を目にしてみるとお召し物は汚れているもの、特にお怪我をされているようではありませんでした。

ホツと胸を撫で下ろしたわたくしは、「ではなぜレイモン様は何をこれほどに取り乱していらっしやるのдарう？」と疑問に思いながらも、アルベール様の足元に水桶を置きお世話を始めました。

「失礼致します」

「ああアニー、ありがとう」

「お聞き下さい、アルベール様！」

先程からレイモン様がアルベール様に熱心に話しかけていらっしやるけれど、アルベール様はそれを無視しておいでです。

そんな中でわたくしは膝を着き、アルベール様の靴・靴下を脱がせ、履物を少し捲くり上げ、お疲れのご様子であるアルベール様の足を水桶に漬ける。

いつもの手順で右足が終わると、次は左足。

「アルベール様！では只今より、わたくしがル・マレ家に直接赴きましょう」

「ああもう、しつこいぞ！“爺”が行くほどの大事じゃない。それより鷹便の用意をしておいてくれって言っているだろう」

お疲れで気が立っておいでなのか、その言葉の後「下がれ」と手を振って、レイモン様を遠ざけられます。

よく見るとお召し物がいつも以上に汚れている、というか所々破けている。自ら魔法で治されたのか、お怪我は負われていないようですが、今日の散策でも大捕り物があったのでしょう。

わたくしとしてはこのような危険な散策は控えて頂きたいのですが、使用人として直接それを出す事は叶いません。ですから、何度かレイモン様にお諫め頂くようお願い出たのですが、アルベール様が散策に出かけられる頻度は増えていく一方で減る事は一向にありません。

アルベール様は1度お決めになられた事は変えることはない、強い心持ちの方。

なれば、わたくしたちに来る事はお疲れになつてこの屋敷に帰られた時に、その疲れと汚れを落とすお世話をさせて頂く事でアルベール様をお支えすることしかないのかもしれませんが。

そのような事を考えながら、今度は左足をそつと水に漬ける。

両足を水桶に漬け終わると、ミネットが汚れた靴などを下げ、持ってきた屋敷用の履物をアルベール様の足元に置く。それはわたくしが右足を洗つてマッサージをし、ミネットが持ってきたタオルで拭いた後に履いて頂くためのもの。

今日はお疲れのご様子ですので、念入りに揉み解す事にしましょう。

それからわたくしは指先に柔らかかな力を込め、念入りにマッサージをさせて頂きました。

「今日は本当に疲れていたから、すごく気持ちよかったよ。あり

がとう、アニー」

一通りのお世話が済むと、そう言って幸せそうなお顔で笑いかけて下さいました。

わたくしたちの主はこう言うお優しい方なのです。

このような些細な事でも、アルベール様は使用人にも感謝のお声をかけて下さる。

誰がそうするように言った訳ではなく、本当に小さい時からアルベール様はそうだったのです。

わたくしやレイモン様が使用人に礼は不要ですと何度言っても、お止めにはなつて下さいませんでした。

このル・マレ領に来て少したった頃、アルベール様がアントワープ家の当主になったとわたくし達使用人は聞かされました。

その席でアルベール様は「わたしは人の品性を失いたくないのだから今後、わたしの謝意は素直に受け取るように」と厳命されてから、使用人たちはアルベール様に感謝の言葉を頂くと深く、深く礼を返すようになった。

アルベール様のお母上でいらつしやる奥様は使用人に礼は言わない。時々、アルベール様やエリザベート様と伺うル・マレ家の方々もそうだ。それがあたりまえなのだ。

しかし日常から感謝や労りの言葉をかけて下さるアルベール様には、ル・マレ領に来てから屋敷に入った使用人たちも、心から自らの主人としてお仕えしている者も多い。中には貴族様であると言うことで無条件に奉仕する者もいるが、それは本当にわずかな数でしょう。

お優しい主人に仕えることが出来るアントワープ家の使用人は幸

せ者だ。

そんなアルベル様の印象を持っているからこそ、この後わたしは非常に驚く事となりました。

“散策”からお帰りになった後のお世話が終わり、その片付けをし始めたときの事。

「エティアン！持ち帰ったモノをわたしの部屋まで持って来てくれ！」

アルベル様は立ち上がってお部屋に向かう前に、玄関ホールの外に待たせてあった護衛を呼んだのです。

その言葉に、「今日も“散策”で得た成果をお持ち帰りになられたのか」と軽く考えていました。以前、持ち帰った大きなクマには大そう驚かされましたが、あれ以上の驚きがあるとは思いませんでしたので。

しかし玄関ホールに入って来た護衛の気配を感じ、アルベル様から視線を外した時、あまりにも驚きに息を飲んでしまいました。

護衛の手には、氷漬けにされたオーク鬼の首が持たれていたからです。

悲鳴をあげなかったのは、長い間使用人として過ごしてきた矜持と言いたいところですが、驚きのあまり声にならなかったと言う方が正しいでしょう。

その恐ろしい顔には下あごから大きな牙が生え、その口からだら

しなく出ている舌がいつそう恐怖を誘いました。

アルベール様が玄関ホールを立ち去られた後、玄関ホールに続くホールでソフィーナ様が上げられた悲鳴で、恐怖に固まっていたわたくしはやつと我に帰り、その時先程のレイモン様の取り乱した理由に思い至ったのです。

オーク鬼は、「平民の傭兵が5人でやつと退治できると言う凶暴な種族である」と聞き及んでいましたが、「散策」中に偶然遭遇したアルベール様が、そのまま討伐をなさったのだと後でレイモン様から聞かされた時にはさらに驚いたものです。

しかもそれをお一人で成し遂げられたと言う話でした。

メイジが亜人退治をするのはおかしい事ではありませんが、それは決して1人で行うものではないのだとか。兵士が足止めをし、メイジの魔法で討伐するのが亜人退治の基本で、実践の経験がないメイジでは大人でも1人で亜人を相手にするのは難しいらしいのです。

それをお歳がまだ10歳のアルベール様が成し遂げられたのには、誰もが驚く事だとレイモン様はおっしゃられていました。

高貴なるアントワープ公爵家の血筋であるとは言え、成人もしいうちに亜人退治を成し遂げられた主人を誇らしげに語りながらも同時に、亜人に遭遇するなどと言う環境である場所の“散策”を許し、護衛を用意しておきながらも主人が1人で亜人と対峙する事態を招いたル・マレ家の不手際に大層お怒りになられていました。

わたくしは“散策”に出かけるようになってから、それが危険ではある反面、年頃のお子達に見る活発さを発揮なされてきた事を喜ばしく思っていただけに、今回のようなことが起こり得るのならばもう“散策”は控えて頂きたいと改めて強く思ったものです。

アルベール様にもしもの事があるなど、考えるのも恐ろしいこと
なのですから。

「ご自愛頂きたいと切に願いました。」

そんなことがあってから少し経ったある日。

「アニー、暇いとまをやる。今日中にこの屋敷から出て行け」

些細なことでした。

そう、本当に些細なことでした。

しかしその些細な事でわたくしは絶望の淵に落とされる事になっ
たのです。

いきなり申しつけられたその一言は、一瞬わたくしには理解でき
ず頭の中に入って来ませんでした。

けれどレイモン様がわたくしのためにアルベール様とお話して下
さっている事実が、先程の言葉を現実のものとして突きつけ、自分
が放逐されることを理解したのです。

自分がアントワープ家から無用として、屋敷を出される。

今まで考えた事もない事態が起こった事に、うまく呼吸が出来なくなり、体が動きませんでした。

やっとの思いで「申し訳ございません」とお許しを乞う言葉が口に出たわたくしの方に、アルベル様の視線が向いたような気配はしましたが、この時自分が頭を下げていなかったことすら気が付かない有様でした。

そのわたくしにさらにお叱りの言葉をおっしゃるアルベル様に、もう何をどうしていいのかもわからず、ただひたすら混乱してしまいました。

とにかくお許しを乞わなければいけないと、「申し訳ございません」という言葉を繰り返し言った事は覚えているのですが、気がつくわたくしはいつのまにか部屋を出され、廊下でレイモン様に頬を叩かれていたのでした。

気を取り戻してまず頭に浮かんだ事はアルベル様にお許しを頂かなくては！と言うことでしたが、レイモン様の言葉に次第に落ち着きを取り戻すにしたがって、心に絶望が広がっていくのです。

アルベル様は1度言った事を覆す事はありません。

しかも今回以前にわたくしは1度同じ事を注意されておりました。心のどこかでエリザベート様の事であるから他のこととは違う、と思っていたのかもしれませんが。

これは使用人としてあるまじき事。

主人の命よりも自身の考えを優先してしまったと言うことに他な

らない。

いくらエリザベート様がお辛そうだったとは言え、まずはアルベル様にその事をお伝えして、お伺いを立てるべきことだったので。

「……に、荷物を纏めなくては。アルベル様のご命令にはもう背く事は、……出来ません」

言葉にした自分の言葉が頭の中で響き渡り、わたくしは何かを言つて下さっているレイモン様の言葉を聞き取る事は出来ませんでした。

わたしはすぐにもアルベル様のご命令通り、この屋敷を出て行かなくてはいけないのだから。

わたくしが荷物を纏め、屋敷の正門に向かうと、レイモン様が馬車を待たせていました。

家の方がお出かけになられるのかもしれないので邪魔になつてはいけないと、脇を通り抜けようとするとレイモン様からお声がかかったのです。

レイモン様の話は、この馬車はわたくしのために用意したものである事、奥様の命でわたくしがこれからル・マレ家の本邸へ行く事、おそらくそこではらく奉公することになるだろうと言つ事これら

の3つでした。

そしてこの手配はアルベール様がなさって下さった事であると、暗に伝えて下さった。

主人であるアルベール様の命を疎かにしたわたくしにはもつたない事だ、最後の命ぐらいは主人に迷惑をかけずに従いたいとレイモン様に伝えたが、手配に従うようにと言われました。

アルベール様は聡明な方、今回のことも何かあの方なりのご理由があるのかもしれない。今でも主人の命に従いたいと言うのであれば、それが正しいのではないか。そう言われ、何かが詰まった袋を2つと手紙を渡された。

少し悩みましたが、レイモン様の言うように従うことにしました。

そうしてわたくしは馬車に乗りル・マレ家に向かい、告げられた通りに本邸で使用人として奉公する運びとなつたのです。

ル・マレ家の本邸に着いた日。

わたくしは与えられた使用人室で、渡されたずっしりと重い袋を開けてみました。

一つには金貨、もう一つには銀貨がぎっしりと詰まっています。アルベール様がわたくしのために用意して下さいましたのでしよう。

もしやとは思っていましたが、無用のわたくしには過ぎたもの。
お優しいアルベール様の笑顔が目には浮かび、申し訳なさと涙が流れた。

少しして落ち着いたわたくしは、一緒に渡された手紙を読むことにしました。

そこにはこう書かれていました。

『 アニーへ

いきなりこういう形で屋敷から出す事を許して欲しい。

本当は長い間、アントワープに仕えてくれたアニーにこんな仕打ちをしたくはなかった。

突然の事で理解も納得もできないかもしれないが、これは必要な事だったんだ。

必要な事とは言ってもアニーに落ち度があるという訳ではないよ。

わたしはアニーの事を信頼しているし、アントワープ家にはいなくてはならない使用人だと思っている。

しかしわたしの、いやエリザベートの為にアニーにはこの屋敷から出てもらう必要があったんだ。

何を言っているかわからないだろうし、いろいろ混乱しているだろう。

だけど今はこの手紙を最後まで読んでくれ。

この屋敷を出てからの当面の生活の事だけれど、その点は安心して欲しい。

母上とマティアス殿が、君をル・マレ伯爵家本邸で使用人として働けるように取り計らってくれるはずだ。

君は二人のどちらからか、わたしの気が治まるまでル・マレ家で一時的に働くよう言われたら、それに従ってくれるかな。

アニーにはル・マレ家で使用人として、しばらく過ごしてほしいんだ。

今はなぜだかは聞かないでくれ。

すべてを話す事は出来ないんだ。

ただ2つ言える事がある。

ひとつは、わたしは誰よりも、わたし自身よりもアニーの事を信じているという事。

もうひとつは、エリザベートのためにアニーの助けが欲しいという事だ。

これは、わたしがアントワープの家でもっとも信頼するアニーにしか頼めない事なんだ。

わたしを抱きしめてくれる母であり、優しく微笑みかけてくれる姉でもあるアニーにしかね。

突然大変なお願いをしてしまったけれど、わたしの事を信じて従ってくれると願っている。

勝手なことばかり言っていると自分でも思っているんだ。

すまない。

本当にすまないね、アニー。

もう一通、手紙を同封しているけれど、そちらはまだ読まないでとっておいて。

それを読む時期は今じゃないんだ。

おそろくですけど数日、あるいは数週間後にはもう一通の手紙を読むべき事態になっているはずだ。

その日が来ればアニーにも絶対わかるから、それまでは誰にも見つからないように持っておいて。

そしてそれを読む時がきたら、その内容に従って欲しい。

追伸

一緒に持たせた金貨と銀貨は少ないけれど、わたしに用意できる精一杯のものなんだ。

長い間アントワープ家に仕えてくれたアニーに、これだけしか用意できないのが情けないけれど、大事に使ってくれ。

アルベール・レオポルト・マランド・

ド・ワントワープ 』

数日もしないうちにその日がやってきました。

夜半過ぎに騒がしくなった屋敷に不安を覚え、起きだしてみるとル・マレ家の家臣の方々が屋敷の外に集まっている様子でしたので、わたくしも身支度を整え玄関ホールに向かったのですが皆鬼気迫る様子で話しかける事が出来ませんでした。

半時ほど経った時、正門の方が騒がしくなり、わたくしが向かうところにはエリザベート様が。

アントワープ家が住まうル・マレ家の別邸に野盗の類いが押し入ったのです。

あの日からル・マレ家の方々によるアルベル様の搜索が行われていますが、依然行方が知れません。

わたくしにはただただアルベル様の無事を祈る事しか出来ません。

毎日、アルベル様の行方を捜しに飛び出しますが、今はわたくしにはやるべき事が出来ました。

今、目の前で泣き疲れて眠っているエリザベート様のお顔をうかがう。

あまり良くない夢を見ているのでしょうか、苦しそうな表情をしておられます。

可憐なエリザベート様の苦痛に歪むお顔はわたくしの胸をひどく締め付けます。

お替りできるのであれば、お替りして差し上げたいのだけれど、今のわたくしには傍にいて、額に吹き出る玉のような汗を拭う事しか出来ません。

日頃は愛らしい笑顔をたたえているそのお顔には、涙の痕がついていらつしゃいます。

眠っていても時折あふれ出す涙のせいでしょう。

これからエリザベート様にとって今までにない、辛くて、悲しく

て、寂しい日々が続くのでしょう。

でもそんな憂鬱な日々も夢を見て朝を迎えれば次の日になります。そうやって新しい朝を迎えるたびに、涙の痕も消えてゆく事でしょう。

辛い事を忘れて、またあの笑顔をわたくしたちに見せてくれる日が来る事を今は祈るばかりです。

きっとそんな明日が来る。

その日が必ず来るようにするために、わたくしはアルベール様にエリザベート様を託されたのだから。

『まずはこの手紙を読み終わったら、わたしからの2通の手紙は必ず燃やすように頼んでおく。』

必ずだよ、アニー。

この日が来てしまったんだね。
手紙を読んでいるという事は、わたしたちに何が起こったかはもう知っているだろう。

アニーをアントワープ家から出さなければいけなかった理由、もうわかってはいるはずだね？

なんとなくこんな事になってしまっくんじゃないかと、悪い予感がしてたんだ。

外れてくれればよかったんだけど、そうもいかなかったみたいだ。

わたしが考えていた事が現実となってしまう以上、母上はもう死んでしまっているだろうけれど、わたしとエリザベートは生きているのかな？

まあ、わたしは死んでしまってもエリザベートだけは絶対に死なせるつもりはないから、エリザベートは生きているはずかな。

アニー。

エリザベートを頼んだよ。

きっと生き残ったエリザベートは、マティアス殿とノエリア様がガル・マレ家で引き取ってくれるはずだ。マティアス殿はエリザベートの父親だからね。

そのためにアニーにあんなひどい仕打ちをしたんだから、そうならなかったらわたしは大馬鹿者だけれど、絶対にそうなっているだろうと確信はしている。

だけど母上とわたしが死んだとなれば、心のやさしいエリザベートは哀しんでいることだろう。

お二人はもちろん、マシューやアナもそんなエリザベートを励ましてくれるはずだけれど、誰よりも長い時間をわたしたちと一緒に過ごしたアニーが、エリザベートを支えてくれればと思っている。

それがエリザベートが心の安らぎを取り戻す、一番のものだろ

うから。

エリザベートのためにアニーにあんなひどい仕打ちをしてしまったけれど、わたしのこの願いを聞き届けてくれるかな？

アニーは昔からわたしが頼んだ事は何でもしてくれたから大丈夫だよ？

アニーならエリザベートの事を頼んでも安心だよ。

そうだ。

前の手紙に書き忘れていた事があつたんだ。

わたしももうすぐ11になるってことは、アニーがアントワープ家に仕えるようになってから12年だよ。

母上と同じ年のアニーが未だ結婚していないのは、わたしと母上が至らないせいだと言うのはなんとなくわかつてはいる。

今回のこともだけど、アニーの献身にはいつも甘えてしまつて……。

アニー自身の人生の事を、後回しにさせているのは心苦しかったんだ。

ル・マレ家で働くようになれば、今までのようにわたしに付きっ切りというわけではなくなるだろうから、いい人を見つける機会も持てるかもしれない。

それと関係のあることなんだけれど、金貨の袋の一番底に宝石を入れてあつたのは気づいてる？

ベルギウム王家から頂いた由緒正しい一品だから、売れば50

0 エキューはくだらないだろう。

それは少し気が早いけれど、わたしからアニーへの結婚祝いなんだ。

祝いの席で直接、幸せな顔のアニーに渡せないのが残念だけけど受け取ってくれるかな？

困った時に売るなりしていいから、好きに使ってくれればうれしい。

アニー。

いつもわがママを聞いてくれてありがとう。

アニー。

いつも迷惑をかけてすまなかったね。

アニー。

いつも母上の代わりに抱きしめてくれて嬉しかったよ。

アニー。

いつも甘えていたアニーにもう会えないのは寂しいけれど

さよなら。

生真面目だけれどやさしいアニー。

矛盾しているかもしれないけれど

アニー自身がしあわせになってくれると嬉しい。

ントワープ 』

アルベール・レオポルト・マランド・ド・ア

わたくしはエリザベート様をアルベール様に託された。

だから、このエリザベート様を命に代えても守り抜かなくてはなりません。

アルベール様が愛したこのエリザベート様を。

だから。

アルベール様、申し訳ございません。

最後の命^{めい}はエリザベート様の笑顔が戻るまで、従^{めい}う事は叶いませ
ん。

ぜひともお許しくださいませ。

挿話 アニ My Love (後書き)

お久しぶりです。

ハードカバーの書籍はお値段がバカ高くてゲンナリしますね。と言う事で、高レベルな書籍（中にはボラれたと思ったモノもありましたが…）を読む訓練は10冊程度で終了する事に致しました。

また趣味のネット小説を書き始めるにあたり、ここ数日アニメ第二期を見ているのですが視聴途中に眠ってしまいます。

なんとか数話見て思ったのですが、ヘキサゴンスペルと合体魔法の違いはなんなんでしょうか？魔法の効果が掛け算と足し算の違いでしょうか？一応そんな感じの解釈で良いのか少し不安です。

あともう一点。
キュルケとタバサがヘキサゴンスペルに対して、合体魔法的なモノを使っていたのでアレ？と疑問に思いました。

複数のメイジによるロマリアの聖歌隊のような合体魔法は、厳しい訓練を必要とするとWikiに書いていたのですが……。二人はやけに簡単に使っていました。

キュルケとタバサの魔法はまた別物なのか、よくわかりません。

ゼロの使い魔はなんかその辺り、というか各種設定が全体的に曖昧
そうですね。

以上の経緯がありまして、魔法系の設定・解釈は今まで以上に好き
勝手にやっつけてしまいそうです。

したがって以後、独自解釈が過ぎる事もあるかもしれませんが、
これらの事を不快に思われた方は、即時読むのをお止め下さい。

以上、疑問とお願いでした。

ボーイ・ミーツ・メスゴリラ

「ここは？」

とくに何を意図して言った言葉ではなかった。

目が覚めたオレは、ぼんやりとした意識の中で視界に入る光景に
対して、ただ発したただけの言葉だ。

目に映るのは、丸太を組み上げて作ったログハウスの壁と天井。

だんだんと意識がハッキリしてくる。

オレは仰向けに寝ている状態である、それは間違いない。

じゃあ、自分がどこに寝ているのか、そしてここがどこなのか、
それを確認しようと思いが浮かぶ。

そう思ったオレは、すぐに行動に移そうとするが不可能だった。

普通に起き上がるのと体に力を入れるが、体が動かない。

意識は起き上がるようにイメージしているのだが、手足もまるで自
分のモノではないように重くビクともしなかった。

ならばと、勢いをつけて起き上がるかと試してみるが、腹筋に力
が入らないので寝ている状態から座っている状態にまで体を起こす
事なんて到底無理そうだった。

どうして自分がこんな状態なのか疑問はあるが、とにかく起き上
がらねば。

すべてはそれからだ、そう思い再度体を動かす。

だが相も変わらずこの体は主人の意志に従おうとしない。いや従えないといった方が正しい。

そこでオレは重力に逆らう動きは諦め、それ以外の動作でハッスルしてみようと考えた。

そうキーワードは“寝起き”さ！

寝起きに元気なところと言えば……。

オレは首だけを動かし自分の大事な部分を見る。

ガーン！

お約束では、体が動かなくてもアソコだけは重力に逆らって天元突破しているのがテンプレのはず……。

なのにオレの息子は期待はずれもいいところだった。

まあ、そもそも起き上がるのには関係がないので今後の展開には支障はないのだが、残念の一言に尽きる。漢^{おとこ}としてね！

そんなこともあつてハッスルの方向性を変えてみることにした。

普通には起き上がることが出来ないので、今度はいったんゴロンとうつ伏せになって肘を立て上体を起こす。

「あう」

うまくいった。

うまくはいったのだが、床から状態を起こす事に成功したものの、

動かした体が異様に痛む。
マジでパネエ激痛だ。

おかげで他人には聞かれたくない変な声を出してしまったが、今は我慢、我慢。

オレは我慢が出来る子なのだ。そう出来る子なのだ。

出来る子なオレは、再び気合を入れなおして起き上がりにチャレンジするが、やはり無理っぽい。

体中の痛みに向け、突っ伏した状態に戻ってしまう。

言っておくがオレがシャバいのではない。

こんな痛みを許容できるのは真性M男だけだ。それに体に力も入らないし。

いや、マジで。

こつも体に力が入らないんじゃどうしようもないな。これ以上自力で起き上がるのは諦めて、母性豊かな巨乳ミニスカ看護婦さんが登場するのを待つか？

「いやいや。こんなログハウスの家に看護婦はいないだろっ！」

自分の思考にツツコミを入れつつ、軽く凹む。

凹む理由は、もちろん“爆乳ナースがいない事”にだ！

一瞬、そんな不埒な考えが過ぎりはしたが、ずっと今のままでは

埒が明かんで思い直そう。

しかたない。

オレも男だ。

更なる挑戦をしてやろうではないか！

新たな挑戦に際して基本方針を固める。

どこかの誰かが言いました。

“ 押してダメなら、引いてみな ” と。

そう右向きで起き上がれないのなら、左向きだ！

今度は逆側、壁側に向かって転がり同じ様に試してみる。

肘を立てた状態から壁に顔をくっつけ、トカゲのように張り付いて上体を起こす。

やる気、もとい気合を入れる為に、壁の丸太が女体の曲線を髣髴ほうかつさせるかもしれないと、目を瞑って想像しながら張り付いていたが、やはり丸太は丸太以上にはなる事は出来ない上に、昔、自己発電で培ったオレの想像力をもってしても軽く痛みが凌駕してしまい、着エロナーズの妄想すら現れない。

アミアミなストッキングぐらいチラリズムしてくれてもいいだろうに。

残念なオレの思考はさて置き。

なんとか座る状態に起き上がる事は出来たが、その過程は散々だな。まあ、目的は達したので良しとしよう。

なら、まずは一応エロナーズ的な存在を確認。

ベット周囲、 クリア。
右方向の扉前、 クリア。
オレの妄想内、 クリア。

一応と言いつつもマジで探したが、案の定いない。
一気にテンションを下げつつ、もう一度部屋の中を見渡してみるのが自分があるベッド以外には何も無い。
ベッドの足元の方に窓があるが、オレは体が動かないので窓の外にナースがいてもそれを見る事が出来ない。

ナースの確認が出来ない、これはつまり……。

「マジでどこ何処だよ？」

という事だ。

名推理すぎるな、オレ。

という訳で、オレはほとんど力が入らない体と、ハンパない倦怠感のせいでうまく頭がまわらないながらも、現状把握に努める事にした。

改めて自分の体を見てみれば、けして清潔そうとは言えないボロ

キレが所々に巻きつけられている。その部分からの痛みで、それがおそらく包帯代わりだろうという事はわかる。

オレは板切れの上において、汚れた布が毛布がわりに掛かっている。以上が現状。

起き上がって10秒でわかった事。

ここがどこであるかわからないことがわかった！

「さすがオレ！……ハッ！！」

そこまで把握して重大な事に気づいた。

「しまった！こう言う時は第一声は『……知らない天井だ』と言わなきゃいけないんだっ」

ぐっ！なんてこった！

鈍く痛む頭を抑えながら（体が思うように動かないので気分だけ）、自分の失敗を悔やむ。

自らフラグをブチ折るなんて！

オレはとんでもないバカなミスを犯してしまったようだ！

これじゃあ、話が進まないではないか。

その証拠にオレが気がついてから、ある程度時間が経っているのに誰もこの部屋に入ってこないじゃないか。オレを助けてくれた人間の登場フラグを立てそこなったんだよ、きつと。

「よしっ！仕切り直そう」

苦勞して座る状態まで体を起こしたが、登場フラグを立てるためにもう一度寝転ぶ。ゴツン！

「あぐら」

体に入らないせいで勢い良く倒れこんだ為、思いつきり頭を打った。もんどりうつ程の痛みだったが、体が動かずこの痛みを表現できないのが悔しい。

この痛みでナースが出現しないかと期待したが、それは都合が良すぎたようで変化はなかった。

まあいい。

オレはやれば出来る子。

必ずフラグを立つる！

待ってる、ンナアアアス！！

ほとばしるコスモを内に秘め、さあ仕切り直しだ！オレ！

しばらく後頭部の痛みが治まるのを待ってから、気を取り直してフラグイベントに臨む。

「TAKE2。お願いしま〜す」

誰にともなく声をかけて、オレは目を瞑り10数えてからゆっくり目を開ける。

「……し、知らない天井だ」

ヤベツ。仕切りなおして緊張したせいか、若干噛んでしまった。またやり直すべきかとも思ったが、しばらく様子を見る。なかなか人が入ってくる気配はない。やはり噛むのがダメだったのか。

「やり直そう！」

またやり直すことにしたオレはTAKE3を始める。

「すみませ〜ん。TAKE3、お願いしま〜す」

目を瞑って10数えてから「知らない天井」をつぶやいてみたが、いっこうにフラグが立たない。

次なる展開に移る事を決め、非常にダルいがもう一度体を起こす事にした。

先程と変わらず座るのには、結構な苦勞を必要としたがなんとか座る状態に起き上がったが変化がない。

「何か見落としているのか？なぜフラグが立っていないんだ？」

このあと、T A K E 1 9までいろいろなバージョンを試してみた。

テンプレの「知らない天井」セリフから入り、傷を無駄に痛がってみたり、「オレは……生きているのか？」や「生き残っちまった……」なんて陰キャラのセリフを挟んだり、「エイドリイイアアアン！」と誰？それ？と言う名前を絶叫してみたり、逆にうなされて目が覚めないバージョンなんてのも試した。

それはオレの俳優魂が熱く猛ったゆえ、いや若さゆえの過ちというものか。

考えられる限りのシュチを繰り返した結果、疲労困憊で死にそうになった。

「もうダメポ。指一本動かさないでござる」

疲労で病んだ人間の使う言葉を発してしまった。

しかし人物の登場フラグ一つでこんなに苦労するなんてどんな無理ゲーだ。今はまったく関係ないが、ガン ム S E E D のシナリオライター氏ね！

話を戻そう。

……と言っても変化はない。
マジでミシシッピー殺人事件並みに進まない展開だなあと悶えていたら、扉が開いた。

「おや？目が覚めたのかい？」

なにいろー！！フラグなして登場だと？！
いや、身動きが取れないのがフラグか？
そういうきっかけか？

「フツ！なかなかやるではないか」

「ん？なんだつて？」

独り言に返事をするなよ。野暮なヤツだ。

「いや、なんでもない。それよりここは？」

非常にわかりにくいフラグに関心しながら、今最大の疑問を投げかけてみた。

「ここかい？ここはヴォルフベルグさ」

「ヴおるふベルぐ？」

……知らん！

まったくどこだかわからん上に、目の前の現実からも目を背けた
い。
知りたいのに現実を受け入れられない。このジレンマを発生させて
いる目の前の生き物に目をやる。

まず、デカイ！

次に、ゴリラだ。

最後に、ナスじゃない！！

絶望した。

オレは絶望した。

目の前にいるこの人間の服を着て、人語を発するゴリラをどうし
ても、ガードー付きミニスカ着エロナスと比べてしまっ。

……わぁくん、ドラ もくん！なんとかかしてえ！

ナスと全然違うよぉ！

パケに騙されたとか、はたまた詐欺にあつたどこの話じゃねえぜ。

今更、『使用による目に見える成果は個人差があります』とか
『これはあくまで感想であり、個人希望を確約するものではありません』とかよくある通販の灰色な注意文句を言われても納得できねえぞ。こりゃあ。

灰色はいらねえ……。

黒の……。

黒のガーターヴェルトを希望するっ！

もっと言わせて貰うのなら、そう。

黒のガーターベルトのオプション付き、淡いピンクのナース服を着ている着エロナースはどこだぁ！！！！！！（魂の叫びLv.7）

ナース登場イベントじゃないなら、ここがヴォルフベルグだろうがどこだろうが同じだ。

「で？あんた何もんだい？」

オレの憤りを無視してメスゴリラが訊ねてくる。“黒いガーター着エロナーズ問題”も解決してないのに話を進めようとするな、ゴリ江！

途中でゲルマニアだか、オウオモエラだか固有名詞っぽいのが聞こえた気もしないが些細なことだ。

適当に返事をして、最重要案件をどうすべきか考えねば！

「オレは　　？……あれ？」

ア　　……、あーっ……、あゝ、ん？

オレ、誰だっけ？

おかしいな、オレの名前は……。

はっ！そうだ！

オレは選ばれた人間、その名も貴族！だったはずだ。

たしか一回死んで、異世界で生き返って……魔法ファンタジーなドゥビドゥビ生活を送っていた、ちょっとお茶目な男の子、だった

よな？

左手をなんとか動かして息子を探すと、やはり立派に育ったマイサンがいた。

てかドウビドウビってなんだ？！とも思わなくないが、お茶目な男の子は確定だ。

しかし、お茶目は男にとってプラス材料なのだろうか？一歩間違えるとキメエと言われかねん気がする。

そのあたりは外見と要相談と言う事で、今後じっくり考えていこう。

いやいや、今後の事より今のことだ。

とりあえず今の問題を考えよう。

お茶目問題はあっちに、お・い・と・い・てえ。

オレは国が滅んでトリステイン王国に亡命的なものをして来たはずだ。お供は、ビッチとガチホモ、後はアホの子だったはず。

それから……それから……、マジ思いだせん。

どーなってるんだ？この状態は？

自分の名前もわからんとは。

困った。

困った時は、他人に聞いてみるのが一番だ。うん、そうしよう！

思考の放棄。なんて甘美な響きなのだ。

「なあ、メスゴリラ。オレは誰だ？」

「ん？メスゴリラ？あたしのことかい？」

「どう考えても、オメーしかいねえだろ？ここにオレとオメー以外に誰かいんのか？」

「まったくおちよっくってやがんのか？コイツ？」

このメスゴリラ改めオレ命名：ゴリ江は、外見だけじゃなく頭の程度までゴリラらしい。そうでなければオレの言葉が理解できるはずだ。

顔のパーツも散らばってるから、脳みそもどっかに散らばっていて考える事が困難なのか？

「口の悪いクソガキだねえ。ところでさっきのゴリラってのはなんだい？」

ああ、そういうことか。早とちりしちゃったな。ゴリラの言葉自体わかんねえのか。

こつちの世界じゃゴリラはいねえのかな？めんどくさいが説明してやるう。

しかし世話の焼けるヤツ、もとい類人猿だなゴリ江。

「オメーにもわかるように言ってやるう。メスゴリラすなわちメスオークと、へぶらう」

殴られたと気づいたのは、左頬の痛みで目覚めた翌日の朝の事だった。

新しい生活の始まり (オマルプレイカット版)

「うん、マズいっ！もう一杯」

昨日オレを左ストレート一撃で昇天させた“ゴリ江”。彼女(?)が持ってきたパン雑炊のようなものを一気に平らげ、そのマズさに辟易しながらもおかわりを催促してみた。

「厚かましいガキだ。お前に食べさせるモノはもうないよ！」

ちっ！ケチ臭いメスゴリラだ。

こっちは見た目も味もゲロのような物を我慢して食ってやってるってのに、感謝の言葉一つなしかよ。寝起きで腹減ってなければこっちから願い下げだっつーの！

「それより昨日の続きさね」

「昨日の?……ハッ！やんのか?この野郎!!」

メシを与えておいて第2ラウンドとはエゲツねえな、“ゴリ江”のくせに。

「そっちじゃないよ！それをお望みならノシてやってもいいが、そ

れじゃあ話が進まないだろ？」

昨日より痛みが幾分マシになった体でファイティングポーズをとるオレに、戦闘民族も真つ青な外見をした“ゴリ江”が話をしようじゃないかと言ってきた。

おかしな話だ。

昨日拳でもって、肉体言語を一方的に交わした生き物が言うセリフじゃねえ。

もしかして今は尻尾でも切れてんのか？それとも新月で月のパワーが降り注いでないからか？

あいにくオレも戦闘民族との邂逅は初めてだ。向こうが話をしようと言っのなら、やってやるうじゃねえか！だが油断はしないぜ。

「じゃあ、なんだってんだ？」

「昨日も聞いたが、あんたは何モンだいつて聞いてんだよ？」

「オレか？……オレは誰だ？メス」

ピキューン！！

！と。今、第六感が危機をオレに訴えてきた。これ以上言っちゃダメだ！と。

見れば危険な生物が目の前に居て、お怒りのご様子。

危なかった。

あのまま不用意にデ・ジャヴ気分を満喫していたら、死んだおじいちゃんと再会してしまっていただろう。ギリギリのところでお助

ったな。

どうやらオレは未知との遭遇で、いつのまにか新しい人類に進化したらしい。危険を前もって感じる事が出来るようになったみたいだ。

というか、“ゴリ江”の握られた左拳がコエエよ。

そのオレの胴体ほどもある左腕に力を込めるのは止めてもらえませんか？マジで。

ケンカに拳を使ったらプロライセンス剥奪でいすよ〜！

ガクブルMAXなオレは、危うく昨日と同じ展開になるところだった自分に反省。

いくらオレがテンドンが好きだからって、殴られてお花畑を見るなんて体験を二日続けてしたい訳ではない。

それが笑いの正解だとしても、今は自重しておこう。

それよりもオレの正体の事だ。

いい加減、“ゴリ江”のプレッシャーに耐えられん。

しかし困った事にオレは一過性の記憶喪失的なモノっぽい状態かもしれないので、オレ自身も自分の事をはかりかねてる。そんなオレにとって“ゴリ江”の問いは非常に答えにくいものだ。

どうしよう？

う〜ん、とりあえず適当に答えておくか。

「体は子供、頭脳は大人、エドガー・コナン。探偵さ！（キラッ！）」

「ふうん。で、エドガー。タンテイってーのは何だい？」

スルーだ！

そしてさらにポケを要求してくるのか？

さすが戦闘民族。でもオレは負けないもん！

「世紀末救世主っぽい、または世紀末ヒーロー伝説的なスーパーサイヤ人のことだ」

「スーパーサイヤ人？スーパーサイヤ……、聞いた事ない国だねえ」

ここまで見事にスルーされると惨めな気持ちになるな。

まあ、当然なだけだね。

“ゴリ江”はどうやら“タンテイ”はスーパーサイヤ人の俗称で、そのスーパーサイヤ人を“スーパーサイヤという国の人間”と解釈しているようだ。

バカ丸出しだな、コイツ。

「わっ、ひゃっ、ひゃっ、あべしっ」

痛みの走る腹筋を酷使しつつ、“ゴリ江”を最大限のバカにした顔で笑っているとビンタされた。あまりの衝撃と痛みに秘孔を突かれたような声が出ちまったよ。

何すんだこの野郎！とは……、さすがに言えんな。

「学がないからってバカにするんじゃないよ。今度笑ったら平手じやすまないよ」

そう言いつつ握る拳と言う名の凶器が目の前にあっちゃね。文句どころか、軽口すら言ってられねえっての。マジ無理。

ちよっと反省。

さっきのことはさすがにオレに非があることは認めとこう。

というかバカはお互い様だし、オレ自身昨日から妙にダルいし、自分からボケといてなんだが、なによりこの状況は面倒くさい。

もうDVはゴリゴリなので、勘違いは放置して話を進めよう。

「昨日、ゲルマニアとかなんとか言っていたが、ここはハルケギニアで間違いないか？」

「ん？ああ、ここはゲルマニアで間違いないよ」

「じゃあ、知らなくても無理はない。オレはハルケギニアの国でない、遠方の国の出身なんだ」

「ハルケギニアの外？エルフがいるってえ東方の国かい？」

「いや、もっと遠方」

「じゃあ、なんだってえこんな所に？」

「それはオレが聞きたい。オレもどうしてここにいるか思い出せないんだ。なあ、オレはどうしてここにいるんだ？」

「自分のことなのにわからないのかい？」

呆れたように言う“ゴリ江”。

不細工の呆れ面はマジム力つくな。さっきちょっと失態を犯したが、このムカつきぐらいは許されるだろう。

しかし今は我慢だ。

「ああ、信じられないかも知れないが、どうやらオレは何かのシヨツクで自分の事がわからなくなってしまったらしい。昔の事はかろうじて憶えているんだが、どうしてこんなに怪我をしているのかもわからないし、最近の事はどうしても思い出すことが出来ない」

「ふ〜ん。もしその話が本当なら、……難儀だねえ。じゃあ、これ以上いろいろ聞いても無駄そうだね」

あまり疑ってるって表情じゃないな。サルは単純で助かる。

「だからもし、オレの事で知っている事があつたら、教えてくれないか？」

「そうさねえ。あたしが知ってる事は一つだけさ。あんたがここにいるのはあたしが拾ったからさ」

「拾った？」

なんでわざわざそんな事を？コイツの外見からは不自然だなあ。

「山から帰ってくる途中で川をドンブラと流れてたあんたを、あたしが拾ってここまで運んだのさ」

山からの帰りに川をドンブラコッコなオレを家まで持ち帰るメスゴリラ。もちろんオレは桃尻。

……これはツツコめばいいのか？判断が難しいな。

不自然な話どころかピーチ侍の話だもんな。

どうすつか？

ピーチ侍の話の体で進めてみるか。

いや、ピーチ侍の話にしても今後の展開に不安が残るのは同じだ。オレ怪我して動ける状態じゃないし。第一、鬼さんがこのハルケギニアにいるはず……、いやひょっとしてオーク鬼で代用がきくのか？

だとすればオーク鬼退治で、お宝持って来いって流れになるのか？

うーん、さすがにオレにも今後の展開がつかめん。

怪我が治ったら……、怪我？

今、脳裏に閃いたような気がする。

『ぼうやあゝ　よい子だ、金出しなあゝ』

ふいにこんなメロディ（まんが日本むかし話OP曲）が頭の中に流れた。

改めて目の前の戦闘民族を見直せば、その存在自体が強力な説得力だと感じる。コイツはどう見ても山賊かメスオークだ。登場人物としては合格点だな。
ならありえるか？

しかしそれだと、そもそも瀕死のオレを助ける必要ねえし。……
謎は深まるばかりだ。

タンテイの勘が告げている、これは難事件だと！

ただの考えすぎなだけな気がするが、とりあえず怪我のことも確認すつか。

「この怪我の手当ても？」

「あんたは手当てした人間の心当たりが、あたし以外にあんのかい？」

「いや、ないな。そうか。遅くなったが助けてくれた事に感謝する」
そう言って神妙に頭を下げておく。今に至り単純に助けてくれたんだから、今後そうそう鬱な展開にはなるまいと言う判断をしたからだ。

「おらしいというか、それなりの態度をとっておいて損はないだろう。」

「生意気なくせに、礼儀ってモノをちゃんと知ってるじゃないか。まあ気まぐれでやったことだ。気にしなくてもいいさ」

なんだ気まぐれかよ！

まあ、助かった事には間違いないので、感謝は取り消さないでお

「うう。」

「そうか。あつかましいとは思うかもしれないが、オレはまだ体が動かせそうにない。動けるようになるまで」

「ああ！それ以上はいいよ！助けておいて、ここでホッポリ出すなんてことはしないから安心しな。あたしは中途パンパな事が大っ嫌いなんだ」

「じゃあ」

「怪我が治るまでここを好きに使いな。メシは朝と夜に持ってきてやる」

「アレレえ?!」

「なんだよ！外見に似合わず、実はめっちゃいいヤツじゃん！」

“ゴリ江”よ。

今まで、心の中でナ　パと同じ扱いして正直スマンかった。オレの心がちょっと汚れてたかもしれない。

心と体が弱っているせいかな、色々とくだらん事を考えてしまったな。

「恩に着る」

反省も込めて心から感謝の念を送ろう！

イカつい類人猿よ。

「あたしはもう行くから、あんたは早く怪我を治しな。おっと忘れるところだった。これはあんたを拾った時に握ってたもんだ」

そう言っつて杖を投げて寄越した。

「ちよつと待つてくれ！」

この折れた杖の事以外にも、まだいろいろ聞きたい事はあるが、これだけは聞いておかないとな。

「なんだい？あたしもヒマじゃないんだが」

「あんたの名前、恩人であるあんたの名前を聞かせてくれないか？」

「そついやあ、言つてなかつたね。あたしはへら。このヴォルフベルグでキコリを生業にしている、しがない平民さ」

帝政ゲルマニア西部、トリステイン王国との国境に位置するオウオモエラ伯爵領。

ヴォルフベルグはその南西に位置する農耕と林業の村だ。

北に大きな村・ツアハがあり、東は深い森が続く。

南は険しい山脈がトリステイン王国との往来を阻むが、その山々を縫う様に流れ出て、村の西をゆったりと流れるマル又川が人と物の行き来を可能にしている。

ヴォルフベルグは国境の集落であるが、マル又川からは少し離れている為に大きな船着場はなく、2時間ほど街道を下ったツアハの村が宿場町として交易の拠点となっていた。

そのためヴォルフベルグの人間の多くは、北のツアハの村と関わりがある。

村の大半を占める林業を営む者たちは、切り倒した木材をツアハまで運び商人に売る。農耕を営む者や、狩猟で生活する者も同様だ。家業を継げない者はツアハで労働をしたり、そこで資金を貯めて王都などさらに大きな町に移り住む。だが結局は夢破れ、彼らの多くがツアハに戻ってくるそうだ。

ヴォルフベルグの村は元々、ツアハの村の発展に際して必要になった木材を切り倒すキコリが、しだいに森を切り開いて出来た村だった。

ヴォルフベルグという名も元来、村の名前などではなかったらしい。

村が存在する以前、今の村の南に位置する山々に多くの狼が存在していたことから、この地域一帯が狼の山「ヴォルフ・ベルグと呼ばれていたのだ。

それが森の木々が切り倒され、獣が山奥に追いやられる事で次第に人が住み着き、マリヌ川から水が引かれたことによって土地が開墾され集落となった。

以上が目覚めてからの5日でオレが得た、ここヴォルフベルグの知識だ。

残念ながらまったくオレの記憶が戻る気配はない。

その上、相変わらず体はダルいし傷は痛む。

一昨日からやっと立って歩けるようになったが、それもゾンビのような動きでしかない。

おっと！それまでの2、3日のシモ関係についてはあまり聞かないで欲しい。

男のオマルプレイの話なんか聞いても、得るもなんて何も無いんだからさ。

そんなことよりも驚いたことに、この小屋にはヘラこと“ゴリ江”の他にヴィムと言う男がいて、ヘラはこのヴィムと暮らしている事がわかった。

ヴィムはなんと言うか、……そう！“ゴリ江”にふさわしい男だと言っておけば察して頂けることだろう。

とりあえずはそんなこんなで、奇妙な3人生活が始まった。

カールなおじさん、時々カーペンターズ

目覚めてから一週間が経つ。

さらに時間が経過した事で精神的に落ち着いてきたのは言うまでもないが、昨日やっと自分の名前も思い出すことが出来た。

だが今更、「わたしの名前はアルベル・レオポルト・マランド・ド・アントワープ。アントワープ家は亡国の公爵家、したがってわたしは高貴な者である！」なんて言うのもなんかダルい。

オレが貴族である事をわざわざ教えて、「敬え！そして崇めよ^{あが}」的な事を言うようなもので、かなりイタいしね。

エドガー・コナンも十分イタいが、すでにその名前が同居人たちに定着したせいか、本当の名前を思い出した今でも“エド”と呼ばれることに違和感はない。

新しい生活も始まった事だし、心機一転と言う事でそのままいくことにした。

詳細な戸籍がある訳でもないし、それによって公共機関からサービスを受けられる訳でもないこの世界なら、名前を変えたり、他人になりすましたりしてもたいした害も損益もないだろう。ましてやそれによって罰せられることも、よっぽど下手こかない限りはそうそうなさそうだしね。

もともとアルベール・レオポルト・マランド・ド・アントワープがオレを唯一表す名前ではなかったのだ。オレ的に2つ目であるこの名前には、どこか芸名っぽいニュアンスを感じていた。

そのせいか名前に対する執着はそれほどないので、名前がなんであるうと気にならないのかもしれない。

それにアントワープの名前にも価値がなくなっていいそうだしな。

まっ、今の状況を鑑みれば、こう考えるのも間違っていないだろう。

やっと自分の名前を思い出したオレだが、いまだ最近の記憶は戻っていない。

しかし、こうしてズタボロな状態で田舎村にいたと言う事は、アントワープ家が凋落してしまった事は間違いないだろうと思う。

“ビッチ”や仕えていた家の者たちももう死んでしまったか、離れて行ったであろう事は簡単に想像がつく。

第一、アントワープ家が健在ならオレがこんな状態になってる訳ないだろうからさ。いくらオレでもそのぐらいは検討がつくってもんだよ。

トリスティン王国に行つてからの事がまったく思いませんが、きつとそういうことだろう。

ベルギウム王国が滅んだ時に遅かれ早かれ、最悪こんな風になるかもしれないと、一応心のどこかで覚悟はしていた。だから今の状況も別段騒ぎ立てる事でもない。

……まあ名前まで覚えていないほど、最低だとは想像してなかったけどさ。

愚痴を言いたい散々な状況ではあるが、今のオレなら一部を除いて、記憶の有無なんて大した事じゃないような気がしている。

だったら、未練など何の工口の足しにもならないものにはこだわらず、これからは自身の力で生きていく事を考えたほうが建設的だろう。

第一、彼らを探そうにも手段すら思いつかんし。

しかし、“ガチホモ”だったとは言え“爺”がいなくなったのは正直大きい。“ビッチ”やソフィーナはどうでもいいが、市井で生きる平民として一番生活力があるのは、間違いなく“爺”だっただろうからな。

“ガチホモ”だったとは言え“爺”のヒモになっていけば、ケツの心配以外は“平民お気楽人生”を送れていたかもしれない。

これもいなくなった以上考えても無駄なので、仕方ないと諦めねばいかな。 “爺”はもちろん使用人たちにもきつと今は、彼らの生活があるだろうしね。

とは言うものの、オレはこの世界での平民生活に不安がない訳ではない。

失われているくない貴族だった時の記憶からしても、平民はただ搾取されるだけの家畜同然だからな。

人権、平民の権利なんて動物園のサル以下しかない。いや、死ぬ

まで餌を与えてくれるだけ動物園のサルの方が、気楽でいいかもしれない。動物園のサル未満に訂正しておこう。

これからはそんな立場で生きていかなくはいけないのだ。

不安はあるが今はオレを助けてくれた“ゴリ江”には、「怪我が治っても、当分は面倒見てやろう」と言われている。

乱暴にだが、手を差し伸べられたオレには幸い時間だけは沢山あるのだ。

じつくり、そして適当に今後の事をそれなり考えよう。

「ふあ〜……」

朝メシとは言え、メシ食った後はやっぱり眠いな。

「じゃあ、3日ほどツアハに行つて来るよ」

「気をつけて行け」

目の前でしばらく小屋を離れる“ゴリ江”にヴィムが声を掛けている。

「ああん？誰にモノ言つてんだい？」

身を案じるヴィムの一言に、力こぶを作って答える類人猿“ゴリ江”。なぜそこで力こぶを作る？やはりオレにはコイツを人間扱いすることは出来そうにない。

「先週、ツアハとクレーンキャンプをつなぐ街道で商人が狼に襲われたいらしい。もしかしたら東の森の狼が増えているのかもしれない」

「ほんと心配症だねえ、あんたは。そんなに心配しなくても今回の仕事に行くのはあたしを入れて6人もいる。これだけいりゃあ、そうそう襲われる事はないさ」

ヴィムから物騒な情報が流れたが、目の前の進化したゴリラには狼程度では敵^{かな}うまい。

余計な心配だと思わず、ヴィム。

むしろ遭遇した時の狼の心配をしてやれ。

「そうか。しかし用心に越した事はないぞ」

「わかってるよ。んじゃ、行って来る」

「ああ」

手をあげてノシノシと歩き出す“ゴリ江”に、オレは一言も声を掛けず静かに見送る。

オレにとっては、拳言語を駆使する厄介者がいなくなるのだ。命の恩人だとは言え、諸手を挙げて「二度と帰ってくるな」と言っただけの状況だ。

しかしそうすると、照れ屋さんなヤツの拳が火を噴きかねない。だからここは黙って見送るのが得策だと判断したのだ。

「さっさと消えろ、消えろ」と心の中で念じていると、いったん歩き始めた“ゴリ江”の足が止まった。

「エド！あたしが帰ってくるまでに怪我治しときな。動けるようになってきたし、そろそろ働いてもらうよ、この役立たず」

野生動物特有の第六感で気づかれたのかと思ったぜ。ビビらせんじゃねえよ！

「う、うるせーな。さっさと行けよ」

オメーに言われるまでもなく、役立たずなのは自分でもわかってんだよ。つか、怪我は治そうと思って治るもんじゃねえんだよ！

そんなことも知らねえのか、脳筋ヤロウ！

「帰ったらコキ使つてやるから覚悟しとくんだね」

「ちっ！狼に食われやがれ」

マジで狼のみなさんに頑張つて貰いたい。無理だろうけど……。

「わっはっはっはー」

豪快に笑いながら村の中心の方へ歩いていく“ゴリ江”を見送り、今日もオレのニート生活が始まった。

オレを助けたヘラという女は、このヴォルフベルグでキコリをしている。

年は30半ばと言ったところか。

このヘラこと“ゴリ江”は簡単に言うと、ガサツだが陽気な性格のメスゴリラだ。

もともとこの村の生まれではないらしく、共に暮らしている相棒のヴィムとこの村に流れつき、村のはずれに住み着いてもう10年近く経つそうだ。

その相棒のヴィムと言う男は、“ゴリ江”と対照的な外見を持つ男である。

年の頃は同じで、太ってはいないが恰幅のいいイカリ型の“ゴリ江”に対して、彼は背が低く、パンパンに膨れ上がった体型、いわゆるアンコ型だ。

そして全体的に見れば、まるでダルマのような体型に坊主頭がくっついていて、後姿はどこぞのおむすびが大好きな裸の大将のように見えなくもない。

顔はすべてのパーツが中心に寄っていて、これもゴリ江とは正反對な作りをしている。それぞれのパーツが散らばっているゴリ江の魚顔チックな造詣と足して2で割れば、配置だけはモブ顔クラスにはなるだろうが……。

いや皆まで言うまい。

外見はそんな感じだが、性格はおおらかで世話焼きといった普通だ。

オレのメシを作ってくれていたのも、実はヴィムだったりする。

そんなヴィムとは“ゴリ江”より長い時間を共に過ごしている。

別にキモい意味ではないよ。

単純に外に出歩けるようになったオレが、昼間は小屋の裏にある作業場に居る事が多いせいでそうなたただけなのだ。

今、オレは怪我人認定されているのでニート状態。

とくに何をする訳でもなく、というか今のオレが大した事が出来ない訳で、不本意ながらニートもとい人間のクズをやっている。

それはもう朝メシから夜メシまで何もやる事がない手持ち無沙汰なオレ。

そう！胸を張って言おう。

オレは今まさに、生きている価値を疑う存在だと！

自分で言ってる鬱だな……。

こんな身の上なため、当然室内に居続けると次第に気分が陰鬱なものになってしまふ、今日この頃。

この気分を晴らすために、日中は屋外にある作業場の隅で時間を潰しているのだ。日の光にあたるだけで少しは違ってくるからさ。

なんか改めてお日様って偉大だなんて思うよ。

まあ、こんな理由でヴィムがよく居る作業場にオレもいる。

そもそも作業場とはオレが勝手につけた呼び名だが、ヴィムが木材を加工するときに使っているの、あながち間違いではないだろう。

彼らはキコリと言っても毎日毎日、木だけを切り倒して生きている訳ではない。

かと言って、カルおじさんのように動物たちと戯れているわけでもない。

キコリと言うくらいだから基本、山で木を切り倒し生計を立てているのは間違いないが、年から年中、仙人のように山に籠っている訳ではないのだ。

山の獣の繁殖期や冬眠前の時期には山や森には入らないし、雨や雪などの天候にも左右される事もある。

そういう山や森に入らない時には、近隣のツアハの村で力仕事を請け負ったり、中には持ち帰った材木で、家具や工芸品を作る者もいる。

ガタイのいい“ゴリ江”はその風体通り細かい作業が苦手なため、今日のようにツアハへ出稼ぎ的なものをしに行くことが多いが、ヴィムは切り倒した売り物にならない木や切り株などを掘り起こして、それを材料にイスなど家具を作るのだ。

“ゴリ江”を見送った後、ヴィムは作業場に向かったのでオレもついてきた。

この村のキコリは周囲に狼がよく出るため、基本一人では森や山には入らない。大体2〜5人程度の決まった仲間で行事をする。

ヴイムと“ゴリ江”は普段2人だけで行動するため、“ゴリ江”がいない間はヴイムもキコリ家業は休業だ。

だからヴイムはこの3日間、作業場で過ごす事になる。

「なあ、ヴイム」

「どうした？」

これから使う木を作業場に運び込んだヴイムに声を掛けると、道具を取りながら背中越しに返事が返ってきた。

「今日も作業を見ているもいいか？」

ここは仕事場、いわば男の戦場だ。

手伝いすら出来ないオレは、とりあえずお伺いぐらいは立てておくべきだと思つたのだ。“ゴリ江”にはもちろんこんな気遣いはしないが、相手は常識人のヴイムだからな。

「別にかまわん」

「邪魔になんねえ？」

「エドは俺の仕事の邪魔をするつもりか？」

「いやまったく」

軽く言葉遊びをしてくる大人なヴィムに、頭をブンブンと振って
そんなつもりはないと答える。

「では問題ない」

そういつとすぐに作業を始めた。

顔さえまともならダンディーなのだが……、残念だ。

ヴィムは大きな洞のある部分をうまく使って、一人掛けのイスを
作るらしい。

まずはデカイ鎌のような道具で、木の皮を剥ぎとっていた。

その木の皮を剥ぐ道具は、鎌のように刃が柄から直角方向に出
ている訳ではなく、刃は斜めに延びる様についていて木の皮を削ぎ落
とすように使うものだ。

馴れた手つきで木の皮を剥ぎ落とす作業を終えると次の工程に
うつる。

きれいに皮が剥ぎ取られた丸太をこれまたデカイ刃だけのノコギ
リで、大人が使うイスの高さに木材を切り、加工していく。

このノコギリも三角形の刃に直接握り手が付いているものと、両
端に持ち手が付いていて2人係りで扱う物があるが、今目の前でヴ
ィムが使い始めたのは一人で扱える前者だ。

こうして大作業を見ているのは思いのほか楽しいものなのだ。

なんの変哲もない木の塊が、文明的な人間の使う物へと形を変え
ていく。このクリエイティブな工程は見ていて飽きない。

しかし作業している人間にとっては楽しいばかりではないだろう。先日、後者の二人用のノコギリで“ゴリ江”とヴィムが売り物の板を作っていたのを見たが、その作業はもう大変そうだったの一言に尽きる。

固定された木材が上部からスライスされて板状になっていくのだが、板一枚にもすごい手間隙がかかっていたのだ。

板状になってからも、仕上げに鉋で表面を整えなければいけないから、売り物の加工はこれほど大変なものだったのかと感心するほどだった。

しかし大変そうではあるが最終工程である鉋掛けは、見ていて楽しい。

サアアと言う音と共に削り屑が出てくる。

これが、なんとも爽快なのだ。

今も早く鉋を使ってくれないかとウズウズしているくらいだ。

始めのうちには薄めの皮つて感じのモノがポロポロと出るだけだが、ある程度木材の表面が削られてくると鉋の刃を調節し更に薄い削り屑が出てくるようになる。最終的にはシューと言う音と共に極薄の膜のような削り屑になる。

こんなキレイな削り屑が出る作業はどんなに楽しいのだろうかと思ひ、先日少しやらせて貰ったがなかなか難しくかった。怪我のせ

いでうまく体に力が入らなかったこともあるが、鉋の刃を調節するのはもちろん、一定の力を加え続けて削るのも見た目とは違い簡単ではないのだ。

結局10分もしないで、鉋掛けは職人技であり素人には難しいと言っ事がわかった。

でもその作業自体は楽しく、あーでもない、こーでもないと試行錯誤しながら試していた為、その時にオレの様を見ていた“ゴリ江”が「手伝ってみるかい？」と言うので、オレは怪我が治ったら、木を切り倒しに行かない日の作業を手伝う事になった。

どうせたいしてやる事もなく、一日中考え事をしてゴロゴロしているのだ。興味があるものはやっておこうと言う軽い気持ちでやる事にしたのだ。

まるで大工の真似事だが、平民ライフの第一歩としては妥当なのかも知れない。

そんな訳で、今日はヴィムの作業を見ているだけだが、近々大工見習いデビューする予定だ。

そうだ！

せっかく大工の源さんの何かになるんだ。

ニート卒業祝いに、まず自分の杖も自分で作ってみるか。

つーか、ニート卒業で大工の源さんって……、オレはパチプロにでもなるつもりか？！

「ダメ人生、まっしぐらじゃないかぁーっ！！」

そんな自分ツッコミを全力でしてしまったせいで、ヴィムが作業の手を止めてこちらを振り返った。

「邪魔はしないんじゃないのか？」

「すま〜〜〜ん!!」

そんなつもりはまったくなかったが、邪魔してしまった申し訳な
さで、オレは上級者用のジャンピング土下座を反射的にしてしまった。

……………結果、しこたま打ちつけた膝を抱えて、オレはもんどり
うつ事になった。

こうして、ニートで怪我人なオレのアホな一日が、今日も確実に
過ぎていく。

大きくなれよ

近頃、オレもやっと“秋の平民ライフ体験ツアー（無期限）”に馴染んできた。

同居人たちに言わせれば、平民なんて領主に税を納めるために働いているようなものらしいが、求められるものがある程度決まった金だけであると言うのはシンプルでいい。

それに平民生活は貴族のかた苦しい礼儀も気にする必要もなければ、紳士たる振舞いも必要ない。話し方だっていちいち気にしなくて、心の声をそのまま解放すればいいだけだ。

周囲の目なんか気にせず好き勝手生きようと思えば出来るし（まあ、そんなことをすればほとんどがノタれ死ぬらしいが）、貴族や亜人など危険なものに近寄らなければオレでも生きていけそうだ。徴兵があつたつてトンスラこいてやればいいだけだしな。

こうして考えてみると失ったモノも多いが、すべてを失った訳ではなくちゃんと得たモノもあるんだなという事に気づく。

人生つてヤツは本当に面白いな。

こんなふうに見えるようになったのは、ある程度“偽装紳士”から“変態平民”にジョブチェンジを果たした自分をきちんと認識出

来ている証拠だろう。

まだ始まったばかりだけど、出だしは上々と言ったところか。

体調のほうもボチボチ戻ってきた。

体の怪我はまだ完全には癒えてはいなかったが、体のダルさが消えた事もあり、ここ数日は作業場でヴィムの手伝いをしたり、2人が山や森で木を切る時に荷物持ちとして付いて行ったりしている。

昨日も“ゴリ江”に「あんたはヴィムとアタシ、両方の弟子だねえ」なんてキャラにない事を言われたりしたばかりだ。

それは奇妙な3人の共同生活にそれぞれが慣れて来たといういい傾向なのだろうが、軽く頭を握りつぶす事が出来るくらい大きな手で、バシバシとオレの背中を叩くのは止めると言いたい。

「殺す気がっ！」と本気で思ってしまうほどのダメージを受けるが、彼女にとってはスキンシップのひとつだから性質たちが悪いのだ。

この村には彼女たちのようにキコリを生業にしている者がそれなりにいるが、“ゴリ江”に弟子が出来ないのはこの殺人未遂スキンシップが一因ではないだろうか。

しかしオレも男の子だ。

この程度の事は笑って右から左へ受け流そうじゃないか。“ゴリ江”が弟子だなんだと嬉しそうなのは、正直言って悪い気もしないしな。

こうして2人と打ち解けてきたせい、実際に仕事を手伝い始めると大工の真似事もいろいろ発見があつて楽しい。

例えば、オレの記憶では鉋は引いて作業するモノだと思つていたが、ここでは押して削つていく。

ある時ヴイムにその事を聞いてみたが、「俺はこう教わつた」と言つただけで話が終つた。

その様子を通りすがりに見ていた“ゴリ江”に「引いて使つたりしても力が入らないだろう？何をバカなこと言つてんだい？」と一蹴される始末。

ゴリラにバカ扱いされるとは納得がいかん！

つーか、オレの記憶違いか？それにしてもムカつくと、我慢できずに殴りかかつた結果、返り討ちにあつたりしたのもいい思い出だ。

この体験で一番の発見は“ゴリ江”には、どうあがいても勝てないといわかつた事だ。

こんなことがあつたりなかつたりしたが、今日はマサカリ担いでキントロウっている。

日が昇る前の早朝から村を出たオレ達3人は、南の山を1つ越えて目的の場所に向かっていった。
今はその道中である。

目的地まで結構な時間がかかっていたので、オレがヒマつぶしを提案した。

「ハイデイ ハイデイ フレ、ハイデイ・ホー！、ハイ！」

オレが絶妙のタイミングで2人に合図を送る。

「ハイデイ、ハイデイ」

ぞんざいだが一応調子の合った声が返ってきた。ここはオレもハズせねえーぜ！

「フレツ・ホウーー！！」

いい感じだ！カモン（合図）！！

「ハイデイ、ハイデイ」 「フレツ・ホツウオオオー！！」

オレ、絶妙！バッチコイ（合図）！！

「ハイデイ、ハイデイ」 「フレツ・ホウーー！！」

まだまだイケるぜえ！もうイツチヨ（合図）！！

「ハイデイ、ハイデイ」 「フレツ・ホツウオオオオー！！、

ひでぶっ！！」

ぐっ……うう！

最高潮に達しようかという時に“ゴリ江”に秘孔を突かれてしまった。ここが一番大事なところなのに！

「なぜにっ！？」

「いい加減、うるさいんだよ。それぐらいにしときな」

そ、そんなあ！

さっきまで一緒にハイデイしてたのにっ！

オレのフレッホーに酔いしれてたでしようが？！

楽しむだけ楽しんで、飽きたらポイだと？！ヒドい！ヒド過ぎる！頭にきたオレは、ヒドい男がバカな女に吐くセリフを言っちゃった。

「そっちだつて十分楽しんだらっ！」

「ダメんな。殴るよ」

「イエス！サーセンっした！」

さすがに一回殴られた直後なのでパブロフ的に反射低頭してしま
う。

てか、すぐ殴るのヤメね？

いい大人なんだからさ。話し合おうぜ、“ゴリ江”。

いつまでもガキみたいにすぐに手を出すな。

大きくなれよ！

あつ！いや、これ以上大きくなれたら死人が出るな。うん。
最初の犠牲者は確実にオレだし。
やっぱ、今のままでいいや。

「まあ、歌の意味はさっぱりだが、こういうのも悪くはないかもね」

「ああ、これだけ声を出せば、獣除けにもなつてちょうどいいしな」

結局どつちなんだと言う“ゴリ江”の発言に、ヴィムも同意しているが……。

「……そう思うのなら2人とも、もっとノリノリでやれよ」

殴られ損だぜ、こっちは。

「あんたみたいに無駄に調子に乗れる訳ないだろ」

「しよーがねえーじゃん！ハイテンションなくしてこんな事できるかよっ！」

オレだって、オレだってなあ。一所懸命に自分を奮い立たせてや
つてたんだよ！

「い、いや。エドはそう言つが、俺は気分良くやっていたのだが…
…」

おいおい……。

ワントンポ会話に入ってくるのがオセエよ、ヴィム。まあいいさ。オレは受けた恩は必ず返す男だ。キモく恥ずかしがりながら発言するユーにも答えてやろう。

「ヴィムは普段からカタいんだからさあ。もつと自分でも恥ずかしいと思うぐらいハツチャけないと！伝わらないぜ」

とくに熱いハートはな！と爽やかにサムズアップしてやった。

「うむ。そういうものが」

「そういうモンなの！」

素直なコが一番だね！

「騙されんじやないよっ！コイツがバカでお調子者なだけなんだから」

「何いい！」

たしかにノリノリなオレは体を揺らしながら歌っていた。だがそれは基本だろ！

途中から横揺れだけに治まらず、膝の曲げ伸ばしを使って上下の動きまで取り入れたが、それが本場じこみだ。何が悪い！

革のベストも着てなければ、羽根突きの帽子を被ってもいないのにここまでやれるオレを賞賛すべきところだろっ？！ここはさあ。

「そんなことより、ここらで始めるよ」

オレの驚愕の表情はいつものようにスルーされてしまった。しかし聞き捨てならんな。

「そ、そんなことだとう?!」

「そうだな。ぼちぼち仕事を始めるか」

「いやぁー! ヴィムまで!？」

「異議あり! 異議あり!! オレのバカ疑惑が否定されていないこの状況で、よくそんな事が言えるな、ヴィム。オレはオレ自身のために、そして法と正義ちよつとしたエロの名の下に戦うぞ。がんばれ、オレ! 戦え、ギャバン!」

「バカエドっ! 訳わからんこと言っていないで、さっさとこっちきな! 3秒で来ないと、殴るよ」

「はぁ~~~~い。エド、行きます! すぐ行っちゃうぞ(はーと)」

オレのプライドも、“ゴリ江”の握り拳の前には紙クズ同然さ。

だって魔法の使えないオレはただの“もやし”なんだもの。ウフッ。

この最終進化系メスゴリラの前では、妄想以外に抗うすべを持っていないのだ。

名残惜しいが、せつかくの楽しいハイキングの時間も終わりか。

さっ！仕事すんべ。お仕事、お仕事！

何気に今は目覚めてから1カ月近くが経っている。

考える時間だけはたっぷりあったので、最近では体のダルさ、体調不良が魔力の枯渇だろうと言う推測をしたり、折れた杖を眺めながら、新しい杖は自分で作れるのか、作れないならどうやって手に入るかなどと思案を巡らせていた。

さすがに平民に落ちぶれたとは言え、魔法が使えるに越した事はないだろう。

そう考えたオレは、メイジになることを薄ぼんやりだがと決めている。

せっかく貴族としてメイジになるための知識を蓄えていたのだ。この財産を使わない手はないだろう。

魔法は稼ぐのにあって困らないスキルだろうし、いざと言う時のいろんな意味で切り札にもなる。

こんな風にオレの考え事はもっぱら魔法についてだったが、その中でももっとも時間を割いていたのが書籍に書かれていた内容を思い出すことだ。

魔力の枯渇なんて推測も、この思い出す作業からサルベージした

記憶の成果から考えたものだ。

オレが記憶のサルベージにほとんどの時間を使っているのには、
でっかい理由がある。

それはなんとなくだがメイジになろうとしているオレが、今の時
点でコモンスペルのライトとマジックアローしか魔法が使えないか
らだ。

オレの記憶の空白な部分は、時間にして7年程度だろう。

今が何歳かわからんが、体つきから12、3歳ではないかと“ゴ
リ江”もヴィムも言っていたから、おおよそだがそのぐらいだと推
測できる。

その7年間に覚えたスペルがかなりあっただろうが、残念な事に
スッポリ抜け落ちた記憶のせいで系統魔法は1つも使えない。

だから残っている記憶の中で、読んだ書籍に書かれていた魔法に
ついての知識やスペルがなかったかと必死に思い出しているのだ。

残念ながらこれがあまり成果はあがっていない。

ソフィーナがイヴァンの頭を火事った時の記憶や、それから芋づ
る式にその時期に読んでいた火の系統魔法の本の内容などは思い出
したのだが……、いかんせん火の系統魔法ばかりだ。

アントワープ家は代々、水のメイジを輩出する家系。

そっち関係を知りたいのだが、思い出したい記憶は一向に思い出
す気配がなく、欲しい知識が増えない。

特にやる事がない今、それで困る事はないけど、この痒い所に手が届かない……、いやたとえが違うな。“ビブーティ”という粉を手から出すインドの宗教家の名前が、思い出せそうで思い出せないな状況はストレスが溜まる。

ん？一周して比喻になつてないな。まっいいか。

どうせ杖が手に入るまで魔法は使えないのだから、焦る事はないのかもしれないけどさ。

まっ、こんな現状だから積極的に2人に付いて回ってるって訳なのよ。

しかしさすがに木一本倒すのは疲れたな。

「うばあ〜」

「あんだ、ほんとに体力ないねえ」

呆れた様子で“ゴリ江”は言うが、オレは病み上がりだぜ。

大の大人が一抱えするほどの太さがある木を、2人の手を借りずに切り倒しただけで自分を褒めてあげたい。

「じゃあ、エドが倒した木はこのまま置いといて、他のを川に落とすよ」

オレが一人で森の主（注：オレが勝手に名づけた）と格闘している間に、“ゴリ江”は倍ほどの太さを持つ木を5本ほど切り倒していた。どんだけパワーあんだよとツツコみたいが、腕がパンパンでそれすら出来ない。

ヴイムは“ゴリ江”が切り倒した木を、順に10メートルほどの長さで切り分け枝打ちをしていた。地味に大変な作業なのに、あっさりこなすコイツも実は以外に筋肉野郎なのだ。

「エド。短く切った細いやつを、そっちに1メートル間隔で並べな」

「腕がオレのいうこと利かないんだけど」

「ほんと役立たずだね、アンタは」

そんなムカつく顔で言われても無理なものは無理。というかやりたくない。

「へら。エドはまだ子供だ。あの木を切り倒しただけも大したものだろう」

「ヴイムはこいつに甘いんだよ！ほらッ！さっさと動きな」

ヴイムがいい事言ったのに、まるで効果がありあしねえ。“ゴリ江”には逆らうだけ無駄か……。

「わかったっつーの！おぼえてやがれ、コンチクショー」

「エド。あまり無理はするな」

「しないよ。出来たら始めからしてるさ」

悪態をつきつつも“ゴリ江”の言うとおりにするオレを見て、ヴィムはその不細工な顔で「フツ」なんてカッコつけてニヒルに笑っている。

全然、様になってないんだから手伝ってくれりゃいいのに。

ヴィムは基本常識的でイイヤツなのだが、甘くはない点がかえねえ。

まだ他人に奉仕されるのが当たり前な貴族感覚が抜けないオレもダメなんだが、一度あのぬるま湯な生活を体験してしまうと、なかなか自立した人間に戻るのは難しいんだよ。

まあ、そのうち慣れては来るだろうが、基本オレは怠け者なので本質的には変わらないかもしれないな。

「あゝ、おもゝい……」

短く切ったといつても、木の上のほうの細い部分を2メートルほどに切ったものだ。軽くても数キロはある。

スプーンより重いものを持ったことがない、貴族なオレには重労働すぎるよ。マジで。

しっかし、こんなものを1メートル感覚で並べてどうしようってんだ？なにか儀式か？イミフ過ぎるな。

“ゴリ江”の単なる嫌がらせじゃないかという考えもよぎったが、ヴィムが止めなかったのでその可能性もないだろう。

なんて思っていたら、2人が10メートルほどの長さに切った木を転がしてオレが並べたものの上を持ってきた。

「まだこれぐらいしか並べてないのかい？この調子じゃまだまだ斜
面まで並べるのには時間がかかりそうだね」

「斜面？つか、なんでこれを並べさせられてるんだ？」

「切った木を川まで移動させるのに、その上を転がしていくんだよ。
そんなこともわかんないのかい」

またバカにされたよ。

ちよつと運び方が頭いーじゃんなんて思っただけに、マジ凹
むな。

挿話 ガキと指輪

いつもと変わらない朝。

あたしはいつもように仕事で山に向かった。

そういつものようにね。

その日の仕事は、木を商人に売るだけの簡単なものだった。

木は前の日にマル又川に落としておいたので、あとは川を使ってツアハの村まで運び、商人に売る。たったそれだけ事だ。

木はすでに運びやすいよう、縄で簡単にイカダの様に組み上げていた。

あたしはこういう作業は苦手だから、前の日のうちにヴィムがやってある。

木を切り倒し、売り物にする作業自体はヴィムと2人ですが、その日の作業はこれを下流へ運び商人に会うだけ。

その商人とももう長い付き合いで、なじみの顔だ。だから、たいした交渉事がある訳でもない。

近頃の相場は上がってはいるものの、そう大きく変わる事がないので、いつものように簡単なやりとりで取引も終わるだろう。

その日もきつといつも通り。

本当になんてことはない、普段通りの仕事だと思っていた。

だから、あたしひとりで十分だった。

川沿いをつたって行けば、山とは言え危険は少ない。

狼なんかに出くわしても川に飛び込めばいい。マル又川は幅はあ
る上に流れもきつくないし、狼たちも水の中へ飛び込んでまで襲っ
ては来ないだろうからね。

一応、もしもの場合でも枝打ち様の鉋を持って来ている。

万が一、狼の2、3匹なら出くあしたって、あたしならどうとで
もなるさね。

昔とつたなんとやらってやつでさ。

だが、あたしもバカじゃない。

山が危険なのは重々わかつているから、獣避けの金属音を時々鳴
らし注意しながら、十分に油断せず目的地に向かった。

少し遠回りになる川沿いを歩いて前の日、木材を川岸に繋いでお
いた場所に着くと、少し違和感があった。

「ん？」

別に木材が流されたとか、盗まれたとかいう訳じゃないんだが…

…。前の日と違う様子にあたしは眉をしかめる。

そこで見つけたのは木材のイカダに引っかかっていた“子供の死
体”だったからだ。

それが違和感の正体だったんだよ。

あまり気分のいいモンじゃないが、イカダに引つかかっている以上は無視することも出来ない。やっかいなもんだと思ったのを憶えている。

遠くからパツと見た感じじゃあ、年の頃は10過ぎたほどの男の子供。

あの身なりはよさは、それなりの商人か貴族の子だったのだろうってのがわかる。

「そんな年で死んじまうなんてツイてないねえ、あんた……」

そのまま川に蹴落とそうかと思ったけど引き上げる事にした。

別に死体がガキだったので憐れに思ったわけじゃないよ。

そうしても良かったんだが、あたしが蹴落とした後また近くの岸に流れ着きでもしたら、熊や狼の格好の餌になっちまう。そうなるのはちよつといただけじゃないからね。

だからこれは同情なんかじゃなく、わざわざ危険な獣を呼び寄せるモノを放つて置けないってだけの行動なのさ。

この辺りにはまだ木を切りに来るからね。ただでさえ嫌な気分なのに、これ以上迷惑を掛けられるのはゴメンだ。

引き上げるにも、とりあえず近づかないことにはどうしようもない。

あたしは縄で繋がれた木材の上を、滑らないように気を付けなが

ら歩いて近づいた。

近くに来てみると思ったよりは大きい。

ただど所詮はガキだ。引き上げるのにそれほど力はいらなかった。驚いたことに引き上げてみると、ガキの右手には折れた杖が握られていた。

「……メイジ、貴族の子か？」

質の良い服は至るところが破れ、血に汚れている。

おそらく昨夜、野党の類に襲われ、逃げ延びるために川に飛び込んだというところだろう。

周りに他の死体はないが、ガキがこの様子じゃ全滅だね。

そんな事を考えていると、引き上げたガキの胸元に光るものが見えた。

鎖につながれた指輪だ。

膝について確かめてみれば、大きく高価そうな青色の宝石がついている。

「これは高く売れそうだね」

死体には必要ないだろうと思って引きちぎろうとしたその時。

ガシッ！と手首をつかまれた。

「っ！」

死体だと間違っただけだったりとしていたはずなのに、あたしの手を掴む力がしつかりしている事には驚かされる。

「体が冷たくなってたから、てっきり死んでいるとばかり思っていたが……。あんた、生きていたのかい」

生きていたのにさすがのあたしも驚いたね。そのことをそのまま口にするが、これは……。

「……う、……ぐ」

ん？あたしの声に反応しているのか？

なにか答えるように口を動かしているが、よく聞き取れないねえ。

やっぱりこりゃダメかもね。

「……あず、……コロ、す……」

今、薄く開けられた目がどこを見ているのかはわからなかったが、かすれた声でたしかに“殺す”と言った。死に損ないのくせに大それた口を利く。

どうやら訳ありらしいじゃないか、このガキは。

「しかし、ガキの言うセリフじゃないねえ」

息も絶えだえの状態で助けを乞わずに、そんなセリフを吐くとは恐れ入った。

ただのボンボンって訳じゃないようだね。

……おもしろい。

拾ってみるのも面白そうだ。

「この生活は穏やかで、そうそう命の危険なんてありゃしない。それを望んで来た訳だが……」。

「たまには違った刺激があってもいいものだろ？ 助けてやるんだから楽しませな」

この10年の間、静かな村に溶け込んだ自分のことに特に何か思う事はなかった。毎日が反吐が出るような昔の生活にはうんざりしてたからね。

でもこのガキの言葉があ頃のあたしを思い出させたのか、こんな昔のような考えをさせた。その責任は取って貰おう。

まあ、村まで生きていたらの話だがどうなることやら。

「3日も寝たきりだねえ。あのガキはもうダメそうかい？ ヴィム」

「いや、傷はひどいが大丈夫だろう。今朝方、けさがた熱も引いたようだし

な

「そうか。思ったとおり、あのガキはしぶといようだね」

「もう少しで目が覚めるが……、どうするつもりだ？」

「どつするもどつするもないよ。3日前にも言ったけど少しの間、面倒見てやるのさ」

「長い付き合いだが、なんとというか……。へらはそんな人間ではないと思っていた」

「それは間違っちゃいないさ。今回は……まあ、ただの気まぐれさ」

「きまぐれか」

「そうさ！それにこいつを頂いたんだ。命ぐらいは助けてもバチはあたらないよ」

ガキが身につけていた、青色の宝石が乗った指輪を見せる。

「……………」

この高そうな指輪を見せれば、景気もよくなるはずだと勢いよくヴイムに見せるが、特に思っていたような反応がない。それどころか何か言いたそうな顔つきでこちらを見ている。

「なんだい？言いたい事がありそうだね？」

「いや、大した事じゃない」

そう言っつて小屋に戻るうとするヴィムの態度が、なんだか気に入らない。ムカツと来て問い詰めるような勢いで、その後を追いかけて小屋に入る。

「はつきり、言い」

最後まで言う前に、ヴィムの様子に遮られる。

「どつやら目が覚めているらしいぞ」

部屋の中ほどで立ち止まっていたヴィムは、ガキが寝ている部屋の方を指差していた。

ガキがいる部屋の方に注意を向けてみるとなるほど、中から物音が聞こえてくる。

『、エイドリアアアアーン』

………なんだかわからないが、ヴィムの言ったとおり目が覚めたようだ。

「………ちょっと様子を見てくる」

なんだかバツが悪くなって、ヴィムには目を合わせずにガキの部屋に向かう。

「ああ」

後ろから聞こえてくるヴィムの声から逃げるように、あたしはガキのいる部屋の扉を開けた。

「おや？目が覚めたのかい？」

部屋に入るとガキが起き上がっていた。

3日も寝込んでいたせい、土のような顔色の悪さでこちらを向く。

「フツ！なかなかやるではないか」

「ん？なんだって？」

なんだか会話が出来ていないが、言葉ははっきりしている。どうやらヴィムの言うとおり、もう死ぬような事はなさそうだね。

「いや、なんでもない。それよりここは？」

ガキは言葉を話すだけで辛いのか、痛みに顔が歪んでいる。こころなしか息も荒い。

「ここかい？ここはヴォルフベルグさ」

「ヴおるふベルグ？」

ガキが聞いてきた事に答えてやったが、どうやらこの村のこと自体わからないようだ。こいつは混乱しているのか、しきりに目を瞑ったり、首を捻ったりして考え込んでいる。

そうかと思つたら、今度はあたしのほうをじーつと見てくる。

しかたない。面倒だが、少し説明してやるか。

「ヴォルフベルグってのはこの村の名さ。この村はオウオモエラ伯爵領の南の端つこにある。言ってみればトリスティンとゲルマニアの国境の村だね」

あたしの言っている事がちゃんとわかったかどうかはわからないけど、とりあえずこいつのことを聞いとかないとね。

そう思つて、黙つたままのガキにさらに言葉を続ける。

「で？あんた何もんだい？」

「オレは　　？……あれ？」

答えようとしたガキが、その途中で言葉を失つた。呆然とした顔から驚いた顔になり、すぐに困つた顔に変わったと思つたら閃いたと言つ顔になつた。

目の前でころころと表情を変えるガキを面白いもんだと見ていたら、自信満々の顔でこう尋ねてくる。

「なあ、メスゴリラ。オレは誰だ？」

一瞬、ガキの言っている事の意味がわからなかったが、このガキが自分が誰なのか自分でもわからず、見ず知らずのあたしに聞いてきているのだと理解できた。

なんてあきれたガキだ！

どうやら混乱していて自分が誰だかわからないようだが、だから
って見ず知らずの人間に聞くかね？普通。

元々なのか、怪我のせいかは知らないが、このガキが普通じゃないのはわかった。

しかし、ここでもうひとつわからないことがある。このイカれた
ガキがさっき言った。

「ん？メスゴリラ？あたしのことかい？」

「どう考えても、オメーしかいねえだろ？ここにオレとオメー以外
に誰かいんのか？」

「口の悪いクソガキだねえ。ところでさっきのゴリラってのはなん
だい？」

メスゴリラ、この言葉だ。

「オメーにもわかるように言ってる。メスゴリラすなわちメス
オークと、へぶらっ」

やっちまった！

あまりにも生意気な事を言うんで思わず手が出ちまったよ。

そもそもこの部屋に入る前からイライラしてたんだ。

それなのにこのガキが口の聞き方がなっちゃいないもんだから、

怪我人だと言うのを忘れちゃってやっちゃった。

常日頃、「すぐに手をだすのがヘラの悪い癖だ」とヴィムに言われているのに、怪我人を殴っちゃまうなんて！

また呆れられそうだ。

しかし思わずぶん殴っちゃったが、大丈夫かね？このクソガキは？
殴った勢いで壁にへばりついてたガキを確かめてみれば、左の頬が腫れてきてはいるものの、気を失った程度で済んでいた。

聞きたい事はまだあったが、殴った引け目があったあたしは無理にたたき起こさず、次に起きた時にすることにした。

結局ガキが目を覚ましたのは翌日だった。

また前の日と同じやりとりをしたが、その感想を一言で言えば“クソ生意気なクソガキ”だ。

ああ、バカも付け足しとかないといけないねえ。

最初は昨日と同じ様に混乱しているみたいで、自分が誰なのか、どうして怪我をしたのかまったくわからない様子だった。

それでもなんとか自分の名前が“エドガー・コナン”だと言う事は思い出したようで、それから少しずつ自分の国の事なんかを話したが、やはり最近のことは思い出せないらしい。

身なりや話、名前からすると貴族ではなく商人の子か？だとすればあの高価そうな指輪を持っていたことも納得がいく。
平民でも魔法を使うヤツはいるからな。

いや、あいつが言っていた遠い異国の出身と言つのが本当なら、
そうとも言えないか。

まあ、どちらにしても本人が自分の事を思い出せないんじゃ、あ
たしがいろいろ考えてもしかたがないね。

一応、育ちのせいか礼儀も知っているし、始めの予定通り怪我が
治るまで面倒を見てやる事にするか。

あのガキ、エドを助けてから数日が経つが、あたしたちの小屋は
ずいぶんにぎやかになった。

以前もそれなりににぎやかであるとは思っていたが、今ではそれ
も静かな方だったのだとわかった。

ヴェムは自分から話を切り出すような男じゃないし、あたしも話
はするが進んでバカ話をするような人間ではない。

しかしエドは寝たきりの時から騒がしいヤツで、動き回れるよう
になってからはいっそう騒がしさが増した。

あまりにももの煩さに、勝手に手が出ちまうほどだ。

昨日はこんな喧しさは冗談じゃないと、殴るあたしをヴェムが呆

れて止めることまであつたぐらいだった。

「とんだ“刺激”物を拾つちまつたもんだよ」

「あまり言葉ほど嫌そうな顔はしていないな」

「冗談じゃない！生意気でうるさいだけのクソガキだよ、エドは」

そう毒づく言葉を聞いたヴィムは、あたしとは少し違つように考えていたと話し出した。

エドは出歩けるようになるまで小屋の裏で、ヴィムの作業を見るようになった。

するとヴィムの作業を見始めて3日で一通りの順序を覚えたようで、ひとつの作業が終わるとちょうど頃合を見計らつてエドが次に使う道具をもつて来るそつだ。

邪魔にならないように、ヴィムの動きに合わせて作業中に出た屑なんかも手際よく掃除するらしい。

それに気づいたヴィムが試しに作業をやらせてみると、出来ないなりにもいるいるとやり方を変え懸命に取り組んでいたそつだ。

ヴィムが言うには「頭は悪くないし、実は根性がありそつだ」との事だった。

あのバカエドが？本当かね？

そのことを聞いた次の日。

まったく信じられなかったあたしは、森に行くのに荷物を持たせてついでにこさせた。

案の定、グダグダと文句を言っていたが無理やり引っ張ってきたのだ。

エドはまだ体の傷が痛むようで、その足取りは重かった。

だが憎まれ口を叩きながらも、けして投げ出さず目的地まで着いてきた。

あたしの思っていたエドの印象とは違っていたので、驚いたもんさ。絶対に途中で帰ると思ったいたからね。

だから「見かけによらず根性があるじゃないか」と褒めてやった。すると「何もしないんじゃない、ほんとにただのニートだからな」とよくわからない事を言ったが、ヴィムの言うとおり根性はあるらしい。

ただの生意気なうるさいだけのクソガキっていうエドの印象も、少しは考え直してやるか。

あたしがエドを拾ってから丸一週間が経った。

今日はヴィムの作ったものをツアハの商人・ダリウスに届けに来ていた。

ついでにこのまま荷物運びの仕事を3日ほどして行くつもりだ。一緒に働く村の男たちとは後で落ち合う事になっている。

そのまえに。

「ダリウス。今日はちょっと見てもらいたいもんがあるんだ」

「ん？もう何も持っていないようだが……」

「これさ」

そう言って懐にしまっておいた指輪を出す。エドが持っていた大きな青色の宝石がついた指輪さ。

「ほう、これはこれは……、ちょっと見せてもらっていいかね？」

「そのために持ってきたさ」

さすがにこの大きさの宝石を見たので驚いているのだろう。いつもは見たこともないような表情でダリウスは指輪を見ていた。

「こ、これはっ！」

突然、驚いた表情を見せたかと思うと、どこからか取り出したレズで、じっくりと調べ始めた。

このようすと期待したとおり、高く売れそうだね。

「どうだい？いいもんだろ？ちょっとや、そつとではお目にかかれ
ない一品さー！」

あたしの言葉は聞こえているんだろうが、返事をしないまま今度は指輪の台座の方を調べている。

「細工も見事だし、かなりの値がすると思うんだが……。いくらに

なりそうだい？」

指輪を調べ終わったダリウスは、少し考えてから思いもしなかった言葉を言った。

「……………これはうちでは買い取れないねえ」

「は？そう言う事だい？100エキューとは言わない。80エキューぐらいはするだろ？こんな大きな宝石がついてるんだ！いくらなんでも買い取れないって」

「へら。そう興奮しないで話を聞け」

「買い取れないって言われて落ち着いていられるか！」

「その訳を話そうと言っているのだ」

「だからどうしてなんだい！この宝石がニセモノだっていいたいのかい？！」

「まず勘違いしないで貰いたいのだが、この宝石は間違いなく本物だよ」

「だったらどうして？！」

「本物だからここでは買い取れないのだ」

「？何を言ってるんだい？」

「この店にある金では買い取ることが出来ないと言ったことだ」

「それって」

「そう100エキューどころか1万エキューは下らないかもしれない
い」

「い、1万……」

「これほど大きくて、しかも質の良いサファイアをわたしは今まで
に見た事がない。しかも特別なサファイアだ」

「特別？」

「それを光にかざして見る」

そう言われて光にかざすと宝石の中に星が浮かび上がった。

「星が見えるだろう？それはスターサファイアと言って、けして平民が持てるようなシロモノではないんだ。かといって貴族様でも持っているのはいないだろう。わたしが40年以上商人をやっている、それを所有していると聞いた事があるのは
アルビオン王国
のモード大公ただ一人だ」

「……アルビオン、の王族」

「ヘラも知っているだろうが、アルビオン王国は風石のように貴重な鉱石が多く取れることで有名だ。だがそんなアルビオン王国でも、持っているのは王弟殿下であるモード大公ただ一人。アルビオン王国の宝物庫にならもう1つや2つぐらいはあるかもしれないが、これほどのものとなると他国の貴族、いや王族でも持っている貴族様

「がいるかどうか」

「……」

「しかも指輪の台座に文字が刻まれているだろうか？」

ダリウスの言葉にあたしは黙って指輪を見直してみると、たしかに細工に紛れて文字のようなものが刻まれている。

「それはルーンだ。メイジが使う文字だよ。それを考えても一介の商人であるわたしが持てるような物じゃない。一時的に商品として預かるとしてもね。もし仮に、わたしにそれを買収するだけの資金があったとしても……買収はしないだろう」

「どうして」

それほど価値のあるものなら、さらに高く売れるんじゃない？と思っ
ているとその表情を読んだのか、ダリウスはさらに話を続ける。

「まず一番の理由は売る相手がいない。それほどのものとなると、
そこらの貴族様では買う事は出来ないだろう。次にそれだけのもの
だ、他の商人や貴族様にわたしが持っているのと知れたら……、ね。
わかるだろ？わたしがヘラに本当の事を言わずに、偽って100エ
キユーでその指輪を買収しなかったのもそういう理由さ」

命が危ないと言う事だろうか。

「どうしても売りたいと言うのならクーレンキャンプ、いやウィンド
ボナの出来るだけ大きな商会を訪ねてみるといい。もしかしたら売
ることが出来るかもしれない。そうすれば、その金ですぐに貴族様

になれるぞ……まあ、それなりの覚悟はいるがね」

覚悟、ね。

さっきのことも合わせて考えれば、40年間商人として培ってきた多くの伝手ついでを持ってしても、ダリウスにも確実に売りさばける自信がないということだろうか？

ダリウスの言う事が本当なら、下手に貴族に売ろうとしても難癖を付けられて取り上げられてしまうどころか、有りもしない罪をきせられて殺される事もあるかもしれない。

いい稼ぎになればと軽い気持ちで持ってきたのに、こんな事になるとは思っても見なかった。

「どうした……もんかねえ」

「それはヘラが決める事だ。いろいろ教えたのは、長い付き合いがあるヘラへのわたしの誠意だと思ってくれ」

よく言う。

商人の損得勘定で、危険かもしれない事に手を出さなかっただけじゃないのさ！

「はっ！そんな人間かどうかなんて事が、長い付き合いのあたしにわからないとでも？」

「今日はちょっと世間話よこしまが長くなりはしたが、この次からはいつも通りに対応するから信用して欲しいものだ」

暗に指輪の話は無かったことにしてくれ、と言う事か。

タヌキじじいめっ！
なんだか忌々しいったらないね！

しかし……、ホントにどうしたもんかねえ。

もうお嫁に行けない

うららかな晩秋の朝。

ひんやりとした空気のなか、木戸を開け放つと、先程まで世話しなくさえずっていた鳥たちが飛び去っていった。

日に日に昼の長さが短く感じられるようになってきたのだ、鳥たちももう冬支度でも始めているのだろう。

もうすぐ冬か。

そんな事を考えていると、部屋に流れ込んでくる冷気で震えが走った。

オレは寝ている間に固まった筋肉を伸ばすように、ゆっくりと伸びをして体をほぐしていく。

「そろそろ……か」

“ゴリ江”に拾われてから、早いもので1カ月半になるうとしている。

全身を包んでいた気だるさはスツカリ消え、体の怪我もほぼ全快したと言っている。

今日の目覚めも、いつになくすっきりしたものだった。

だから、確かめなければいけない。

「セッツ!!」

そう！オレ様のパーフェクト・ボディが完全復活を遂げたのかを！

腰を落とし、右手をしなやかな鶴のように掲げたキメポーズをとり深呼吸をする。

よし！

体のキレを確かめてやるう！

カッティングだぜ！

「つつちーつつちーつつちーつつちー！」

独特の掛け声と共に、最初のポーズから始めは小さく、次第に大きく揺れていくオレの上半身。

うむ、上半身は異常なし！

「ハイツ！つつちーつつちーつつちーつつちー！」

ひゅん
一声気合を入れて、手をペンギンにし、小さい円を描きながら辺りを動きだす。

小気味よいステップが踏めているな。

よし、下半身も異常なし！

「ずくだんずんぶんぐん」

キメッ！

まずは上半身に捻りをくわえただけのポージングをキメる。
まだ自身の体の筋や筋肉と会話しながらの、小手調べ的な体勢だ。

「えすばんしゅんぼんしょん」

キメッ！！

今度は下半身を前後に振りながら稼動域を確かめる。

発情中のサルも真つ青なスウィングに、見た者は脱帽するだろう。

「えすばんすん えすばんさん えすばんしゃんかんせん、ぶん！」

最後はくねくねと人間が可能な限りの奇妙なポーズをとりつつ、
全身の違和感を洗い出す。

もちろんそれだけに止まらず、「ぶん！」の声で表情筋まで使っ
てキメポーズをとった。

キマった！

特に全身に引きつったりする違和感は無かったし、何より……結
構動けるようになってるな、オレ。

これならばマスターアジアの称号にも手が届くかもしれない。

と、心の中で一応の満足を感じたその時。

「エドー！さつさと起……………」

「……………」

扉を開け放った“ゴリ江”とガツチリと目線が交錯した。

そう、自分でも恐ろしく奇妙なポーズをとっていると自覚している姿を、同居人に見られてしまったのだ。

オレはただ、体の調子を確かめていただけなのに……、こんな事になるなんて！

これが運命の悪戯ってヤツか！

恥ずかしすぎる！

オレ、もうお嫁にいけない。

そんなことが朝にあった為、今日はちょっと気まずい。

「ところでき。2人は5年前にヴォルフベルグへ来たんだろ？じゃあ、ここ来るまでなにやってたんだ？」

今は仕事も一段落着いて、休憩中だ。
最近寒くなってきたとは言え、さすがに力仕事なので汗だくなる。

だから失った水分補給と、そんな体をクールダウンするのに仕事の合間に2度、3度は休憩を取る。

それでオレの年が12才ぐらいだろうと言う話が出て、前に2人に聞いた話を思い出したのだ。

「それを聞いてどうすんのさ？」

「別にどうもしねえよ。聞いてみただけだ」

なんだか突っかかってくる“ゴリ江”に特に意味はないと答えた。朝のことで向こうも気まずくて、あまり話をしたくないのだろうか？

「あんたみたいなクソガキに教えてやる義理はないねえ」

「はいはい、そーですか」

気まずいのかもれないが、さすがに“ゴリ江”の言い方にはムカついた。

こつちだつて“ゴリ江”のことなんてスゲー知りたい訳じゃねえつてんだよ。

思春期のガキじゃあるまいし、女なら誰にでも興味があるんだろう？的な嫌悪感を顔に出しやがって……いや、見た目はガキだけどさ。だけどお前は女っていうか、分類的にはメスだ。

ズロース履いたゴリラなんかに興味はねえ！

1ドニエの価値も、1オンクストロームの興味もありやしねえぜ！

むしろ想像しただけでダメージをうけたオレの脳に、高額な慰謝料を払ってもらいたいくらいだ。

さっきのはただ気まずさに負けたと言うか、会話のネタに困ったと言うか、そんな感じだったから振ったただけだ。

勘違いしないいでよね！プンプン。

「まあ落ち着け。へー。別に隠す事ではないだろう。オレ達が傭兵だった事なんて」

「ちっ！余計な事を言うんじゃないよ。ったく！」

オレが“ゴリ江”のズロース姿に興味はねえと不機嫌な顔をしていると、ヴィムがあっさりと答えをのたまいやがった。

“ゴリ江”はさらに不機嫌になり、もう動物園でウンコを投げてくるゴリラほどイラついている。

「なんだ。傭兵だったのかよ。オレはてっきり動物の糞を投げる仕事でもしてたのかと、あうちっ」

すべてを言いきる前にハタかれた。

「殴るよ」

「つつ~~~~う！もう殴ってんだろ！」

ボケ役からしてみれば、ツッコミ役のスキルが上がる事は喜ばしいところだが、“ゴリ江”の場合は威力がパネエため歓迎できない。

今も“ゴリ江”基準では“殴る”ではなく“ハタく”程度なのだ

ろう。

人語を理解する能力に乏しいため、お前の“ハタク”は他人の“殴る”だと何度言っているのだが通じていない。

早く人間になって国際評価基準ISO796084なぐるのやーよを取得してもらいたいものだ。

「あんだだつてメイジだつて事、話さないじゃないか。それと同じさ」

メイジだとは知ってたんだ。まあ当たり前か、杖持ってたんだもんな。

「話さなかった訳じゃねえよ。聞かれなかったから答えてなかっただけだ。一緒にすんな。それに」

「それに、なんだ？」

「杖もないのにメイジもクソもないだろ？」

「杖なんて今手に持つてるのでも、何でもいいだろうに」

そう言つてオレの持っている鉄の杖を指さす。

「えっ？いいの？」

逆にオレが聞き返してしまう。

オレの持っている杖は、平民が土を耕す時に使う道具である杖だ。基本、杖つてやつは農耕に使うための物なので木製だが、キコリ

は切り株を掘り起こすのに使う。その為、根っこを突き切ったりする必要があるので金属製を使う。

今日はヴィムが工芸用に使う切り株を掘り起こす為に持ってきていた。

「いいもなにもそれと同じ様なのを持つてるヤツを戦場で見たことがある」

ヴィムまで肯定？

「マジで？これでいいの？」

杖の契約についての書籍も読んでいると記憶はあるが、その内容についてはまったく思い出していない。

だから杖は記憶に残っているモノ、つまりメイジが手にしていたモノみたいなを使わないといけないと思っていた。

そこに“杖なんて何でもいいんだろ？発言”だ。

オレが思わず聞き返してしまったのもしかたがないだろう。

「ダメなのか？」

「しらね」

つか、オレに聞かれてもマジで知らんだ！

「だけどエドが持つてるそれじゃあ、土の系統魔法の使い手みたい

だ

「？」

「そうだね」

グイムの発言の意味がわからず疑問に思っていると、それに“ゴリ江”も同意する。これはちょっとどついつ意図なのか聞いてみるか。

「どついつことだ？」

「ああ、すまない。エドは知らんだろうが、戦場でも噂話みたいなものがあつてな」

「噂話？」

なんか面白そうな話だ。

興味深げにそう聞き返してみると、今度は“ゴリ江”が答えてきた。

「簡単に言うと、手に持っている杖を見てそのメイジが何の使い手がわかるって話さ」

「えっ？そんなのわかんのか？」

ウソくせえー！

「だからあくまでも噂話程度だって言ってるだろ。ちゃんと話を聞いてたかい、バカエド！」

「うっせ！それより面白そうだな、その話。教えてくれよ」

「面倒臭い」

ぐううう！ゴリラのくせにい！

「おめえには聞いてねえ！オークと結婚して死にやがれ。ヴィム、教えてよ」

「うっせ！」

幸せになるにはそれしかないと言う将来をアドバイスしてやっただけなのに、青筋立てて怒る“ゴリ江”を無視してヴィムに話の催促を試みる。

「あくまで昔聞いた噂だが、それでもいいなら話してやろう」

「さっすが、ヴィム、ボゲラッ」

期待に胸を膨らませていたところを、今度はマジで“ゴリ江”に殴られた。

「いつ殴ってもやっぱりスッキリするねえ、エドの頭は。スッキリした事だし、特別にあたしが教えてやろうじゃないか！」

痛む頭を抑えながら文句の一言でも言っただろうと思ったが、得意顔で上腕二等筋を見せ付けてくるので諦めた。

そのまま何か言おうものなら、「話している時に口を挟んだ」と殴られるのがオチだからな。

ガマンしてやるからさっさと話しやがれ、この筋肉！

「じゃあ、まずは戦場で一番わかりやすいメイジは、杖剣を使うやつ。そのメイジは大體風の使い手だね」

「ジョウケン？」

「杖と剣がひとつになったものさ」

初めて聞く名前だ。

杖剣とやらの実物がちよつと想像がつかんが、今はいいだろう。それよりも理由が気になる。

「なんで風のメイジは普通の杖より杖剣が多いんだ？」

「基本、杖剣つてのは貴族に仕えているメイジが使うもんなのさ。貴族に仕えているメイジ、つまり魔法衛士隊や諸侯の魔法隊・騎士団は、風の使い手が多いのは知ってるかい？」

聞いた事あるような、というか本で読んだ事があつたような気がするな。だが、詳しい事がさっぱり思い出せん。

ここはアホな振りして聞いてみよう！

「いや、なんで魔法衛士隊は風のメイジが多いんだ？」

「まあ、偉い貴族の家柄のヤツはそうとは限らないらしいんだが、名ばかりの貧乏貴族で衛士隊に入るのは風の使い手が多いって話さ。やつらの役目は王侯貴族の護衛。直接敵と戦うよりも飛んでくる

魔法や矢を迎撃する機会のほうが多い。なんせ傭兵と違って守るのが第一の仕事だからね。だから風の使い手の方が都合がいいようなのさ。

それに使い魔のこともある。

戦いに向いている幻獣であるグリフォンやヒポグリフ、あとは竜なんかも風メイジの使い魔に多い。

こんな理由で風の使い手が多いのさ」

「なるほど、なるほど」

一理あるかもしれない。“ゴリ江”のくせにまっとうな事を言うなんて、生意気な！

「そのせいでそうだった連中が落ちぶれたりするとそのまま杖剣を使う。こういった連中は、プライドが高いから平民と同じ仕事はもちろんしない。というか出来ない。だからほとんどが実入りのいい傭兵になる。

もちろん手柄を立てたくて前線に立つ貴族の子弟も杖剣を使っているが、そいつらは身なりや杖剣の質を見ればすぐに見分けがつくさね」

「ふむふむ。杖剣は風のメイジ、時々貴族の子弟ね。他は？」

「じゃあ、次は土の系統を使うメイジ。これは杖が鉄だとか金属である事が多い。

ヤツラは創作・土偶クリエイト・ゴーレムのように土系統魔法の性格上、比較的敵と近くで戦う事になる。もちろん近づかれないように巧みな動きをする者もいるが、魔法をかわされたり、すり抜けたりされた場合を考え、て剣を受け止める事の出来る金属性の杖を持っているものが多いよ

うだね

「ほう！それは属性上納得がいくな。噂話も侮あなごれん」

「あとは火の系統を使うメイジだが、やつらはただの杖だね」

「いやいや、みんな杖でしょ？」

「黙って最後まで聞きな！」

やつらは戦場では花形メイジでね。ヤツラの多さが敵味方の優劣に大きく関わってくるんだよ。そのぶん火のメイジたちはプライドが高いらしく、メイジである象徴でもある杖をこれ見よがしに主張すると言う話だ。だから大き目の木製の杖を持つらしい」

これは眉唾だな。

こじつけ感が十二分に感じられる話だ。

内容のぺらぺら具合が“ゴリ江”っぽい。

まあ、そんなことより次だ！次！

「ふくん、じゃあ残りの水のメイジは？」

「しらないね」

「は？」

期待していただけに、ずいぶんマヌケな声で聞き返してしまった。

「水のメイジはあまり前線にはいないんだよ。基本、戦闘より回復役だからね。だから特徴を聞かれてもねえ」

なんかだんだんと話が盛り下がってきて、オチがたったって感じだな。

「ああ、でもやつらは魔法を使う時に、他にも道具を使うことが多いって聞いたような気がするねえ。杖のほかに、腰なんかは道具を入れるものをつけているメイジが多いのかなんとか……」

「へえ」

オレにとって一番大事なところなのに、曖昧過ぎんぞ！
期待はずれもいいところだ。
なんか聞き損って感じだな。

「まあ、あくまでも戦場ではそういう傾向があるという話で絶対ではない」

一通りの話が終わったと言う事で、ヴィムがフォローを言ってシメた。

オレは脳筋の“ゴリ江”じゃなくてお前に聞いたつもりだったんだが、それだけかよ！

てか、それは最初に聞いたっつーの。

「そうだねえ。半分ぐらい当たってれば儲けものって程度さ。」

半分ねえ。

ウソ臭ええ！

ガチでウソ臭すぎるな！

しかし話としては、なかなか興味深い。

オレの前世の記憶ではタロットカードってのがあった。もともとはトランプから派生した遊戯用のカードらしいが、オレには占いの道具ぐらいの認識しかない。

そのタロットには、杖、剣、聖杯、貨幣の札がある。

それぞれ杖〓火、剣〓風、聖杯〓水、貨幣〓土の属性だ。

穢れのないピュアボーイ（遺憾な言い方では童貞）だったオレが女の子と親しくなるために、必死コイて得た知識である。

わずかでもきっかけになりそうな可能性のあるもの一つとして、かじった知識だという経緯があるため間違いはないはずだ。

ちなみに女の子と親しくなるために、他には“靴下を履かない人語録”の熟読等もしたものだ。

それはさておき、なんとなくタロットカードの属性とメイジの杖の傾向が一致するのは不思議な感じがする。

2人はあくまで噂程度のもの眉唾話しだと言っていたが、もしかしたらそれぞれの系統メイジと杖の形状・素材などに相性と言うものがあるのかもしれない。

オレの記憶に残っているメイジは、母親である“ビッチ”と魔法教師のソフィーナ2人だが、魔法を使っているのを見たことがあるのはソフィーナだけだ。

彼女の杖は、オレが初めて与えられたロッドタイプ（30センチほどの指揮者などが使うタクトより少し大きいモノ）の杖よりもひとまわり大きいバトンタイプ（50センチの警棒ぐらいのもの）だった。

魔法少女よろしく、クルクルと回していたのでよく憶えている。

オレが与えられた杖はメイジが一番初めに持たされる一般的なものだったと記憶しているので、火の使い手だった彼女が持っていた杖は、普通よりも大きい木製の杖だった事になる。

標本が一例だけと他にないのでなんともしゃべらないが、“ゴリ江”とヴィムが言う戦場の噂に一致する上に、天才肌のソフィーナがその感性で選択したとすれば可能性は上がってくるんじゃないだろうか？

いやいや考えすぎか。

しかし、これから考えてみると水のメイジは聖杯、つまり奇跡の力が宿ったもの。

いわゆるマジックアイテムの類だろう。

マジックアイテム的な魔力のこもったものを杖とするのがいいの

か？

たとえば風石・水石や秘宝と言った類のもの……。

杖の先つちよに“不思議石”が付いてるなんて、ファンタジー丸出しでいいな！

杖を手に入れたら、先つちよに風石とか水石でも付けてみるか。

……てか風石売ってるのって、何屋さんだ？

もうお嫁に行けない（後書き）

アニメの第二期、メンヌヴィル登場&死亡まで見ました。

感想については……微妙です。

もうこれ以上見ないかもしれません。

原作は未だに読んでいませんが、おそらく「原作は面白いがアニメは残念」と言うやつなのだと推測致しました。

私が書いているものには、あまり原作等とは関係なくなってしまうので、これ以上見なくても大丈夫なのではと思っております。

真のヒロインであるらしい(?) 巨乳・ハーフェルフと高慢・ツインテールが出てきていませんが、なんとなくゼロの使い魔はこんな感じなんだなあと再確認は出来ました。

虚無の魔法がどんなものなのか知る為に、巨乳と無能王、陰険教皇のキャラは確認しておきたかったです……。

まあ、なんとかなる！と安易に考えております。

マスターアジア（予定）、強制労働に逝く

オウオモエラ伯爵領内の最大の街、領主の館のあるクーレンカン
プ。

マルヌ川を使った南北の交易と帝都ウィンドボナから東西に伸びる大陸交路の終着の街と言う場所柄、商人が集まる交易都市として栄えている。

街を見下ろす小高い丘に建てられた領主の館は、古くはトリステイン侵攻部隊の拠点として築かれた城砦であるためその様は無骨で堅固な作りをしていて、商人が行き交う街にはそぐわないと言えるだろう。

ゲルマニアの帝都であるウィンドボナが国の東、エルフの領域であるサハラに程近い位置にあるため、オウオモエラ伯爵は国内で「西の果ての辺境領主」と呼ばれているが、この館以外はともも辺境という言葉におさまるような街ではない。

経済面だけで見れば、オウオモエラ領よりも広大な領地を持つ辺境伯爵領・侯爵領、いや公爵領に比べても遜色がないと言われているらしい。

まあ「西の果ての辺境領主」と言うのは貧乏貴族のやつかみと言
うヤツだろう。

オレがいるヴォルフベルグの村のあるオウオモエラ領が意外に栄えている領地なのだと思った訳だが、なぜそんな話になったかと言えば理由がある。

それは領主が定期的に行うマル又川の堤防工事、その賦役のために徴集され、クーレンキャンプに来てしているからだ。

領主から平民に課せられた義務は2つある。

1つは貢納じゆのついわゆる税金で、もう1つは賦役ふえきつまり労働奉仕である。

始祖の国々やロマリアではこれに加え、ブリミル教会への寄付と言う名目だが実質は徴税として払わなければならない税もあるらしい。とくにロマリアではこの税の割合が他国に比べ多いそうだ。

最近ゲルマニアでも教会の建立・司祭の招致・ブリミル教への入信などが奨励されているため、熱心な領主がいる土地では払わなければならない町村や集落もある。

今の皇帝閣下がブリミル教を奨励しているためだ。

オレは前世や生まれ変わった国では宗教観念が希薄な環境であったため、どちらかと言えばこのブリミル教ってやつも胡散臭い目で見ている。

聞いた話だと偶像崇拜を禁止している宗教らしいが、その存在自体が確たるものではない神ならまだしも、実在した始祖への英雄崇

拝的な宗教に偶像もクソもないと思うのだが、そのあたりも含めさっぱりわからない。

まあ、そのあたりはブリミル教の開祖とか、昔の偉い教皇とかがアホな大人だったのだろう。

だが、この世界では平民が学ぶと言う機会がない為、道徳教育や文字の読み書きを学ぶ場として教会が存在する事は一定の評価をしている。

でもぶっちゃけて言うとヴォルフベルグの村人たち、と言うかおそらくこの世界の平民の知能レベルは小学生並だ。教会での教育もないよりはマシというレベル。

幼少期に学ぶ訓練をさせていないという事が、これだけ自分でモノを考えない人間を生み出す事になるとは……、恐ろしく感じるほど現実だ。教育のシステムが整っている現代人にとっては、狂っているとしか言いようがない。

平民で自ら知識を求めて思考する人間なんて、おそらく数%いれはいい方だろう。

こういう現実を実際に肌で感じてみると、多少は教育された貴族＝支配層、教育とはほぼ無縁の平民＝被支配層という構図を作り出すために、平民に教育の機会を与えないと言うのはゲスいにも程があるって感じた。

この世界じゃ、始祖の血脈たる王家の王政が6000年も続いているって話だが、魔法という絶対的なアドバンテージの存在もあるため革命が起こり成功しないのも頷ける。

革命が起こってもせいぜいトップの体制が少し変わるぐらいで、貴族と平民の立場の違いに変化が起こるとはとてもじゃないが考えられない。

まあ、オレもそのゲスイ貴族の一員だったらしいから声を大にして言える立場ではないんだけどな。

話が逸れちゃったが、今オレがクレーンキャンプにいるのは、さっきも言ったようにそのゲスイ支配者層へ奉公するために来たからなんだけど……、オレが参加するのってオカしくね？

ヴォルフベルグから30人賦役に付かなきゃいけないってのは聞いた。

だけどオレは4ヶ月前に村に来たばかりの、言わばヨソ者同然ですよ！

なんで奴隷のごとく強制労働なんてしなきゃいけないんだ？

納得いかーん！

そもそもこうなったのもすべて“ゴリ江”の横暴だ。

「もつと力をつけるために行ってきた」「あたしの代わりだ」なんて抜かしやがり、必死の抵抗むなしく、結局は拳で語られ「あたしの言う事に逆らうなんざ、10年早い」と押しきられた。

当然オレは一縷の望みをヴィムに託したが、そのヴィムまで「まあ、体力もついてきたから大丈夫だ」ときたもんだ。

「バツカもーん！」と波平にどなってもらわねば、自分の過ちに気づかないのか？

こいつら、「まじブアカか？」と言いたい。

てか、切り株の角に頭ぶつけて死ねばいいのに！

基本、体力とか何とかの問題じゃねえんだよ。

賦役はヴォルフベルグの村民に来てるんだ。村長が領主からの徴集があつたと話していたときに聞いたはずだ。

村の若い者に頼むってさあ。

ちよつと考えてみる。

若い者つたつたつてオレは若すぎだろ！

まだ初体験も迎えていないチエリーなお子様に強制労働って！？

おかしくねっ！？

普通は働き盛り、ヤリ盛りの大きなお友達にする話でしょ？

横文字3文字ぐらいの人権保護団体だか慈善事業機構だかから苦情殺到ものですよ？

死に掛けの村長のお言葉を思い出してごらんよ。

「今年の賦役も去年同様マル又川の堤を築くことだそうじゃ。領主様からの知らせでは今年もこの村から30人の人手を出すようにとの仰せじゃ。堤を築く労働は過酷じゃから、女子供や年老いた者には無理じゃろう。すまないが村のためにも力のある若い者に行つてもらいたい」

どつよ？

女子供や年老いた者には無理じゃろって言うてるよな！

つまり性別不明の“ゴリ江”やヴィムに頼むって言うてんだからお前らが行って来い。

てか、行くのが当たり前なんだよ。

だまって奴隷のごとく強制労働に励んで来いってんだ！

そしてムチで打たれて、「アハン」「ウフン」と快感に酔いしれてしまえ！

“ゴリ江”は別にそのままムチ打ちの傷がもとで死んでしまっても構わん。

たぶん殺せないだろうけど……。

とか、いろいろ少年の主張をぶつけてみたが、オレの体に生傷が増えただけの結果に終わった。

結局、賦役のためにこのクーレンキャンプに来るために村を出立する日までの抵抗むなく、オレが賦役につくことは覆らなかつたのだ。

まあ、前日に“ゴリ江”にいいパンチを一発ぶち込んでやったので少しは溜飲が下がりはしたが、納得するのとは別の話だ。

しかし、“ゴリ江”に食らわしたガゼルパンチ（体格差が激しいので顔を殴るのにはアッパー系しか届かない）には自分でもびつく

りしたな。食らわせた後、かつてない感触が拳にあったが、まさか筋肉生物のゴリ江に血を吐かせるとは。

血を吐かせるといつても、いいものを貰った“ゴリ江”がたたらを踏んだ後にちよつと咳き込んで血の混じった唾を吐いた程度だが、まあ同じ様なものだろう。

あの時にオレは悟ったね！

『きつとオレの拳には神が宿っているんだ』、と。

ロバ・アル・カリイェ

東方世界にまで名を轟かせるマスター・アジアの称号を得るのも、オレには容易いことだろう。

この拳でゴリ江を昇天させるのもそう遠い未来ではないのかもしれないな。

ガゼルパンチがジェットアップに昇華する頃には、オレの拳が天を突くだろう。

「オレの拳は天を突くドリ、じゃなくて拳だ！」

ふっふっふ、今から楽しみだぜい。

「エド、何を言っているんだ。はぐれるからこつちにい」

おつとイケね。

オレの明るい未来に想いを馳せすぎてしまったようだ。

ただでさえ初めてきた街で地理に疎いのに、こう人がごった返しているところではぐれてしまつとオレ泣いちゃうかもしれん。

そのままエスケープ出来る喜びで！

だが、呼びつけられたからには仕方がない。

オレと共に賦役のためにクレーンキャンプに来たヴィムの気遣いに「チツ！」と舌打ちしながら、ヴォルフベルグの村人の集団に戻ると、少し離れたところに居た一団に目がついた。

彼らは明らかに平民とは違う集団だ。

腰に下げた剣や、背中に背負った槍が一種異様な空気を作り出している。身につけた武器の類が統一されていないところを見ると領主の兵と言つわけではなさそうだ。

特にその中心にいるローブをつけた人間が違和感を助長させていた。

「ヴィム。アレは？」

気になったオレはその怪しげな集団を指差して訊ねてみると、ヴィムはそちらに顔を向けたままで歩きながら答えてくれた。

「傭兵だろっ」

「アレが傭兵かぁ。思ったより小奇麗なんだな」

「どづいつのを想像してたんだ？」

「こづ、無精ひげを蓄えていて、毛皮なんかを腰に巻いているおっさん」

あと付け加えるなら顔に傷ね。これテンプレ。

「それじゃあ、野盗の類だ」

いや同じ様なものでしょ。

つつこもつかと顔を向けると、オレに向かってヴィムはニヒルに苦笑する。

……いかんせん残念な顔面のヴィムには似合っていない。
ゲンナリしたので突っ込むのは止めておいた。

「そういえばヴィムたちも元傭兵なんだっ たっけ？」

「まあ、ヘラの粗暴なところをよく知るエドなら、そう思っていても仕方がないな」

粗野？ “ゴリ江” が？ バカ言っ なよ、ヴィム。

「いや、アレは粗暴って言うか野生だから」

人類の括りに入れて話をするなんて、人が良すぎるぜ。ヴィムさんよお。

と言うか、さっきからつつこみどころ多すぎだぜ。

「ふっ」

何を言っているんだというオレのリアクションに、男前な笑いを返すヴィムにまたも微妙な視線を送りつつも、集団からはぐれないように歩を進める。

ボケたおすヴィムにめまいを起こしそうになったので、話は終わりだ。

ヴィムはふざけている訳じゃないだけに、相手をしていると疲れがたまるな……。

そう思っていると、急に横合いから腕を捕まれた。

「エドガー！エドガー！今日、領主様の街では祭りでもあるべか？こげに人さ、いっぱいいるのを見たのはオラ初めてだあ」

その人物はヴォルフベルグから一緒にここまで来た、よく知る顔だった。

バカなお兄ちゃん(前書き)

前話の続きです。

バカなお兄ちゃん

賦役ふえきで堤を補強するマルヌ川岸は、このクレーンキャンプの街から北西に少し行った場所だ。

去年も同様の賦役に参加した村人によれば、まだ一時間ほど歩かなければならぬらしい。

オレたちヴォルフベルグ村民・sが今居るところは、まだクレーンキャンプの街に入ったばかりの場所なのだが、田舎者のオレたちに言わせれば山と森に囲まれたヴォルフベルグに比べると祭りのような人の多さだとも言えなくもない。

だから初めてこのクレーンキャンプに来た村民ならばそんな人の多さに驚き、キョロキョロとしきりに辺りを見回すもの仕方がないのかもしれない。

先程オレに声をかけてきたコイツ、アドルフのように。

「踊りはいつ始まるのかあ？」

うぜえ。

先程の問いに何も答えてないにもかかわらず、すっかり脳内で祭り認定がなされたアドルフがワクワクしていますといった表情でオレに聞いてくる。

ちなみにアドルフは世間一般で言うところのバカなので仕方ないのだが、ウザいものはウザい。

オレは何日も歩いて来たせいで疲れてんのよ！

肉体が疲労でタウリンを欲しているってのに、これはマジないだろ？

疲れているときのバカほどイラつくものはない。

タウリンに加えてカルシウムも要求したい状況だ。

「みんなキレイな服着てるべ」

はあ〜……。

しかし、オレはこのバカなお兄ちゃんになぜか懐かれている。

アドルフは村で10人ほど居る狩人の息子で、今年15になる。

キコリと狩人は何かと縁が深いという仕事柄、“ゴリ江”たちとアドルフの親に交流があるためオレもコイツと知り合った。

顔は狩人である両親には似ておらず、なかなかのつくりをしている。

一言で言えば、野性味溢れる男前と言ったところか。

村の小娘どもにも人気があるが、残念なことにチビだ。年下であるオレと同じくらいしか身長がない。

コイツは見かけ小柄の少年といった感じなのだが力は大人顔負けで、大人3人がかりで運ぶ荷物を一人で運ぶほどの力自慢である。

そのことに加え、村で一人前とみなされる年になったと言う事で、今年の賦役に参加しているのだが……何度も言っているとおり、如

何せんコイツはバカなのだ。

文字は当然読めないし、計算も当たり前のようには出来はしない。興味のあること以外は、致命的に記憶力が乏しい。人の言う事をすぐに信じるためすぐに騙される。

あえて長所をあげるとすれば、素直だという点だけだろう。

こんな残念な部類に属する人間なので、オレにとっては使い勝手がなかなか良い。

ストレス発散にイジメ、妄想“ゴリ江”としていたぶり、意味もなく貶める。

オレがこのような扱いをするのは、けしてコイツが女にモテるから八つ当たりをしているのではないよ。

村の外れで女とチクリ合っているのを偶然目撃したからではないと、一応明言しておこう。

くそっ！

リア充、マジ氏ねっ！

おっとあぶない本音が……。

まあそんな理由で酷い扱いをしているにもかかわらず、たまに飴を与えるオレに騙され懐いているのだ。

それも、ただ次にイジめる為の布石なんだが

バカは扱いやすくて助かる。

そんなアドフルは、目下“オレ専用パシリ”に教育中である。

と言う訳で、とりあえず殴っておこうか
教育の一環だ。

「あいたー！いきなりなんなんだべ」

「アドルフ。オレはガツカリだよ」

ため息混じりに言葉を告げると、先程までの楽しげな表情が一転、
混乱と非難を訴える表情になりこちらに詰め寄ってくるバカなお兄
ちゃん。

「な、なしてだ？エドガー」

「お前はここに何しに来たんだ？」

「そりゃあ……、ええと……おとうが、けっぱれってえ」

さすがオレが認めるバカだ。目的がすっぱり頭から抜け落ちてい
やがる。

期待通りの返しをする残念なヤツだな。

まあ、いいさ。

もう一度殴ってやろう

「あいたー！何するだあ！」

一度目より若干強く殴ると、またいつちよ前に痛みがりがった。
生意気な、アドルフのクセに。

どうやら説教が必要らしいな。

「いいか？アドルフ。お前はここに領主様のために働きに来たんだ。違うか？」

「そうだったべ！やっぱりエドガーはなんでも知ってるべな」

ちょっと真面目な顔をつくって嗜めると、殴られた事をもう忘れたかのように、ハツとした顔でアドルフは驚く。今回の目的を思い出したのだろう。

しかしその姿は見事なまでにバカだ。

「そうだ。オレは何でも知っている。だから大事な事を忘れていたお前を殴った。大事な事を忘れていたお前が悪いからだ。違うか？」

「たしかにオラが悪かったべ……。おとうにけっぱるように言われてたのに」

おっ？落ち込んでるな。

ちょうどいい機会だし調教、じゃなかった教育しておこう。

こういう時は、まずは諭すようにやさしい態度で同意を得るんだっけか？

「オレだってお前を殴りたいわけじゃない。お前は友達だ。お前が悪いとは言え、殴るのは辛い。殴るたびに心が痛む。お前だってオレと同じで、友達を傷つけないとは思っていないだろ？」

「もちろんだべ！」

成功したな。

「だろ？ けどお前のためだから、オレもこの辛さに耐えてるんだ。悪い事をちゃんとお前が悪いとわかるようにな」

ここは辛さに耐えるかのように顔を背ける演技も入れておこう。

「そうだったんだべか……」

ちらっと盗み見てみると、シユンとするアドルフ。

捨てられた子犬のようだが、オレには可愛くもなんともない。というか、捨てられるような駄犬に用はないのだ。

オレを退屈させるな。

つて、自分で言ってるてなんか……ノツてきたな！ オレ。

手順としてはここらかいりいろあつたはずだが、今はこのまま勢いに任せてみるか？

「しつかりしろ！ アドルフ。お前、そんな調子で大丈夫か？ 領主様のための仕事は、お前が失敗すると村のみんなに迷惑がかかるんだぞ！」

「む、村のみんなにだべか？」

「あたりまえだ！ 領主様のために働きに来てんだぞ。お前が失敗したら、お前が怒られるだけじゃなく、まずここに一緒に来ているみんなが怒られる」

「エドガーはオラと違って失敗なんてしねえのに、エドガーも怒られるだべか？」

「もちろんだ。お前が失敗すればみんなが怒られるんだ。それだけじゃすまない。その後、ここに来ていない村のみんなまで怒られるんだ」

「来てないみんなもだか？」

「なんか思っていた展開とは違うが、このまま不安を煽るのも一興か？」

「そうだ。お前の幼馴染のファニも、お前が尊敬してる狩人のペーターも、ヨボヨボで死にそうな村長もだ。ノーマンのとに生まれたばかりのエーファだって」

「以前チチクリ合っていたララは言わない。別に悔しいわけではない！」

「エーファはまだ赤ん坊だべ！」

「年は関係ない。さつきみんなが怒られるって言っただろ？もう忘れたのか？」

「覚えてるだ。エドガーがみんな怒られるって言ったのは、オラちやんと覚えてるだ」

「そうか。じゃあ、みんななんだからエーファが怒られるのもわかるな」

「わかるだ。……オラア、ちゃんと出来るだかなあ」

バカがかなり不安気に肩を落としている。

そんなに心配するな！おそらくお前にはちゃんと出来んがオレが操ってやるう！オレが楽するために。

「大丈夫だぞ、アドルフ。オレがついている！」

「ホントかあ？」

バカがオレを疑うなんて100年はええ！

そんなバカには詐欺師がよく言うセリフを自信満々に言ってるう！

「オレが嘘を言った事があるか！？」

「エドガーは『意地悪は言うけど、嘘は言わない』んだべ！」

オレの『ドーン！』という効果音が付きそうなセリフに、理想的な返事が返ってきた。

『意地悪は言うけど、嘘は言わない』とは、オレが普段から調教じゃなかった、教育時にアドルフによく言っているセリフだ。

これは簡単に言ってしまうば、ただの屁理屈。

オレの都合のいいようにアドルフを弄る為に言っているだけの言葉なのだが、大事な場面で事あるごとに「なっ、オレは嘘は言わないだろ？」と刷り込むことでそう錯覚させている。

普段からの仕込みに手間はかかったが、これが意外に使えるのだ。

しかもこういう自発的な発言の時は調教　で、もういいや。

その絶好の機会となる。

「そのとおりだ。ちゃんと覚えてるじゃないか、アドルフ。偉いぞ」
「えへへ。エドガーが褒めてくれたのは久しぶりだべ」

バカは直近の喜怒哀楽に意志を大きく左右される。これをつまく使いこなせてこそ調教だ。

調教は奥が深い。

なぜなら調教は過程や内容が重要なのではないからだ。

相手の思考を奪う手段は千差万別で、相手を踏みにじる行為と自身を信頼させる行為という相反する事実を両立させ、肉体的または精神的な檻に閉じ込められたと錯覚させなければならぬ。

感情の落差を演出し、いかに強い印象で相手の心に楔を打ちつけるかなど、重要な要素はいくつもある。

実験と検証を繰り返しながら最適解を求める過程なのだろうが、実は答えが出る前にその行為は完了しているのだ。

「つか、話が逸れたな。
今はこの状況をうまく利用して、賦役で楽をする方向に話を持っていく。」

「領主様の仕事をする時もオレの言う事を聞いていれば、もっと褒

めてやるぞー！」

「ホントだべか?!」

「フーかコイツ、オレが年下だつて事を完全に忘れてるな。」

年下に褒めてやると言われて喜ぶなんて、どんだけバカなんだよ。」

「ああホントだ。そのうえ、ちゃんとオレの言う事を聞いていけば、失敗もしないから村のみんなも怒られない」

「オ、オラ失敗しないようにエドガーの言う事をちゃんと聞くだつ
！」

「よしよし、その調子だ！オレの言う事聞いていけば間違いない！」

「エドガーの言う事を聞いていけば間違いないべー！」

「領主様のためにがんばるぞー！」

「領主様のためにけつぱるべー！」

「「おおーっ！」「」

「フツ、チヨロいな。」

元々、堤防工事なんてダルいことはオレには向いていないんだ。
こういうバカがやる仕事である。

バカが生まれてきた意味を知り機会と場を用意してやるなんて、
オレはなんてやさしい人間なんだろう。

感謝しろよ。

オレの労働分まで、しっかり使い倒してやるからな。

バカなお兄ちゃん。

バカなお兄ちゃん（後書き）

前話を書いている時に、拙作に決定的に足りないものに気づきました。

『ヒロイン』と『仲間』です。

こういうモノは早い段階で登場すべきモノでしょうから、今更感がありますが……。

と言う訳でとりあえず何人が人物を登場させて、その後の展開次第で『仲間』や『ヒロイン』になればいいなあという意図で、今回は書かせて頂きました。

まあ、『ヒロイン』を登場させるには主人公の年齢がもう少し必要かもしれませんが……。

食い込みがナンボのもんじゃい！

無事に数週間の賦役ふえきも終え、ヴォルフベルグに戻る日がやって来た。

とは言え、堤の工事が完了したというわけではなく、オレたちの賦役もとい強制労働期間が終了したというだけの話だ。

オレたちは今日村に戻るが、他の町や村の人間が代わりに人足として入れ替わり働く。

こうして数ヶ月間の間、オウオモエラ領の公共工事的なモノが行われるのだ。

……地獄のような強制労働がね。

いやあゝ、マジできつかったぜ。

オレのようなイタイ気な少年がすることじゃないよ、アレは。

スキを見つけては、可能な限りアドルフのバカに仕事を押し付けた。

バレないようにするのに苦労したものだ。

そのかいあって、オレは人の半分程度しか肉体を酷使してないのだが……。

「見ろっ！オレの筋肉！！」

カッチカチやぞ！カッチカチやぞ！」

……。

……………。

い、いやさあ。

この無駄についた筋肉を見れば、スべるとわかっけていてもやりたくなるって！

かつて“もやし王子”を自称していたオレとは思えないもの、この体。

粗末な食事のおかげで余計な栄養素がない分、細マッチョな体に仕上がってるけど十分っしょ？

今なら蛍光色のビキニパンツもドンと来いつてんだ。

食い込みがなんぼのもんじゃい！

なんならTバックでも履きこなす自信があるぜ！！

まあ、それでも腕力でアドルフのバカには遠く及ばないんだけどな。

とりあえずムカつくから蹴っておこう！

ゲシッ、ゲシッ。

「いきなり何するだ？エドガー」

前を歩くアドルフが突然蹴られ抗議の声を上げるが、「なんとなくお前がムカついたんだ」とはさすがに言えない。

適当な理由をつけて先を急ごう。

「そんなところで立ち止まってる、他の人の邪魔だからさっさと歩け」

そういつとオレは目的地である街の広場へ足を進めた。

オレたちヴォルフベルグの村民、sは村に帰る支度を整え、今はクレーンキャンプの街中にいる。

来た時はさすがに時間が無かったので素通りしたが、当初からの予定で帰る前に街の見たりやお土産を買うと決めていたのだ。

さすがにゲルマニアでも指折りと言える商人の街。

商店の数はもちろんのこと、そこにある商品も物珍しい品から実用的な日用品まで多種多様なモノがある。

賦役と言う用事であったので、皆大して持ち合わせはないのだが、帰りを待つ家族や親しい者のために思い思いにお土産を選んでいることだろう。

あいにくオレは“ゴリ江”に何かを買って帰るなんていう、気の利かせ方はしない。

だから自然とバカの買い物に付き合っていたのだ。

バカの買い物が両親へのモノだったので、集合時間までの暇つぶしついでに一緒にいる。

これがいつかのチチクリ相手だったら、鼻にソーセージを突っ込んで奥歯ガタガタいわせてるところだ。

しかしこの世界の平民が旅行先で両親に買って帰る土産なんて、まったく想像も出来なかったのでなんの役にも立たなかったな、オレ。

適当に商人と調子を合わせておいたので、それなりのモノは買えただろう。

少し時間が早かっただろうか。

広場に着くとヴォルフベルグの村人、sは10人も集まっていなかった。

その中にヴィムがすでにいたので、声を掛ける。

「ヴィム！」

あれっ？

オレは声をまだ発してないのに、ヴィムを呼び止める声があった。視線の先で辺りを見回しているヴィムと同じ様に、オレも数メートル離れた場所から辺りを見回してみる。すると少し離れたところにいた怪しい一団からヴィムのほうに歩み寄ってくる爺っおっさん、と言っかヤクザ？さんがいた。

「やっぱり、ヴィムだったか！」

やけに野太い声で再びヴィムを呼ぶと、ヴィムもヤクザのおっさんを見つけたようだ。

「ヤーコブか？」

「がっはっは！おうよ、ヤーコブ様だ」

「ふっ、あいかわらずデカい声だな」

ヴィムの言うとおり、かなりデカい声のおっさんだ。周りの人間が何事かと声の主であるヤクザのおっさんを振り返って見ている。外見が厳ついのですぐにその視線は逸らされているが、本人は気にもしていない様子だ。

「がっはっは！褒めるな。そっちはどうだ？ヘラの姿が見えねえが

」

「ここにはいないが、ヘラも相変わらずさ」

「そうか。まだしぶとく生きてやがるか？それは何よりだ、がっはっは！」

なんか2人が『フーカー』な感じで話し始めた。

どうやらこの2人は知り合いのようだ。

そのヤクザっぽいおっさんはさっき見た怪しい一団、おそらく傭兵だと思われる一団の仲間なのだろう。こちらに来たヤクザのおっさんを、物騒な連中が見ていた。

「がっはっは！」

このヤクザのおっさんのやけにデカイ声と威つい風貌に、周囲の人間が距離をとっているが気にもせずヴイムと話し込んでいる。マジでチンピラやヤクザのようだ。

オレも見た目のガラの悪さと想像できる頭の悪さから、お近づきにはなりたくないタイプだ。

しかしよく見るとコイツは腰ほどまでしかないが、ローブを身につけてるな。

メイジか？

杖は背負っている両手持ち用の特大ハンマーのような物がそんなのだろうか？

他にそれらしい物を身につけていないので、このヤクザのおっさんがメイジならおそらくまちがいないだろう。

てか杖まで威ついなんて、マジオレとは波長が合わなさそうだな。近づきたくはないが……、あそこがオレの目的地。

行かねばなるまい。

関係者ではないですよオーラを出しながら、シレっと2・3メートル離れたところにいれば問題ないだろう。たぶん。

とか言ってるものの、実は少し興味があるオレは、2人から少し離れたところから様子を伺う。

アドルフは村人の群れに合流したので、今はオレ一人だ。

先程から鈍器を持ったヤクザと並んで話しているヴイムだが、2人の立ち姿はなんとなくしっくり来るな。知ってはいたが、今更な

がらヴィムも傭兵だったのだと納得した。

やって来たヤクザのおっさん、いいかげんもう面倒くさいので“ヤッさん”でいいや。

今からオレ呼称、“ヤッさん”でいく。

その“ヤッさん”の話を聞いてみると、昔ヴィムと“ゴリ江”がいた傭兵団関係の知り合いらしい。

なにやら“メイジ殺し”のヘラなんて物騒な単語が聞こえてきたが、これは聞かなかったことにしよう。オレにはこういうへんなフラグは必要ないからな。

そうやって盗み聞きしている間、なんか会話の端々に物騒な単語が飛び交っているのので、“他人ですよ作戦”をとったオレの判断はどうやら正解だったようだ。

そのままオレは空気になって、離れたところでおのぼりさんなアドルフがキョロキョロ辺りを見回しているのを見ているフリをする事にした。

「ヴィム！」

ヴィムと“ヤッさん”が話している間にかなりの時間が経ち、集まってきた村人、sが声を上げた。

そろそろヴォルフベルグの村へ向けて出発しようと言う事を促したのだろう。

オレもいい加減バカの観察にも飽きてきたところだ。

2人の雰囲気の影響を受け、いつのまにかヤンキーよろしく、ウンコ座りで待機していたオレは立ち上がり、伸びをする。

「ヤーコブ。そろそろ行かなければならん」

「そうか。しかしお前がキコリとはな。がっはっは」

「もう傭兵ではないからな」

「また傭兵家業に戻る時はウチにこい。ウチの頭はひよろっこいが
凄腕だぞ」

「いや……ヘラが、な」

「そうだったな。すまんすまん。がっはっは！」

「代わりにと言う訳ではないんだが。エドっ！」

チツ！

ヴィムの死角になるところに待機していたのに気づいてやがったか。村人'sの集団に合流したアドルフでも、からかいに行こうとおもっていたのに。

お近づきにはなりたくないが、ヴィムを無視するわけにもいから、適当に挨拶して切り上げる事にしよう。

「ん？なんだ、ヴィム」

「ひょっとしたらこのエドが世話になるかもしれん」

何を言いやがりますかね！この残念ダルマは！

「この小僧がか？がっはっは！冗談はよせ」

ハイ、冗談ですよ。

気にしないで下さい。

スルーして下さって結構ですよ、“ヤッさん”。

「こつ見えてもメイジの才能があるようだ。きっと戦力になるぞ」

バ、バカちゃんがぁ！余計な事を言っなって！

「小僧！魔法が使えるのか？」

やっぱり食いついてきたか。

近くだと頭がガンガンしてきそうなほど、デカイ声だな。てか、いろいろ勘弁してくれよ。

オレも帰りたいよ。

ダルイよお。

つかめんどくさいから、“ヤッさん”はスルーするね。
それよりもだ。

「ヴイム、ちょっと待てよ。オレは傭兵になるなんて一言も言っ
てねえだろ？」

「貴族になりたいと言っっていたじゃないか」

いやいや貴族になりたつてのは誰もが言っ冗談だろ？

特に何かを意図して言っつた訳じゃないよ、オレ。

それにさあ。

「確かに貴族にはなりたいたと言ったが、傭兵はなりたいたと言っていない」

「キコリよりも傭兵の方が可能性がある」

それはそうだろうが、可能性的には2%が3%になるぐらいの違いだろう。

いくらゲルマニアでは平民でも土地や、爵位が買えるとは言っても、それは金を持つてる商人や城に仕えていると言ったそれなりに地位がある人間でなければ話にならない。

田舎の村人Aが王宮に行って「貴族なりたいたので爵位売って下さい」と言うだけで爵位が手に入るわけではないのだ。

オレが呆れつつも言葉を返そうとすると、真剣な顔でゲームが話を続ける。

「エド。お前には才能がある。それも一握りの人間しか持っていないような才能だ。お前が望むのなら、俺はきつと貴族にだってなれると思っっている。ヴォルフベルグのような田舎の村で一生を終える人間ではないんだ」

「どうしたんだよ、急に」

なぜに真面目モード？いつそんなフラグが立っただんだ？

「いいから聞け。いい機会だから言っておく。お前は俺達に恩を感じているかもしれんが、ずっと一緒にいる必要はない。ヘラが最初

に言ったたろう？』怪我が治るまで面倒見てやる』と」

「ああ」

そう言えばそんな事言っていたような気が……しないでもない。

「お前の怪我は治った。今は特に行く当てもないから一緒にいるが、もうお前の好きにしていいいんだ。いつでもあの小屋を出ていい。だから出るときの当てを今のうちにいくつか作っておけ。当て多くても困る事はない。別に必ずそこに行かなければ行けない訳ではないのだからな」

「はあ、そういうもんなの？」

いい加減マジだいい。

「そういうものだ」

「……」

うん。どうしたものか？

ヴィム、マジじゃん。

「がっはっは！えらく入れ込んでるじゃないか、ヴィム」

「茶化すな、ヤークオブ」

「まあ、昔のよしみだ。当ての1つぐらいにはなつてやうじやないか」

「悪いな」

おいおい！勝手に話を進めるなよ。

てか、何コレ？何コレエ〜？何なの？

「はあ………」

オレを置き去りにしたヴィムの無駄に男前風なやりとりで脱力してしまい、もうどうでもいいやと言う気になってきた。
ちよつど話も付いたみたいだし、もうそれでいいや。

「いいつて事よ、がっはっは！小僧、名は？」

「……エドガー・コナン。探偵さ！（キラリッ）」

「タンテイ？」

ヤッベ。

疲れているせいか、条件反射でイタい事言っちゃった。
気を抜き過ぎちまったぜ。

「いや、それは気にしないでくれ。それよりオレの事はエドで。エドとだけ憶えておいてくれればいい」

「エドだな。名前は忘れそうだが、顔は確かに覚えたぞ。がっはっは！」

なんか脳筋発言が満載だな、“ヤッさん”。
大丈夫か？

「ワシらはしばらく東のテーリヒュンにあるローリングゲンを中心に仕事をする。気が向いたら訪ねて来な。がっはっは！」

やっと終わったか。

オレは非常に疲れているので、最後の方は当然聞き流した。

さっ、帰るべ。

挿話 クソったれな未来

数週間ぶりに帰ってきた小屋は、冬の寒さのためかひっそりとしているように見えた。

秋の初めからここ数ヶ月の騒々しさを、寒さで凍らせてしまったような。

そんな気さえしてしまう。

「へラ。帰ったぞ」

扉を開けて小屋に入るがへラの姿は見えなかった。

部屋の中は沈黙が積もったようにひっそりとしていて、ギィギィと軋む扉の音を吸い込んでいる。

今はもう真昼も過ぎ、日中では一番暖かい時間帯だ。

だというのに部屋の中はそういった暖かさばかりか、人の温もりのようなものさえ感じられない。

まるで朝からこの部屋に誰もいなかったように。

俺は特に慌てることなくへラの使っている部屋に足を向ける。扉に触れて一瞬躊躇したが、すぐに頭かぶりを振り部屋に入る。

「へら。いるか？」

努めていつものような声で呼びかけた。
すると入り口の扉以上にかたい手ごたえ腕に感じたあと、目に映ったのはベットに腰掛けていたへらだった。

「今帰った」

安堵とともにもう一度へらに向かって帰った事を告げる。

「さつきから聞こえてるよ」

手に持った布切れを両手で包み込むようにしてこちらを向いたへらが、呆れたような調子で返事を返してきた。

「今年も賦役は特に問題なく終わったよ」

「そうかい」

「去年と違ってアドルフがいたのが大きい」

「ベンノんとこのガキはバカだが、力はあるからね」

めったな事では他人を認めないへらも、目の前で自分よりも力があるところを見せられたアドルフの事はそれなりに評価しているようだ。

「……エドが仕事の指示を出していて効率も良かった」

「あのバカのことだから、そうやって自分は手を抜いていたんだろ

「？」

見てなくてもわかると呆れるように言うへらに、俺も苦笑を漏らしてしまう。

「まあ、否定は出来ないな」

「まったく！しょうがないヤツだね」

「でも、役には立っていたぞ。役人が感心するぐらいにはな」

「どうせ口で丸め込んだんだろ？」

「さあな。でもエドの指示のおかげで、怪我人が出なかったのも事実だ」

「ふんっ！」

一見、不機嫌そうにへらが鼻を鳴らす。
だがこれは誤魔化そうとする時によく使う仕草である事はわかっている。

長い付き合いだからな。

とりあえず、ここを空けた間の報告はこんなものだろう。
どうせ賦役なんて毎回やる事は同じだ。
ひたすら貴族の言うとおりに動き、泥にまみれる。

ただそれだけ。

違いと言えば怪我人が出たとか、最悪の場合は死人が出たとかい

う事ぐらいだ。

「ところでヴィム」

「なんだ？」

聞き返しといてなんだが、ヘラの疑問はわかっている。
と言うか、聞くのが遅すぎるぐらいだ。

「そのエドはどうしたんだい？」

「なあ、ヴィム」

「どうした？エド」

クレーンキャンプを出てから数日、ツアハの村へと続く街道を歩いていると、最後尾にいたエドが話しかけてきた。

賦役に向かう行き道では、「遠い」だの「疲れた」だの散々文句を言っていたが、今は周りの景色を眺めなたりアドルフとふざけたりしながら歩いている。

あれだけ過酷な労働だったのだ、エドもかなりの体力がついたのだらう。

その歩調も確かだ。

「この前はさあ。疲れてたつてもあつて、おざなりに話してたけど。あの時の事をこうやって歩きながら考えてたら、ヴィムが言っていたこともまんざら悪くないかもって気がして来たよ」

振り返ると両腕を頭の後ろに組んで軽快に歩いてくるエドが思ったよりも近くにいて、前を歩く俺にしっかりと視線を向けていた。

その視線に怯みはしたものの、これは俺が望んでいた事でもある。今のヘラもそう望んでいるはずだ。

だから答える。

「そうか」

ただ単純な了承の言葉を。

「ああ。だからすぐにでもあのおっさんのとこ訪ねてみようと思っ」

その言葉に前方へと視線を戻す。

あれから数日経っている。

だから思い付きなどではなく、考えた末の答えだらう。

きっと俺が薦めたからではなく、エド本人が決めたのだ。

なら俺がやる事は。

「……っ。みんなっ！ちょっと聞いてくれ」

「どうした？ヴィム。まだ歩き始めたばかりだぞ」

少し前を歩いていた狩人のペーターが、振り返って怪訝そうに訪ねてきた。

それを合図にしたように、ヴォルフベルグへと戻る村の者たちの足が止まる。

「エドが村を出て行く事になった」

「ちょ、ちょっと待てよ、ヴィム。すぐつつつてもいったん村に帰ってからの話だぜ？めんどくせえけどヘラにも断わつとかないとな」

皆を止めてまで自分の話を始めた俺に、エドが戸惑うように声を上げた。

今皆にする話じゃない、どうしてこんな事をしているんだと。

そんなエドにもう一度振り返って言葉を続ける。

「決めたのならすぐに行動しろ。ヘラには俺から言っといてやる」

俺がする事は後押し。

それだけだ。

「でも、なんつーか。一応アイツ命の恩人だし、直接言わないとさ
あ」

「そんな事をイチイチ気にするようなヘラじゃないさ」

「……………」

いつもと違う俺の様子に困惑し、とうとうエドが押し黙った。
話を進めるなら今だろう。

「みんな！エドにテーリヒエンまでの馬車代を都合したいんだ。急な上に持ち合わせも少ないだろうが、少しづつでいい！都合してもらえないだろうか？」

俺の急な申し出に村の者たちが困惑した様子で、互いを見合つ。
アドルフは意味がわかっていないのか、キョトンとしているのが見えた。

いくらアドルフでも周りの大人たちから話を聞けば、すぐにどういふことがわかるだろう。

アドルフ、すまないな。

お前がエドと仲がいいのは知ってはいるが、これはエドの為でもあるんだ。

「頼む！このとおりだ！」

俺にはその場に這いつくばって頭を下げる。

「おい！何やってるんだよ？ヴィム！」

這いつくばる俺を見て、少し後ろを歩いていたエドが駆け寄ってくる気配がした。

そのまま俺の前に回りこんで、皆から俺を隠すように座り込む。

突然のことで驚いているのだろうに、俺のために気を回すなんて

らしくないじゃないか。エド。

だが俺自身もここまでする事が出来る自分に驚きはあるが、止める気はない。

「どうしても今必要なんだ！頼む」

さらに言い募る。

体に力が入り、自然と声も大きくなった。

「グイム！止めるよ」

両膝を地につけ頭を下げる俺の腕を取り、エドが立たせようとしてきたが今、立つ訳にはいかない。

「頼むっ！」

きつと、情けなく思っているだろう。

さぞ、無様に見えるだろう。

だが俺に出来る事は少ない。

エドにも、ヘラにも……。

だから俺に出来る事をする。

「……頼むっ！」

声が震え、なお体に力が入る。

小声で話す村の者の声が聞こえてくるが、しばらくしても誰も声を掛けては来ない。

時と場合もよくないが、やはり突然すぎたか？

「グイム！「グイム」」

エドの声の後にペーターの声が重なった。

そして肩にそつと置かれた手に、諦めきれない俺はバカみたいに同じ言葉を繰り返す。

「頼む」

どうにかその言葉を搾り出したが、それ以上は何も言えなかった。

そのとき、強く土を握り締めていた俺の手をペーターが取った。

「事情はわからんがコレを」

その声に顔を上げると、ペーターが俺の手に自分の金を握らせてくれていた。

ほかの皆も懐に手を入れて、こちらに集まって来ている。

「オレのも使え」

エック。

「エドがなんかやらかしたのか？」

オトマール。

「少して悪いが」

ニコ。

「とにかく立て」

トビアス。

「おい、スー。お前いくら残ってる？」

コルト。

皆　　。

「　　すまない」

エドがここにいない経緯を話し終わると、一仕事をした後のように体の力が抜けていくのがわかる。

「……それでヤーコブのヤツのところへ行かせたのかい？」

これまで黙って聞いていたヘラは、一息ついた俺の様子を見て、
ゆっくりと口を開いた。

「無様な姿を曝してまで皆から集めた金だ。エドが受け取らないと
思うか？」

「そこまでバカじゃないだろうね」

「あの時のエドの顔をヘラにも見せてやりたかったよ」

「ハンっ！グズるようなタマじゃないだろ？」

「なんだ？わかってたのか」

実際、エドには呆れるような顔で見られたしな。

「あたりまえさね。それよりその後は？」

「ああ。そのままクーレンキャンプに引き返させた」

「……ヤーコブのクサレ野郎はクーレンキャンプにいるのかい？」

「テリリヒエン領にいたと言っていたな。クーレンキャンプからは帝
都へ続く街道を東へ一直線だ。乗合馬車を使えば一週間もあれば着
くだろう」

「いや、夏場と違って今の時期じゃあもう少しかかるぞ」

「そう、だな。そうになると……、持ち合わせが心もとないな」

「そこまで心配する必要はないさ。もし金が足りなくても、あのバ力なら何とかするだろうさ」

「まっただ」

エドは路銀が尽きたくらいで、右往左往する姿が想像できない。そうなったとしても、いつもの調子で何とかしてしまっ。そんな気がする。

「……ふう。あのバカが帰ってこないんなら、もういいか……」

ヘラが手に握っていた布切れを口に当て、体から力を抜いた。

「横になっている。スープでも作ってくる」

「うまいヤツを頼むよ」

先程までのヘラとは違い、冗談を言い笑みを作る表情に力がなくなっている。

きつと小屋の扉が開いた時から、ずいぶんと無理して気を張っていたのだろう。

エドに今のような自分を見せないために。

「わかつている」

わかっているぞ。

お前とは長い付き合いだからな。

昔、きまぐれで俺を助けた事も。

どうして川でエドを捨ててきたのかも。

そのエドに必要以上に強く当たっていた理由も。

全部わかっている。

その握られた布切れの黒いシミが意味する、クソツたれな未来のこともな。

挿話 クソったれな未来（後書き）

え、話が進まないところ指摘がございましたので、当初の『適当に登場人物を出してその中から仲間を探す』展開を取り止めたいと思います。

きっと主人公に仲間は必要ないという神の力が働いたのでしょう。

私もそんな重要なキャラ書けるの？と半信半疑でしたし、話進まないなあとちょうど思っておりましたし。

まあ、前話・前々話が無駄にならないように、いつか登場させれば問題ないでしょう（たぶん）。

と言う事で流れをぶった切りまして、強引に傭兵にしたうえで今後話がうまく転がればいいなあと言う話に致しました。

ハルケギニアの神の中の神！出て来いいいや！！！！

「来ちゃった てへっ」

テーリヒエン男爵領の領主の街・ローリンゲン。

オウオモエラ伯爵領に比べ領地自体もかなり狭いが、領主のいるこのローリンゲン自体も大きな街ではない。そもそも一辺境都市としては、異常なまでに発展したクーレンキャンプと比べるのが無駄のように感じる。

さすがにヴォルフベルグやツアハのような村と呼ばれる集落よりは発展しているが、オレの目にはなんとか街と呼べる程度にうつる。

そんな大きな街ではないゆえの利点。

「おお！たしかヴィムと一緒にいた小僧じゃねえか！さっそく来やがったか？」

人探しが簡単なことだ。

オレがこの街に来て頼るべき人物。

見た目はヤクザで、中身はおっさん。傭兵家業のヤーコブ……だつたっけか？

たしかそんな名前である目の前の男は、ローリンゲンにある5つの酒場の1つで、ツレと2人で昼真っから酒をかつくらっていた。

つか憶えていたのか？

脳筋判定をしたおっさんのはずだが、そこまでは頭が悪くはないのかもしれない。

「ああ、世話になる」

結局、グイムの好意？でこんなところまで来ちゃいました、オレ。

始めはそんな気はさらさら無かったんだけど、ヴォルフベルグまでのヒマな帰り道になんとなく考えていたらある事に気づいちゃったんだよ。

今でも傭兵にもものすごくなりたいて訳じゃないんだけどさあ。

あのままヴォルフベルグみたいな田舎町にいても、夢の“イチヤラブ”はありえないってことに！

もともとオレのこの世界での生きる指針としてはユルい“イチヤラブ” 貴族生活だったはずなんだ。

わずかに残る昔のオレの記憶が正しければ、“イチヤラブ”を目指して新しい人生を謳歌していた。

あいにく体と局部がその実現には時間を必要としていた為、いつかくるその時期を今か今かと待ち続けていたけど、“イチヤラブ”

の夢を諦めてた訳じゃない。

ただ貴族として、来る日まで優雅に遊び呆けていただけだ！

……別に胸を張って言うことでもないんだが、まあいいだろう。

しかし。

夢儂くも、今のオレはしがない平民。

惰眠を貪り、豪華な食事を喰らい、優雅な生活を満喫しながら、

“イチャラブ”の相手を探す事は出来ない。

“すいぶんと落ちぶれてしまったものだが、考えてみればまだ“イチャラブ”生活と言う部分だけは十分実現可能かと思われる。

“ゴリ江”に拾われてからヴォルフベルグでの生活は忙せわしない日々が続く、最近では自身の今後のことなんてすっかり考える余裕はなかったが、今後の事をちょっとは真面目に考えた結果

『ヴォルフベルグにおいては“イチャラブ”は夢のまた夢』

と考え至ったんだ。

だってヴォルフベルグは、超がつきそうなほどの田舎村なんだよ？
ハジとペターがスキップして歌い踊っていてもおかしくはない集落だよ？

村人はみんな知り合いで若い娘もそれなりにいるが、あいにくそんな村には美人なんていないんだ。

ここが重要だから、もう一回言おうじゃないか。

ヴォルフベルグには美人がいない。

悲しいかな、これが現実。

この残酷な天使？もしくは神のテーゼから、あそこにおいてはオレの“イチヤラブ”への解を導き出すのは不可能と判断したのだ。

誰だつてさ、バナナ　ンのヒムラヤ出川　朗の女性版と“イチヤラブ”したくはないだろ？

村の中心にはヴォルフベルグを象徴するデツカイ樹があるんだけど、このまま村で過ごしていたらその伝説の樹の下で告白されちゃうよ？オレ。

伝説の樹の下で告白されちゃったら、永遠とわに添い遂げちゃうんだよ？呪いで。

バナナ　ンのヒムラ似のオナゴと……。

無理いいい！

そんなの無理いいい！！

それってどんな鬱ゲーよ？マジで。

ならヴィムの話に乗ってみるのも面白いかと思うのも、自然な流れでしょう！

オレ、間違っていないよね？

しかし、「どうした？ファンタジー！」とハルケギニアの中心で奇声を叫びたい。

異世界補正で大体の登場人物は美女・美少女ってのがテンプレだろ？

ツンデレ幼馴染やヤンデレ義妹はどうした？

もうボクツ娘でもエロ担当でも、なんでもいいから一人ぐらい融通してくれてもいいじゃなあ〜い？

ハルケギニアの神の中の神！出て来いいいや！！！！

「ヤーコブ。このボウズはなんだ？」

なんて“イチャラブ”への渴望のために心の雄叫びをあげていたら、“ヤツさん”と酒を飲んでいた色黒がオレを見てボウズとホザきやがった。

色黒な上に顔グロな可哀想な男だ。

オレをボウズと呼ぶのはムカつくが、その顔に免じて許してやるう。

「今日からオレの手下になる小僧だ。名前は……、忘れた。がっはっは」

おいおい、憶えていたのは顔だけかよっ！

自分の器のデカさに酔いしれていたつてのに、ツッコませんじゃねえつての。

てか、やっぱ脳筋野郎じゃねえか、コイツ。

ちよつとでも頭が悪くはないと思ったオレの消費エネルギーを返せ！

「おい、ボウズ。名は？」

「あゝあ？！んんっ、いやすまない。オレはエドガー・コナン。エドと呼んでくれ」

ヤバい。今、マジキレそうだった。

さつき器のデカさを言つてたばかりなのに、ここでキレル訳にはいかんだろ。

「俺達のような見てくれの大人に物怖じしないのは大した物だが、お前のようなボウズがやってける家業じゃねえぞ。帰んな、ボウズ」

シッシと手でまるで野良犬を追い払うかのように、ぞんざいに扱われる。

そのまま近くを通つた店の人間に、何やらメシの追加注文までしやがる始末。

コイツ、マジムカつくわあ！

さつき名前言つただろうがっ！ああん？

名前聞いたんなら、ボウズじゃなくて名前使えや！ゴリアー！

「ヤーコブ。こんなキレイな顔したボウズがやってけると思つてん

のか？」

「心配すんな。小僧は俺たちと同じメイジらしいぞ」

「このボウズが？ウソだろ？杖もってねえじゃねえか」

「ん？小僧。お前、杖はどうした？」

すうーはあー、すうーはあー。

モチツケ、オレ。

コイツら2人もメイジらしいから、ここでキレちゃマズい。
ガマンだ。

オレの心はラグドリアン湖よりデカくて深いんだ。

「折れた」

ちよつと無愛想になったが、許容範囲だろう。
むしろオレよく頑張った！

「いつだ？」

「大分前」

カタコトなのはご愛嬌ってことで……。

「代わりの杖は？」

「オレが杖を買う金なんて持ってるわけねえだろ」

長くしゃべるとボロが出るな、気をつけよう。

「おいおい。ヤーコブ。このボウズ、本当にメイジなのか？」

こ、このっ！色黒顔グロのウンコ野郎！
いつか又ツ殺す！

「わからん！がっはっは！」

「ったく、何考えてんだ」

「まあ、いいじゃねえか！どうオレ様の子分なんだからよあ。コイツあ昔のなじみに頼まれたんだ。それをこのオレ様が断る訳にもいかんだろっ？がっはっは！」

「ちっ、厄介ごとを押し付けられたただけだろ？何偉そうに言ってる。まあいい。いずれにしてもバカを見るのはお前だからな」

「お前も長い付き合いになるんだぞ、ベン。がっはっは！」

コ、コイツらさっきから本人を目の前にして、デリカシーってもんがないのか？

「何見てやがんだ？ああ？」

色黒顔グロのウンコ野郎というか、もう“クソ野郎”でいいや。
コイツ、マジむかつくわあ。

てかもういいや。

ガマンするのは止めよう。

ヤバくなったら、“ヤツさん”がどうにかするだろ？
ヴィムにオレのこと頼まれたんだし。

この“クソ野郎”は無視だ、無視。

「オレにもなんか食わせるよ。腹減ってんだ」

「なっ！」

「がっはっは！言っじゃねえか、小僧」

「ヤツさん”、お前に言ってるんだ。あと杖も買ってくれ」

テーブルに置かれていた腸詰ソーセージを掴み取って頬張る。

「このガキ！俺の肉を！」

しらんがな。

まあ、ちよつとからかつてやるか。

「わめくな、大人気ないぞ。肉が食いたけりゃ頼めばいいだろ？その口は飾りか？」

「ボウズ、テメエ……」

「顔が残念なヤツは頭も残念なんだな。憶えておこつ。そんな残念な“クソ野郎”は憐れだな。仕方ない、今日は特別に“ヤツさん”が追加の肉の代金を払ってやるつ」

アルコールと怒気があいまって、オーク鬼のように顔を真っ赤に

している“クソ野郎”の腸詰をさらに食う。

「まあ落ち着けや、ベン。小僧相手にみっともないぞ！それより小僧。“ヤツさん”たあ、オレ様の事か？」

あれ？そつち？

金払うのは別にいいんだ。

キヤラどおりそのあたりはザツクリしてんのかな？

太っ腹じゃん、“ヤツさん”。

なかなか気に入った。

腸詰もうまいし気分がいいので、答えてやるのが世の情け。

「ヤーコブのおっさんだから“ヤツさん”」

腸詰で“ヤツさん”を差しながら簡潔に述べてやる。

本当はヤクザのおっさんだから“ヤツさん”なんだけどな。

そしてついでに、お前はベン＝便＝ウンコだから“クソ野郎”がお似合いだ。

「がっはっは！まあいい。とりあえず腹が減ってるんなら食え。後でお頭に合わせる」

「お頭？」

“クソ野郎”が怒鳴るように酒を追加しているが、もうコイツは突っかかってはこないだろう。

放っておいて“ヤツさん”と話を進めるか。

「俺様と同じ土のメイジで傭兵団の頭だ」

うっん、面倒くさそう……。

「ええ〜？いいよ。オレ、それパス。むぐむぐ。“ヤツさん”が適当に言っといてくれ」

「そういう訳にもいかん。まあ、強制じゃないが自分がどういう者かを、頭に話すのは傭兵団に入るときの礼儀みたいなもんだからな」

あっ、そう。

だが断る！

「そんなこと言われたってオレ、むぐむぐ。記憶喪失で半年以上前のこと憶えてないし」

「あん？なんだそりゃ？」

「どう言う事だ？小僧」

アレ？“クソ野郎”も食いついてきたな？

まあいいや、無視しよう。

道端のイヌのクソに話しかけるヤツはいないからな。

「半年前に死にかけていたオレをヘラが助けたんだよ。それ以前の記憶がない。あっ！おねーさん。これと同じ腸詰もう一皿追加ね。つて、“ヤツさん”はヘラは知ってたよな？」

「ああもちろんだ。しかし小僧……、記憶がないのか」

ふむ、と言った表情で“ヤッさん”が考えているそぶりを見せているが、脳筋でどこまで思考が可能なんだろう？

「何から何までフザケだボウズだ。と言つかあのヘラが人助け？冗談もほどほどにしろってんだ」

「あのオーク鬼とさほど変わらんヘラがなぜオレを助けたのかは、未だにサッパリわからんが……。そういう事なんだよ、“ヤッさん”」

もちろん“クソ野郎”のベンはスルーした。

ワカメちゃん？つーか、これからっしょー！

今日、オレはテーリヒエン男爵領ローリンゲンの宿の1つで目が覚めた。

昨日は結局、土の系統の使い手だという傭兵団のトップに会う事はなかった。

と言うのもあの後、傭兵のヤークトこと“ヤッさん”に連れられて行った宿に彼の姿がなかったのだ。

その宿にいた同じ傭兵団の人間に聞いたところ、昼過ぎからどこかに出かけたらしく、彼が戻るのは夜になると言われた。

オレは待つのも、会うのも面倒だったから「長旅で疲れているので眠い。“ヤッさん”が話を通しておいてくれ」と言って、日が沈む頃には宿に引っ込んだ。

その宿には空いている部屋がなかったため、少し離れたところにある“ヤッさん”が使っている宿に部屋を取ってもらい惰眠を貪ったと言う訳だ。

そんなこんなで今日は目が覚めたというより、正確には昼前に“ヤッさん”に叩き起こされ、あるところに向かっている。

寝起きから頭に響くような大きな声を聞かされ続けているため、もうすでにノックアウト寸前だよ。

「なあ“ヤツさん”」

「どうした？小僧」

「昨日の夜にオレの事、大体は言っといってくれたんだよね？」

「ああ、軽くはな」

軽くつてどのくらいよ？

「ヴイムに頼まれた事も？」

「ああ」

「記憶がないことも？」

「もちろんだ。がっはっは」

脳筋のクセに重要な事は抑えてるじゃん。

つか、そうなる。

「じゃあ、わざわざ会いに行く必要なくね？」

「顔見せだ。それに今日連れて行くと言っておいた。がっはっは」

何が面白いのかわからんが豪快に笑う“ヤツさん”とは逆に、「

面倒だ」とさつきからオレのテンションはダダ下がりだ。

昨夜、“ヤツさん”から得た情報では、傭兵団は一仕事終えたばかりなので今のところ次の予定は決まっていないと言う事だった。ならオレ的には魔法を学びつつ、未来の“イチヤラヴ”相手を探すために時間を使いたい。

誰が悲しくて、イカ臭い傭兵団のトップになんか会わなきゃならんのだ。

不平不満はあるが、これからお世話になる“ヤツさん”の面子を潰すわけにも行かないので、今日のところは仕方ないと諦めるか……。

「しかたねえか……」

そんな鬱な気分を少しでも紛らわせようと、腰に差していた杖をぬいて手慰みにする。

杖なんてものはそうそう売っている物ではないんだが、ここローリングンが西の商人の街・クーレンキャンプと東の帝都・ウィンドボナを繋ぐ大陸交路の宿場町でもあることが幸いした。

この街に滞在していた商人の中に、ちょうど杖を仕入れてウィンドボナへ戻る途中の者がいたのだ。

杖を扱っている商人なんて、ゲルマニアでは商人の街であるクーレンキャンプか、もしくは魔法学院のある帝都ぐらいにしかないの
で奇跡のようなタイミングと言える。

その商人を何だかんだと言うか脅し^{すか}賺して、“ヤツさん”に強引に買ってもらった杖を弄りながらコモンスペルを唱えてみる。

……何も起こらない。

「やっぱりまだ無理か」

魔法が発現しないのは当然だが、魔力が通る手ごたえすらないところをみると、杖との契約はまだ時間がかかりそうだ。

まあ、昨日の今日だから当然か……。

昨日、宿の部屋に籠ってから残っている記憶を頼りにいろいろ試しているが、まだまだ杖の契約には時間がかかりそうだ。

そんなオレを見た“ヤツさん”が足を止めて、オレに干し肉を手渡してきた。

「がっはっは。まだまだ杖の契約には時間がかかるぞ、小僧。1ヶ月は辛抱してろ」

“ヤツさん”が言う事ももつともなんだろうけど、オレは初めて杖と契約した時には1週間もかからなかった記憶が残っているので、今回はあと数日で契約できるとふんでいる。

その辺の愚民と元貴族のオレを一緒にするとは、“ヤツさん”もまだまだだな。

「すぐに契約できるさ。オレは　　ってどうした？」

オレと話をしていた“ヤツさん”が視線を外して左手の方を睨むように見ている。

それを不思議に思ったオレもそちらに顔を向けると、貴族が乗りそうな馬車とそれを取り囲む騎士が走り去っていくところが見えた。

おっ！

この干し肉、塩加減が絶妙だな！うまうま。

「小僧。この街であの馬車を見たらすぐに身を隠せ」

「あん？あの馬車がどうしたって？」

そんなことよりもっと干し肉よこせ！と思い“ヤツさん”を見上げると、遠ざかって行く高級感のある馬車を目で追いながら、オレがまだ見たことのない不快な表情を浮かべていた。

「あの貴族の馬車は厄介だから近づくなと言ったんだ。わかったか？」

「言いたい事はわかった……、けど理由は？」

はじめて見る真剣な顔に頷きはしたが、正直何がどうしてそんな事を言うのか理解できん。

それより干しに。

「あの人だけに行けばわかる」

オレの心の声を遮り、答えを見せるとばかりに、馬車が走り去った場所に出てきている人だけかへと向かって行く“ヤツさん”。

失敗した。

面倒事のフラグっぽいぞ、これ。

もう理由なんていいから干し肉くれるだけでいいよ？って、無理だろうな……。

人だかりが出来ていた場所に着くと違和感を覚える。
その人の多さにしては不自然なくらい静かなのだ。

集まっている人の表情も一様に暗い。

「大道芸を見てるって雰囲気でもなさそうだな」

「まあ見てみる」

その人だかりの中心に向かうと子供が横たわっていた。
その子供に覆いかぶさるように女性が縋り付いていて、「ああ、
やっぱり」と途中から感じていた悪い予感が当たっていた事に凹む。
横たわった子供をよく見ると血を流しているのだ。

「うづくまる母親らしき女性の様子を見れば、おそらくそういっ
とだろう。」

「……死んでる？」

「ここの領主の息子であるヨルク様のお戯れってやつだ」

「お戯れ？」

「男爵の次子にあたるヨルク様は暇つぶしで、平民を蹴り殺すのさ」

「なんだそりゃ？どうしてそんな事をする？」

「理由なんてありゃりねえ。平民なんて貴族様に見れば、その

程度の価値しかねえからな」

このハルケギニアでは珍しい事ではないんだろうが……。

「胸糞わりいな」

「ああ、同感だ」

「この街じゃ、こついう事は日常茶飯事なのか？」

「去年の暮れに男爵が床に伏せてからは特に酷い。それでも騎士のジークリッドがいればこんな事は起きないんだがな……」

「？」

「ジークリッド？誰だそりゃ？」

「とにかくだ。この街で貴族の馬車には近づかんようにすることを憶えとけばいい。それより急ぐぞ。お頭を待たしてんだ」

「つておい！」

「説明しないのかよ！」

「だったら干し肉ぐらいよこせ！」

「いいか。さっき言った事、忘れんじゃねえぞ」

目的の宿に着いてからこればかりだ。

「わかった、わかった。何回も言うな。オレはアホな子かつーの
」！
」

オレに失礼のないようにと何度目かの念を押した“ヤッさん”は、
コンコンとノックした後に返事を待たずに扉を開いて入っていく。

お前の方がよっぽど礼儀を知らねえじゃねーかつ！

そのツツコミをする間もなく中にズンズンと入っていくヤクザ顔
を追って、オレも部屋に入る。

「っ！」

“ヤッさん”の今更な「失礼しやす」という挨拶に続き、オレが
部屋に入ると卓の中心に座っていた男が驚いた顔をしていた。

たぶん座っている位置的に傭兵団のトップ、“ヤッさん”がお頭
と呼んでいる人物だろう。

昨日のうちに軽くは“ヤッさん”からオレの話は聞いているはず
なんだが、思っていたよりも見た目がガキでビックリしたのかもしれない。

だからってそんなにあからさまに驚かなくてもいいじゃん……。

「昨日言った小僧を連れて来やした」

「……………君がエドガー・コナンかい？」

“ヤッさん”の言葉の後しばしの沈黙があつたが、返ってきたのは思っていたよりも軽い調子の声だった。

「そつだ」

じろじろと観察するような不躰な視線に、横柄な態度で答えてやると横にいた“ヤッさん”からゴツンと頭に拳骨を喰らう。

「いつてえな!“ヤッさん”、何しやがるんだ?!」

「お頭に生意気な口叩くんじゃねえと言つただらうが」

たしかにそんなこと言われた記憶はあるが、そんなの関係ねえ!

それより、相変わらず声はデカイが普段からは考えられないくらい畏まった態度の“ヤッさん”、お前キモいぞ。

目の前の男に敬意でも持っているのか?

はつきり言つてキャラ的に似合わん。止める。

普段のオツパッピーな“ヤッさん”はどこに行った?

そんなんだからアンタの拳骨は“ゴリ江”に比べて大した事ないんだ。

その程度でオレを従わせようとするのは、不可能と知れ!

この顔だけヤクザめっ!

「うっせ!オレはオレの好きにする。指図は受けん!」

ふぶっ。

オレ、カッコよくな？

てかマジ、カッコよさげじゃね？

普通、オレみたいなガキが言うセリフじゃねえって、今の！

オレ、テラカッコ良ス！！！！

「ヤーコブ、別にいいよ。彼はまだ子供だしね」

「すいやせん、お頭」

ん？やはり真ん中の軽い感じの男が、この傭兵団のトップのよう
だ。

見た目は傭兵と言うより、貴族や商人と言った方がしっくり来る
な。

「それといつも言ってるけどお頭じゃなくて団長と呼ぶようにね」

「すいやせん、お頭」

「……まあ、いいさ。ところでエドガーだっけ？」

「なんだ？」

マジなんだそれ？

もう安い漫才はおしまいか？

こころなしか不機嫌になっているような気がするけど、大丈夫か？

「僕が誰だかわかるかい？」

「？」

何言ってるの？コイツ。
心配してやったのに、ワケワカメな事いいやがって。

「わからない？」

わかる訳ねえって！

はっ！もしかして……新手のナンパか？

この状況でか？

いやいやオレ男だし、ガキんちよだよ？

それはない……ってコイツ、まさか。

シヨタかよおおー！！？

マジで？！

コワッ！マジありえないんすけどお？！

そんな趣味マジわかりません！わかりたくはありません！

しかしここで面と向かって「シヨタですかあ？」とは、さすがの
オレでも言えんぞ。

どういつつもりかは知らんが……。

コイツはヤバイ！

とりあえず、スツ呆けよう。

うん、そうしよう！

「どこかであったか？」

「『どこかで』だって？そうか……うん、ならいい」

なんか一人で考えて、一人で納得してるな。

なんだ？この対応は。

平静を装えたはずだが……。

「ヤーコブ！」

「へいつ！お頭」

「……。エドガー、だったっけ？この子はお前が面倒見るんだっただよね？」

「へい」

「きつとウチの戦力になるよ。いい拾い物をしたじゃないか、ヤーコブ」

「ありがとうございます、お頭」

そのあと話があるというヤーコブを残して、オレは部屋を出て行けと言われた。

その時、最初の反応からしたらやけにあっさりした対応だったなとか、もしかしてシヨタじゃないのか？とか考えていて反応が遅れてしまった。

返事をしないオレに視線が集まる中、しくったなと思いつつも「はいはい」と適当に返事をして踵を返す。

まあ、今の雰囲気からしてあまり身（オシリの貞操）の危険は感じないし、保留と言う事にしておいて問題ないだろう。

あっ！

そう言えば結局お頭、じゃなかった団長の名前聞いてねえな。扉に手をかけたまま振り返り、何気なしにその疑問を口に出す。

「あー、団長の名前聞いてないんだけど」

「ん？そういえばまだ言っていなかったね。僕はパンツエ・コスキオルマ。まあ、普段は団長と呼ぶように」

……………はっ？

……………ハ、パンツッコスキオルマー、だって？

……………パンツッコ、スキオマエ？

パンツっ子、好きお前?!?!

いきなり何言ってるのこイツ???

マジでイミフ過ぎんだろ?!

シヨタじゃないって事かあー?!!

質問に質問で答えるのはまだ許容範囲だが、さすがにこれはないっしょー!

っーか、これからっしょー!

おもしろいからもう一回言っ。

っーか、これからっしょー!

上記文の発言者と同じく、ワケワカメ過ぎ……っ?!

って、これかあああ?!!

団長のイミフ発言に混乱させられながらも、オレの明晰な頭脳が導き出した答えは。

「えっと……ワカメちゃん、のこと?」

間違いない!

ワカメちゃん？っーか、これからっしょー！（後書き）

50話になります。

活字嫌いな私がここまで書くことが出来るとは、正直思っておりませんでした。

思い返してみると書き始めた頃は苦手意識しかございませんでした。友人に厳しい言葉ばかり言われておりました。

途中でプロットなる物が必要だと知りました。

一区切りついた後はなかなか書く気が起こらなかった事もございました。

再開してみれば体内に不思議石を精製してしまい、血尿がドバドバ出てまた書く気が起こらなくなり、しばらく書かない時期もございました。

しかしこうして続けている成果は確実にあつたと思っております。今では苦手ながらも読書を趣味に出来ていますし、少し達成感のよくなモノも感じる事が出来ておりますので。

これと言つのも、拙作をお読み頂いた方や感想にてご意見・ご指摘などを書いて頂いた方、そして何より温かいお言葉をかけて下さった方のおかげだと思っております。

改めて皆様に心より感謝申し上げます。

モブではないのだよ！モブではっ！！

テリリヒエン男爵領に来て2ヶ月が過ぎた。

つまりオレがこの傭兵団に厄介になり始めて2ヶ月経ったと言う事だ。

ここローリングンでの傭兵生活にも慣れた。

この傭兵団でもそこそこうまくやれてはいる、と思う。

そこそこと言うのは、思っていたよりもこの傭兵団が大所帯だった事に原因がある。

なんと構成人数が50人を超えているのだ。

事実を知った時には「パンツっ娘好き？お前」団長のカリスマに驚いたものだ。

ワカメちゃんLOVEのくせに生意気なっ！

話が逸れちゃったがこの傭兵団のことを話すにはまず、この曖昧な呼び方から説明する必要があるだろう。

この傭兵団には特に決まった固有の呼び方がないのだ。

某マンガの『鷹団』とか『しねしね団』とか、あるいは厨二的な名前がないのである。

「この世界で傭兵団に名前がつけられるのが常識かどうかは知らんが、“ヤツさん”に聞いたたら。

「そんなものはない。がっはっは」

で話が終わった。

後からいろいろ聞いた話から考えてみると、この傭兵団に名前がないのは成り立ちにも関係があるのではないかと思っっている。

この傭兵団はそもそも3つの傭兵集団が集まって出来た物であるからだ。

その3つと言うのは、1つは団長が率いていたメイジだけで構成された6人組。

もう1つはヤークオブが率いていたメイジ2人と平民の傭兵12人の計14人の集団。

最後の1つはデイモと言うメイジが率いていた9人の集団である。雇われた戦場でこの30人程度の集団に分けられ任務をこなしたのがきっかけだそうだ。

その時、人数は一番少ないながらも戦力では突出していたメイジ6人組が仕切る事になり、団長がトップになったと言う訳だ。

その後、4つほどの傭兵集団が合流したそうだが、2つはすでに全滅し、残りの2つもそれぞれ団長とデイモの集団に吸収され今に至っているため、今でも内部では3つの集団に分かれている。

しかし今でも実質、この傭兵団を動かしているのは、団長と元メンバー4人のからなる幹部5人のメイジである。

オレが挨拶に行つたときに団長の部屋にいたヤツラだ。彼らがすべての仕事を決め、傭兵団として赴く時であれば、その仕事の人数に合った傭兵を送り込む事もあるというスタイルで動いている。

このように結構な人数がいるので、新しく入ってくる新参者も多い。

個人や少人数で動くよりも、より大きい集団の方が何かと安全で、安定して仕事が出来るからだ。

だからオレのように個人で傭兵団に入ってくる者がいたり、仕事で死ぬ人間がいるのでこの傭兵団、その中の3つの集団は常に増減している。

今の傭兵団内の構成を見ると、戦力としては相変わらずメイジの人数が多い団長直属の集団が圧倒的だが、人数的には囲い込みをしているデイモの集団が半数以上を占めていて、そういうのに頼着がない“ヤツさん”の集団は俺を入れて8人という弱小ぐあいだ。

ここで始めの話に戻るが、オレは“ヤツさん”のところでは一人を除いてうまくやっている。

もちろんその一人はベンの“クソ野郎”だがそれは今はおいておこう。

団長のところの人間とはうまく出来ていないどころか、団長以外には敵意的なものを持たれている。直接言われる事はないが、態度があからさまだから間違いないだろう。

デイモのところとは戦力になるメイジのオレが、弱小の“ヤツさ

ん”のところを持っていかれたと言う事で、あまり友好的とは言えない接し方をされている。団内での地位を自集団の戦力強化で得ようとしているディモには面白くないだろうから、これも仕方がない。

と言うわけで、そこそこなのだ。

まあ、でも。

それも領ける。

だってオレ天才だもの！

そら一般人たちは、天才なオレのこと受け入れられないのも当然だよ。

傭兵団に合流した時には、オレ自身コンスペルしか扱えないと思っていたが、ほんの2ヶ月でコンスペルを扱えるようになったからね。

杖の契約が終わった後、あつという間にドットスペルを使いこなし、間をおかずコンスペルを憶えるオレって、マジ天才。

つか、マジヤバイ。

なんかこう、不思議と出来ちゃうんだよね。

自慢じゃないよ、真実だよ。

現実だよ。

でもその事に驚いていたのは団員たちだけで、団長はそうでもな

かった。

オレに一番最初に魔法の手ほどきやスペルを教えてくれていたのが団長だったんだが、その団長いわく「記憶がない時に魔法を使えていたんじゃない」とのこと。

だからそんなに驚くことじゃないらしい。

まあ、この事で余計に幹部&団長に付いている集団からは敵意を持たれる様になったけどね。

マジ面倒くさい。

普通は傭兵団の戦力が強化されて喜ぶと思うんだけど……なぜだっ？！

ヤツラが心酔している団長がオレの事を鼻屑しているとも思っ
てんのかな？

嫉妬？

嫉妬なのねっ？！

男の嫉妬なんて恥ずかしくないの？

この豚共がっ！

団長も豚共がオレに剣呑なのはわかってるはずなのにまったくの
放置なのはどうなの？

そりゃ仲良しこよししたい訳じゃないけど、なんとかならんもん
かね？チミィ？

団長はホント、何考えてんのかわからん。

魔法を教えてくれた時もそうだ。

始めオレは“ヤツさん”に習うつもりだった。

だけどオレが杖の契約を終えたと知ると、いきなり現れて団長から教わる事になった。

団長は始め、オレに火の系統魔法を教えていたので「なぜ火の系統ばかり教えるのか」と訊ねると、「君が火のメイジからだよ」と答えた。

何をもって火のメイジだと断定したのか、オレにはさっぱりわからん。

この辺が団長の謎キャラの所以だ。

団長は見た目が軽薄そうな優男に見えるが、実はものすごい自信家で、自分が下した判断に一切の疑問を持たない人間だというのは最近知った。

というかそれぐらいしか団長の事は知らない。

そのためどういう理由でその指示をしているのかとか、どういう訳でこの命令を下したのかとかは言わず、結論だけを言い結果を求める彼をあまり理解できてはいないのだ。

彼なりの判断材料や答えに至るロジックがあるのだろうが、他人にそれをあまり説明しないのをどうにかして欲しい。

仕事の時は命かかってるからさ。

オレ以外の人間はバカなのか、団長に心酔してるからかわからんが、そのへん全く気にしてないのでどうにもならんのが現状。

この魔法のことだって、突き詰めればオレの命にかかわることよ？

もつとどうしてそうなのかと言う説明をして欲しいよ。

オレのわずかに残っている幼いときの記憶によれば、オレは代々水のメイジを輩出していた貴族の生まれだ。

常識的に考えて、当然オレも水の系統魔法の才能があるはずである。

いくら火の系統魔法を教えられてもイマイチしっくり来ないのはそのせいだろう。

なのに団長は火の系統を得意とするメイジだといい、火の系統のスペルを教えてくる。

火の系統は水の系統と相性が悪かったはずだ。

おそらくそのせいでオレはうまく火の系統の魔法が使えなかった。

なのにオレのそんな様子を見て、

「エドガー。真面目にやってる？」

なんてほざいてくる。

バ・カ・か？お前。

バ・カ・な・の・か？パンツェさんよお。

その目は節穴かっつてのっ！

お前のはパンツ見るためだけにあるんじゃないやねえぞ！
いいか？ここテストに出るから、よく憶えとけ？

じゃないとお前が嫌がるお頭と呼ぶぞ、ゴラァ！

目の前で必死にやってるオレを見ればわかるだろうが！

「手を抜いてるように見えるのか？」

ちよつとキレぎみにそう言つと、何やら考え出した。

パンツばかり見てた事を反省してくれているのだろうか？

大体、メイジとして魔法を1つでも多く学ぼうとしているオレが、そんな事をする理由がないだろう？

というか教えている系統が合つてないんだよ！

そう言おうとも思つたが、それらの事を言うのがなぜか憚られた。かなりの使い手であるというカリスマ団長の「方針が間違つている」と口に出すのも躊躇われたのだが……。

しかし一番の理由は、団長にその事を伝えると考えるだけで酷く焦燥感に駆られたからだ。

なぜかオレ自身にもわからない。

奥の手は最後の最後まで隠しておけという、昔読んだマンガの影響が合ったのかもしれない。

だけど形式的には味方じゃん。

オレの心は乙女のようにままならんのか！

なんてくだらない事を考えはしたが、その時は漠然とした言葉でその場を濁した。

「なんかオレ、火の系統が向いてないような気がするんだけど？」

そついつと団長はまた少し考えながら聞き返して来た。

「向いていない？そんなはずは……いや、それは根拠があるのかい？」

「根拠？わかんねえけどうまく使えていない感じがする。直感みたいなもんだけど」

「直感、か。………じゃあ、土の系統魔法を試してみるかい？」

あくまでも抽象的に返答をすると、今度は長く考えた末に納得した表情でそんな事を言ってきたのだ。

その時はわからなかったが、今思い返してみると団長が方針を変ええる事は珍しいことだった。

だが、まだそんなことを知らなかったオレは何の疑問も持たず、

「火の系統以外ならなんでも」

と答え、その後も団長に魔法を学んだ。

結局、団長はその日しかオレに魔法を教える事は無かったが、その後“ヤッさん”の教えを受けたオレは初日に団長に学べたことがかなり幸運だったと知った。

“ヤッさん”はスペルを教えて「ヤレ！」だの「イケ！」だの教えているのかも怪しい上に、言葉がなんか卑猥だったからな……。

最初からあの教え方だったとしたら、いくら天才のオレでも未だにドットスペルすら習得出来ていたかあやしいもんだ。

傭兵団で厄介になり始めた当初、オレの仕事は雑用というかパシリだったので、その状況から抜け出す為に必死になったってのも大きかったな。

一応、“ヤッさん”の手下と言う事になっているので、誰の命令でも聞く訳じゃないがパシリはパシリだ。

そのストレスはベンの“クソ野郎”のビールにハナクソを入れたりして晴らしていたが、そんな時期もオレの才能の前にすぐに終わりを告げ、魔法がある程度扱えるようになった頃から、オレは主に連絡係的な仕事を任されたのだ。

ガキだったのもあるけどね。

何はともあれ現在オレはメイジと言うこともあって、団内ではそれなりの立場にある。

けしてその他大勢のモブではないのだ。

モブでは！

今もこのテーリヒエン男爵領から南に位置するアルデンの森付近で仕事をしている“ヤッさん”のところから、このローリンゲンへ仕事の経過を報告に来たところだ。

「ん？あれは」

団長の宿へ向かう途中、前方からこちらに向かういつかの領主の息子の馬車つばいのが見えた。

“ヤッさん”に言われたとおり目を付けられないように横道に入

ろつとすると、オレを呼ぶ声がする。

「エドガー。戻ったんだ？」

「団長？」

「どこ行くんだい？寄り道してないで報告に来なきゃダメじゃないか」

「いや。あの馬車が見えたんでやり過ぎそうかと」

オレは馬車を指差して答えた。

「つか、団長も早く退散しようぜ。」

面倒事は嫌っしょ？

「ん？ああ、あれなら気にしなくていいよ。さあこっちだ。ヤーコブたちは順調かい？」

馬車など気にもしないとった感じで宿の方向かつ。
いやいや。

「でも、あれヤバいんじゃない？」

「大丈夫だつて言ってるじゃないか。呼び止められる事はないから、とりあえず宿に行くよ」

オレは疑問に思いはしたが団長に逆らうことはせず、ヒヤヒヤしながら団長について馬車とすれ違った。

するとオレの言っていた通り、すれ違った直後に馬車が止まり、馬車の御者に呼び止められたのだ。

「そのこの傭兵。待て！」

だから言ったじゃ〜ん！

何が大丈夫なんだよ！このパンツフェチめっ！！

見事にご指名受けやがって！

どうすんだよ？これ！どうすんのさあ？！

つか、さっきの自信はなんだったんだよ？

「僕の事かな？」

だと言つのに、団長は大して慌てた様子もなく御者に答える。

「こちらへ来い。お前に話がある」

「話？何だろう？」

素直に馬車の方に歩いていく団長は、不自然なほどに堂々として
いる。

何だろう？じゃないよ！

自分で死亡フラグ立ててたじゃん！

他人のフリ〜、他人のフリ〜。

オレ関係ないしい、貴族の気まぐれで死ぬのなんて真っ平ゴメン
だしい。

歩いていく団長を終わつたと思って見ていると、馬車の窓が開き
ユルい表情をたたえた貴族風の男が話しかけてきた。

「お前、最近屋敷に出入りしている傭兵だったな？」

「ああ、これはこれはクリストフ様。いかがなさいました？」

あれ？普通に話してるし。

それに名前呼んでるって事は顔見知り？

団長の死亡フラグは？

っていつか、クリストフ？

男爵の息子はヨルクじゃなかったっけ？

「傭兵は諸国を渡り歩いているのだろう？お前もか？」

ん？知り合いつて感じじゃないな。

「それなりには」

でも普通に団長は答えてるし……。

どういつ事？

オレの疑問をヨソに貴族との会話が進んでいく。

なんか危なげな感じしないな。

「そうか。ではその際に商人などに伝手を得ることなどもあるのか？」

「幾人が当てはございますが」

「その中に帝都の商人などはいるか？」

「心当たりはございません」

「ふむ。では次に屋敷を訪れる時は私のところにも顔を出せ。いいな」

「かしこまりました」

「もういい。出せ」

話が終わるとすぐに窓が閉められ、馬車は行ってしまった。

一体何だったんだ？

「団長。今のは？」

「どうやら今の女に飽きたらしいね。それで新しいのを見つけたのに僕に声をかけたんだろう」

何を言っているのかさっぱりわからん。

「意味がわからないんだけど」

「ヤーコブにでも聞くといい。それより報告だ。宿に行くよ」

暗にこれ以上は話さないとわれ、その場では諦めるしかなかった。

後で聞いた話だと、団長が話していたのはテールヒェン男爵の長子であるクリストフというヤツらしい。

何でも男爵には3人の子がいて、一人はなくなった前妻・エメレンツィアの子で長子のクリストフ。

その前妻であるエレメンツィアと言う女性が亡くなると、バルバラと言う女性が男爵家に入り、その女性が産んだのが次子のヨルク。エレメンツィアの侍女であったエルザに産ませた庶子が、末娘のフリーデリカというそうだ。

オレが気をつけると言われていたのは次子のヨルクと言うヤツで、コイツはとにかく傲慢で、平民は家畜同然の扱いをする残忍な息子と言うことで有名なのだそうだ。

団長と話していた長子のクリストフは、今体調を崩しているテリヒエン男爵の後を継ぐことになるのだが、女と見れば片っ端から手をつけるほどの色狂いではあるものの、男なら平民だろうが貴族だろうが無害な息子みたいだ。

団長に話があるというのも、帝都・ウィンドボナの華やかな女性を商人の伝手で見つけるためだろうとのこと。

……クリストフ。

なんてうらやましいヤツなんだ！

ちっちゃい事は気にするな！

オレ様は傭兵である。

名前はまだない、ってこともなくむしろいくつもある。

傭兵団に厄介になり始めて1年と数ヶ月が経過したが、未だ記憶自体は戻ってはいなかった。

ヴォルフベルグにいた頃は記憶がない事に不安を感じてはいたが、最近はどういんじゃないかね？と思いはじめている。

だって特に困っていることもないしい。

傭兵のオレは、仕事で敵をブツ殺していれば生きていける。

敵はもちろん人間の場合もあるし、亜人やモンスター、幻獣なんてのもあった。

なんとなくこんなに日常が殺伐としていいのか？と思いはずし、生きる目的である“イチャラブ”からは遠のいている気がするのがタマにきずだけど……。

傭兵ってそんなものだからね。

唯一、護衛の仕事が平和的な仕事なんだけどさあ。

商人の護衛なんてユルい仕事は金がよくないのか、単にオレが関知してないだけなのか、よほどの事がないと団長から命令される事はないんだ。

したがって可愛い女の子がいる街に行く機会も、当然少ない。乙。

はあく……、おにゃの子と最近話してもしてないなあ。
傭兵団にいる女性は性別が違うだけで、おにゃの子とは言えないから……。

……鬱だ。

……激しく鬱だ。

激しい時点で鬱ではないとか突っ込まないでくれ。
まあそれでも、今では団長がオレに仕事を任せてくれるようになったので、それなりに充実はしている。

立場的には“ヤツさん”の子分ってのは変わらないが、ほら“ヤツさん”て脳筋だからさ。

仕事の詳細の把握とか、準備、根回し、段取り、実践時の戦術とかはオレがやるようになったのよ。

“ヤツさん”の役割はオレらの集団のまとめ役と実践指揮だけすればいいようになって、暇なときは酒ばっか飲んでるし。

ホント傭兵って、ヤクザな商売だよな。

女の子に声をかけても、傭兵だとわかると引きつった顔で遠ざかっていくのも仕方ないわ。マジで。

せっかく先日ひと皮剥けて大人の階段登ったってのに、これじゃあいつまで経っても小僧扱いだ。

クッソ！誰でもいいから赤飯ぐらい炊いてくれよ！

怒りに任せて扉を蹴つとばして部屋に入る。

「団長、こんなにクソ暑いってのにお呼びですかぁ？仕事なんてデ
イモのところにヤラせといて下さいよ、面倒クセー！」

部屋に入ると幹部が勢ぞろいしている。

なんか一部が青筋立ててるが、気にしたら負けだ。
オレの態度が悪い訳じゃないだろう、きつと。

「そういう割には絶対時間に遅れないよね、エドガーは」

「約束を守れんヤツは人間のクズだからな。それより話って何？」

どうでもいいから本題に入ってよ、暑いんだから！

「ははっ、じゃあ結論から言うよ。デイモが手間取っているから手
伝ってきて」

「何でオレが」

「ウインドボナのすぐ近くだよ。行きたがってたじゃないか、ウイ
ンドボナ」

オレが拒否ろうと口を開くと、遮るように甘い言葉を吐くワカメ
ちゃんLOVE団長。

「……尻拭いはいつも団長のとこがやってんじやないの？」

デイモと“ヤツさん”のグループがへタこいた時は団長らが始末

をつけるのが、いつものやり方だ。

「今はちょっとここを離れられないからね」

意味あり気に言う軽い口調がイラつく。

「オレが抜けると“ヤッさん”のどこ使い物になんないよ？」

「嫌な予感がするんだ。仕方ない、すぐに行ってくれらなら10エキュールあげよう」

「団長！それは」

「大丈夫。僕の個人的な金だから」

幹部が口を挟もうとするが簡単に黙らせる団長の言葉に、すくなく食指が動かされる。

しかしここはガマンして抵抗せねば！

「……仕事終わってからすぐには帰ってこないかもよ」

「ちょっとぐらいなら帝都見物しておいで」

ダメだ！

オレの思考は単純すぎるせいか、団長には丸わかりみたいだ。

休暇とボーナス。

これに釣られない人間はいないよ。

「了解。エドガー・コナン、小者の尻拭いに行ってくださいます。はい、

お金頂だい」

団長にあっさりと陥落させられたオレは、貴族風にお辞儀をした後、満面の笑みで金を催促した。

今回みたいにオレが一人で助っ人に行くのは初めてではない。

この傭兵団に入ってから半年ほどした頃、連絡係としてだけではなく戦力として仕事に連れて行かれるようになった。

そこで魔法を使って平然と人を殺しているオレを見て以降、傭兵団の連中は肝が据わっていると一人前として接してくるようになった者たちと、得体の知れないものを見るような視線を向ける者たちとに分かれた。

後者のオレを忌諱する者たちの理由は単純だ。

「少年の年の頃なのに、人を殺す事に躊躇いが無い」

たしかにオレは魔法で人を殺す事にあまり違和感を感じなかった。というか、戦場でオレを殺そうとしてくる人間を殺すことに躊躇いなんて沸くはずがない。

「亜人だってそうだ。」

やつらは人間を喰うんだぜ？良心の呵責なんてある訳がない。

モンスターや幻獣なんて害獣だ。

誰かが駆除しなきゃならんものだから、オレがやろう。

ただそれだけのことだ。

団長は失った記憶の時期にそういう経験があったのだろうと言っていたが、正直そんなのはどうでもいい。

ヤツラはガキのオレが傭兵団でデカイツラするのが、気に食わないだけなんだから。

ドットメイジ1人でも傭兵10人以上の戦力となりうるため、傭兵団ではメイジは重宝され発言力も大きい。

どの傭兵団でもメイジがいれば大体は団長や幹部となるのが普通だと言う。例外としては、名の通ったメイジ殺しや商人崩れの傭兵が率いているものがあるらしい。

まだ少年と言う年頃なため、顔には幼さが残るが、ここ一年で急成長を果たしたオレの体は180 سانتに届くかと言うほどだ。

ヴォルフベルグで肉体を酷使していた頃に比べて、高さと共に横幅も厚みも出てきた。

“ゴリ江”たちに拾われた頃はいかにも貴族の子らしく、もやしっ子だったオレがだ。

それが2人の手伝いをしたり賦役に就いているうちに体力がつき、1年と数ヶ月の傭兵生活がさらにオレを逞しくした。

仕事で亜人退治やモンスター狩り、幻獣討伐に行けば、野営ではアローを使って狩りをして侘しいメシの足しにしていたのが良かったのかもしれない。

狩った獲物を野営に持って帰ると“ヤツさん”に大半を平らげられてしまったため、森の中で捌いてジューシーに焼いて食っていたのだ。

不思議と狩りのやり方や獲物の捌き方は体が覚えていた。
記憶がない時期に覚えたのだろうか？

しかし貴族が獲物の捌き方を覚えているなんてありえるのだろうかとも思う。

普通に考えて貴族はそんな事をしないだろう。
しかもオレは未だ子供なのである。

そこからオレが想像しているよりもずっと早くにアントワープ家は没落してしまって、狩りをしなければならぬ状況になっていたのかもしれないなども考えたが所詮は想像だ。

あっても困らないので考えるだけ無駄な気もする。
でも傭兵をしなくても狩人としてやっていけそうなほどのスキルだぜ？

つくづく思ったものだね。

エド、恐ろしい子！って。

まあ、何度も言うが本当に考えても仕方ない事だから、昔のオレに感謝しておけばいいだろう。

このスキルのせいで、オレが一人で助っ人に行かされる現実もあるのだが……。

「あれっ？」

オレは杖さえあれば大抵のことには困らないので、団長に10エキュートをせしめた後、すぐに動くことにした。

そして馬を引いてローリングゲンの街から出ようとしていると、見

慣れない馬車が街に向かって来ているのが見えたのだ。

「あの馬車……、クリストフのでも、ヨルクのでもないな」

かと言ってテーリヒェン男爵は病床の身、ゆえに領主もありえない。

男爵夫人はヨルクの馬車を使うから違うし……。

「誰だ？」

あきらかに乗合馬車など平民が使う馬車とは違って、貴族用の高級感のある馬車だ。

あと考えられるのは、テーリヒェン男爵を訪ねてきた貴族ぐらいだ。

いづれにしても面倒ごとはゴメンだ。

オレはイチャモンをつけれないように、道端に馬を引いて馬車が通り過ぎるのを頭を下げて待つ。

近づいてきた馬車はかなりの速度が出ていた。

若干の土ぼこりを上げながら、馬車がオレの前を通り過ぎて街に入っていく。

前を過ぎたのを確認して顔を上げると、続いて一頭の馬が駆け抜けて行った。

ん？

あれはジークリードか？

見慣れない馬車に追従していたのは、テーリヒエン男爵の腹心と
言われていた騎士だった。

「まあ、誰だか知らんがオレには関係ない。さっさと仕事に行きま
すか！」

へんな組合わせだが考えても無駄だ。

オレはウインドボナ、じゃなかったデイモの野郎がいるイルミッ
ツとか言う町へ急がなきゃいけない。

そして手早く仕事を終わらせて、帝都で可愛いおにゃの子を見つ
けるんだ！

潤沢な資金も手に入れたことだし、そのおにゃの子と目いっぱい
遊ぶぞ！

もしかしてウフフもあるかも

ヤベー！スゲー、ワクテカすぎる！

オレは意気揚々と目的地・イルミッツの町を目指した。

イルミッツへは一週間もかからなかった。

大陸交路さままだ。

途中、帝都ウインドボナを横目を通り過ぎた時は、まだ見ぬガ
ルフレンドに後ろ髪を引かれる思いだったが、速攻仕事を終わらせ

てくればいいだけの話だと自分に言い聞かせた。

オレは出来る男、いや漢だ！

どうせすぐに終わるさ。

デイモが手間取つてると言っても、ヤツは所詮ドットメイジ。すでにトライアングルスペルを操るオレにとっては、ちよつとしたお使い程度の仕事だろう。

今回デイモが任されたのは、亜人討伐だ。

亜人はオーク鬼で数は5体程。

領主が諸侯軍として国内の反乱鎮圧に出ているため、領内の戦力では心許ないと傭兵が借り出された。

本来ならオーク鬼5体程度なら20人以上いるデイモたちでも討伐は可能なはずなんだが、何を手間取つてんだか？

「おーい！ハニ！ハニ 王子！」

村人に野営地を聞くと、南にあるノイジードラ湖の畔だと言っていたので、とりあえず“飛行”^{フライ}で湖を目指してやって来たのだが、なかなか見つからない。

「お馬さんでもいいぞお！返事しろオオオ！」

一体どこにいやがる？

小者のクセに面倒かけやがって！

つか補給もあるだろうし、そう村から離れたところに野営をするとも思えないんだけど……、マジどこ行った？！

ちよつとイラついてきた時、村からかなり離れた場所で、

オグル鬼、発見。

でけえ！

牙恐え！

5、6メートルも身長あるってどういう育ち方してんだよ？

重力から考えて、人型だと無理がある進化具合だぞ！

ダーウィンなめんな！

つてか……。

「あれって……、ひよつとして」

“飛行”で食事中らしいオグル鬼を背後から見下ろすと、変な物が見える。

足元になんか、肉片？つばいモノがあるけど……アレって人間じやね？

デイモいない オグル鬼食事中 食べカス人間つばい。

……。

……。

ち、ちっちゃい事は、気にするな！それワカチコ、ワカチコ！！

今、何気にオレいい事言った！

ちっちゃい事よりもお仕事を済ませよう。

社会人だし、仕事優先だね？

うん、そうしよう！

「ひゃっはー！」

以下略。

結果は討伐完了。

トライアングルメイジのオレにとっては、実に簡単な物でしたよ。奇襲で視界を奪って、足狙って動けないようにして、頭潰して終わり。

オーク鬼も2匹いたけど瞬殺だし。

くわしく書く必要ないっしょ？

その後、オレは大して疲れてもいなかったもので、すぐに村に討伐した事を報告し、その足で領主であるブルゲンラント侯爵邸にも事の次第を伝えに行った。

オグル鬼がいたなんて簡単には信じてもらえなくて、確認作業に
ずいぶん時間をとられてたけど、死体を持っていくわけにもいかん
し、この時間のロスは仕方がない。

まあ、報酬の上乗せももらったし、面倒なディモたちも相手にし
なくて良かったし、トータルでプラマイゼロと言っことにしておこ
う。

はっ！

今回、オグル鬼が出たこと黙つとけば、上乗せ分オレのモンじゃ
ん！

オレ、あつたまいい〜！うぷぷ

さいわいディモ達全滅っぽいし、……バレねえだろ。たぶん。

オレは上乗せ分の金貨を手にディモの冥福を祈ったり、祈らなか
ったりした。

こうしてウインドボナでナンパをしていたオレに、「すぐに帰っ
て来い」と団長からの知らせが来たのがちょうど一週間後のことだ
った。

フンコロガシ

「ふははっ！帰ってきたぞ、ローリングン！」

街の入り口で両手を挙げて叫ぶ姿を、隣で連絡係のイツカが変な目で見えていたがその程度の事を気にするオレではない。

と言うかコイツはきつと、先日のを根に持っているのだろう。だから悪意のあるイツカが変な目で見ているからと言って、オレが一般人から見て奇妙な行動をとっているとと言う訳じゃないんだ。そうオレは普通、変人ではない。

変人なんて、断じて否と言っておこう！

……嘘だけど。

でもオレが奇行に走ったのも、そもそもは貴重なナンパ休暇を邪魔しやがったイツカが悪いんだ。

ウィンドボナの新市街で、フラれ続けてorz状態のオレに「ローリングンに帰って来い」なんて言う団長の伝令を持ってくる、この常識人が！

きれいな目をしてオレをまっすぐ見るんじゃないやねえってんだよ、ま

ったく。

ムカついたので三年殺し^{カンチョウ}を食らわしたのは、いい思い出だ。
人差し指が第二関節まで入った時、変な声が聞こえてきた気もするがそれはまた別の話。

さすがに団長の帰還命令を無視するわけにもいかないので、こうしてシブシブとローリングンに帰ってきたが、やっぱり帝都に比べると何もかもがシヨボイな。

帰って来たくもなかったので、余計にすべてが中途半端な地方都市に見える。

なんだってこんなところを拠点にしてるんだか……。
団長の気が知れねえぜ。

まあお約束もしたし、いつもの宿に戻るか。

そう思って隣を見ると、まだ変な目で見ているイツカがいた。

「ほわたあー！」

「ぐあああー！」

失礼な人間に目潰しをくらわせてみた。

エドガーはイツカにダメージを与えた。

おそらく快心の一撃だ。

イツカは痛がっている。

テッテレ〜

エドガーはウサ晴らしのレベルが上がった。

そして気分もよくなった。

ノリでやってみたが、なんか万々歳だ。

「ふっ、つまらぬものを突いてしまった」

不心得者への教育としては不十分な気もするが、レベルが上がったのでよしとする。

これでコイツも死んだ魚のような濁った目になる事だろう。

「な、なにするんですかあ?!」

両手で顔を覆いながらも、しっかりと苦情を言ってくるイツカに少し感心しながら言ってる。

「……いやがらせ」

ノリ、と言うのが躊躇われたので違う答えを出したが、あまり変わらないかったかもしれない。

「ヒドい!いきなり何なんですか一体?!」

「2000年の歴史を刻み受け継がれてきた、恐るべき暗殺拳があった。その名を北斗 拳!」

「は?」

「いや、だから北斗 拳」

何なのかと聞かれたので答えてやり、目潰しをしたオレの右手人差し指と中指をイツカに見せてやる。

「ほあたる！」と言う気合と秘孔を突く暗殺拳が他にあるはずなのに、知らんのかコイツは？

「意味わかんないよ！」

意味わかんないのかよ？

常識人のクセにバカか？コイツ。

いつもならバカは放置するところだが、特別に説明してやるか。あゝ、面倒くさつ。

「……天空に連なる7つの星の下、一子相伝の北斗 拳を巡って、……悲劇は繰り返される」

「だ・か・ら！目潰しと何があるんですっ?!」

「いや、だから悲劇」

今度は目を突かれて痛がっているイツカを指す。

「エドガーが引き起こしたんでしょうが！この悲劇は！」

「たしかに。そうとも言う」

さすが常識人、当たり前前の事を言う。

こんな常識人にオレの休暇を邪魔されたかと思うとマジイラつくな。

でも八つ当たりは十分したし、そろそろ団長のところにも行くか。

「ただとお前の相手ばかりもしてられん。オレはもう行くぞ」

「はあ……、もう最初から素直に団長のところに行つてよ」

ゲルマニアの帝都・ウィンドボナでのナンパは順調だったんだ。

笑顔で第一印象をよくし、軽快なトークで掴みは5割の確率でうまく行く。

懐具合も温かかったので、お茶をおごると言えば2割ぐらいいはついてきてくれる。

そこで年齢を聞かれて、「14だ」と言つと可愛いと言われるので、要所要所でカワイさアピールで押す事も忘れない。

結構これでいいところまではいくのだが……。

「何やってるの?」と聞かれ、「傭兵」と答えるとダメになるパターンがお決まりになっていた。

くっ!なんでだ?!

もうほとんどうまくいったんだよ?

なのに傭兵だつただけで、まるで野盗を見るような目つきで女の子たちは逃げていく。

オレがなにしたらつて言うのおお?!

傭兵だと言わずに年齢同様に嘘を言っておけばいいだけの話なんだが、途中から意地になって傭兵だと言い続けてしまったら、あつと言う間に1週間が経ってた。

1週間つまり8日間で声をかけたのは、およそ100人を超え、最終的にいい感じになったのが6人。そして成果……なし。

もちろんチューも……なし。

………神は死んだ！

この恨み、はらさしておくべきか……。
ブ、ブリミルのシャバ僧めっ！
オレに祝福を授けんとは生意気な。

いつかきつと後悔させてやるぜ！

なんてブリミルに復讐を誓っていた時に、イツカが現れたんだ。
そりゃ、一子相伝の秘奥義・三年殺しも炸裂するさ。

でも女の子成分を十分満喫する事も出来たし、ウインドボナ土産も買えたし、休暇としては十分だったかな。

「くらあー！帰ったぞ、“ヤッさん”！」

「遅いぞ！ついて来い」

肩で風を切つて宿に帰るなり、“ヤツさん”に首根っこをつかまれて領主の館へ連れて行かれた。

あれよあれよと領主の館の一室へ。

何？この扱いは？

ヒドい！ヒド過ぎるよ！

仮にも一仕事終えて帰ってきた人間の扱いじゃなくね？
てか。

「あれれ〜？」

領主の館に入るとき、門番なんか止められなかったんだけど…
…なんで？

あきらかに不審人物なんだけど“ヤツさん”とかさあ。

オレとかも普通に入っちゃダメでしょ、貴族様の館なんだから。

なんだかおかしいなと思っていると、“ヤツさん”が開けた扉の向こうに団長&その他モブ傭兵がいた。

領主の館に傭兵団？

謎がナゾを呼ぶ展開だ！

まさに探偵たるオレに相応しいじゃないか、じつちゃん！

「やっと帰ってきたのかい？エドガー」

やっと“ヤツさん”に掴まれてた首根っこを開放されたので、アゴに手をあてて事件を考えるフリでもしようとしたところに、団長が声をかけてきた。

「お見通しって訳じゃないよ」

こゝ、心まで読めるのか？

こんな時に驚愕の事実発覚？！

はっ！もしかオレの精神に入ってくる魔法でも使っているのか？

「やゝめゝてゝ、私の心に入ってこないでえゝ」

精神汚染は法律違反だお！

セカンドチルドレンたるオレを廃人にする気がっ？！

「おい、エドガー。そんなにあからさまに表情に出てりゃ、お頭でなくてもそのくらいの事はわかるぞ」

何っ！“ヤッさん”まで？

「生き残りが2人帰って来てるんだよ」

「えっ？そうなの？」

なんだよゝ。

脅かすなって！

マジでビビった。

つか、オレとした事が混乱してた。

「だから出しなよ。追加、報酬」

そうか、これはきつとシナリオ通りなんだ。

ガキのオレが抵抗したってどうにもならない事なんだ。

オレは諦めて団長の空いている手に、金貨の入った小袋を差し出した。

受け取った団長はそれらを後ろにいた幹部に預け、それから2つ、3つ指示を出すとこちらを向き直る。

振り返った団長は真剣な、仕事の時の表情になっていた。

「じゃあ、エドガーが聞きたいだろう事を説明しようか」

ニイドの月は例年よりも暑い日が続いた。

その事が、もとより病床にあつたテーリヒエン男爵の体力を削り、いつそう症状を悪くすることになった。

水のメイジの“癒し”^{ヒーリング}も水の秘薬の効果も一時的なモノで、症状を改善させるには至らなかつたのだ。

男爵は自らの死期を感じたのかどうかはわからないが、ニイドの月の半ばに臣下のジークリッドをロマリアに向かわせた。

それはロマリアの修道院に預けていた末娘・フリーデリカを迎えにやませたのだという。

オレがローリンゲンを立つ時にすれ違つた馬車が、末娘のフリーデリカだつたようだ。

彼女がローリンゲンに戻って9日後、テーリヒエン男爵が死亡する。

葬儀が行われ、それを仕切っていた長子のクリストフが正式な新当主の布告を領内に出そうとした矢先。

兄弟間の相続争い勃発した。

誰もが長子・クリストフが家督を継ぐものと思っていたが、男爵夫人・バルバラは実子であるヨルクが家督を継ぎ男爵位を襲爵するために、仕えている臣下を使ってクリストフの命を狙ったのだ。

それを察知した老臣・ライムンドがクリストフを館から脱出させ、郊外にある別荘へ逃がす。

難を逃れたクリストフは父の腹心で人望もあつたライムンドに臣下を集めるよう命令する。

彼が長子のクリストフが正当な後継者である理を説けば、多くの人間が自分の下に集まるのは目に見えていたからだ。

結果、テーリヒェン男爵に仕えていた大半の臣下を抱え込むことになった。

これに対しバルバラも何もしていなかった訳ではない、実子ヨルクが後継者となるのを見込んで、男爵家の名で金を集め、それ使つて傭兵を雇い入れていた。

うちの傭兵団は真つ先にそのバルバラに雇われ、臣下の少ない領主の館に留まっているという訳だ。

「ローリングンを拠点にしている傭兵なんてオレ達ぐらいだろうか、当然と言えば当然の流れか」

「もちろん他にも傭兵を集めているみたいだよ。もう僕たち以外に100人以上はこの街にいるんじゃないかな？」

「お頭は死んだテリヒエン男爵に呼ばれて、よくこの屋敷にも来ていたから俺達が屋敷の警備をしているって訳だ」

「あっそうなんだ。あっさりここまで来れたのはそういう事か。戦力比は？」

「数ではこちら。質ではあちら。6：4でこちらの分が悪い感じかな」

「まあ、メイジの比率が直接戦力に影響するからそんなもんでしょ？ところで帰ってきたって言う末娘のフリーデリカは？」

「この屋敷にいるよ。ジークリードがついているようだ」

いや、オレ的には空気を読まずに美人かどうかを聞きたかったんだが……。

あのジークリードがついてるんじゃ、お顔拝見とはいかないかな。

ちえっ、つまんねえの！

「ぶ〜ん。大体の状況は把握したよ。オレらは劣勢を覆して、色狂いのクリストフぶつ殺すのが仕事なのね？」

「そうなるね」

「って言うかさあ。まさか団長は男爵が死にそうな頃から、こういう事を見込んでローリングンにいた訳じゃないよね？」

「ここにいたのは男爵には臍盾にしてもらってたからさ」

たしかに結構な頻度で仕事を貰っていたようだけど、それだけの？マジで。

相変わらずオレと違って表情が読みにくいな。

でも普通に考えて、一年以上もこんな中途半端な街に居座り続けるメリットがねえし……。

この団長なら相続争いを見越してここを拠点にして、いざ起こったら劣勢側について、報酬をたんまりせしめる事を考えていたとしてもおかしくないんだよな。

いや、考えすぎか？

「まあいいや。でも極悪ヨルクが領主になる為に働くってのも、なんかヤル気でないんだけど。オレ」

「仕事だよ、エドガー。僕たちは正当な後継者に雇われて依頼者に不都合なモノを取り除く」

「それ以上の仕事もしなければ、それ以下の仕事もしないでしょ？」

「そういうこと」

「はいはい」

「それとここは一応、次期当主であるヨルク様の屋敷って事になってるんだからさあ。口を慎むようにね」

「わかってるって。それで当分はこちらの戦力、傭兵が集まるまでは無駄飯食らっていいの？」

「それがあちらの陣営も傭兵を集め出したらしくてね。エドガーにはやって欲しい事があるんだ」

ピュキーーーン！

ヤバイ！

激しく嫌な予感がする！

「あつ！オレ、国の両親が危篤なんだよね。帰らなきゃ。さっき手紙が来たんだ、ホントだよ？」

「君は記憶喪失だろ？」

「そ、そうだ！帝都で『オシリむずむず病』にかかって体調が悪かった。ごほっ、ごほっ」

「お尻なのになんで咳をしてるんだい？」

何でもいいんだ。

何でもいいから言い訳を考えろ！

……ダメだ。思いつかぁーん！！

「うぐう……。い、いやだぁ！帰ってきたばかりなのに、面倒な仕事なんてしたくない！ここは断固拒否をさせてもらう！」

「そうかぁ。せっかくよく頑張ってくれているから、イルミッツでの追加報酬を君の取り分にしてあげようと思っていたのに……そんなにいやなのかぁ」

そうやって人を手のひらの上でコロコロ転がそうだったってそうはいかんぞ、フンコロガシ野郎め！

タダのクソのように転がされてやるものか！

「あたりまえだろ、このそもそもが討伐はオレ一人でやったんだぞ！ 評判を落とさないように尻拭いしたんだから、全額貰ってもいいぐらいだ」

「引き受けてくれたら可愛い娘、紹介してあげようと思ったのに……。そっか無理か」

何？

今っ、今なんと言った？

このフンコロガシ団長様よお？

可愛い？

かわいい子？

カワウイウイおにゃのこだった？

……。

……。

そっという事なら話は別だ！

「誰がそんな事を言った？」

「やるかい？」

団長、皆まで言つな。

「オレに不可能な事などないっ！」

そうさ！

健康的でありながら清楚な物腰の中にたまに見せる艶やかな表情と屈託のない微笑が同居した純情可憐で見目麗しい凛とした美貌のカワウイー女の子のためなら！！

「その話のノツた！」

強制ストーキング行為

オレが団長に任された仕事と言うのは、長子・クリストフのいるローリングン郊外の別荘を監視することだった。

敵味方両陣営の戦力がそれなりに揃ってきた今、いつ戦を仕掛けられてもおかしくない状況らしい。

基本、貴族は頭がパーなせいで正面から正々堂々戦いを挑むことを好む。

その際に下手な口上めいたもので、相手に自分の正当性をのたまったりまでする。

バカなことだと思うが、そこが貴族たる所以。

外聞と自尊心のみが彼らにとっては重要なのだ。

しかし今回の戦いは当主の座を巡っての争いであって、普通の戦いとは少し違う。

これは言ってみれば、単なる内輪揉めのケンカだ。

本来あつてはならないモノであり、収束後には対外的に何もなかったことになる類のものだ。

よって貴族同士の決闘時のようなルールや“シキタリ”、暗黙の了解的なものはないも同然なのである。そもそも身内同士だから外

聞は関係ないし、自尊心から争いが起こるようなものだ。

まさに血を血で洗う状況とはこの事だと言っただろう。

しかもクリストフにしてみれば、もうすでに暗殺という貴族にあるまじき行為で命を狙われでしまっている。報復に何をしても許されるぐらいには考えていてもおかしくない。

それがわかっているから、次子・ヨルクと男爵夫人・バルバラは少ない臣下を自らの護衛に置き常に警戒しているのだ。

そのせいで手薄になっていく屋敷の警護やその他、戦いの準備などをオレ達のような傭兵に任せている。

しかしこれもおかしな話である。

ヨルクと男爵夫人は暗殺のことをけして認めないだろうが、この時点で宮廷に申し出ればクリストフが当主となることは確実なんだ。

しかしそれをしない。

いや、きつと出来ない理由があるのだろう。

考えられるのは、それぞれの後ろ盾の格の違いでそれが不可能だという場合、家印などがなくそれが物理的に不可能である場合などいろいろ考えられるが、もしかしたら根本的にしたくない理由でもあるかもしれない……。

まあ、オレが考える事じゃないか。

そのおかげで金を稼がせてもらってる立場だからな、こっちは。

クリストフの首にはイルミッツでの討伐なんて目じゃない報酬が用意されてるし。

それゲットできれば“イチャラブ”のための資金として申し分ないしね！

そのためにもオレが任されたこの任務は都合がいい。
もしかしたら一撃必殺のチャンスが巡ってくるかもしれないからな。

そしたら、うまうまだぜー！ひゃっはー！！

と浮かれたいところだが、そんなに甘くはないだろう。

甘くはないだろうが、お目当てのクリストフの行動パターンを観察すれば、きつとなにかしらのチャンスに繋がるといふ事があるかもしれない。

何事もポジティブに考えていけば、道が開けると大金持ちのおっさんも言っていた。

こんな面倒な仕事をやるハメになったが、ただで泣き寝入りするオレと思うなよ！

クソ忌々しいマイナスを、このオレ様自身の力でプラスに変えてやる。

かわいい女の子も紹介してもらえて、さらに倍！

オレの人生バラ色だぜ！きつと。

サンキュー団長！

なんて意気揚々と監視に来て、1分もしないうちにその団長を呪う事になった。

おかしいと思ったんだ。

団長が女の子を紹介してくれるなんてさ。

思い返せばおかしい事ばかりだが、たぶんかわいい女の子という言葉の魔力にやられていたのだろう。

あの時、そわそわとしながらも仕事の話聞き終えたオレは、説明が終わるや否や「いつ女の子を紹介してくれるんだ！」と迫った。そしたら「すぐに会わせてやるから、今はとりあえず監視に行ってきて」と言われ、この仕事が終わったら紹介してくれるものだと勝手に思い込んでいたのだ。

けどここに来て監視をしていたヤツと話して団長の思惑が知れた。

交代要員としてきたオレが軽く情報の確認作業をしていたら、「例の女は別荘の中にいるから、なかなか顔は見えないぜ」と言われたのだ。

「例の女？」と訳がわからずオレが聞き返すと、「ん？お前は他のヤツに聞いてないのか？」と逆に聞き返されたので、詳しい話を求めた。

するとなんでもクリストフが雇った傭兵の中に、かなりの美女がいる事がわかった。

その瞬間、「コイツのことだったのかあああ！」と悟った。

何でも、監視役の人間はその女を見るために、わざわざ一度はこのキツイ仕事に来るのだからか。

……………そう、団長はこの事を知っていたんだ。

あの時の団長の言葉を思い返す。

「可愛い娘、紹介してあげよう」と「すぐに会わせてやるから、」

つまり“可愛い娘”とはこの女の事で、“紹介”とは監視しろという事。

そして“すぐに会わせてやる”と言うのも仕事しろって言う事だったんだ。

たしかに紹介してくださりやがったな、あのクソ団長！

“紹介”つつーか、ただの敵情報の共有だろーが！

“会わせる”も何も、監視の仕事しって事だろお？ざけんなつ！マジ鬼畜！マジ鬼畜過ぎるよ！アンタ。

いつか絶対殺す！

こんなことなら断固拒否を貫き通して、領主の館にいればよかった。

そしたらジークリードの隙を突いて、（おそらく）薄倅美少女のフリーデリカちゃんをこの目で見る事が出来たのに……。

そして無駄飯食らって、事が起きるのをダラダラと待つてる事が出来たのに……。

。 それにあの館にいれば、ひょっとしたら廊下の角で出会い頭に

ドンと何かとぶつかるオレ。

「いったい」

ポテンツと尻餅をつく彼女。

「失礼。怪我はありませんでしたか？フロイライン」

サツ！と手を出すオレ。

「もつどこ見てんのよ！わたしの朝食のパンが台無しじゃない！」

ブンブン！と可愛く怒る彼女。

「すまない。でも、パンがないならケーキを食べればいいじゃない？」

チィーン！と何処からともなく取り出したワイングラスを鳴らし、髭はないけど貴族風なオレ。

「それもそうね。あなた頭いいわね！」

ウルウルとオレの博識に熱い視線を向ける彼女。

「いやあくそれほどでも、あるっ！」

キラッとキメ顔なオレ。

「わたし頭のいい殿方がタイプなの！」

ドキドキッと胸を弾ませる彼女。

「オレに惚れると怪我するぜ！」

ドーン！と殺し文句なオレ。

「いやあく。かつこいい〜」

ズッキューン！と目がハートな彼女。

「ふっ」

サラッと髪をかきあげるオレ。

「好きっ！」

メロリン　な彼女。

そして館の廊下で、罪な男なオレと薄倅の美少女の彼女は抱き合
う。

傭兵と貴族の娘の許されぬ小さな恋の物語。

F i n .

なんてパンをくわえたフリーデリカちゃんと恋するフラグが立ったかも知れねえってのにさ！

絶対え、あそこで選択肢ミスったんだよ。

ドチクシヨー！

ガシガシと監視をしている木の上で頭を打ちつけながら、激しく後悔するが後の祭りだ。

もうどうにもならない過去なのだ。

いい加減頭も痛くなってきたので、昔の女のことなんて忘れるか。

靴下を履かない人の教えには反するが、今は目の前の仕事に逃げる事にしよう。

事が“イチヤラヴ”関係だったので、期待が大きかっただけに傷口も大きすぎるよ。

ダメな人間と罵ってくれてもいいさ。

仕事に逃げて何が悪い。

さー、お仕事お仕事。

あたりはスツカリ夜の帳に覆われ、空には2つの月が出ていた。

オレが監視する時間は、屋敷が寝静まるまでと早朝の日が出る前の時間帯だ。

動き出すとすればそのどちらかだと言う団長の考えには、オレも納得できる。

とりあえずは今から数時間、フンばるか。

「イル・ルーナ・スペクトリテレ・スコープ、
「ナイト・スコープ暗視」、イル・ウィンデ・
スペクトリ、
「遠視」」

オレは早速“暗視”と“遠視”の魔法を唱え、別荘の方を伺う。

「しかし思った以上にあつちに傭兵が雇われているな」

別荘の周囲には傭兵たちが野営のために用意しているテントがいくつもたっていた。

テントの周囲には火を囲むように傭兵たちが座り、干し肉をかじったり、武器を磨いたりしている。

ざっと見、メイジがほとんどいないようだな。

建物の中に配置しているのか？それとも始めからそうなのだろうか？

家臣はほとんどがメイジだろうから、盾役として集めただけかもしれない。

後々の事を考えて、傭兵の中にいるメイジの確認もしておきたかったが、それもあまり必要ないのかもな。

今は言われた事だけやっておくか。

オレのやるべき事は奇襲の動きを察知することだ。

となると、まず動くのは指示を出すであろう屋敷の中の人間たる

う。

暗殺を実行するにしても屋敷の中で、必ず動きがあるはず。なら外の傭兵たちの動向はさほど重要ではない。

そうオレは判断し、火を囲む傭兵たちから別荘の方に目を移し、人の出入りや見える範囲での中の様子を監視する事にした。

……のだが、10分もしないうちに飽きてきた。

だって中がほとんど見えないんだもん！

見えそうで見えないチラリズムすらない。

基本的にバルコニーでもなければ大きい窓はないからなあ、この世界は。

きつと着エロの文化が花開いていない事も大きな要因に違いないだろう！

これで監視ってちょっと無理くさくね？と思った時点でオレは仕事を半ば放棄し、例の女を探すことに力を注ぐことにしたが、オレが悪い訳じゃなくてきつと時代が悪いのだ。

「さあ！どれだけエロいかオレに見せてみる！ふははははー！」

結局、初日の監視偵察では傭兵団の皆が言う件の美女は発見できず、オレは朝になってやって来た交代要員と2、3言葉を交わしてローリングンに戻った。

しかし、ホントにダルいだけで嫌な仕事だった。

例の女も影すら見えなかったから、テンションも最低。

遅い時間になるにつれ、監視もおざなりになったのも仕方なかったらう。

そんな最低で暇な時間だったが考えることだけは出来たので、結局最後は昼間に得た情報や団長の動きからいろいろ事態の想定をして暇を潰した。

その過程で、やはり監視する上で団長に確認しておいた方がよさそうだなと思つたことがいくつかあつたのだが、いい加減眠けも最高潮だつたので、起きてからでいいやと宿に戻ってベッドにもぐつた。

木の上で寝ようとしたのだが夏の厄介者が現れて、ブーンブーンと煩く碌に仮眠も取れなかったからだ。

どうせ現れるなら美女が現れるってんだ！

昼も十分に過ぎた頃に起きたオレは、飯も食わずに団長のところに顔を出した。

飯を食わなかったのは仕事熱心な訳ではなく、団長から飯代をせしめようという思惑があつたためだ。

寝起きだがそれなりに腹の減ってきたオレは昨日の部屋へ急ぎ、

「くらあー！」と扉を蹴り飛ばして開けてやった。

領主の館だらうがオレの知つたことではない。

むしろ団長が後で文句を言われれば、オレ的にハッピーだ。

「このペテン師野郎！これからも夜の監視をオレに続けさせたいなら、イルミッツの報酬全部よこせっ！」

部屋に入るなり、団長を罵倒して金を要求するが、肝心の団長はそんなオレのことなどどこ吹く風といった様子だ。いつものことだがムカつくぜ。

「可愛い子を紹介してあげたじゃないか？」

「アレは紹介したとはいわねえ！」

どの口が言うかねえ、この野郎っ！

「でもすぐに会えたでしょ？」

「会えてねえし。それにアレは一方的な覗きだ！」

アレで運命の出会いを感じたとしたら、そいつはストーカー適正が天元突破してるよ。

「なんだ。会えなかったんだ？」

「夜だぞ！建物の中にいる人間が見える訳ねえだろ、バカか？クソ団長」

「でも美人らしいじゃないか？ガンガンアタックしちやえば？」

いつもの軽い調子で言う団長にイラツキがとまらねえ！

「“でも”の意味がわかんえつつの！それに顔どころか後姿さえ見てねえのに、アタックなんてする訳ねえだろ！脳みそ腐ってんのか？ああん？」

ってか、脳みそ腐ってねえから手に負えねえんだけどさあ。

「大丈夫。みんながみんな美人だって言ってるらしいから。あとはエドガーの努力次第だよ」

マジ何が大丈夫なんだ？と鼻に指突っ込んで聞きたい。
オレはもう空いた口が塞がらない状態だよ。

もはや、マジ殺意しか湧いてこねえって！

騙された方が悪いってのはわかってるんだ。

しかし“イチャラブ”に関わる今回のような事はいつものように流す事は出来ん。

死活問題だからな、オレにとって“イチャラブ”は。

「いつか憶えとけよ。コンチクショーがっ！」

「んー、そこまでダメだとは思わなかったよ。そっか。こっちは洒落が通じないのか、憶えておこっ。それで？他にも用があるんだろっ？」

強引に話題を変えられたが、いつまでやっても不毛なのはわかってるのでその流れに乗る。

非常に不本意だがな。

「……オレとしては非常にヤル気はないんだけどさあ。夜、動こっか？」

これが昨日の夜、オレなりにいろいろ考えた末の結論だ。

「どうして？そんな依頼は受けてないよ？」

「そうだけどさ。さっさと終わらせたいんじゃないの？」

「まあ……それは僕が決めることじゃないから」

「わかった。じゃあ、殺していいのと殺しちゃダメなの教えといってくれ」

「どうしてそんな事？」

「不測の事態のためだ。後で文句言われてもかなわんからな」

「……不測の事態ねえ。エドガーは進んでそんな事態を起こしそうな勢いなんだけど？まあいいか」

「で？」

「そうだねえ。クリストフといつもの取り巻きの家臣、あとライムンドもいっかな。傭兵も好きなようにしていいけど、その他の家臣はダメ」

「わかった。んじゃー、監視と報告はちゃんとするけど、あとは適当にやる」

もういいや。

今回はいろいろ面倒な事がありそうだけどオレはしらん！

適当にクリストフをブツ殺してウサを晴らそう。

そしてたんまり金を稼いで、こんな傭兵団からはおさらばしてやる。

一片の価値なし

その次の日からの3日間は何事もなく過ぎた。

オレもその間、ただ何もせず遊んでいたわけではない。

つまらない監視を早々に放棄し、「どこまで気づかれずに近づけるかな」と称してスニーキングを楽しみ、ゴホツゴホツ。

情報収集のために実地訓練していたのだ。

現代と違って月明かりぐらいいしかなないハルケギニアの夜は深い。だから素人のオレでも細心の注意を払えば、それなりに近づける。まあそれも焚き火の揺れる灯りや、生木をくべた時になるべきっという音などがあつての話だが。

最初は「オレは森の精、森と一つになる！」と変な呼吸法を試しながら木の幹に頼りしりしてから、「オレは森、オレは森……」なんて自己暗示をかけてから近づいた行つたが、バレそうになった。ちやんと葉っぱのついた枝も両手に持ってスツカリ木になりきっていたのだが、逆にその枝が目立ってしまった。

動くたびにカサカサと音が出ていたから、それがいけなかったのかも知れない。

次に森との一体化がダメならば、無の境地というやつはどうだと試してみる。

四行だがなんだが知らんが、オーラを消して気配を断つことで目標に近づくのだ。

思いついたまでは良かったが、どうやればいいのか全くわからなかったのとおりあえず座禅を組んでみた。そして「無想転生、無想転生……」と自己暗示をかけてから近づいて行ったが当然、またバシそうになった。

何がいけなかったのかはサッパリわからない。

こうしてこの後も思いついては試すことを繰り返したが、監視2日目は試行錯誤のいかにもなく成果はあがらなかった。

次の日も監視任務につくなり、スニーキングのスキルアップを始めた。

途中までは何の成果も上がらず前日と同じだったが、監視対象の傭兵が魔法でなんとすればいいじゃん！と遅すぎる発見をした結果……うまくいった。

“飛行”^{フライ}を使って人の視界に入りにくい、地上から5、6メートルを移動すれば簡単にクリストフのいる建物にまで到達する事が出来たのだ。

でもこれって……、もうスニーキングじゃなくなっ？！

闇夜に紛れてお空をひとつ飛びとかさあ。

スニーキングの神に失礼だ。

スネ　クに謝れ！

というか前日のオレの努力って一体……。

深く考えるのはやめておこう。

目から流れる心の汗が止まらなくなる。

手段はどうあれ、こうして目的の場所に近づく事が簡単に出来るようになったオレは次の段階に進んだ。

実際に情報を収集する事だ。

やっとスニーキングらしくなってキターアアア！と気分上々なオレは、建物にへばりつきながら中の様子を窺う。

気分はスパイ大作戦。何事も形が大事なのだ。

しかしオレ的にはコソコソとやってるつもりなのだが、180センチにもう少して届こうかといオレの体はそれを許してくれなかった。

移動するたびに音がするし、足跡らしきものが残ってしまっただ。

まあ、スニーキングスキルが上がったわけではないので当然なのだが……。

そうして監視3日目はまたしても撤退を余儀なくされ、監視ポイントに戻る事になった。

監視4日目。

傭兵つてホントただの犯罪者だなと唐突に思った。

ナンパしても傭兵つてわかると女の子が逃げてくのも納得だ。

だってオレがやってることは胸を張って人様に言えるようなことじゃないもん。

あまりこの事を考えてもいい事は何もないので、思考を仕事に切り替え今日の予定を決める。

いろいろと候補はあったが、今日はスニーキングに必要なスキルとして大きな割合を占める“無音移動法”を模索することにした。

“飛行”^{フライ}や“浮遊”^{レベテーション}はそれを簡単に可能にしたが、これらの魔法は常時コントロールを必要とする魔力操作直接型の魔法だ。故に使用中に他の魔法が使えない。

これはちよつといただけない。

というか致命的だ。

不測の事態や緊急の対応に難のあるこれらの魔法は、潜入時には適しているも情報収集時には向いているとは言い難かった。あくまでも偵察・監視・潜入までだ。

しかし戦場でもない限り情報収集は、屋内での行動こそが重要となってくる。

だから主に探索や諜報に便利な魔法が使えればいいのだが……、そう都合のいい話はない。

オレが知らないだけかもしれないが、“透視”や“拾音”などの魔法は聞いたことも見たこともなかった。

結局、自分でスキルを磨くしかないのだが、魔法も補助程度なら

使えるものがあつた。

自分の体を軽くして足音や足跡などを軽減する魔法、どこのつまり
ライトネス“軽量”だ。

どうにもならない微かな音は他の音に紛らわせるといふ手段を併用して、オレのハルケギニア版スニーキング術が一応の成功の形をなした。

サイレント“静寂”の魔法も場合によっては使えるが、この魔法は範囲効果魔法である為に他のメイジに察知されやすい。最悪、魔力の流れに敏感なメイジがいると使った瞬間にこちらの存在が露見してしまうので、今の時点ではスニーキングには向いていないという結論にしておいた。

こうして方向性の目処が立った今、オレがやる事は熟練度を上げるのみだ。

監視の仕事？

まあ、それはそれ。

これはこれ。

5日目に入り本格的に情報収集に取り掛かった。今日は来る前にイツカを殴ったので気分がいい。すべてがうまく行きそうな予感がしていた。

早速交代を終えると前日に引き続き、あえて傭兵たちの上空を飛び越え敷地に潜入する。

夜とは言え屋敷から発見されないように慎重に進路を決め、上空を通過した時に陰が目に付かないように下の傭兵にも注意を払った。

何事もなくスムーズに潜入に成功。

屋敷外壁に到達したオレはすぐに“軽量”の魔法を使い、周囲に細心の注意を払って進む。

向かうのはオレの監視ポイントからは死角となる建物の反対、西側だ。

クリストフのいる郊外の別荘は、東側にある正面入り口と南側にある庭園からの出入りが出来る。

当然、監視は東と南に置かれていて、オレの監視しているポイントは大きく開けていて傭兵たちが野営をしている東側だ。ローリングの街がある方角でもあり、事が起こればすぐに魔法で領主の館へ戻って知らせる事が出来るように、常にオレのようなメイジが担当している。

南側はメイジではない傭兵が遠見と呼ばれる望遠鏡の劣化版のような物を使って監視をしているが、夜は暗視が出来ないため夜目の利く人間が担当している程度だ。

黒いローブに全身を包んで夜空を進むオレに気づく事はないだろう。

オレが監視もそこそこにスニーキングを楽しんでいることが、団長にバレでもしたら厄介だからな。

“飛行”を使う時は、敵同様に南側の監視にも注意を怠ってはいない。

そのため今西側に向かっているルートも、もちろん屋敷の北側を回りこむものだ。

今日はある目標を設定して行動している。

監視を始めてもう5日目となるが、オレは未だ例の女の姿を見ていないことに気づいた。

ここ数日スニーキングにかかりつきりで、監視はもちろん例の女の事も頭になかったのだ。

思い出したついでにちょうどいいんじゃないかという事で、彼女を発見することを目標に今日の訓練を行っている。

とりあえず行きは1階を覗き込みながら西側へ進み、帰りに“飛行”を使って2階部を見る予定だ。

発見できなければいったん監視ポイントに戻ってからその後の行動を決めるつもりである。

オレは手始めに玄関ホールを覗きんだ。

「っ！」

てか、いきなり発見じゃね!?

あっさりすぎるよ、これじゃあさ!

あまりにもものあっけなさに感慨も何もあつたものじゃない。

なかなか手に入らない商品がAmazonで簡単に買えてしまった時のような変な虚しさがある。

そう、これは賢者タイムに近いモノだ。

あまり虚しさに凹んでいても埒が明かないので、観察を始める事にした。

覗き込んで見た2階部まで吹き抜けの玄関ホールには、家臣らしき揃いの装備を身につけた一団と傭兵らしき一団がいる。

家臣らしき一団は見覚えがあった。

クリストフの取り巻きである若くて頭の悪い騎士どもだ。

たしか団長が言う殺していいリストに上がっていたので機会があれば、というか機会を作って殺してやりたい連中だ。

一方、傭兵らしき一団は10人ほどでその中には3人の女がいた。傭兵とは思えないダンディーな髭をたくわえた男に言い寄っている行き遅れっぽい年齢の女と壁にもたれかかっている女盛りといった年頃の女、そして例の女だと一目でわかる美女。

ちなみに行き遅れはタルんだ体のおばさんで、壁の女は可もなく不可もない容姿だ。

それより今は美女だ。

美女？っていつか美少女？

年は明らかにオレより上だろう。

けれど大人びた見た目だが、おそらくまだ10代。

美女と言うにはまだ数年の月日が必要な美少女だった。

彼女はオレンジ色のストレートな髪を無造作に束ねそれを前に垂らしていた。

その肌は白く透き通っていて、玄関ホールに使われている大理石の白い色がくすんで見えるほどだ。

平民の旅装でメイジのローブを纏ってはいるが、とても傭兵には見えない容姿をしている。

なるほど。

皆が言うだけの事はある。

たしかに美人だ。

見た人間は10人が10人と彼女のことを美人だと言っただろう。

整った顔。

小さな頭。

細くしなやかな腕。

くびれた腰。

体の半分はある長い脚。

それでいて女性的な曲線を描くスタイル。

しかあああーしっ！

美人だが……残念な事にエロくはない！

大事なことなのでもう一回言っ。

エロくはないのだっ！！

彼女の美しさは言ってみれば、モデル的な美しさ。

不要なものを取り除いた美の雛形。

芸術的な美に近い。

オレも認めようじゃないか。

彼女は美人だ。

間違いないよ。

だが、

エロのないものに一片の価値なし！

コウメイの罫？

これはもうクリストフを又ツ殺すしかない。

“例の女”に興味を失ったオレが八つ当たりもかねて、そう心に決めたのも無理はないだろう。

女友達に「わたしの友達い、チヨーかわいいよ」などと言われ、て行った合コンで騙された知り、「女の“カワイイの定義”を国の法律で定めろ！」と政府相手に訴訟を起こすようなものだ。

よく聞くあるあるネタだけに世の中の9割の人の賛同が得られるとオレは信じている。

だからクリストフ、死んでくれ。

そして恵まれないオレにお金を下さい。

この作戦が終わったら、そのお金を持ってどこかのかわいい子に告白するんだ。

死亡フラグっぽいけど、あくまでもあいまいに言ったからそうはならないはず！

そうさ！きつとつまく行く。

ウィンドボナでのナンパの続きはつまく行くっ！

だから是が非でも色狂いのクリストフを見つけないでいかん。

そうと決まればオレの行動はピカチーよりも早い。

まさに電光石火っ！

すぐさまその場で3回ヒンズースクワットをしてからふたたび玄関ホールを覗き込み、その場にいる傭兵の顔を記憶する。

オレが傭兵の顔を覚えようとしているのは、彼らが全員杖らしきものを身につけているからだ。

間違いなく全員がメイジだろう。

戦闘になった時、真っ先に攻撃をしなければならぬ驚異対象であるメイジを、認識できているかそうでないかでは損害に大きな差が出る。しかもその損害がオレだった場合、洒落にならんからな。

KUM N式で鍛えられたオレの頭脳をもってすれば10人程度の顔なんてチヨロいもんさ。時間が惜しいのでさっさと覚えてお金じゃなかった色狂いを探そう。

時間も青春時代も無限じゃないんだ。

ぐずぐずしてたら目の前のタルんだ体の女傭兵のように、人生の負け組みになってしまう。

とりあえず女3人の顔は覚えたので大丈夫として、あとは残りの男共だな。

男の顔を覚えるなんて正直気が進まないがこれもお仕事だと割り切る。

髭ダンディ、太っちょカウボーイ、ザーボンさんに……あとは口

ーブ身につけているからわかるっしょ。よし！これでオツケー。

なんとなくおぼろげにだが傭兵全員の顔を頭に入れ、当初の予定通り屋敷の北側ルートで先へ行こうとするのとホールに動きがあった。クリストフの取り巻きであるバカな家臣筆頭であるダリウスが例の美少女にちょっかいをかけたのだ。

なんかヘラヘラしながら近づいて行って声をかけているのだが、ここではその内容が聞き取れなかった。

しかし例の美少女は“マネキン”のように無表情で、目もあわせしていない。

何かを必死に語りかけているバカダリウスに一言も口を開かず、蠅か蚊を追い払うかのように手をひらひらと動かし追い払おうとしている。

遠目に見ているだけでも軽くあしらわれているのがよくわかる。

プププッ！ダサ。

イラついた様子のバカダリウスが憤りをあらわに“マネキン”美少女の手を掴もうとしたが、それがわかっていたかのようにヒラリと横をすり抜け、少し離れていた傭兵たちの輪の中に向かった。

しつこくバカがダリウス、もうバカウスでいいや。やつが後を追うが、“マネキン”美少女は行き遅れ“タル女”が言い寄っていたダンディな髭男に話しかけバカウスを指差す。

ん？“マネキン”美少女は“髭ダンディ”とデキているのか？

何のためらいもなく“髭ダンディ”の腕を引いた仕草が、とても自然だった。

それにおさまりがいいと言うか、絵になる感じだ。
というかこっから見る風景が、動物園の檻の前にいる不倫カップルと檻の中にいるチンパンジーにしか見えない。

バカウス、お前一体いくつなんだ？

たしか20代のはずなんだが、下手すると“髭ダンディ”よりもおっさんに見えるぞ！

頭も悪くて顔も悪いつて……、つくづく残念なヤツだな、お前は。

そんなバカウスを腕を引かれた髭ダンディが一目見ると、「チツ！」とこちらまで聞こえてきそうな舌打ちをしたであろう表情をしてスゴスゴともといった場所に戻っていく。

錯覚か？

動きがチンパンジーに見えてきたぞ。

しかし哀れ、バカウス。

その鼻の下が長く禿げ上がったチンパンジー顔じゃあ、オレ以上に女にはモテんぞ。

もっと自分を知れりやがれ！

見世物はもう終わりか？

もうひと悶着あっても面白かったのだが、期待通りにはいかないものだな。

“髭ダンディ”ももつとりアクションがあってもいいものだと思うが、“マネキン”美少女に随分そっけなくも見える。てか引かれた腕を振り払う仕草があまり良い関係には見えなかった。

それを見た“タル女”が不細工な顔でざまあ的な表情をしする。きつと会話の最中に邪魔されてご機嫌斜めなのだろう。

それぐらいのことでも思ったが、『ブスは性格までブス』という法則もあるしな。

テンプレか。

まあ、これ以上ここに留まっても仕方がないので先に進む事にしよう。

覗き込んでいた窓の下を慎重に潜り、西に向かって足を忍ばせる。

少し行くと鼻を刺激するつまそうな匂いがしてきた。

すると目の前がひらけ、人が出入りする扉が見える。

積まれた薪が扉のすぐ傍にあるのだから、きつと厨房だろう。

1階北側は東側正面入り口から脇に入り、大きく迂回する道があった。おそらく商人が食材などの物資搬入をするために使ったり、使用人が出入りするため使う道だろう。

そのことから考えても厨房で間違いないはずだ。

てか、こつちにも使用人が出入りできる扉があるなら監視がいるんじゃないのか？

こつちから出て北の林に隠れてローリングンを目指されたらわかんねえじゃん。

監視の穴ってヤツでしょ？コレ。

……まあ、どうでもいいか。

その辺を決めたのは団長だ。

不手際があつたら腹を抱えて笑つてやろう。

そんなことより先に進もう、今はクリストフ見つけなきゃならんのだし。

厨房へ入るであろう扉から先は道がなかった。

さらに進み西側へと回ると、正面や庭園のようには手入れされていない空間があるものの、そこを何かに使っている様子はなかった。単に西側の部屋への採光のために間伐されたのだろうという感じだ。

入念に気配を探り、“開錠”^{アンロック}で木窓を開けて中を見てみるが、とても貴族が使っているような部屋には見えなかった。

おそらく使用人の部屋だろう。

西側は同じ様なつくりが続くだけで、特に何もなく偵察を終えた。

まあ、予想はしていたがクリストフは2階にいるのだろう。

この別荘はそう大きな建物ではない。

大体の貴族の館がそうであるように、1階は無駄にデカイエントランス、豪華なホール、イミフな長さの食台のある食堂、隣接した厨房、使用人の部屋で構成され、2階に貴族が滞在する大きな部屋がある一般的なモノだ。

ちやつちやと“飛行”^{フライ}使つて、2階を調べるか。

「イル・フル・デラ・ソル・ウインデ、
、
“飛行”^{フライ}」

小さく呪文をつぶやくと、ひとツ飛びして西側2階の部屋を調べる。

屋敷の端に位置するこの部屋は、庭園に面した南側に大きなバルコニーがあった。

そこに降りた方が中の様子を窺いやすいのだろうが、南側を監視している仲間に見つかりと少々まずい。南側のバルコニーには降りないほうがいだろう。

中の様子が見やすい位置の木を探し、そこから中を覗く。

ビンゴ！

クリストフだ。

ホント今日はさくさく目標が達成されていくなあ。

やっぱりイツカをぶん殴ってきたからだろうか？

これからもゲンを担ぎにちよくちよく殴ることにしよう。

簡単に見つかったクリストフは、下品なほど豪華なカウチに寝そべって女とイチャイチャしていた。

何やってんの、このリア充めっ！

すぐに成敗してやるとも思ったが、部屋の中には見える範囲だけでも5人の臣下がいたので、それも出来ない。

さすがのオレでも5人以上のメイジ相手に、彼らの警護対象である目標を殺せるとは思っていない。

思っではないのだが。

マジ殺してええええ！！！！

臣下の前であたりまえのように羞恥プレイ。
ぐううう、そんなハイレベルなプレイを当然のようにこなすとは
！さすが色狂いの二つ名を欲しいままにする男だ。大して男前でも
ないのに！

やっぱ金か？男は金なのか？

もはやクリストフには殺意しか沸かない。

チューもした事がないオレの前で、女の胸元に手を突っ込んでア
フンアフン言わせてんじゃねえぞ、
ゴラァ！

殺ッ！

殺ッ！！

殺ッ！！！！

殺ッ！！！！！！

殺ッ！！！！！！！！

眼力だけで人を殺せるスキルが欲しいいい！！

この色狂いをギアスの力で、オレに殺させてくれええええええ！！

それから30分、殺意を送りながらも目だけはしっかりと、胸や
あんなところを弄られている女を監視した。うん、監視だよ？

疑問形になったのは、別に後ろめたい事があるからじゃないんだ
からねっ！

だって、これは当然の行為なのである！

いやあ、だってさあ。考えても見てよ。

ほらっ、オレの任務って監視じゃん？テヘツ

十分に堪能、
もとい監視の任務を果たしたオレは「今日も仕事したな、ふう」と満足気な顔で監視ポイントにもどる。

もう少し見ている問題なかったのだが、クリストフが相手していた女がダウンして部屋の外に連れて行かれた後、「次があるの？」「次もあるよね？」「次のコ、カモン！」としばらく待ったが来る気配がしなかったため、非常に残念だが戻る事にしたのである。

まあ、明日があるさ！

明けない夜はないんだから。

セリフはカッコいいが、その目的が下衆だなオレ……。

クリストフへの殺意を10%減らした帰路、少し反省した。

アライメントが少し下がったかもしれないから、これからは気をつけよう。

一通りの偵察を終えたオレは、2階北側の廊下を見るともなしに見ながら飛んで、監視ポイントのある東の林に向かう。

「あれは“マネキン”？」

廊下をこちらに向かって歩いてくる一団を見て、小さくつぶやい

てしまう。

“マネキン”美少女がバカのダリウスを含めた取り巻き連中に連れられ、突き当りの一番奥の部屋に入っていったのだ。

「ん？あの部屋は……」

さっき監視していたデカイ部屋だな、クリストフのいる。

……クリストフのいる？

嫌な予感がすると言つか、確信がある。

「だって……ずっと見ていたんだもの、アタシ」

さっきの下衆な行為がなかった事にならないかと、乙女のように少し恥じらいながら言ってみたが気持ち悪いだけだった。チィ！やめとけばよかったよ。

マジ、ハズい。

ハズいのは一先ず置いて、今の状況だけど。

ひょっとしたら、これってチャンスじゃね？

これからクリストフの取る行動はわかりきっている。

“マネキン”美少女は当然抵抗するだろう。商売女じゃないからね、彼女。

メイジでもあるあの美少女が抵抗したら、スキが出来るかもしれない。

さっきのバカウスとの一件からしても抵抗するのは間違いないだろうし、必死ならばスキぐらい出来るだろう。

うん、可能性として無きにしても非ずだ。

“マネキン”とは言え、美少女を囿にするように気が引けるが、所詮エロがない女だ。

エロがない女はだたの女、よって良しとしよう。

作戦としてはこうだ。

色狂いクリストフ絶対エロい事するはず “マネキン”美少女抵抗する メイジであるため家臣が取り押さえるなりするはず 家臣の注意がクリストフから離れた所で奇襲 うまく行けばクリストフを殺ッてお金ガツポガツポ、ヘタうって家臣殺して戦力減らせるはず！

なんか、はずが多い気がするけど、無理そうだったら即撤退すればいいだけだ。

なんとかなるさ、この作戦。きっと敵にコウメイもないだろうし。

うん。なんくるないさー。

今日はすべてがうまく転んでいた事もあり、ヘタな考えでイケる気満々になったオレはすぐに来た方へ戻り、南側のバルコニーへ降り立つ。

事ここに至っては、団長にバレるもクソもない。

ここが中の様子を窺うにも、奇襲するにも最適だからな。

こんなこともあるのかと持ってきた帝都土産を、オレは懐から取り出しかぶる。

そしてローブのフードもかぶって顔を隠すと、足を忍ばせてバルコニーの扉に向かう。

夏の熱さのためか、普通に開け放たれていたガラス戸の扉の傍で身を低くして中を覗き込んだ。

この扉の内側に敵はいないようだ。

「何をなさるのですか？」

えっ？

もっ？！

部屋ではすでに事は始まっていて、“マネキン”美少女の杖を持つ右腕は家臣の一人につかまれていた。

ちよっ！展開早すぎっ！

それにそんなにあっさり捕まってちゃ、オレの作戦が機能しないよ。

何これ？何これえ〜？！

コウメイか？

コウメイの罨なのか？！

そんなことより、

何でもいいから逃げてえー！超逃げてえええ〜！

ベイダー見参

マジ何やってんの、“マネキン”美少女！

名前すら知らないけど、あぶないから早く逃げろって！

こんな時まで涼しい顔してる余裕があんなら、もっと華麗にエロ貴族の手下なんて捌いてくれよ。

さつきは玄関ホールでヒラリとバカウスをかわしてたじゃん！

あのスキルはどうした？

なんか普通に捕まっちゃってるし……。

バカウスのチンパンジー野郎が、腕を捻り上げられてるアンタ見てニヤニヤしちゃってるよ？

まあ、後ろの方にいるから見えないと思うけどさあ。

でも悔しくないの！？

根性見せて抵抗してみるよっ！っていうか、してえ〜。

おもいっきり抵抗してえ〜。

抵抗してくんなきゃ、オレの作戦台無しじゃんよあ〜。

どうするよ、オレ？

初っ端から計画破綻してるけど、これってヤバくねっ？

うっん、出たトコ勝負するか？
どうしてもナンパ資金が欲しいし。
マジ悩むぜ。

派手に一発ブチかましてみるか？

それでクリストフが死んでいれば、^{マンヤ}万々歳で即撤退。
クリストフが死んでいなければ、混乱に乗じて家臣を何人か成敗。

後者の場合はあまり時間をかけすぎると、1階玄関ホールにいる
傭兵や他の家臣が集まってくるので危険だよな。2、3人を目処に
手早くこなしてから、すぐに撤退すればいけるか？
欲張りすぎると狩られる側にまわってしまうからな。
欲張ると碌な事がない、見極めが大事だ。

なんかまたもイケる気がして来た。
オラ、ワックワクしてきたぞ！
よし！いっちょ、やったるぜ！

「コーハー」

オレは大きく深呼吸して、ウインドボナ土産のマスクの位置を微
調整する。

杖を握りなおし、部屋の中を覗くと“マネキン”美少女は床の上
に仰向けで取り押さえられていた。
クリストフの色狂いが覆いかぶさるうとしている。

ヤツベ！マジ展開早すぎっ！

焦る気持ちを落ち着け、もう一度深呼吸してからスペルを唱える。

「コーハー。イル・アース・マーケ・アクトウス・マルコ

ナツクル・ダスター
、「鉄拳」」

アルケミー “錬金” と クリエイト “創作” を掛け合わせた土のラインスペル ナツクル・ダスター “鉄拳”。

眼前の屋敷の岩壁を鉄に錬金して、創作で直径3メートルはあろうかと言うデカイ鉄の拳を作り、部屋の中の人間を殴り倒す。拳の大きさはメイジの実力に比例するが、本来水の系統の使い手であるオレとしては十分過ぎるデカさだ。

オレの事を土の系統メイジだと勘違いした団長と“ヤツさん”から学んだ呪文の1つであるこの魔法は、城壁のある工城戦や室内、閉鎖された空間などで威力を発揮する。

ちなみに両手をパンツ！と合わせて、地面に手のひらをつける必要はない。

やはり少し焦っていたせいか、魔力を込めすぎてしまった。

勢いで反対の廊下側の壁もブチ破ってしまい、ドゴーン！という派手な破壊音が屋敷内に鳴り響く。

直撃したヤツはミンチになっただろうが、床に押し倒されていた“マネキン”美少女は無事だろう。

オレはフェミニスト（注：かわいい子に限る）。

立场上、オレには生死は関係ないと言っても、靴下を履かない人の教えに背くことは出来ない。

よほどの運が悪くなければ死んではいまい。

魔法を使った眼前の壁はぽっかりと大穴が明いてしまったので、その前に立つオレからは部屋の中の様子が見渡せる。とは言っても派手に破壊をしすぎたせいで土埃が部屋に舞っている。

それでもゴホゴホと咳き込む声や呻き声が聞こえているので、まだまだ敵は健在のようだ。

鉄拳の魔法が解け、大きな鉄の拳が瓦礫として部屋に落ちると同時にオレは室内に踏み込んだ。

「な、なんだ?!」

その時、クリストフの声が聞こえてきた。

失敗か!

どうやら“マネキン”美少女に襲い掛かろうと伏せるような状態だったため、クリストフは“鉄拳”を逃れてしまったようだ。初撃で仕留められなかったのは致命的だな。

作戦は第二フェイズに移行、『家臣を数人手早く始末する』だ。

悪・即・斬!

すなわち、ドン・ガン・ズドーンだ。

これから家臣たちはヤツを守るように動くだろう。なら無理してクリストフを狙うよりも、この混乱した状況を利用

して護衛の家臣たちを一人でも多く殺しておく方がいい。
ヤツラは“鉄拳”を使う前のクリストフの位置は把握しているはずだから、視界が悪いながらも守るために集まるはずだ。

そこを狙う。

「敵を切り裂く剣と成せ　　、ライトセイバー。コーハー」

オレがコモンマジックのブレイドを唱えると、杖をもつ右手に青白い光の剣が現れる。

手探りでクリストフの元に集まっているだろう家臣を狙い討つぞ。

たしか西側外壁の方に2人、北側の出入り口扉の両脇に2人、カウチの後ろに2人東側内壁の方に2人だったな。

東側の2人が“マネキン”美少女を押さえつけていたから、コイツらと扉の両脇の2人は魔法に巻き込まれているはず。カウチの傍にいた2人はすぐにクリストフに駆け寄ることが出来るだろうから、相手にはしない。

狙うのは彼女を連れてきたバカウスらと西側の2人だ。

オレは壁から少し離れた位置をキープしつつ、マスク越しに見えるぼんやりとした動く人影を探す。

どこだ？！

どこにいやがる！

悪・即・斬だ。

すなわちサーチ・アンド・デストロイ。

うん、こちらの方がバカっぽくないな。

やっばこっちで行こう！

「サーチ……」

自然と小さく呟きながら進むオレ。

たしかここらあたりに、見つけた！

土煙を手で払うように部屋の中心に向かっていている人影。

これは間違いなく敵だろう。

「アーンド……」

そう判断したオレはライトセイバーを構え、一気に距離を詰める。

「デストロイツ！」

テリリヒエン領の家臣たちは全身フルプレート鎧とまではいかないが、一様に金属製の胸当てをしていたので、狙いは一撃必殺が可能な頭部だ。

「がっ」

狙い通りに光る剣が吸い込まれ敵を葬る。

ジエダの騎士の剣技のように、冴えわたっているオレのライトセイバー捌き！

ヤバイ！オレ、いつの間にかリアルジェイの騎士のなっていたかもしんない。

光る剣でぐちゃりとスイカのように敵頭部の中身をブチ撒けたが、そんなグロいものをじっくり見ている余裕は無い。てか見たくもない。

「コーハー」

時間との勝負だ。

足を止めずに、意識して大きく呼吸を取る。

次の獲物はどこのどいつだ?!なんてカツコつけてると、なんか高ぶってキタアアアー!

「サーチ・アーンド……」

しかしオレの位置が敵にバレてしまつては元も子もない。

マスクのなかで小さくつぶやくように声に出し、次の獲物を求めてさらに数歩進む。

今度は向こうからやって来た。

バカめっ!

視界に捉えたと同時に、今度も一足に距離を詰める。

「なっ!おま」

土煙の中から急に目の前に現れたオレに気づき、声を上げようとするがもう遅い。

「デストロイ!」

「ぐぼっ」

懐に飛び込むような形で近づいてしまったので、喉を一突きする形になった。

雑魚がっ!フォースの力を侮るからだ。

これで2人目。

引き時か？まだイケるか？！

よし！『ガンガンいこうぜ！』の命令続行だ。

「コーハー」

仕留めた家臣が倒れる前に抱え込み、盾にしながらクリストフのいる部屋の中心へ突進する。

すると足元の何かに躓きかけた。

おっと！

抱えていた死体を勢いのまま前に放り投げ、躓いたモノを確認すると敵のようだ。“鉄拳”が直撃はしなかったものの余波を受けて昏倒しているみたいだ。

見逃す手はないな。

「デストロイツ！」

飛びつくように馬乗りになり、ライトセイバーを喉に突き立てる。ハプニングのせいで略してしまったが、なんとか威力は保てただろう。

「1つら」

憐れな断末魔を上げているが所詮は雑魚。

気を失っている間にやられるなんて、相当不幸なやつだ。

コイツはきつと今日「コレ、親の形見なんだ。預かっててくれよ」的な死亡フラグを立てるセリフを言ったに違いない。

あまりにも調子よさに下らないことをついつい考えてしまった。

「っ！」

アホなスキが出来たオレのすぐ横で、何かが身を起こすような気配がした。

ヤバイっ！？油断したか！

考えると同時にそちらに意識を向けるが、その人影はこの状況に呆然としているのか上体だけを起こし、辺りを見回している。このシユチュで何やってんだか？オレよりアホだな、コイツ。

マヌケめっ！

こんなチャンスを見逃すオレではない。

時間的にはこれで最後にしよう、その人影の襟首を掴むとライトセイバーをその喉元に突き立て

「ん？」

光る剣が喉を穿つ前に手を止める。何かおかしい。

襟首を掴んだ手を引き寄せるとほとんど抵抗がない、てか軽い？

「っ……！」

“マネキン”美少女だった。

額と額がぶつかるような距離まで引き寄せたため、“マネキン”美少女にもオレの顔が見えたのだろう。オレの異様な風体に驚いているようだ。

まあ、この世界じゃ見たことないだろうからね。

フルフェイスのガスマスクなんてさ。

黒いフルフェイスのガスマスクに黒いローブのフードをかぶっているオレは悪魔のように見えるかもしれない。

オレ的には隠密行動時に顔もワレないし、一見ダーベイダーのような雰囲気があつて気に入っているんだがな。

「コーハー。邪魔だ」

彼女は死のうが生きようが関係ないが、わざわざ幼気いたいけでもないが、少女を殺す気もない。フェミニストだしね。

オレは自分が立ち上がると同時に、そのまま襟首を掴んで“マネキン”美少女も立たせて、先程“鉄拳”でブチ抜いた廊下側の穴の方に突き飛ばす。

こいつに付き合っているヒマなどない状況なのだ。
すぐに撤退の準備をしなければ！

「クリストフ様！お怪我は？！」

「賊だ！クリストフ様をお守りしろっ！」

「あちらの刺客だ！逃がすな！」

オレが『ガンガンいこうぜ！』から『いのちをだいじに』に作戦変更したあたりで、やっとクリストフの家臣どもが動き出した。

混乱から立ち直るのが遅すぎですよ、アンタ達。

だが、まもなくこの土埃も晴れ視界が戻るだろう。
急ごう。

オレは身を低くして部屋の西側の壁、外壁の方へ戻る。

家臣達が立ち直った今、進入してきたバルコニーは警戒されているだろうし、出入り口のある北側の廊下もこの騒ぎで集まってくる傭兵などがいるだろう。

だから今は魔法で開けた北側と南側の大穴から逃げるのは愚策だ。

だがそうなるとこの部屋から脱出する出口はない。
ないのだが。

なければ作っちまえばいい。

さっきデカイ穴を二つも開けてやったばかりだ。壁にたどり着いたオレは片膝について身を低くし、晴れていく視界の中、スペルを唱える。

「イル・アース・マーケ・アクトウス……」

オレがスペルを唱え始めた時、視界がよくなりつつある部屋の隅にいるオレを家臣の誰かが見つけ声をあげた。

「いたぞ！あそこだ！」

「あっちの壁の前だ！」

「ウル・カーノ・ヘス……」

なんかあっちもスペルを唱え始めている。

バカどもがつ！

もうおせえっての。

あばよっ！

「……」

“ナックル・ダスター
鉄拳”！

ベイダー見参(後書き)

今回は「ダースベーダーの仮面を主人公にかぶらせたい!」と思う
思いつきで書かさせて頂きました。

セーラー服やナース服が登場しているんだから不自然ではないだろ
うとは思いましたが、一応Wikiで確認しておかなければと見て
みたところ、地球からの召喚物は「始祖ブリミルの魔法が聖地に開
いたゲートから、ガンダールヴの最強の「槍」として考え得る最強
の武器を」召喚するとありました。

???

セーラー服、ナース服が最強の武器?(私が見たアニメではエロ本
も)

シエスタの祖先のように兵器(武器)と一緒に召喚されてきたので
しょうか?

セーラー服の少女(別に中年のおジサンでもいいのですが)+機
関銃のような感じで……。

原作主人公が召喚されたサモンサーヴァントの方式だと、パソコンも一緒に召喚されているので筋は通ります。

しかしこの召喚方式では武器を身につけているモノ（人や物）もしくは触れているモノを一緒に召喚する事になるので、ハルケギニアに異世界人がもつと溢れかえっているのではないのでしょうか？

溢れかえっていると言い過ぎでも、結構な確率で人も召喚される事になると思われず。

冷蔵庫など家電は召喚されないとありましたが、アメリカ人は小銃を冷蔵庫の中に置いてある家庭も結構ありますから、Wikiに書いてある設定が真実ならこの召喚方式では矛盾する気も致します。同様に空間指定・座標指定も武器以外のものが召喚されるので、これらの方式の確率は低いでしょう。

だとすれば武器・兵器のみを召喚する任意に物体指定を行う方式？だと考えられなくもない。

この方式だと戦闘機や戦車など兵器の内側に人間が入る事が出来る場合のみ、人間や武器以外の物が一緒に召喚されるという事が起こりうるのでは？

シエスタの祖先は戦闘機、破壊の杖の持ち主はおそらく戦車の中にいたと考えれば、辻褄が合うのかもしれない。

あと他にあるとすれば、武器と言う概念判定で召喚をする方式でしょうか？

この場合、概念判定基準は召喚陣を作ったブリミルではなく、ましてやハルケギニア・異世界の不特定の人間でもなく、現界している

ガンダールヴのルーン保持者のの概念が最も有力だと思われます。だとすればガンダールヴがない時期は武器は召喚されないはずですから、シエスタの祖先が迷い込んだ時期、破壊の杖の保持者などがいた時期など、わりとコンスタントに虚無の使い手が現れて、使い魔を召喚していた事になりますから、これも少しおかしい気がしますね。

まあ、いずれにしてもセーラー服などの召喚理由が不明です。ネタに走るために原作者様が設定を無視しただけなのでしょうか？

以上のような事を取りとめもなく考え、『場違いな工艺品』は結局なんでもありなんだろうとも思いましたが、さすがにダースベイダーの仮面はやりすぎだろうという事で『ガスマスク』に落ち着きました。

挿話 クロエ・テュリム

「お前など……生まれてこなければ、よかったのだ………」

泣かない。

あの日からわたしは父上の前では泣かないと決めましたから。
辛くても、悲しくても、嬉しくても、楽しくても……、わたしが
感情をおもてに出す事を父上は嫌う。

だからわたしは泣きません。
そう誓ったのです。

母上が亡くなったあの日から。

わたしの母上はトリスティン貴族の妾の娘でした。

そんな母上も成長すると腹違いの兄の妾の一人となったそうです。
それは母上の意志とは関係なく強制されたものでしたが、立場の
弱い母上にそれを拒む事は出来なかったのでしょうか。
そしてその結果、わたしを身籠ったのです。

腹違いの庶子とは言え、兄妹を孕ませた事を表ざたにするのはさすがに体裁が悪く、その事実は家内だけで留められ、当時の当主によつて母上は結婚を決められました。

相手に選ばれたのは父上でした。

父上はその家に代々仕える騎士の家柄で、魔法学院を卒業したばかり。

身籠つた母を娶るように貴族に命じられた父上が、それを断る事は当然出来なかつたのでしよう。

言われるがままに母上と結婚し、わたしが当主の息子の子であると承知で育てて頂きました。

わたしがその事実を知るまで、なんの疑問も持たないぐらいには愛情を持って。

しかし当主が変わり、新当主に父上が放逐された頃から少しずつおかしくなってしまうのです。

父上は放逐され傭兵と身を賣やした事で、わたしの事を疎まい目で見ようになります。当時のわたしがその理由など分かるはずもなく、なかなか仕官出来ない父上が日に日にわたしを見る目が厳しくなつていくことに、ただただ「なぜ？」と言つ思いが募る毎日でした。

それを父上の口から知らされる日はすぐにやって来てしまいます。放逐されてから生活が窮し、そのことが原因で母が体調を崩して亡くなつた数年前の春。

わたしが父上の本当の娘ではないことを知つたのです。

わたしの本当の父が誰であるのかを告げられた衝撃も冷めないうちに、母上の身の上、母上と父上が結婚をした経緯、本当の父が当主となったことで放逐された事実、その本当の父が流した出鱈目な話で他の貴族の家に仕官が叶わない事など、恨みの言葉と憎悪の視線と共に投げかけられたのです。

わたしは父上に憎まれている。

それは幼いながらも、薄々は感じていたことでした。

だからその事は否定したいとも認めたくないとも思わずストンと心の中心に収まり、父上の憎しみは自分に向けられるべきものであると、それは仕方のないことなのだと思われ入られます。

それと同時に母上がわたしに施してきた貴族としての振る舞いや、亡くなる前日にした最後の約束も納得が出来るものになりました。

「貴族はいかなる時も貴族たる振る舞いをしなければなりません。クロエ、あなたも貴族のように死に至る瞬間まで貴族たる振る舞いをしなさい。これは死にゆく母の最後の願いです」

あの言葉を母上がどういふ思いで口にしたかはわかりません。

けれど、わたしに何を求めていたのかはハッキリとわかります。

今、そのときの事を思い出すのは、もうわたしに未来がないとわたし自身が一番わかっているからなのかもしれません。

「これで邪魔なヤツはいなくなったな。ひっひっひ」

父上を殺した男が下品な声を上げて笑っている。

わたしたちが身を隠しながら東を目指している間に“飛行”^{フライ}で先回りしたのでしよう。

後方から追い立てられる事ばかりに注意を払っていたわたしは、父上の体に魔法の矢が突き刺さるまで、不覚にもその男の存在に気がつきませんでした。

その結果が父上の死。

「どうした？もう逃げないのか？クロエ」

怖気の走る粘着質な声で名前を呼ばれると、いつもは心が冷えてゆくのに、今は手に流れ落ちる父上の血の熱さが逆に心に熱を生む。いいえ、心がかき乱されると言ったほうが正しいのでしよう。

「ち、父上……父上……」

震える手で持ち合わせの水の秘薬を口に含ませようとしても、父上はそれすら飲み込む力がない。

火の使い手であるわたしは“癒し”^{ヒリング}は使えません。

助けるには“癒し”が使える水のメイジの下に連れて行かなければなりません、今は追われる身。

どうしようもなくなただ呆然としているうちに父上は動かなく……

「もう死んでるよ、ひっひっひ」

不快な声を意識の外に追い出し呼びかけるが。

「父上！父上っ！」

もう反応がない。

目の前が真っ白になり何も考えられない。

腕の中で事切れた父上を抱く腕にも感覚がない。

今際の果ての言葉と父上の死と言う事実を、わたしは受け入れることを拒否したがっている。

「逃げないのなら楽しませてもらおうか。クリストフ様には殺してしまっただけ言えば問題ないだろう」

下卑た笑いを口元に浮かべ舌なめずりする様は嫌悪するところなのだけれど、わたしはその意味すら頭の片隅に追いやるほど他の考へてしまっている。

どうしてこんなことに？！

その問いを自分自身に繰り返すことしか考えられなかった。

そうしているうちに、わたしがこの屋敷に来た時からしつこく言い寄ってきていたダリウスと言う男が近づいて来ていた。

なのにわたしは動くことが出来ないでいる。

先程から「どうして？」「なぜ？」という言葉ばかりが頭の中を駆け巡って、何がいけなかったのかばかりを考えてしまう。

この仕事を請けたこと？　でも、父上の決定にわたしは反論する事は出来ませんわ！

じゃあ、一人で館の主人の元に向かったこと？　家臣が何人もいる前でいかがわしい事をする人間がいるなんて思いもしなかったのです！

体を求められて拒否したこと？　たとえ雇い主でも許されることではないはずです！

襲撃の時に動転していて敵を攻撃できなかったこと？　あの状況でしかも恐ろしい敵を間近に見てすくんでしまったわたしにも落ち度はありますが……。

スパイだと決め付けられその場から逃げた父上に従ったこと？

問答無用で攻撃を受けましたが、あの場は留まるべきでした。しかしあれは父上が！

逃げる時にローリングンを目指してしまったこと？　街道を指さず、北の森に入ってから東に向かっていたので落ち度はないはず。運が悪かったとしかいえないでしょう？

めまぐるしく浮かぶ疑問に自問自答することしか出来ずにいるわたしは、強い衝撃を受け自分が地面に倒されたことはわかったけれど、体にうまく力が入らず逃れることが出来ない。

何？

何ですか？

一体、何がいけなかったと言っているの？

どうして父上が死んでしまったの？

今、なぜこの男に組みしだかっているの？

「スマした顔も良かったが、泣き叫ぶお前も見てみたいな」

父上……。

わたしを押し倒し、愉悦の表情を浮かべる男を見ることが恐ろしく、顔を横に向けると事切れた父上の顔があった。

母上が死んだ日、「私を苦しめたフロリー又のために泣くのはやめろ」そう言われ、わたしはそれから泣く事を許されなかった。わたしから涙を奪った父上。

母上が死んで1年経った頃「だんだんフロリー又に似てきたな。私の前ではその顔で笑うな」と言った父上。死んだ母上の面影を残していたわたしを見ると、いつも辛い顔をする。わたしは笑うことも出来なくなつた。

父上について傭兵の仕事を始めた頃、依頼人の不義理に憤りをあらわにした時「その仕事を私に見せるな！イライラする」と、怒ると眉間に指をあてるクセが母上と同じだと怒鳴られた。もう怒る事も腹を立てることも出来ない。

母上が亡くなってから嬉しい事は一度もなく、嬉しさの笑顔を見せなかつたわたしに許された感情は喜び。

子供心に父上に好かれようと、傭兵になると言つて戦場についてくるようになったのも、父上に言われたとおり感情を顔に出さないように努力したのも、父上に昔のように笑いかけて貰いたかつたから。

でも……もうすべてが終わる。

その父上ももういない。

わたしに残されたのは母上との約束だけ。

もう何もわからない。

何も考えられない。

何も……。

だからその約束に従いましょう。

穢されるぐらいなら、誇りを奪われるぐらいなら、潔く死を。

「いい体してるじゃないか。クロエ・テュリム」

服を引き裂かれ、胸があらわになるがもうどうでもいい。

幼いわたしが感情を殺し続けていかなければいけなかったあの時、わたしはもう死んでいたのかもしれない。そうする事でしか、父上のもとにいられる方法を知らなかったわたしは自分を殺し続けていたのだ。そんなわたしが、いまさらどうなっても同じでしょう？

家族を失い、愛を失い、感情を失っていったわたしは、なぜ今まで生きていたの？

わからない。

何もわからない。

本当に何も……。

でも、もういい。

「楽しませてもらう

、ぐぶっ」

その時、父上へ向けた視線を遮るように、わたしを穢そうとした男が倒れてきた。

喉を何かに貫かれ、口から血を流し、小さく痙攣している。

「コーハー」

声がるる方に顔を向ければ、全身黒い異形のモノが立っていた。

「どうした？ 苦しいのか？ 泣いているのか？ コーハー。それとも笑っているのか？」

そう言っつて差し出された手。

「あつ、……あゝ あゝ」

それを見た瞬間。つい先程まですべてを失つて死のうとしていたと言つのに、わたしは優しい声と差し出された手に縋っていた。

わたしは死にたくなかったのだ。

苦しい時に手を差し伸べられたかった。

誰かの手をずっと掴みたかった。

救い出して欲しかった。

母上が亡くなったあの日から。

だからわたしはその手を掴んだ。

差し伸べられた大きな手を。

幼なかつたわたしが父上に望んでいた事を、わたしにしてくれたこの相手に今の気持ちを伝えたい。

わたしは父上の死の悲しみで嗚咽し、母上の約束よりもただ生きたかつた自分に怒り、救いの主に唯一わたしに許されていた感情で微笑みを浮かべ言葉を紡ぐ。

「ありがとう」

幼いあの時のわたしを救ってくれて、

ありがとう。

“マネキン”・スカイウォーカー

もう無理っ！無理以外の何モノでもない！！

さすがのオレでも一度に複数のメイジなんて相手にしてらんないよ！

ここはマジ撤収！即撤収う！

ナックル・ダスター
“鉄拳”で今度は部屋の東西にデカイ穴をあけてやり、部屋の中はまたも土埃で視界が悪くなるが、さつきとはまったく状況が違う。確実に敵がオレを認識しているし、中央でクリストフの色狂いを護衛していた家臣どもも今度はかわした事だろう。その上、この騒ぎでテーリヒエン男爵家の家臣やら、雇われ傭兵やらがすぐに集まってくる。

さっさと逃げ出さなくてはっ！

ライトネス
“軽量”で身軽になっていたオレは、西側外壁に開いた大穴から華麗にヒラリと飛び降り、即時徹底を試みる。その前に
！

「あばよっ!」

もちろん、柳沢シゴのマネも忘れない。

これをやらなくなると、オレがオレでなくなってしまうからな。

アイデンティティーの問題だから、けして譲る事は出来ん!

ガスマスクで見えないとわかっているが、カッコよくウインクしてからローブをひるがえす。

そこまでは良かったのだが、その後クリストフの家臣の魔法を少しくらってしまった。

「ぐっ!あちっ!」

だが、怯んでる時間などない。炎の矢らしき魔法をくらったわき腹が痛むが、地面に着地すると同時に森に走り出す。くだらない事はやらなきゃよかったとも思わないでもないが、やらなくて後悔するよりもやって後悔する方がいいっしょ?

イイ事言ってるけど、行動が残念なのがオレ様クオリティさ!

「追ええええ!」

「外に出だぞ!」

「傭兵どもにも追わせろっ!」

オレが森に入るまでに家臣の怒号や魔法が飛び交ってはいたが、夜の闇の中ではオレを的確に狙い打つ事は出来ず、まんまと逃げおせた。逃走時に有利な夜の奇襲のお手本どおりだな。さすがオレ!

一応、別荘を離れる時にはわざと敵にわかるように南東の方に去ると見せかけたが、オレの向かう先はこの別荘の東にあるローリングンの街だ。だから全速力で夜の森を駆け抜け十分巻いたところで、進路を北にし屋敷よりも北の位置に至ったところで、“飛行”^{フライ}の魔法を使って東のローリングンの街に向かう。

その途中、別荘を遠目に見ると大穴を開けた屋敷の2階西部の部屋が崩壊していた。「ざまあ！」と気分は上がるが、左脇にくらった魔法のせいでムカつきは治まらなかった。

マジ、クリストフの野郎は瓦礫に埋もれててくんねえかな。オレがこんなに痛い思いしたのに、あのリア充が傷ひとつなかったとしたら、ブリミルのクソ神にイヌのクソ食わせてやるっ！

傷は深くはなかったので、すでに“癒し”^{トリング}で治していたのだが、それはそれ。これはこれ。

でも団長ならきつと今夜か明日にでも襲撃をかけるだろう。そのときにあの別荘を全壊させてやればいいさと心に誓った。

オレは今3、4マイルの低空飛行で森の木々を縫うように東に向かっている。

“飛行”で夜空に舞い上がり“暗視”“遠視”を使って上空から捜査しているだろう家臣の連中や、地上の森をうろつき回って探索している傭兵から見つからないようにするためだ。

まっすぐに進めないし、“暗視”の魔法を使っているとは言え注意を怠れるわけではないので、速度は全然出ていない。

仕方がないんだけど、ストレス溜まるわあ、コレ。

なんてイライラしながら東のローリンゲンの街を目指していると、前方に森を索敵しながら進む家臣が見えた。

クリストフの趣味だろうか、ヤツの取り巻きたちは白いローブを身につけているので、すぐに敵だとわかった。

そいつは“暗視”の魔法を使っているのだろうか、自分たちが追い込んでいる側である認識とオレが後方から近づく存在だったため、こちらには全く気づいてはいない。

暢気なことだ。

乙女のように暢気だな。

森に入るならそれなりの準備ぐらいしろっての。多対一という油断から、結果的にただ的ターゲットになり下がるなんてマヌケもいいところだろ？

だからオレのようなノリだけで行動するヤツにやられる事になるんだよ、おバカさん。

でも、さっきやられた憂さを晴らすのにちょうどいいな。

ほくそ笑むとまではいかないが、戦闘での高揚がオレの口元を吊り上げる。

数マイル後ろに音もなく降り立つと、オレはさっき今日の格言に決定した『サーチ・アンド・デストロイ』を実行する事にした。

「サーチ・アンド……デストロイっ！」

その後、同じ様に周囲を飛び獲物を探した。
わざわざ敵が自ら戦力の分散をしてくれたのだ。各個撃破をしない手はない。

普通なら数人の集団を作り、探索をするもんなのだが……コイツらマジ馬鹿。

おそらく捕らえた者もしくは殺した者に報奨を出すとも言ったのだろう。手柄欲しさに我先にと個人で動いてやがる。

特に一人で動いているヤツには傭兵が多い。

何人か玄関ホールで確認した傭兵も見えたが、オレは気にしないでサクサク殺す。特に反撃を受ける事もなかったし、見つかるようなへまもしなかった。

傭兵については団長も何も言っていなかったから、ウサ晴らし殺しても問題ないだろう。

さっきの奇襲で適当に家臣殺しちゃったから、「こんなに戦力減らしたぜ！」とこちらの成果でそのことを有耶無耶にしなければならぬからな。ちよつとがんばろう！

すまないがオレの言い逃れのために、死んでくれ。南無うゝ

思いのほかに上がる戦果にノリに乗ってデストロイしていると、見覚えのある“タル女”を発見した。別荘にいた女メイジの傭兵だ。その“タル女”が木の陰に隠れて、何かを見張っている。

おかしな行動だな。

実におかしい。

敵はオレを探してるんじゃないのか？

まあ、でもいつか。

そんなのはオレにはカンケーないよねっ！

と。

「デストロオオオイ！」

とりあえずデストロイしてみた。

脂肪という名の鎧に守られていたので、この女は首をチョンパしてやった。

女と言っても美人じゃなければ性別不明も同然なので、オレのフエミニスト判定には引っかからないのだ。言うまでもなかったかもしれないが、一応ね。

“タル女”が隠れていた木にもたれかかるように倒れると、おかしな行動の原因に興味があったオレは、何を見ていたのか同じ様に覗き込んでみる。するとクリストフのバカな家臣筆頭であるダリウスを発見した。

バカのダリウスのストーキング？

いやいや、ありえねえって！

自分でツツコンでからもう一度状況を確認すると、ダリウスが“マネキン”美少女らしき女を襲っているではないか。

ふむふむ。

そういう事ね。

美少女の危機を見て愉悦に浸るブス、って構図か。

ブスのテンプレ行動だな。

まったく。ブスは死ぬまで残念な生き物なんだな。

わかってはいた事だが、実際にこの目で見ると引くな。

「ん？あれは？」

若干ヒイいているオレの視線が、襲われている美少女の傍に止まる。

すぐ横に髭ダンディが寝ているのだ。それを見てなにかのプレイの一種かとも思ったが、早とちりはオレの悪い癖だ。とりあえず近づいてみる事にした。

しかしオレが考えているとおりなら、反吐が出るほどかなりの上級者プレイだな。バカウス。

“軽量”で軽くはなっているものの、接近には細心の注意を払う。

バカウスは夢中になっているせいか、こちらにはまったく気づかない。

近づいてみれば、やはり“マネキン”美少女だった。

髭ダンディは血塗れで動かない事からアレはどうやら、ただのしかばねのようだ。

オレは彼らの斜め後ろからほんの数メートルの距離まで近づいているが、こりら側に顔を向けている“マネキン”美少女が反応を示さないのはどうということだろうか？

服が引き裂かれ抵抗もしていないところを見ると、すでにすべてを諦めているのか、それともオレを追っての一人だと勘違いしたのかのどちらかなのか？

その時、されるがままの彼女を見たオレは、不意に激しい頭痛に襲われた。

目に映る映像が、何かモヤのかかったような断片的な画像に邪魔をされ、激しい焦燥感に襲われる。

直接頭に思い浮かぶのだから、それを見ない事は出来ないのはわかってているが必死に目を背けようとするオレがいる。それも数瞬。なんとかその場は声も出さずに、立ち眩み程度で乗り切ったがコレはまずい。

途切れ途切れ視界に入ってくる目の前の光景が、頭痛をいつそうひどいものにしていく。

どこから沸いてくる恐怖と嫌悪、焦り、怯み。

明確な理由もなく、決定的な何かを恐れたオレはそれを排除する事にした。

そう、一秒でも早く。

目の前の××を消す！

小さく呟いて、右手に持つ杖に光る魔力の剣を出したオレは一足でバカウスに近づく。

バカウスは下半身をあらわに、ちょうど息子を取り出しているところだった。

「楽しませてもらう　　、ぐふっ！」

バカが何かを言っていた様な気もしたがサクッとライトセイバーで頭を突く。本人は何が起こったかもわからず、即死した事だろう。

「コーハー」

大きく息を吸い込む。

まだ頭痛は治まらない。

何だ？

何なんだ？コレは？

ふらつく足で死んだっばいバカを蹴り、“マネキン”美少女の上から退かせる。そして彼女を見ると、横を向いていた美少女がゆっくりとこちらに顔を向けた。

始めは呆然としていたが、次第にオレが助けた事を理解し始めた

のか、なんともいえない表情で涙を流した。

服は引き裂かれているが大事には至ってないようだ。それを確認した時から頭痛は治まってきた。

どうして激しい頭痛が起こったかも、なぜその時脳裏にあの画像が浮かんだのかもわからない。だが今、オレがするべきことがひとつあるのはわかる。

「どうした？ 苦しいのか？ 泣いているのか？ コーヒー。それとも笑っているのか？」

辛そうとも見えるし、救われたようにも見えるその表情に、何か声をかけるべきだと思った。だからそうした。けれど、それ以上かける言葉が浮かばない。

どうしたのか……。

困ったオレは手を差し出し、倒れている“マネキン”美少女をとりあえず起こすことに。

「あつ、……あゝあゝ」

すると両手で縋るようにオレの手をとった彼女は、堰を切ったように言葉にならない声をあげ泣き出した。

「マネキン”美少女のキャラになさ過ぎの行動に面食らってしまった。」

「ここは何事もなかったように無表情で「助かったわ」とか、「今度はあなたがわたしを襲うのかしら？」とかいうところじゃねえの？ クールな美少女キャラは超然としていて常識がないところが売り

でしょ？

その設定から多種の“萌え”に発展するのがテンプレなんじゃないの？

「ちよっとズレてるのが、かぁーいいのお〜！」って“萌え”
るやつじゃないのか？

何コレ、何コレ？何だコレ？

はっ！オレが主人公キャラじゃないからか？

そう考えれば納得がいく。

このあとデレる必要がないからな。

クーデレが成立するしない以前の話なのだろう。

よし、納得した！

解決だ。この展開はそういう事だろう。

しかしまだクリストフの手下どもがうるついているかもしれない。
かなりの数をデストロイしたが、まだサーチしきれていない奴が
いるかもしれないのだ。これほどの声だと、10マイルも近づけば
すぐに気づかれるだろう。

だからと言って泣いている女の口を手でふさぐ訳にもいかないし
な……。オレ、一応紳士だし（変態だけど）。
どうしたものか？

っ！

……こういう時は、アレか？！

ポック、ポック、ポック……チーン！！

困ったオレは“ムロマチ”スタイルで熟考した結果、靴下を履かない人の教えを思い出した！

その教えはハードルが高すぎるため一瞬躊躇したが、今は命がかかっている。

背に腹は変えられない。やるかつ？！

がんばれ、オレ！がんばれ、童貞っ！

自分自身に活をいれ、思い切って“マネキン”美少女を引き起こし、胸に抱いてその声を抑える。

やっちつたああー！

靴下を履かない人は言いました、『泣いている女性がいたら胸を貸してあげなさい』と。

オレ的には火竜山脈の火口に飛び込むぐらいの思い切りだったのだが、拒否られる事もなくオレの胸で“マネキン”美少女は泣いてくれた。これで漏れる声も少しはマシになるだろう。

でも……あれ？

なんかドキドキしないな。

女の子抱きしめてるのに……、何でだ？

どうやら息子にも変化はないようだ。

あれだけ躊躇したのに思ったほどでない現実にはちょっと前の自分がバカらしく思えたが、考えてみればこの“マネキン”美少女（つか、もう“マネキン”じゃない気もする）にエロはない。

ドキドキしないのもそのせいだろう。

ウィンドボナでナンパしてた時にいい感じになった、母性豊かなおねいさんにはドキガムネムネしてたしな。

やっぱ、オレにはエロが必要なんだ。

しかしエロが必要って……オレってダメな子というか、イタい子だな……………orz。

そのまま少しの間、凹みつつ周囲を警戒して彼女が泣き止むのを待つ。

オレは頭痛が治まってからかなり冷静になれたせいか、マジでこんなことしている場合じゃないんだけどな、と心の中でひとりごちてしまっ自分を嗜める。少しの間だと自制できたのは、オレが身も心も大人の階段登り始めているからだろう。

ダンディズムオーラをキング・ズのように放つ日も近いな。フッ！

ある程度経つと、と言っても数十秒だろう。

痺れを切らしたと言うか、状況が許さなかったと言う理由で行動を始める。撤退のために“マネキン”美少女に“軽量”をかけただ

けだけどね。

もう十分に敵もDESTROYしたし、当初の目的どおりに“飛行”でローリングンを目指そうって訳よ。

「ここはまだ危ないから移動するぞ。いいか？」

「……」

そう問いかけるが返事がない。つか、非常時なんだから返事ぐらいしろっ！

いくら美少女でも2、3回までしか許さんぞ、無視はっ。

いやこのレベルなら5回は……イケるか？

「今は連れの男の遺体は運べない。別れはいいか？」

ふと思いついて、後付で髭ダンディを放置する旨の確認もとっておく。

すると今度は両手でオレの胸を押して離れると、髭ダンディの方を一瞥し振り返る。そこにあつた彼女の表情はもう“マネキン”などではなく、少し幼く見えるぐらいの顔で。

「ありがとう」

ほほえ
微笑んだ。

ますますキャラ崩壊がはげしいな、おいつ！
マジ勘弁して欲しいぜ。

ドンだけ素直なんだよっ？！

とツッコみたいが、今はここを離れることを優先しよう。今はツッコミ属性に身を任せるよりも大人の対応だ。

とりあえず助けた上に胸まで貸しておいて、ここに放置プレイも出来ないしな。

面倒臭いがローリングンまでは連れて行くか。

そう決めるとオレは彼女の膝の裏に腕を差し入れ、抱え上げると相手の反応など待たずにスペルを唱える。

「イル・フル・デラ・ソル・ウインデ　、　“飛行”」

もともと華奢な“マネキン”美少女は魔法でさらに軽くなっていたので、大して速度が落ちる事もなく真北に向けた進路を辿ることが出来た。

木に隠れるギリギリの高さを飛び、大きく迂回する道を選んでローリングンを目指す。

当然到着するのに時間がかかってしまうが、急ぐのも面倒だ。

しばし“マネキン”との夜空の散歩とシャレ込みましようか。スカイウォーク

まあ、なんつーの？

ホント、エロくないのが残念でならん！

“マネキン”・スカイウォーカー（後書き）

お読み頂いている読者の方は少ないとは思いますが、一応ご報告をさせていただきます。

しばらく拙作を書いている趣味の時間を読書にあてようと思います。

昨日、友人にチートものを紹介して欲しいと頼んだところ、

「最近のモノはどの媒体でもチートものが主流だから適当に選べ」と言われ、

「じゃあ、旬なので」と食い下がる、「ドラマやってたし、テンペスト読めば？」という流れになり、人生初の上下巻の読書に挑戦する事に致しました。

今のテリリヒエン篇ももうすぐ終わるので、とりあえず一週間〆十日を目処に再開をする予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0095s/>

習作・ゼロの使い魔式次

2011年9月29日15時05分発行